

# 異世界喰種

白い鴉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人間と喰種の狭間の存在である青年、金木研。かれはCCG最強の捜査官、有馬貴将に敗れ、死んだ……はずだった。だが目が覚めると、彼は見た事のない異世界に召喚されていた。目の前には、ゼロと呼ばれる一人の少女の姿があった……。大切なものを守れなかった青年は、この世界で何を見るのか？ ゼロの使い魔と東京喰種のクロスオーバーです。 亀更新になると思いますが、よろしくお願ひします。

目次

第一話	召喚	1
第二話	由来	17
第三話	決闘	36
第四話	誘惑	57
第五話	魔劍	75
第六話	秘宝	97
第七話	舞踏	115
第八話	王女	130
第九話	任務	149
第十話	旅路	169
第十一話	襲撃	199
第十二話	哀別	223
第十三話	激闘	244
第十四話	終幕	263
第十五話	思惑	276
第十六話	変化	296

## 第一話 召喚

(僕は……ここで、死ぬのか……)

日本の首都、東京の地下に広がる地下空間で、白い髪の毛の青年——  
金木研は仰向けに倒れながらそう思った。

体中に激痛がする上に、左目からはまるで刃か何かで貫かれたような痛みが走っている。もう指の一本も動かす事ができない。普通の人間ならばすでに死んでいるが、金木研は死んでいなかった。

それは何故か。理由は単純。金木研が普通の人間ではないからだ。  
喰種<sup>グール</sup>。人間の体を簡単に貫く筋力に、刃物などを通さない強靱な体、そして赫子<sup>かぐね</sup>と呼ばれる捕食器官を持つ人類の天敵である。金木研も、その喰種の一人だった。

とは言っても金木はある事情で喰種の臓器を移植された存在——  
——隻眼の喰種と言う存在であり、正確には半分人間半分喰種という方が正しい。

そして喰種は再生能力も高いので、大抵の怪我ならばすぐに治るのだが、ここまで深手だと再生するのにかなりの時間がかかる。

それに、仮にこの怪我が治ったとしても、彼は生きて地上に上げられない事を察していた。

その理由が、彼にゆつくりと近づいてきていた。

「——IXA<sup>イグザ</sup>の防壁を、損傷させるとは思わなかった」

それは、男性だった。

白いコートを身に纏い、眼鏡をかけている。その髪の毛は金木と同じような白髪だった。

有馬貴将<sup>ありまきしょう</sup>。

人を食らう喰種を狩る組織、CCGにおいて彼はこう呼ばれている。

CCGの死神。無敗の喰種捜査官。

それが、彼……有馬を表す代名詞だった。

その名にふさわしく、この地下空間には大量の喰種の死体が転がっている。

全て、有馬が駆逐した喰種だった。

「……そうだな。新しいクインケが、いる」

倒れている金木のそばに歩み寄ってきた有馬はそう言いながら、手にしている剣のような武器の切っ先を金木の右目に向けている。どうやらもう一度右目に刺して、完全に息の根を止めるつもりのようにだ。

(……ああ、死ぬな……)

うつすらとした意識の中で金木がそう思い、有馬が剣を動かそうとしたその時だった。

突然光の鏡のような物が現れ、金木の体を包み込んだ。

「……………」

ばっ！ とその鏡に警戒した有馬は即座に後ろに跳び、その鏡を警戒する。

しかしその鏡は金木を包み込んだ以外は特に奇妙な動きを見せる事無く、そのまま消えてしまった。

——鏡が包み込んだ、金木もろとも。

「……………」

有馬は驚きや落胆をその表情に表す事も無く、水音が響き渡る空間の天井を仰ぐ。

「……逃げられたか」

有馬のその眩きは、誰の耳に入る事も無く空気に溶け消えていった。

爽やかな青色の空に、ドオン!! という轟音が鳴り響いた。

その爆発の音源は、トリステイン魔法学院。長い歴史を誇る魔法学園であり、魔法を始めとした様々な教育を貴族の子供達に行う学び舎だ。

そして現在行われているのは、春の使い魔召喚の儀式である。

生徒達はこの儀式を行う事で自分の属性に合う使い魔を召喚し、自分の魔法属性と専門課程を決めるのだ。この使い魔は呼び出した人間の属性によって異なり、モグラやカエルなどを召喚した人間もいれば、サラマンダーやウインドドラゴンの幼生など非常に珍しい生き物を召喚した者もいる。

しかしその中に、まだ何も召喚できていない少女が一人いた。

桃色がかったブロンドの髪に透き通るような白い肌、それに鳶色の目がくりくりと踊っている。黒いマントの下には白いブラウス、そしてグレーのプリーツスカートを身に纏っている。

顔はかなりと言って良いほど整っているが、今その顔は苛立ちと焦りの表情で彩られていた。

悔しそうに奥歯を噛み締める少女に、あちこちから罵詈雑言が投げかけられる。

「さすがゼロのルイズだな！ 召喚もまともにできないなんて！」

「どうでも良いけど、早くしてくれよ！」

「さつきから爆発ばっかりじゃないか！ もう諦めた方が良いんじゃないか！」

それに少女——ルイズは観衆達に黙れと言いたくなかったが、どうにかその言葉を呑み込んで歯を食いしばる。

「ミス・ヴァリエール」

自分の名前を呼ぶ声に振り返ると、そこには一人の中年の男性が立っていた。黒いローブを着用しており、顔には眼鏡、頭は見事に禿げてしまっている。使い魔召喚の監督を行っている教師、『炎蛇』のコルベールだ。

「だいぶ時間が押してしまっているし、続きは明日にしましょう」

「お、お願いします！ あと一回だけ召喚させてください!!」

叫びながら、ルイズはコルベールに向かって頭を下げた。

さつきから何回もやっても爆発ばかりで、一向に成功する兆しが無い。もしかしたらこれ以後も爆発するだけかもしれないが、このまま諦めて明日に回すのはルイズのプライドが許さなかったし、何より

もそれでは周りの諦めろという声に負けたようで悔しかったからだ。するとルイズの気持ちを察したのか、コルベールは少し考え込んだ後優しい声音でルイズに言う。

「……分かった。じゃあ、あと一回だけですよ。これでだめだったら、明日にします」

「……っ！　ありがとうございます！」

ルイズは再びペこりと頭を下げると、深呼吸した後息をついて心を落ち着かせる。

「何だよ、またやるのかよ！」

「もう無駄だってのに……」

うるさい黙れ、とルイズは心の中で言い返してから杖を握る。

「宇宙のどこかにいる私の僕しもべよ！」

自分のありつた力の力を込めて、ルイズは叫ぶ。

ここまで失敗したのだ。もうドラゴンやグリフォンなどの贅沢は言わない。せめて。せめて犬や猫、最悪自分の大嫌いなカエルでも構わない。

(お願い……お願いだから、成功して!!)

「神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！　私は心よりも訴え、求めるわ！　我が導きに答えよ!!」

そして杖を振り下ろすと、今日一番の爆発が起こった。

爆風が辺りに吹き渡り、灰色の煙で周囲が見えなくなる。

「おい！　また爆発したぞ!!」

「もう勘弁してくれよ、ゼロのルイズ！」

だがルイズは周りの言葉に耳を貸さずに、徐々に薄れていく灰色の煙をじっと見つめる。

すると地面に、何かの生き物が横たわっているのが見えた。

(やった！)

心の中で歓声を上げながら、ルイズはその生き物に駆け寄る。

しかしそれを目にした瞬間、ルイズは思わず目を見開いた。

「えっ……っ！」

そこにいたのは、確かに生き物だった。

が、それは犬や猫でもなければ、カエルですらなかった。  
黒を基調にした服に、同色の短パン。しかも髪の毛は白髪。  
それはどこからどう見ても、普通の人間だった。

「ん……」

鼻孔に入ってくる風と草の匂いに、金木研は目を覚ました。

それからゆっくりと起き上がると、彼に向かってどこか不機嫌そう  
な声が投げかけられた。

「あんた誰？」

その声に金木が目の前を見ると、桃色がかったブロンドの髪の毛の  
少女が金木の顔をまじまじと覗き込んでいる。

金木が彼女から視線を外して周囲を見渡してみると、彼女が身に着  
けているのと同じ黒いマントを身に着けて自分を物珍しそうに見て  
いる人間がたくさんいるのが見えた。さらに豊かな草原が広がって  
おり、遠くにはヨーロッパにあるような石造りの巨大な城まである。  
その光景に、金木は混乱しそうになった。

(……どうして僕は、こんな所に……)

そこまで考えた所で、金木は自分の体のある異変に気付いた。

(傷が……治ってる……?! あれだけ酷い傷だったのに……!)

有馬との戦闘で負った全身の傷、さらには彼の武器で貫かれた左目  
まで完治している。いくら金木が再生力に優れている鱗赫りんかくの喰種グールだ  
としても、これほど早く再生した事は無かった。おまけに、自分の着  
ていた服まで修復されている。

自分の置かれた状況に戸惑っていると、金木に向かって少女が再び  
口を開いた。

「ねえ、あんた誰って聞いてるんだけど」

見てみると、少女の表情は先ほどよりも不機嫌そうである。仕方な  
いので、金木は自分の名前を言う事にした。

「僕の名前は……金木研」

「どこの平民？」



平民？ と金木は思わず訝しげな表情を浮かべる。すると金木と少女を遠巻きに見つめている観衆の一人が目の中の少女に言った。

「ルイズ、サモン・サーヴァントで平民を呼び出してどうするの？」

その言葉と同時に、金木の顔を覗き込んでいた少女以外の全員が一斉に笑い始めた。

「ちよ、ちよつと間違っただけよ！」

ルイズと呼ばれた少女が鈴の様によく通る声で言い返すが、周りの笑いは止まらない。

「間違いつて、ルイズはいつもそうじゃん」

「おまけに何だよあの髪！ 真っ白だぜ、真っ白!!」

「さすがはゼロのルイズだな！」

誰かが言うのと、人垣がどつと再び爆笑する。

自分が置かれている状況が分からずに金木が呆然としてしていると、

「ミスタ・コルベール！」

ルイズが誰かに向かつて怒鳴った。ルイズの声に反応するかのようには、人垣が割れて、中年の男性が現れる。その姿を見て、金木は思わず目を丸くした。

何故なら彼が大きな木の杖を持ち、真っ黒なローブに身を包んでいたからだ。その姿は、紛れもなく『魔法使い』と呼ばれる格好である。

「何だね。ミス・ヴァリエール」

「もう一度召喚させてください！」

召喚？ と金木が少女の顔を見ると、コルベールと呼ばれた男性が首を振ったのが見えた。

「それはダメだ。ミス・ヴァリエール」

「どうしてですか！」

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する。今、やっている通りだ」

今度は使い魔である。これでは本格的に本で読んだ事のある魔法使いの世界だ、と金木はますます混乱した。

「それによって現れた使い魔で、今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。一度呼び出した使い魔は変更する事は出来ない。

何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるにかかわらず、彼を使い魔にするしかない」

「でも・平民を使い魔にするなんて聞いた事がありません！」

ルイズがそう言うと、また周りが笑い出した。ルイズがその人垣を睨み付けるが、それでも笑いが止む事は無かった。

「これは伝統なんだ、ミス・ヴァリエール。例外は認められない。彼は……」

コルベールは金木を指差しながら、

「ただの平民かもしれないが、呼び出された以上は君の使い魔にならないならならぬ。古今東西、人を使い魔にした例はないが、春の使い魔召喚の儀式のルールはあらゆるルールに優先する彼には君に使い魔になつてもらわなければ困る」

「そんな……」

それを聞いて、ルイズはがっかりと肩を落とした。

「さて、では儀式を続けなさい」

「え……。あ、あの、彼と？」

「そうだ。早く。次の授業が始まってしまうじゃないか。君は召喚にどれだけ時間をかけたと思ってるんだね？ 何回も何回も失敗して、やっと呼び出せたんだ。良いから早く契約をしなさい」

コルベールに賛同するように、そうだと野次が飛ぶ。

ルイズは金木の顔を困ったように見つめた後、彼に言った。

「ねえ」

「な、何？」

「あんだ、感謝しなさいよね。貴族にこんな事されるなんて、普通は一生ないんだから」

「き、貴族？」

金木が鸚鵡返しに言うのと、ルイズは諦めたように目を瞑った。手に持った小さな杖を、金木の目の前で振る。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

朗々と呪文らしき言葉を唱え、杖を金木の額に置いてから彼女はゆっくりと唇を近づけてきた。

「え、ちょ……」

金木は少し顔を赤くして止めようとするが、もう遅かった。

次の瞬間、ルイズの唇が金木の唇と重ねられた。

「っ!？」

柔らかい唇の感触に金木は目を見開くが、身動きもできない。

永遠とも思える数秒の後、ようやくルイズが唇を離れた。

「終わりました」

よく見ると、彼女は顔を真っ赤にしていた。どうやら照れているらしい。

ルイズの報告を聞いて、コルベールが嬉しそうに言った。

「サモン・サーヴァントは何回も失敗したが、コントラクト・サーヴァントはきちんときたね」

だがそれを冷やかすように、また周りからからかいの言葉が飛ぶ。

「相手がただの平民だったから、契約できたんだよ」

「そいつが高位の幻獣だったら、契約なんかできないって」

すると、ルイズがその生徒達を睨み付けながら叫んだ。

「馬鹿にしないで！ わたしだってたまにはうまくいくわよ！」

「ほんとにたまによね。ゼロのルイズ」

見事な巻き毛とそばかすが特徴的な少女が嘲笑うように言うと、ルイズが少女を指差しながらコルベールに言う。

「ミスタ・コルベール！ 『洪水』のモンモランシーがわたしを侮辱しました！」

「誰が『洪水』ですって？ わたしは『香水』のモンモランシーよ！」

「あんた小さい頃、洪水みたいなおねしょしてたって話じゃない！」

『洪水』の方がお似合いよ！」

「よくも言ってくれたわね！ ゼロのルイズ！ ゼロのくせに何よ！」

「ごらごら。貴族はお互いを尊重し合うものだ」

コルベールが二人を諫めるように言う。

わけの分からない単語に金木が困惑していると、金木の体が急に熱くなつた。

「熱っ……!?!」

痛みにはある程度慣れている金木だが、それにしてもこの熱さは予想外だった。そんな金木に、先ほどよりも若干落ち着いたルイズが声をかける。

「すぐ終わるわよ。待つてなさい。使い魔のルーンが刻まれるだけだから」

「使い魔……?」

金木が呟くと、体の熱が無くなり平静を取り戻した。そんな金木にコルベールが近寄ってきて、金木の左手の甲を確かめる。

彼の視線を追うように金木も自分の左手を見てみると、そこにはルーン文字のような文字が躍っていた。

「ふむ、珍しいルーンだな」

そう言いながら、コルベールは金木の左手のルーン文字をスケッチする。

「さてと、じゃあ皆教室に戻るぞ」

コルベールは踵を返すと、宙に浮いた。

それに金木は両目を限界まで見開き、その様子を凝視する。

「と、飛んだ……!?!」

自分が出したその声は、あまりの驚きでかすれていた。だが、それも仕方ない事だろう。あらゆる修羅場を経験してきた金木だが、それでも生身の人間が空中を飛ぶという現象は見た事が無い。これでは本当に魔法である。

浮かんだ全員は城のような石造りの建物へ向かって飛んで行った。

「ルイズ、お前は歩いて来いよー!」

「あいつフライはおろか、レビテーションさえまともにできないんだぜ」

「その平民、あんたの使い魔にお似合いよー!」

そう言つて笑いながら、少年少女達は飛び去って行った。

残されたのは、ルイズと呼ばれた少女と金木だけ。

ルイズは二人きりになると、ため息をついた。それから金木の方を向き、大声で怒鳴る。

「あんた、一体何なのよ!」

「……何なのよ、って言われても……」

それはこっちの台詞だよ、と金木は内心思った。さつきまで殺し合いをしていたのに、気が付いたらこんな所にいたのだ。一体何がどうなってるのかを聞くために、金木はルイズに向かって口を開く。

「えーと、ルイズちゃん、で良いんだよね?」

「ご主人様って呼びなさい。馴れ馴れしいわね」

「ここは一体どこなの? あの人達さつき飛んでたけど、もしかして君達って……魔法使いなの?」

ルイズの言葉は無視して、とりあえず一番気になる事を尋ねる。するとルイズはこいつは一体何を言っているんだろう? と言いたそうな顔になってからまたため息をつき、

「つたく、どこの田舎から来たか知らないけど、説明してあげる」

「う、うん」

「ここはトリステインよ。そしてここはかの高名なトリステイン魔法学院」

「トリステイン……?」

ルイズから聞いた単語に、金木は訝しそうな表情になる。そんな地名、今まで聞いた事もない。

「わたしは二年生のルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。今日からあんたのご主人様よ。覚えておきなさい!」

ご主人様、という言葉に金木は頭が痛くなってくるのを感じた。額に手を当てながら、金木は再び尋ねる。

「あの、ルイズちゃん」

「だからご主人様って……」

「本当に僕は召喚されたの?」

「だからそう言ってるじゃない。何度も。口が酸っぱくなるほど。もう諦めなさい。わたしも諦めるから。はあ、なんでわたしの使い魔、こんな冴えない生き物なのかしら……。弱っちそうだし、髪の毛白い

し……」

「髪の毛の色は関係ないと思うけど」

「もつとカツコいいのが良かったのに。ドラゴンとか、グリフォンとか。マンティコアとか。せめてワシとか、フクロウとか」

「どうやら彼女の口ぶりからして、ドラゴンもグリフォンもここにはいるらしい。そして、召喚と使い魔という単語。これらから導き出される結論は、

「って事は……君達は本当に、魔法使いなの？」

「そうよ。本来なら、あんたなんか口が利ける身分じゃないんだからね！」

ルイズの強気な口調に、金木は思わずため息をつきそうになった。自分のいた世界には、魔法など存在しない。ドラゴンやグリフォンもだ。

つまり、ここは自分がいた世界ではない可能性が高い。

荒唐無稽な話だが、今はそれしか考えられないのだ。否定しようにも、今自分の目の前に広がっている光景がその証拠である。自分の置かれた状況に金木が本当にため息をつこうとしたその時。

(……あれ?)

それまで金木は、ある事を忘れていた。

それは有馬との死闘のせいもあるが、何よりも突然トリストインに召喚されたショックが大きくて頭から一瞬吹き飛んでいた事も大きい。

だが、それを忘れていたのは金木にとって何よりも大きなショックだった。

何故なら……、

(ちよつと待てよ……。僕がここに召喚されたって事は……!!)

そこで金木は最悪の事実にたどり着き、限界まで目を見開く。

金木は振り返ると、自分を怪訝な目で見ていたルイズの肩を勢いよく掴んだ。

「な、何するのよー！」

「僕を今すぐ帰してくれ!! 早く!!」

「ど、どういう事よ!?!」

「そのままの意味だよ！ 僕が元いた場所に戻してくれ!! 召喚する魔法があるなら、送り返す魔法もあるはずだよね!?!」

金木がここまで焦るには、ある理由がある。

そもそも金木が有馬と戦っていたのは、自分がかつて働いていた喫茶店『あんていく』の店長の芳村を助けるためだ。その従業員である古間と入見はすでに助けていたが、あの地下空間に有馬がいた以上、彼らの無事も今では分からない。

本来ならばここで目の前の少女と話している暇などまったく無いのだ。

一刻も早くあの戦場に戻り、芳村達を助けなければならぬ。

だが、金木の剣幕に押されたルイズの口から放たれたのは、予想外の言葉だった。

「む、無理よ……」

「どうして!?!」

「使い魔を元に戻す呪文なんて存在しないの。あるのは、使い魔を呼び出す『サモン・サーヴァント』だけ。それにそれを唱えるためには、一回呼び出した使い魔が死なないといけないの」

「」

「だから、唱えるためにはあんたが一度死ぬ必要が……。ちよ、ちよつと!?!」

ルイズは慌てた声を出した。金木がルイズの肩から両手を離し、地面に両膝をついたからだ。

(帰……れない……?)

さつきまであった希望が、粉々に打ち砕かれる。

金木は地面を見ながら、絶望的な事実を思う。

(僕は……守れなかった……)

あんていくも。芳村も。古間も。入見も。

彼が本当に守りたかったものは……失われてしまった。

「ね、ねえ」

ルイズの声に金木が顔を上げると、彼女は心配そうな顔で金木を見ていた。尋常ではない金木の様子が気になったのかもしれない。

「……………何？」

「とりあえず……………わたしの部屋に行きましょう？　もうすぐ夜になるし……………ね？」

金木はこくりと頷くと、のろのろと立ち上がる。ルイズはそんな金木の様子をちらちらと見ながら、石造りの建物へと歩いて行く。その後を、金木はゆつくりとした足取りでついて行った。

「……………」

金木は空に浮かぶ二つの月をじっと見つめていた。そんな金木を、夜食のパンを握っているルイズが見ている。

二人はテーブルを挟んだ椅子に腰掛けている。

ここはルイズの部屋だ。十二畳ほどの大きさであり、窓を南向きとするならば、西側にベッドが置かれ、北側に扉がある。東には大きなタンスがある。どれもこれも、高価なアンティークに見える。

だが今の金木には、そんなのどうでも良かった。彼はただ死人のようにぐったりしながら、空に浮かぶ月を眺めている。

(……………これから、どうすれば良いんだろう……………)

もう、帰る場所はない。帰ろうにも、ここは異世界だ。それはこの城と、空の浮かぶ二つの月が証明している。

帰る場所もなければ、手段もないし手がかりもない。まさに八方塞がりだ。ここで笑う事ができれば少しは気がまぎれるのだろうか、生憎今はそんな気分ではなかった。

戦いの最中ここに召喚されたので、財布や携帯電話など何も持っていない。

いや、正確には一つだけあった。

金木は懐からそれを取り出し、じっと見つめる。



それは歯と歯茎が剥き出しになったデザイン、眼帯をイメージした黒いマスクだった。これだけが、自分が持っていたただ一つの所有物だった。

だが、これが何かの役に立つわけではない。精々顔を隠すのには役に立つだろうが、それだけだろう。金木はマスクを再び懐に戻すと、ルイズの方を見た。

「……………」

「な、何よ」

すると、彼女はどこか警戒したような声を金木に返す。

ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。自分を召喚した少女。悪く言えば自分をこんな世界に召喚した元凶。良く言えば……………自分の命の恩人。

あの地下空間であのまま有馬と戦っていけば、金木は今頃死んでいるだろう。最悪、CCGが喰種と戦う時に用いる武器『クインケ』の材料にされていたかもしれない。

つまり、結果はどうあれ自分の命は彼女に救われたのだ。

だったら、

「……………ルイズちゃん。使い魔って、何をすればいいの？」

するとその言葉がよほど予想外だったのか、ルイズは目を丸くして、

「ど、どうしたのよいきなり」

「いや……………元の世……………故郷に戻れないなら、せめて君の使い魔でもしようかなって……………」

死にかけて所を助けられた身だ。ならば、彼女の使い魔になって彼女の世話をするのも悪くはない。

この世界で人を食えなくなつて死んだとしても、それならそれで構わないし、彼女も新しい使い魔を呼び出す事ができるだろう。

……………金木が自分の命に無頓着に見えるのは、大切なものを守れなかった罪悪感と喪失感のせいというのが大きい。

だが今の金木は、それに気づく事ができなかった。

それほどまでに、金木が心に負った傷は深いのだ。

一方ルイズは、金木が自分から使い魔になると言いだしたせいから、

打って変わって無い胸を張りながらふんと鼻を鳴らした。

「自分から言い出すとは殊勝な心がけね。良いわ、教えてあげる！  
まず使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

「……つまり、僕が見たものは君も見ることができるとして事？」

「そういう事。でも、あんたじゃ無理みたいね。わたし、何にも見えな  
いもん！」

「そうなんだ……」

「それから、使い魔は主人の望む物を見つけてくるのよ。例えば秘薬  
とかね」

「秘薬って？」

「特定の魔法を使う時に使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか……。  
でもあんたじゃ無理そうね。秘薬の存在すら知らないのに」

「ごめんね……」

ルイズは金木の苦笑にため息をついた。

「そしてこれが一番なんだけど……。使い魔は、主人を護る存在であ  
るのよ！ その能力で、主人を敵から護るのが一番の役目！ でも、  
あんたじゃ無理そうね……。弱そうだし。カラスにも負けそう」

あはは……と金木は力のない笑いをしたが、それは大きな間違いで  
ある。

金木は一見弱そうに見えるが、実際はその体はかなり鍛えられてい  
る。それに赫子の威力も相当であり、その実力はCCGからSSレ  
ーの認定を受けるほどであり、『ムカデ』という呼称まである。カラス  
にも負けるどころか、戦い方次第ではグリフォンやドラゴンすら屠り  
かねない存在なのだ。

しかし、そんな事をルイズが知っているはずが無く、

「だからあんたにできそうな事をやらせてあげる。洗濯。掃除。その  
他雑用」

「うん、頑張るよ」

「そうしてちょうだい。喋ったら、眠くなっちゃったわ」

そうやってルイズはあくびをした。

「僕はどこで寝ればいいのか？」

ルイズは床を指差した。まあ、ベッドは一つしかないからしようがないか……と金木は諦めた。

しかし毛布を一枚投げてよこしてくれなので、少しはマシになりそうである。

それからルイズはブラウスのボタンに手を掛け、一個ずつボタンを外していく。すると下着が露わになったので、さすがの金木も慌てて声を上げた。

「な、何してるの!？」

きよとんとした声で、ルイズが言った。

「寝るから、着替えるのよ」

「い、いやそういう問題じゃなくて! いくら何でも男の前で着替えるのは、その……」

「男? 誰が? 使い魔に見られたって、何とも思わないわ」

どうやら本当に犬か猫扱いらしい。金木は深いため息をつくとき、毛布を掴んでそれにくるまり横になる。

「じゃあこれ、明日になったら洗濯しといて」

ぱさぱさつと何かが飛んできて、金木はそれを取り上げる。

レースの付いたキャミソールに、パンツだった。白く、精巧で緻密な作りをしている。女性の下着に顔を赤くしながら、金木はそれらを床に置いて床に転がる。その後、ルイズがぱちんと指を弾くとランプの明かりが消えた。どうやらランプまで魔法らしい。

まもなく、金木を睡魔が襲い始めた。考えてみればついさっきまで有馬と死闘を繰り広げ、気が付けばこんな所に召喚されていたのだ。自分の予想以上に疲弊していたのだろう。

目を瞑ると、まもなく金木は眠りについた。

こうして、金木研という喰種<sup>グール</sup>の、異世界での生活が始まった。

## 第二話 由来

自分の顔に差す日差しで、金木研は目を覚ました。

彼は起き上がってからまだ眠い目をゴシゴシと眠ってから、自分の状況を再認識する。

「やっぱり夢じゃない、か……」

夢のような出来事だったが、どうやられっきとした現実らしい。金木は自分の横にある下着と、ベッドの中で未だ夢の中を漂っているルイズを交互に見る。

「そう言えば、洗濯してって言われてたっけ」

金木は部屋にあった籠を持つと、その中に下着を入れて部屋を出る。

それからあちこちを移動してみたが、ここで致命的な事に気付いた。金木は昨日このトリステイン魔法学院という場所に召喚された。つまり、衣服を洗う場所が分からないのだ。こんな事なら、昨日ルイズに場所を教えてもらえば良かったと今更ながら後悔する。

しばらく金木が廊下をさまよっていると、ようやく人の姿を発見する事が出来た。

後ろ姿なので顔は見えないが、格好からしてどうやらメイドのようだ。どうやらこの学校はメイドも雇っているらしい。ちょうど良い、メイドなら服を洗う場所も知っているだろうと思い、金木は彼女に声をかけた。

「あの、すみません」

すると少女が振り返り、彼女の顔が露わになる。この学院では滅多に見えない黒髪をカチューシャで纏めており、顔にはそばかすがある。彼女は金木の顔を見て一瞬きよとしたが、すぐに笑顔を浮かべて言った。

「はい。どうしたんですか？」

「これを洗える場所を探してるんですけど……良かったら、教えてもらえませんか？」

そう言いながら金木はルイズの下着が入った籠を差し出した。

「ええ、良いですよ。よろしければ、ご案内いたしましょうか？」

「あ、お願いします」

すると少女はとことこと歩き始め、金木もその後を追った。

少女に案内されてしばらく歩き続けると、ようやく水汲み場まで辿り着いた。金木はルイズの部屋から持ってきた洗濯板を使って、下着をぐしぐしと洗い始める。湧水は冷たいが、我慢すればなんとかなる。それに、この程度で自分の皮膚が切れるとはあまり思わない。

金木が無言で洗っていると、それを見ていた少女が口を開いた。

「あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になったっていう……」

彼女の目は金木の左手のルーン文字に向けられていた。どうやらこれに気付いてそんな質問をしたらしい。

「うん、そうだけど……。僕の事、知ってるの？」

「はい。なんでも、召喚の魔法で平民を呼んでしまったって。噂になってますわ」

そう言うと少女はにっこりと笑った。この世界に来て初めて見る、屈託のない笑顔である。

「君も魔法使いなの？」

「いえ、私は違います。あなたと同じ平民です。貴族の方々をお世話するために、ここでご奉公させていただいてるんです」

実際の所は平民じゃなくて地球人、しかも半分喰種で人間ではないのだが、さすがにそんな事を説明するわけにはいかない。なので、金木は普通に挨拶をする事にした。

「そうなんだ。あ、僕の名前は金木研つて言うんだ。よろしくね」

「変わったお名前ですね……。私はシエスタって言います」

少女——シエスタは笑顔で自分の名前を告げた。

それから金木は下着を全て洗い終わると、籠を抱えてシエスタに礼を言う。

「教えてくれてありがとう。助かったよ」

「いいえ。また何かあったら、遠慮なく言ってくださいね。同じ平民同士ですし」

「ありがとう。……あ、そうだ。じゃあ一つだけ教えてもらって良い？」

「何ですか？」

「医務室って、どこにあるのかな？」

金木の言葉にシエスタは一瞬不思議そうな表情になったが、すぐに医務室の場所を教えてくださいました。

「医務室、ですか？ それなら……」

そして医務室の場所を聞いた金木は、籠を持ってぺこりとシエスタに頭を下げた。

「色々ありがとうございます。またね」

そうやって、金木はその場を去って行った。シエスタはしばらく金木の後ろ姿を見ていたが、仕事を思い出したのか彼女もさっさとその場を離れた。

シエスタと離れた金木は、彼女に教えてもらった医務室の前まで辿り着くと、ゆっくりと扉を開ける。幸運な事に、鍵は開いているらしい。

それからゆっくりと入るが、どうやら人はいないようだ。それにほっと一息つくくと、悪いと思いつつも部屋中を歩き回ってある物を探し始める。

「……あった」

それを部屋にあった机の引き出しからようやく見つけた金木は、探し物を手に持つ。

探していたのは、医療用の白い眼帯だった。

金木がこれを探していたのは、無論目に障害などを負っているからではない。

喰種は通常、感情が高ぶったり赫子を出す時は両目が赤く染まる赫眼かくがんという状態になる。しかし半分喰種である金木の場合は、左目だけが赫眼かくがんになる。それが、彼が隻眼の喰種といわれる由縁でもあるの

だ。

この先戦う事になった場合、もしも左目が赫眼になっているのを見られたりしたら大騒ぎになるかもしれない。何せ、目が赤く染まるのだ。ただの人間では、そんな事は絶対に起こらないだろう。

この眼帯は、それを防ぐための予防策のようなものだ。

金木が左目を眼帯で覆い隠すと、視界がやや狭くなった。しかしマスクを着けている時も片目が塞がっている状態であるので、正直言ってあまり気にならない。

金木はこの場にいない部屋の主に軽く頭を下げると、静かに扉を開けて医務室から立ち去った。

金木が部屋に戻って来ても、ルイズはまだベッドで眠っていた。金木はため息をつくくと、洗濯物が入った籠を置いてからベッドに近寄り、ルイズの小さな体を揺さぶる。

「ルイズちゃん、朝だよ」

「はえ……？。そう……。って、あんた誰よ！」

ルイズは寝ぼけた声で怒鳴った。ふにやふにやの顔が痛々しい。それを見て金木は呆れた様に肩をすくめた。

「金木研だよ。昨日ルイズちゃんが召喚した」

「ああ、使い魔ね。そうね、昨日召喚したんだったわね。でもあんた、昨日眼帯なんかしてたっけ？」

「どうやら金木の白い眼帯に気付いたらしい。金木は顎を擦りながら、

「あー……うん。ちょっと目にゴミが入っちゃって、それで……」

自分でも下手な言い訳だと思っただが、どうやらそれで納得してくれたらしい。ふーんと言いながらルイズは起き上がると、あくびをしてから金木に命じる。

「服」

そう言われて、金木は椅子にかかった制服を取る。その間にルイズはだるそうにネグリジェを脱ぎ始めた。男の目の前で脱ぐとは、昨日

も思ったが本当に金木を男と思っていないらしい。

「下着」

「それぐらい自分で取りなよ……」

「そのークローゼットのー、一番下の引き出しに入ってるわ」

「はいはい……」

呆れた声を出しながら、金木はクローゼットの引き出しを開けた。そこには当然だが、大量の下着が入っていた。金木は適当に下着を一枚掴むと、目を瞑ってルイズに渡す。

下着を身に着けたルイズが再びだるそうに呟いた。

「服」

「さっき渡したでしょ？」

「着せて」

えー……と金木が振り向くと、下着姿のルイズが気だるそうにベッドに座っていた。

ルイズは唇を尖らせながら、

「平民のあんたは知らないだろうけど、貴族は下僕がいる時は自分で服なんて着ないのよ」

それを聞いて、金木は自分の中の貴族のイメージがガラガラと崩れていくのを感じた。その貴族のイメージも本を勝手に読んで抱いていたイメージだが、それにしてもこれは少しあんまりじゃないかと思う。しかしその事を言っても仕方ないので、金木は渋々服をルイズに着せてあげた。

着替えを終えたルイズと一緒に部屋を出ると、隣の扉が開いて中から燃えるような赤い髪の女性が現れた。ルイズよりも背が高く、むせするような色気を放っている。彫りが深い顔に、突き出たバストが艶めかしい。まるでメロンみたいな大きさである。

一番上と二番目のブラウスのボタンを外し、胸元を覗かせている。大抵の男ならばその谷間に思わず目が行ってしまうだろう。褐色の肌が、健康そうな色気を振りまいている。彼女に匹敵する胸を持つ女性性は、金木の知る限り知り合いの喰種であるイトリと、かつて自分を食おうとした利世りせぐらいかもしれない。



身長、肌の色、雰囲気、胸の大きさ。全部がルイズと対照的な女性だった。

彼女はルイズを見ると、にやりと笑みを浮かべた。

「おはよう。ルイズ」

ルイズは顔をしかめると、嫌そうに挨拶を返した。

「おはよう。キュルケ」

「あなたの使い魔って、それ？」

金木を指差して、バカにしたような口調で言う。

「そうよ」

「あつはつは！ほんとに人間なのね！すごいじゃない！」

本当は半分人間じゃないんだけど……と金木は本日二回目の事を思ったのが、そんな事を口にするはずもなくただ黙っている事にした。

「サモン・サーヴァントで平民を召喚するなんて、あなたらしいわ。さすがはゼロのルイズ」

ルイズの白い頬に、さつと朱が差した。

「うるさいわね」

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って、一発で呪文成功よ」

「あつそ」

「どうせ使い魔にするなら、こういうのが良いわよね。フレイム」

キュルケは勝ち誇った声で使い魔を呼んだ。すると、キュルケの部屋からのつそりと真つ赤なトカゲが現れた。大きさは虎程もあり、尻尾が燃え盛る炎でできている。チロチロと口から炎が迸っており、むんとした熱気が金木を襲った。

「これってもしかして、サラマンダー？」

現れた生き物に驚きながら、金木はそう言った。その姿は、昔読んだ幻獣の本の挿絵に描かれたサラマンダーの絵にそっくりだったのだ。

「ええそうよ、良く知ってるわね。見て？この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ？ブ

ランドものよー。好事家に見せたら値段なんかつかないわよ?」

「そりゃ良かったわね」

苦々しい声でルイズが言う。

「素敵でしょ。あたしの属性ぴったり」

「あんた『火』属性だもんね」

「ええ。微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。でも、男の子はそれでイチコロなのですわ。あなたと違ってね?」

キュルケは得意げに胸を張った。ルイズも負けじと胸を張り返すが、ポリュームが違いすぎて勝ち目が全く無かった。

ルイズはそれでもぐつとキュルケを睨み付けた。どうやらかなりの負けず嫌いらしい。

「あんたみたいにいちいち色気を振りまくほど、暇じゃないだけよ」

キュルケはにつこりと余裕の笑みを浮かべると、今度は金木を見つめた。

「あなた、お名前は?」

「か、金木研」

「カネキケン? 変な名前」

「はあ……」

シエスタに続いてキュルケにまで言われて、金木はそんなに変かたと内心首を傾げた。確かにこのような国では珍しい名前かもしれないが、そんなに変と言われる名前だとは思わない。他に何か理由があるのだろうか。

「じゃあ、お先に失礼」

キュルケはそう言うと、炎のような赤髪をかきあげて颯爽とキュルケは去って行った。ちょこちょこと、大柄な体に似合わない可愛い動きでサラマンダーがその後を追う。

キュルケがいなくなると、ルイズは悔しそうに拳を握りしめた。

「くやしー! なんなのあの女! 自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって! ああもう!」

「ま、まあまあルイズちゃん、落ち着いて……」

「落ち着けるわけじゃないじゃない! メイジの実力をはかるには使い魔

を見ろって言われてるぐらいよ！　なんであの馬鹿女がサラマンダーで、わたしがあんななのよ！」

「そんな事言われても……」

金木はそう言いながら困ったように頬を掻いた。

「そう言えば、彼女君の事をゼロのルイズって呼んでたけど、ゼロってなんの事？」

「……ただのあだ名よ」

そう言ったルイズの表情は、どこか悔しそうに見えた。彼女のその様子が少し気になりながらも、金木はさらに続ける。

「ゼロか……。彼女の微熱は何となく分かるけど、君はどうしてゼロなの？」

「知らなくて良い事よ」

ルイズはバツが悪そうに言った。ゼロというあだ名は気になるが、この様子では恐らくこれ以上尋ねても答えてくれないだろう。金木はそこで質問を止める事にした。

トリステイン魔法学院の食堂は、学院の敷地内で一番背の高い真ん中の本塔の中にあった。食堂の中には長いテーブルが三つほど並んでおり、百人は優に座れるだろう。ルイズ達二年生のテーブルは、その真ん中だった。

どうやら学年ごとにマントの色が決められているらしく、食堂の正面に向かって左隣のテーブルに並んでいる、少し大人びた雰囲気のないメイズ達は全員紫色のマントを着けていた。雰囲気からして、三年生なのだろう。

右隣のテーブルのメイズ達は、茶色のマントを身に着けているので恐らく一年生だ。

ルイズによると、学院の中の全てのメイズ達……つまり生徒も先生も全員、ここで食事をとるらしい。

一階の上にはロフトの中塔があり、先生達がそこで歓談に興じているのが見えた。

全てのテーブルには豪華な飾り付けがなされていた。いくつもの

蝋燭が立てられ、花が飾られ、果物がたくさん盛られた籠がのっている。

金木がその豪華絢爛さに驚いていると、得意げに指を振ってルイズが言った。彼女の鳶色の目が、悪戯っぽく輝く。

「トリステイン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ」

「魔法だけじゃないって言うത്？」

「メイジはほぼ全員が貴族なの。『貴族は魔法をもつてしてその精神となす』のモットーのもと、貴族たるべき教育を存分に受けるのよ。だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬのよ」

「貴族の食卓、ね……」

眩きながら、金木は食堂を見渡す。彼女の言い分は分かるが、それにしてもやけに豪華すぎるような気がする。

「いい？ ホントならあんたみたいな平民はこの『アルヴィーズの食堂』には一生入れないのよ。感謝してよね」

「そのアルヴィーズって何？」

「小人の名前よ。周りに像がたくさん並んでいるでしょう」

ルイズの言う通り、壁際には精巧な小人の彫像が並んでいた。

「よくできてるね。今にも動き出しそう」

「動くわよ」

「動くの!？」

「っていうか踊ってるわ。いいから、椅子を引いてちょうだい。気の利かない使い魔ね」

腕を組んでルイズが言った。金木はやれやれと言うように肩をすくめながら椅子を引く。

ルイズが礼も言わずに腰掛けると、金木も自分の椅子を引き出して座った。

「え……もしかして、これが朝食……?」

金木は目の前の料理に思わず絶句した。大きい鳥のローストに、ワインや鱒の形をしたパイが並んでいる。それらから漂ってくる香りに、金木は思わず顔をしかめた。いくら貴族とはいえ、ここまで豪華

にする必要があるのだろうか。

目の前の料理に目を奪われていると、ルイズが自分をじつと睨んでいる事に気付いた。

「ど、どうしたの?」

その眼差しに金木が尋ねると、彼女は床を指差した。そこには皿が一枚置いてあり、小さな肉の欠片が浮いたスープが揺れている。皿の端っこには硬そうなパンが二切れ、ぽつんと置かれていた。

「……何これ?」

金木が皿を見ながら言うと、ルイズは頬杖をついて言った。

「あのね? ほんとは使い魔は、外。あんたはわたしの特別な計らいで、床」

「僕はペットか何かですか……」

そう呟きながら、金木は床に座り込んだ。どうもこの少女は使い魔の意味をはき違えているような気がする。

金木が座り込むと同時に、食事の席に着いているメイジ達全員による祈りの声が唱和された。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもうた事を感謝いたします」

これでささやかかって、と金木は呆れかえっていた。この学院に来た時から思っていた事だが、どうもこの学院のメイジ達は貴族とは名ばかりのような気がしてならない。自分を召喚したルイズを嘲笑うし、正直言ってあまり貴族という雰囲気を感じられない。本当にこの生徒達はきちんと貴族の教育を受けているのかと疑問に思うレベルである。

唱和が終わると、ルイズは美味しそうに豪華な料理を頬張り始めた。金木はごくりと覚悟を決めたかのように唾を呑み込んでから、目の前のパンにかじりつく。

「~~~~~っ!!」

口の中に広がるパンのひどい味に、金木は自分の背筋が凍りつくのを感じた。ついでに今すぐパンを吐き出したくなるが、かろうじてそれだけは防ぐ。そんな事したら食堂から追い出されること間違い

なしだ。

喰種の味覚は人間と大きく異なり、人間にとって美味しいと感じる食べ物でも喰種にとっては酷くまずく感じてしまい、仮に摂取できたとしても体調を悪くしてしまう。例えばパンなら無味無臭のスポンジ、ハムならば獣の生皮を張り付けたような食感である（なお、これらは全て金木の個人的な感想である）。そのため喰種は人間と同じような食事をとる事は出来ない。人肉以外に唯一摂取できるのは水、そしてコーヒーだけだ。あとは同種である喰種も食べる事ができるが、味は酷いため好んで食べる喰種はあまりいない。

（ま、前に食べた食パンは固形の嘔吐物みたいな味だったけど、これはそれに下水を混ぜたみたいないな味……！）

要するに、非常にマズイという事だった。

そんな味だったので金木はそこでパンを食べる手を止めて、スープも残す事にした。

運よくルイズには気付かれていなかったので、怒られるような事も無かった。

その後トイレに行き、胃の内容物を吐き出した金木はルイズと一緒に魔法学院の教室に向かった。

教室は金木が通っていた大学の講義室のようだった。違いを挙げるならば、机や椅子などが全て石で造られている点だろう。かつて通っていた大学の講義室によく似た教室を見て、金木は自分の胸に懐かしさがこみ上げてくるのを感じた。

金木とルイズが中に入っていくと、先に教室にやってきていた生徒達が一斉に振り向くと同時にくすくすと笑い始めた。生徒達の中には先ほど出会ったキュルケもいて、彼女の周りを男子が取り囲んでいる。

どうやら男の子がイチコロだというのは本当のようだ。周りを囲んだ男子達に、まるで女王の様に祭り上げられている。

皆、様々な使い魔を連れていた。

キュルケのサラマンダーは椅子の下で眠り込んでいる。肩にフク

ロウを乗せている生徒もいた。窓から巨大なヘビがこちらを覗いており、男子の一人が口笛を吹くとヘビは頭を隠した。他にも、カラスや猫などもいる。

しかし何よりも目を引くのは、金木の世界では架空の生物である生き物達があちこちを動き回っている事だった。

(あの六本足のトカゲは……確か、バシリスクだ。でも、あの目の玉は……?)

「ルイズちゃん。あの目の玉は何?」

「バグベアー」

「バグベアー? あれが?」

金木の記憶が正しければ、バグベアーは全身毛むくじやらの姿をしたゴブリンの一種である。

「じゃあ、あの蛸人魚は?」

「スキュア」

「スキュア……? あ、スキュラの事かな? 確かにちよつと似てるかも……」

スキュラというのは、ギリシア神話に登場する怪物である。上半身は美しい女性で下半身は魚だが、腹部からは三列に並んだ歯を持つ六つの犬の前半身を持つと言われている。どうやら同じような名前でも、姿形が異なる生き物がこの世界には存在しているらしい。

(もしかしたら同じグールって名前でも、性質とかが全然違う生き物がいるかもしれないな)

金木がそんな事を考えていると、ルイズが不機嫌そうな顔をしながら席の一つに腰掛けたのが見えた。金木も隣に座ると、ルイズが金木を覗んだ。

「今度はどうしたの?」

「ここはね、メイジの席。使い魔は座つちや駄目」

「さすがに座る事ぐらいは許してほしいな……」

金木がそう言った直後、扉が開いて先生が入ってきた。先生が入って来た事でルイズもそれ以上言うのはやめたのか、ルイズは金木から視線を金木から前に映す。

入ってきたのは、中年の女性だった。紫色のローブに身を包み、帽子を被っている。ふくよかな頬が優しい雰囲気を漂わせていた。

彼女は教室を見回すと、満足そうに微笑んで言う。

「みなさん、春の使い魔召喚は大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に様々な使い魔達を見るのがとても楽しみなのですよ」

その言葉に何故かルイズがうつむくと、シュヴルーズの目が金木に向けられた。

「おやおや。変わった使い魔を召喚したものですね、ミス・ヴァリエール」

するとその直後、教室中がどっと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！ 召喚できないからって、その辺歩いてた平民を連れてくるなよ！」

その言葉にルイズが立ち上がった。長いブロンドの髪を揺らし、可愛らしく澄んだ声で怒鳴る。

「違うわ！ きちんと召喚したものだ！ こいつが来ちやつただけよ！」

「嘘つくな！ サモン・サーヴァントができなかったただけだろ？」  
ゲラゲラと教室中の生徒が笑うのを、金木は冷めた目つきで見ている。

「ミセス・シュヴルーズ！ 侮辱されました！ かぜつぴきのマリコルヌがわたしを侮辱したわ！」

握りしめた拳で、ルイズが机を勢いよく叩く。

「かぜつぴきだと？ 俺は風上のマリコルヌだ！ 風邪なんか引いてないぞ！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪も引いてるみたいなのよ！」

まるで小学生の喧嘩みたいだな……と金木は思った。マリコルヌと呼ばれた少年が立ち上がってルイズを睨み付けると、シュヴルーズ先生が手に持った小ぶりな杖を振った。立ち上がった二人は糸の切れた操り人形のように、すくとんと席に座った。

「ミス・ヴァリエール。ミスタ・マリコルヌ。みつともない口論はやめ



なさい」

ルイズはしよぼんとうなだれた。シュヴルーズの一言で、さつきまでの生意気な態度が吹っ飛んだようだ。

「お友達をゼロだのかぜっぴきだの呼んではいけません。分かりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ。僕のかぜっぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

マリコルヌのその一言でくすくす笑いが漏れると、シュヴルーズが厳しい顔で教室を見回した。そして杖を振るうと、笑っている生徒達の口にぴたつと赤土の粘土が押し付けられた。

「あなた達は、その格好で授業を受けなさい」

その一言で、教室のくすくす笑いが収まった。

「では、授業を始めますよ」

それから始まった授業は、魔法が無い世界で育った金木にとって非常に興味深い内容だった。

何でもこの世界の魔法には『火』『水』『風』『土』の四大系統が存在し、さらにそこに今は失われた系統魔法である『虚無』を合わせて全部で五つの系統があるらしい。さらにシュヴルーズによると、五つの系統の中で土は最も重要なポジションを占めているという事らしい。それは彼女が土の系統による身びいきではなく、土系統の魔法が万物の組成を司る重要な魔法だから、という事のようにだ。土系統の魔法が無ければ重要な金属を造り出す事も出来ないし、加工する事も出来ない。大きな石を切り出して建物を建てる事もできなければ、農作物の収穫も今より手間取るといふ事だ。

(つまり、この世界じゃ科学の代わりに魔法が発達してるのか……。それなら確かに、貴族達が力を持つてるのも分かるかも……。でもその魔法も現代の日本の科学技術には追いついていない、か)

推測だが、この世界の文化レベルは中世から近世のヨーロッパに近いのかもしれない。近い内、図書館などでハルケギニアの事を本格的に調べた方が良さそうだと金木は思った。

それからシュヴルーズは机の上に置かれた石ころに向かって杖を

振り上げ、短くルーンを呟くと突然石ころが光り出した。

光が収まると、ただの石粉だったそれは光る金属に変わっていた。

「ゴゴ、ゴールドですか？ ミセス・シユヴルーズ！」

キュルケが興奮したように身を乗り出した。

「違います。ただの真鍮です。ゴールドを錬成できるのは『スクウエア』クラスのメイジだけです。私はただの……『トライアングル』ですから」

こほんともったいぶった咳をしてから、シユヴルーズはそう言った。それを聞いた金木は、横のルイズに小声で尋ねる。

「ねえルイズちゃん」

「何よ。授業中よ」

「分かってるよ。スクウエアやトライアングルって、何？」

「系統を足せる数の事よ。それでメイジのレベルが決まるの」

「……？ どういう事？」

ルイズは小さな声で金木に説明する。

「例えばね？ 土系統の魔法はそれ単体でも使えるけど、火の系統を足せばさらに強力な呪文になるの。単体の魔法を使うメイジの事を『ドット』メイジ、二つの系統を足せるのが『ライン』メイジよ」

それを聞いて金木は考え込むように顎に手を当てながら、

「そうか、凶形の形になってるんだ。じゃああの先生は三つの系統を足せるから『トライアングル』メイジ……。『スクウエア』メイジは四つの系統を足せるって事？」

「そうよ。ま、スクウエアメイジは超一流の証だから、滅多にいないんだけどね」

なるほど、と呟きながら金木は視線を前に戻す。するとシユヴルーズが席を見渡しながらこんな事を言った。

「では、誰か一人に『錬金』の魔法をしてもらいましょうか。そうですね……。ミス・ヴァリエール、どうですか？」

名指されたルイズはきよんととして、

「え？ わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてみてください」

しかしルイズは立ち上がらない。困ったようにもじもじしている。それを見て、金木が声をかけた。

「どうしたの?」

「ミス・ヴァリエール! どうしたのですか?」

シュヴルーズ先生が再び呼びかけると、キュルケが困った声で言った。

「先生」

「何ですか?」

「やめといた方が良いと思いますけど……」

「どうしてですか?」

「危険です」

キュルケがきつぱりと言うと、教室のほとんど全員がそれに同意するように頷いた。

「危険? どうしてですか?」

「ルイズに教えるのは初めてですよね?」

「ええ。でも、彼女が努力家という事は聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやってごらんなさい。失敗を恐れていては、何もできませんよ?」

「ルイズ。やめて」

キュルケが蒼白な顔で言うが、ルイズは立ち上がってはつきりした声で告げる。

「やります」

そして緊張した顔で、つかつかと教室の前へと歩いて行った。

隣に立ったシュヴルーズはにっこりとルイズに笑いかけた。

「ミス・ヴァリエール。鍊金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

こくりと頷いて、ルイズは手に持った杖を振り上げた。金木が周りを見てみると、何故か前の席に座っていた生徒は椅子の下に隠れていた。その姿に嫌な予感を感じた金木は、自分も椅子の下に隠れる。

その直後だった。

凄まじい轟音が教室内に響き渡り、それに続いて窓ガラスが割れた

ような音がした。金木が驚いて椅子の下から這い出ると、教室の中は阿鼻叫喚の騒ぎになっていた。

キュルケのサラマンダーが先ほどの爆音に驚いてか炎を口から吐き、マンティコアが飛び上がり、外に飛び出していった。その穴から先ほど顔を覗かせた大へびが入ってきて、誰かのカラスを飲みこんでいる。ちなみにルイズとシユヴルーズは爆風をもろに受けて、床に倒れていた。

すると金木と同じように椅子の下に避難していたキュルケがルイズを指差して、叫んだ。

「だから言ったのよ！ あいつにやらせるなって！」

「もう！ ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「俺のラッキーが食われた！ ラッキーが！」

その光景に金木が呆然としてみると、煤で真っ黒になったルイズがむくりと立ち上がった。ブラウスが破れ、華奢な肩が覗いている。しかもスカートが裂け、パンツが見えていた。見るも無残な姿である。ちなみにシユヴルーズは倒れたまま動かないが、たまに痙攣しているので死んではないようだ。

そして事の張本人であるルイズは大騒ぎの教室を意に介した風もなく、顔についた煤を取り出したハンカチで拭きながら、淡々とした声で言った。

「ちよつと失敗したみたいね」

その直後、ルイズは他の生徒達から猛然と反撃を食らった。

「ちよつとじゃないだろ！ ゼロのルイズ！」

「いつだって成功の確率、ほとんどゼロのルイズじゃないかよ！」

それを見て、金木は小さく呟いた。

「そうか……。だから『ゼロ』なんだ……」

その後、ルイズと使い魔の金木はめちやくちやになった教室の掃除を命じられた。罰として魔法を使って修理する事が禁じられたが、ルイズは魔法が使えないのであまり意味が無かった。なお、掃除を命じ

たミセス・シユヴルーズはその日一日錬金の講義を行わなかった。どうやらトラウマになってしまったらしい。

金木は特に何も言わずに、黙々と掃除を行っている。新しい窓ガラスを運んだり、重たい机を運んだり、煤だらけになった教室を雑巾で磨いたりなど重労働ばかりだが、人間以上の筋力を持つ金木にとつてそれは大きな問題ではない。一方、この状況を生み出した本人は黙って机を拭いている。

「……これで分かったでしょ」

突然、机を拭いていたルイズがそんな事を言った。重たい机を元の位置に運んだ金木はそんなルイズを見て、尋ねる。

「分かったって、何が？」

「私の二つ名の由来に決まってるでしょ!!」

教室に、ルイズの悲しそうな声が響き割った。

「何を唱えても、爆発ばかり!! 魔法の成功率ゼロパーセント!! それで付いたあだ名が『ゼロ』のルイズよ!! あんただって本当は、わたしの事馬鹿にしてるんですよ!? 貴族のくせに魔法が使えない落ちこぼれだって!! メイジ失格のできそこないだって!! 笑えば良いじゃない!! どうせ本当の事なんだし、あんたも笑って馬鹿にすれば良いじゃない……」

ひとしきり叫ぶと、ルイズはうずくまって啜り泣き始めた。

「どうしてよ…… どうしてわたしは、魔法が使えないのよ…… どうして……」

「……………」

金木はそんなルイズに近づくと、しゃがみこんで彼女の顔を見る。「笑って君の気が済むなら笑うけど、そんな事したら君はすごく傷つくと思う。だから、笑ったりしないよ」

「ひぐ……何よ、偉そうな事言つて……」

「それに、ルイズちゃんは思い違いをしている。ルイズちゃんはきちんと魔法を使えたでしょ?」

え? とルイズが金木の顔を見ると、彼は優しい笑みを浮かべながらルイズの顔を見ていた。

「僕を召喚したじゃないか。それが、ルイズちゃんが魔法を使つたつて証拠だよな」

そう言うのと、金木はルイズの涙を拭いながら、

「だから、泣いちゃだめだ。そんな事したら、他でもない君自身が自分の事を『ゼロ』だつて認めてる事になつちやうよ？ ルイズちゃんは魔法を使えたんだから、胸を張るべきだ。そう思わない？」

そう言いながら金木はルイズの頭をポンポンと叩いた。ルイズはしばらくぼかんとしていたが、慌てたように金木の手を払うとふんとそつぽを向いた。

「ま、まったく使い魔のくせに主人の頭を叩くなんて、礼儀のなつてない使い魔ね！」

「あはは、ごめんね」

金木は笑いながらも、ルイズの調子が元に戻つた事を感じ取つて内心安心した。自分にとつても彼女にとつても予想外の召喚だつたとはいえ、自分にとつて彼女は命の恩人なのだ。そんな彼女が泣いているのは見ていられない。彼女は金木に背を向けたまま、

「まったく、お腹が減つたわ！ 先に食堂に行つてるから、あんたも早く来なさいよね！」

「はいはい」

「……それと、……う」

「え？」

「何でもない！」

そう言うのと、ルイズはぷんぷんと教室を後にした。

しかし金木は、その後ろ姿を笑みを浮かべて見つめていた。

何故なら、彼女が最後に言つた言葉が。

ありがとう、と聞こえたから。

### 第三話 決闘

ミスタ・コルベールはトリステイン魔法学院に奉職して二十年、中堅の教師だ。彼の二つ名は『炎蛇のコルベール』である。その名が示す通り、火系統の魔法を得意とするメイジである。

彼は先日の春の使い魔召喚の際に、ルイズが呼び出した平民の青年の事が気にかかっていた。正確に言うと、青年の左手に現れたルーンの事が気になって仕方ないのである。それで、先日の夜から図書館にこもりつきりで書物を調べていたのだ。

トリステイン魔法学院の図書館は、食堂のある本塔の中にある。本棚は驚くほどに大きい。約三十メートルほどの高さの本棚が、壁際に並んでいる様は壮観である。それもそのはずで、ここには始祖ブリミルがハルケギニアに新天地を築いて以来の歴史が詰め込まれているのだ。

彼が現在いるのは図書館の中の一区画、教師の身が閲覧を許された『フェニアのライブラリー』の中だ。

生徒達も自由に閲覧できる一般の本棚には、彼の満足いく回答は見つからなかったのである。

レビテーションという空中浮遊の呪文を使い、手の届かない書棚まで浮かんで彼は一心不乱に本を探っていた。

そしてついに、その努力が報われる時が来た。彼は一冊の本の記述に目を留めた。

それは始祖ブリミルが使用した使い魔達が記述された古書だ。その中に記された一節に彼は目を奪われていた。じっくりとその部分を読みふけるうちに、彼の目が見開かれる。古書の一節と、少年の左手に現れたルーンのスケッチを見比べる。

彼はあつと声にならない呻きを上げた。そのせいで一瞬レビテーションのための集中が途切れ、床に落ちそうになる。彼は本を抱えるど、慌てて床に下りて走り出した。

彼が向かった先は、学院長室だった。

「オールド・オスマン！」

図書室から慌てて走ってきたコルベールは、学院長室に通じる扉を勢いよく開けて部屋に飛び込んだ。

「なんじゃね？」

中にいたオスマン氏は腕を後ろに組んで重々しく闖入者を迎え入れた。部屋の隅に置かれている机には、秘書のミス・ロングビルが机に座って書き物をしている。

実はついさっきまでオスマンが使い魔のネズミ、モートソグニルを使ってロングビルの下着を覗き見るといふセクハラ間違いなしの行為を行い、それが理由でオスマンがロングビルに蹴りまわされていたのだが、二人は素早く定位置に収まりそんな事があつた事などコルベールに微塵も悟らせなかった。とんでもない早業である。

「ただ、大変です！」

「大変な事などあるものか。全ては小事じゃ」

「ここ、これを見てください！」

コルベールはオスマンに先ほど読んでいた書物を手渡した。

「これは『始祖ブリミルの使い魔達』ではないか。まあたこのような古臭い文献など漁りおつて。そんな暇があるのなら、たるんだ貴族達から学費を徴収するうまい手をもつと考えるんじゃよ。ミスタ……なんだっけ？」

「コルベールです！ お忘れですか！」

「そうそう。そんな名前だったな。君はどうも早口でいかんよ。で、コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「これも見てください！」

コルベールは金木の左手に現れたルーンのスケッチを手渡した。

それを見た瞬間、オスマンの表情が変わる。目が光り、厳しい色になった。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」



するとロングビルは言われた通り立ち上がり、部屋を出ていった。彼女の退室を見届け、オスマンが口を開く。

「詳しく説明するんじゃない。ミスタ・コルベール」

教室を出て、ルイズがいる食堂に向かっていた金木は、ふとある事に気付いた。

「そう言えば、こっちに来てからあまりお腹減らないな……」

こつちに来る直前、自分は有馬に殺されかけていた。今ではその際に受けた傷も元通り治っていたが、普通なら飢餓状態に陥っていてもおかしくない。実際、有馬と戦う前はある捜査官から重傷を受けたせいで腹が減って減っておかしくなりそうな状態だったのだ。そんな状況になっただけでもまったくおかしくない時に召喚されたというのに、まったく空腹感を覚えてないというのは少しおかしな話だった。そして金木は、ある事を思いだした。

(……そう言えば、ヒデはどうなったんだろう)

有馬と戦う前、極限の飢餓状態で出会ったのは、小学校時代からの金木の親友である永近英良<sup>ながちかひでよし</sup>だった。あの時は飢餓状態に陥った事による幻影だと思っただが、今ではそれを否定できる。あれは間違いなく幼い頃からの親友の姿だった。

だが金木は、今永近が何をしているか知らない。あの時は飢餓状態で我を失っていたし、気が付くと彼の姿はどこかに消えていたからだ。

(……そう言えばあいつ、僕が喰種だって事を知ってたような事言ってたな……)

まあ知っただけでもおかしくないな、と金木は心の中で思う。彼は昔から勘が良い一面があったし、金木の大学の先輩である西尾<sup>にしお</sup>からも『他の連中よりも周りが見えてる』と称されている。

だから、彼が自分の事を知っていても不思議ではない。

(どこで何してるかは分からないけど、無事だと良いな……)

あの時彼は、自分の正体を親友に知られる恐怖に陥っていた金木に

苦笑しながら言ってくれた。

『知ってた！…シな事良いからさっさと帰ろーぜっ』

あの言葉を信じるならば、きっと彼はもつと以前に自分の正体を知っていたのだろう。

彼に自分が喰種になってしまったと知られていたのはショックだが、今ではそれ以上に嬉しいと思う。

何故なら彼は金木が喰種だという事を知っていてなお、自分の事を親友だと思っていてくれたからだ。もしかしたらあの場にCCGの装備を身に纏って現れたのも、突然自分の前から姿を消した金木の手掛かりを探すためにCCGに入ったからかもしれない。

(…………ヒデに、会いたいな…………)

親友の事を思い出すと、この世界に来て初めて元の世界に対する愛着というものが湧いてきた。切なそうに目を細めながら、真つ青な青空を見上げる。

しかし親友の事を思い出した金木は、その直前にあった事すらも思い出そうとしていた。その時に自分に重傷を負わせた一人の捜査官の事を思いだして、金木の背中を寒気が襲う。

(そう言えば、あの人は…………！)

「カネキさん？」

ぱっ！ と金木は勢いよく振り返った。すると自分の背後に、今朝自分を洗い場まで案内してくれたメイド、シエスタが立っているのが彼の目に入った。

一方、急に金木が振り返った事に驚いたのか、シエスタは目を丸くして言う。

「ど、どうしたんですかカネキさん？ それに、その眼帯は…………」

彼女の目は自分の左目の眼帯に向けられていた。ああ、と金木はようやく我を取り戻すと苦笑を浮かべながら、

「驚かせてごめんね。ちよつと考え事してたから…………。この眼帯は、医務室の先生に頼んでもらったんだよ」

「ああ。だから今朝医務室の場所を聞いてきたんですね」

金木の言葉を聞いて、ほっとシエスタは安心したような息をついてから言った。それから不思議そうな表情を浮かべて、

「でも、カネキさん目に怪我なんかしてましたっけ？」

「う、うん。ちよつと病気があつてね。今朝は眼帯をしてなかったけど、いつもはしてるんだよ」

顎を擦りながら金木が言うと、それでシエスタは「そうだったんですか……」と納得してくれたようだ。それから眼帯に関する話題を逸らすように、金木が慌てた口調で言う。

「そ、そうだシエスタちゃん！ 僕に何か手伝えることはない？ ほら、君に今朝洗い場まで案内してもらったし、そのお礼がしたくて……」

「ええ？ でも、悪いですし……」

「大丈夫。僕にできる事なら、何でもするからさ」

するとシエスタは可愛らしく顎に指を当ててうーんと言いながら、「なら、デザートを運ぶのを手伝ってくださいな」

「うん、任せて」

そう言う和金木は、シエスタと一緒に食堂へと向かった。

大きな銀のトレイに、デザートのケーキが並んでいる。金木がそのトレイを持ち、シエスタがはさみでケーキをつまんで一つずつ貴族達に配っていく。

すると、金髪の巻き髪にフリルの付いたシャツを着た気障なメイジがいるのが金木の目に入った。薔薇をシャツのポケットに挿している。周りの友人たちが、口々に彼を冷やかしていた。

「なあ、ギーシュ！ お前、今は誰と付き合っているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ ギーシュ！」

気障なメイジはどうやらギーシュと言うらしい。彼はすつと唇の前に指を立てると、

「付き合う？ 僕にそのような特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

(……この人、ウタさんと声が似てるなあ。性格はどっちかって言う  
と月山さんに似てるけど……)

自分のマスクを作ってくれた喰種と、自分の剣になり一緒に戦って  
くれた青年の事を思い出しながら、金木はそう思った。とは言っ  
ても、物腰や言い回しなどは月山の方が数段上だった。

その時、ギーシュのポケットから何かが落ちた。ガラスでできた小  
瓶である。中には紫色の液体が揺れていた。

金木はしゃがみ込んで小瓶を拾うと、ギーシュに言った。

「あの、落としたよ」

だがギーシュは振り向かなかった。どうやら聞こえていて無視し  
ているらしい。

仕方ない、と金木は思うとシエスタにトレイを持ってもらい、小瓶  
をテーブルの上に置きながら少し大きめの声で言う。

「小瓶、落としたよ!」

その金木の声に、ギーシュは苦々しげに金木を見つめると、その小  
瓶を押しやった。

「これは僕のじゃない。君は何を言っているんだね?」

「そんなわけないでしょ。君のポケットから落ちたんだから……」

するとその小瓶の出所に気付いたギーシュの友人達が、大声で騒ぎ  
始める。

「おお? その香水はもしや、モンモランシーの香水じゃないのか?」

「そうだ! その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけ  
に調査している香水だぞ!」

「そいつがギーシュ、お前のポケットから落ちてきたって事は、つまり  
お前は今モンモランシーと付き合っている。そうだな?」

友人達の指摘に、ギーシュは首を振りながら、

「違う。良いかい? 彼女達の名誉のために言っておくが……」

ギーシュが何か言いかけた時、後ろのテーブルに座っていた茶色の  
マントの少女が立ち上がり、ギーシュの席に向かって歩いてきた。

栗色の髪をした、可愛い少女だった。着ているマントの色から、  
きっと一年生なのだろう。

「ギーシュ様……」

そう呟くと、少女はボロボロと泣き始めた。

「やはり、ミス・モンモランシーと……」

「彼らは誤解しているんだ。ケティ。良いかい、僕の心の中に住んでいるのは君だけ……」

しかしケティと呼ばれた少女は、思いつきりギーシュの頬を引つばいた。パシーン！ という小気味良い音が食堂内に響き渡る。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！ さようなら！」

ギーシュは頬をさすった。すると今度は遠くの席から、一人の見事な巻き髪の少女が立ち上がった。金木はその少女に見覚えがあった。金木がこの世界に召喚された時に、ルイズと口論していた少女である。

いかめしい顔つきで、ギーシュの席までやってくる。

「モンモランシー。誤解だ。彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただけで……」

あまりに下手な言い訳である。その証拠に、彼は冷静な態度を装っていたが、冷や汗が一滴額を伝っていた。

「やっぱり、あの一年生に手を出していたのね？」

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のような顔を、そのような怒りで歪ませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

いや、元凶は君……と金木が思った直後、モンモランシーはテーブルに置かれたワインの瓶を掴むと中身をどぼどぼとギーシュの頭の上からかけた。まさに見事な修羅場である。

そして、

「嘘つきー」

と怒鳴って去って行った。

沈黙の中、ギーシュはハンカチを取り出すと、ゆっくりと顔を拭いた。そして首を振りながら芝居がかかった仕草で言う。

「あのレディ達は、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

それに金木は呆れたような表情をしてから、シエスタから銀のトレイを受け取って再び歩き出す。

そんな金木を、ギーシュが呼び止めた。

「待ちたまえ、その白髪の君」

「え、何？」

金木が振り返ると、ギーシュは椅子の上で体を回転させると、すさっ！と足を組んだ。

「君が軽率に、香水の瓶なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

その言葉に、金木は呆れかえりながら答えた。

「いや、君が二股をかけてるのがそもそもの原因だろ……」

すると、ギーシュの友人達がどつと笑った。

「その通りだギーシュ！ お前が悪い！」

周りの友人達の笑い声で、ギーシュの顔にさつと赤みが差した。

「良いかい？ 給仕君。僕は君が香水の瓶をテーブルに置いた時、知らないフリをしたじゃないか。話を合わせるぐらいの機転があつても良いだろう？」

「知らないよそんなの。それに、自分の二股の責任を僕のせいにされても困る」

さらに友人達の笑い声が大きくなり、ギーシュの顔がさらに赤みを増す。

そしてその直後、ギーシュは何か気付いたような表情を浮かべた。

「そう言えば、その白髪……。ああ、君は確かあのゼロのルイズが呼び出した平民だったな」

どうやら金木がルイズの使い魔である事に初めて気づいたらしい。調子に乗ったギーシュは、笑みを浮かべて続ける。

「さすがはゼロのルイズの使い魔だ！ 主人が出来損ないであれば、使い魔も出来損ないというわけだ！」

——その言葉で、金木の表情が変わった。

温厚そうな顔が鋭さを持ち、目が冷たい輝きを帯びる。金木はギー

シユの方に振り返ると、いつもよりも低い声で問いかける。

「……どういう意味？」

「そのままの意味さ。出来損ないのゼロのルイズが召喚したなら、その使い魔も出来損ないというわけだ。そんな使い魔に貴族の機転を期待した僕が間違っていたよ。どこへなりとも行きたまえ」

すると金木はふんと相手を馬鹿にするように鼻を鳴らして、

「君が貴族？ 寝言は寝て言えよ」

「な、何だと!？」

「か、カネキさん!」

金木の言葉にギーシュが憤り、顔を青くしたシエスタが金木を制止しようとしたが、シエスタは金木の表情を見て思わず後ずさりした。

今の金木は、先ほど自分と一緒にいた青年と同一人物とは思えないほど、冷たく鋭い顔つきになっていた。

「二股がばれば僕に責任を押し付けて、しかも何の関係もないルイズちゃんを馬鹿にする。君のような人間を何て言うか知ってる？ 世間知らずの馬鹿って言うんだよ」

その言葉でギーシュの顔が怒りで震え、目が光る。

「どうやら、君は貴族に対する礼を知らないようだね……!」

「あいにく、そんなの何の価値もない世界から来たからね」

二人はしばらくお互い睨み合っていたが、やがてギーシュの方が先に口を開いた。

「良かろう。君に礼儀を教えてやろう。ちようど良い腹ごなしだ」

「僕は構わないよ」

そう言いながら金木は、折り曲げた右手の人差し指を親指で押してバキリ、と音を出した。

ギーシュはくるりと体を翻すと、金木に言う。

「ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配り終えたら、来たまえ」  
ギーシュの友人達がわくわくした顔で立ち去り、ギーシュの後を追った。

一人はテーブルに残っている。恐らく金木を逃がさないための見張りのようなものだろう。

金木は鋭い表情を消すと、後ろのシエスタに振り返った。彼女はぶるぶる震えながら、金木を見つめていた。

「あ、あなた殺されちゃう……」

「え？」

「貴族を本気で怒らせたなら……」

そう言うときシエスタは、走って逃げて行ってしまった。

金木がきよとんととして彼女の後ろ姿を見ていると、そんな彼に先に食堂についていたルイズが駆け寄ってくる。

「あんた！ 何してたのよ！ 見てたわよ！」

「あ、ルイズちゃん。遅れてごめんね」

「遅れてごめんね、じゃないわよ！ 何勝手に決闘なんか約束してんのよー！」

「だって、悪いのは彼だよ？ それなのにあんな事言うから……」

金木が苦々しい表情を浮かべると、ルイズはため息をついてやれやれと肩をすくめた。

「謝っちゃいなさいよ」

「どうして？」

「怪我したくなかったら、謝ってきなさい。今なら許してくれるかもしれないわ」

「でも、先に因縁をつけてきたのは……」

「良いから」

そう言いかけると、ルイズが強い調子で遮った。彼女の鳶色の瞳が、金木の顔をじつと見つめている。

「……嫌だ」

「分かんずやね……。あのね？ 絶対に勝てないし、あんたは怪我するわ。いや、怪我で済んだら運が良いわよ！」

「やってみないと分からないと思うけど」

「聞いて？ メイジに平民は絶対に勝てないの！」

「(……ただの人間の平民、だったらね)」

金木はルイズに聞こえないようにぼそりと呟くと、ルイズと金木のやり取りを見ていたギーシュの友人の一人に尋ねる。



「ヴェストリの広場ってどこ？」

そう言われると、友人の一人は顎をしゃくった。

「こっちだ。平民」

「ありがとう」

「ああもう！ 本当に！ 使い魔のくせに勝手な事ばかりするんだから！」

ルイズは仕方なく、金木の後を追いかけた。

ヴェストリの広場は、魔法学院の敷地内、『風』と『火』の塔の間にある中庭にある。西側にある広場なので、そこは日中でも日があまり差さない。そのため、決闘にはうってつけの場所になっていた。

だが、今は噂を聞き付けた生徒達で広場は溢れかえってた。

「諸君！ 決闘だ！」

ギーシュが薔薇の造花を掲げると、うおーっ！ と歓声が巻き起さる。

「ギーシュが決闘するぞ！ 相手はルイズの平民だ！」

観衆の声を聞きながら、金木はぐっぐつと腕を動かしたり伸ばすなどの準備体操をする。

ギーシュは腕を振って、歓声にこたえている。それからやつと存在に気付いたという風に、金木の方を向いた。金木も準備体操を終えると、首をゴキゴキと鳴らしながら広場の真ん中に立つ。

「とりあえず、逃げずに来た事は誉めてやろうじゃないか」

「決闘を受けたのは僕なのに、逃げるはずがないだろ」

「ふっ、それもそうだな。では、始めるか」

ギーシュが言った直後、人混みの中からルイズが飛び出してきた。

「ギーシュ！」

「おおルイズ！ 悪いな。君の使い魔をちよっとお借りしているよ！」

ルイズは長い髪を揺らし、よく通る声でギーシュを怒鳴りつけた。

「いい加減にして！ 大体、決闘は禁止のはずでしょ！」

「禁止されているのは、貴族同士の決闘のみだよ。平民と貴族の間で

の決闘なんか、誰も禁止していない」

ギーシュのその理屈に、ルイズは言葉を詰まらせた。

「そ、それは、そんな事今まで無かったから……」

「ルイズ、君はこの平民が好きなのかい？」

ルイズの顔が、怒りで赤く染まった。

「誰がよ！ やめてよね！ 自分の使い魔が、みすみす怪我するのを黙って見ていられるわけじゃないじゃない！」

そう言うのとルイズの怒りの矛先が、今度はギーシュから金木に変わった。

「カネキ！ あんたもこんな馬鹿げた事やめなさい！」

「あ、今初めて僕の名前を呼んだね」

「今はどうでも良いでしょそんな事!? 大体あんた平民だし、片目も塞がってるんでしょ!? それなのにメイジと戦えるはずがないじゃない！」

どうやら彼女は今でも金木の下手な言い訳を信じてくれているらしい。金木はにつこりと笑い、

「心配してくれてありがとう、ルイズちゃん」

「し、心配なんてしてないわよ！ それより、早く謝りなさい！ 今ならまだ間に合うかもしれないわよ！」

「……ごめん。それだけはできない」

「どうして!？」

ルイズが叫ぶと、金木は先ほど食堂でシエスタに見せたような鋭い表情を浮かべ、

「別に僕が馬鹿にされるのは良い。……だけど、彼は何の関係もない君まで馬鹿にした。君が失敗ばかりだつていう理由だけで。そんなくだらない事で、君が傷つけられる理由なんてない。そんなの間違ってる。……それを、分かせなくちゃならないんだ」

言いながら、金木はぐっと拳を握りしめた。思いがけない金木のその言葉に、ルイズは何も言えなくなってしまった。

一方、ギーシュはふふんと笑いながら、

「中々素晴らしい主人愛だね。だけど、決闘は決闘だ。手加減なしで

いかせてもらうよ」

言いながら薔薇の花を振るうと、花卉が一枚宙に舞う。

するとその花卉は、甲冑を着た女戦士の形をした人形になった。

身長は大体人間と同じぐらい。どうやら金属製のようであり、淡い陽光を受けてその肌——甲冑がきらめく。

しかしそれが金木の前に立ちふさがっても、金木の表情は変わらない。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね」

「……………」

「どうやら、恐怖で声も出ないようだね。ああ、言い忘れたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手……………」

ギーシュが自慢げに言おうとした瞬間だった。

ドゴン!! という轟音が響き、ワルキューレと名付けられたゴーレムが凄まじい勢いで吹き飛んだ。

吹き飛んだゴーレムは地面に直撃した直後跳ねて、直撃した直後跳ねてといった事を繰り返し、そのたびにドガン!! バガン!! という音が連続して鳴り響く。最終的にワルキューレは学院の外壁にぶつかり、ばらばらになった。

目の前で起こった現象に、観客、ルイズ、ギーシュはぼかーんと馬鹿みたいに口を開けてその光景を見つめていた。

唯一時間が止まったような空間の中で動いているのは、足を動かしている金木だけだった。彼はつまらなさそうな表情をしながら、ばらばらになったワルキューレの残骸を見つめて呟く。

「…………脆いな」

その一言でようやくギーシュは我に返ると、金木に叫んだ。

「な、何をした!? 一体何をしたんだ平民!」

「…………別に。ただ単純に、思いつき蹴っただけだよ」

そう。

金木がした事は、単純にワルキューレに接近して思いっきり蹴り飛ばしただけだ。

聞いてみれば、単純明快。だが、ただの蹴りで金属でできたゴーレムが吹き飛ばすはずもない。人間を遥かに超える筋力を持つ半喰種の金木だからこそ、できる芸当だ。

そしてここにきて、ようやくギーシユは目の前の人間がただの平民ではない事を知った。

「ワ、ワルキューレ!!」

叫びながら、ギーシユは慌てて薔薇を振るう。花卉が舞い、新たなゴーレムが六体現れた。

全部で七体のゴーレムが、ギーシユの武器だ。一体しか使わなかったのは、それには及ばないと思っていたからだ。しかも今度は全てのゴーレムが剣や槍などの武器を持ち、完全に武装している。六体のゴーレムはすぐに金木を取り囲むと、いつでも攻撃できる態勢に入る。

だが、金木の表情に動揺はまったくない。それどころか、凶悪な笑みを浮かべるとこう呟いた。

「……うん。邪魔だな」

そして、バキリ! と折り曲げた人差し指を親指で押し鳴らす。その音を合図にするかのように、ゴーレムが一気に襲いかかる。しかし金木が後ろにいたワルキューレを蹴り飛ばすと、ワルキューレが握っていた剣がその手から離れてくるくと宙を舞う。

金木はすつと右手を真上に伸ばすと、落ちてきた剣をしっかりとその手に掴む。

その時、金木の左手に刻まれたルーン文字が光り出した。

決闘が始まる、少し前。

学院長室で、コルベールは泡を飛ばしてオスマンに説明をしていた。

春の使い魔召喚の際に、ルイズが平民の青年を召喚してしまった。

事。

ルイズがその青年と契約した証明として現れたルーン文字が、気になった事。

それを調べていたら……。

「始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』に行き着いた、というわけじゃね？」

オスマンはコルベールが描いた金木の手に見えたルーン文字のスケッチをじつと見つめながら、コルベールに尋ねる。コルベールはぶんぶんと首を勢いよく縦に振りながら、

「そうです！ あの青年の左手に刻まれたルーンは、伝説の使い魔『ガンダールヴ』に刻まれていたモノとまったく同じであります！」

「で、君の結論は？」

「あの少年は、『ガンダールヴ』です！ これが大事じゃなくて、なんなんですか！ オールド・オスマン！」

コルベールは、禿げあがった頭をハンカチで拭いながらまくしたてた。

「ふむ……。確かに、ルーンが同じじゃ。ルーンが同じという事は、ただの平民だったその青年は『ガンダールヴ』になった、という事になるんじゃないかな」

「どうしましょう」

「しかし、それだけで、そう決めつけるのは早計かもしれん」

「それもそうですな」

オスマンは、悩むようにコツコツと机を叩く。

するとその時、ドアがノックされた。

「誰じゃ？」

扉の向こうから、秘書であるロングビルの声が聞こえてくる。

「私です。オールド・オスマン」

「なんじゃ？」

「ヴェストリの広場で、決闘をしている生徒がいるようです。大騒ぎになっています。止めに入った教師がいましたが、生徒達に邪魔されて止められないようです」

「まったく、暇を持て余した貴族ほど性質たちの悪い生き物はおらんわいで、誰が暴れておるんだね？」

「二人は、ギーシュ・ド・グラモン」

「あのグラモンとこのバカ息子か。親父も色の道では剛の者じゃったが、息子も輪をかけて女好きじゃ。おおかた女の子の取り合いじやろう。で、相手は誰じゃ？」

「……それが、メイジではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の青年のようです」

ロングビルの報告に、オスマンとコルベールは顔を見合わせた。

「教師達は決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めております」

オスマンの目が、鷹のように鋭く光った。

「アホか。たかが子供の喧嘩に、秘法を使ってどうするんじや。放っておきなさい」

「分かりました」

そう言った直後、ロングビルが去って行く足音が聞こえた。

コルベールは唾を飲みこんで、オスマンを促す。

「オールド・オスマン」

「うむ」

頷いたオスマンが杖を振るうと、壁にかかった大きな鏡に、ヴェストリ広場の様子が映し出された。

剣を握った瞬間、金木は自分の体に起こった異変に思わず目を見開いて驚いた。突然体が羽のように軽くなり、右手に握った剣が自分の体の延長のようになりと馴染むのだ。剣などこれまでまったくと言って良いほど使った事がないにも関わらず、だ。

ふと自分の左手を見ると、左手の甲に刻まれたルーンが光っている事に気付いた。もしかして、このルーンの花なのだろうか。

それから周りのゴーレム達に意識を戻すと、それらはゆっくりとした動きで金木に向かって来ていた。どうやらこれもルーンのおかげ

らしい。

(……考えるのは後で良い。今は、こいつらを潰す)

視線を鋭くして剣を構えると、鋭い動きでゴーレムの包囲網から脱出し戦場を走り回る。

元々CCGの羽赫うかくのクインケの攻撃も簡単にかわすほどの金木の機動性は、ガンダールヴのルーンによってさらに高められていた。今の彼の動きは、見ている者が瞬きする事すら許さない。

「な、何だあれ!？」

「人間の動きじゃねえぞ!!」

金木のあまりの速さに、見ていた観客達が驚きと戸惑いの声を上げる。金木は素早い動きでのろのろ動くゴーレム達を見ながら、一気に加速しゴーレムの集団の中に突進する。

刹那。

加速した金木とすれ違った六体のゴーレム全てが金木の持った剣によってバラバラに切り裂かれ、金属音を立てながら地面へと崩れ落ちた。それまで凄まじい速度を叩きだしていた張本人はようやく立ち止まると、自分のゴーレムがあっさり切り倒されて呆然としているギーシュをギロリと睨む。

「ひっ……!」

一睨みで戦意を挫かれたギーシュは、怯えた声を出して地面に尻餅をついた。金木はギーシュに近づくと、剣の切っ先を彼の目の前に突き付ける。

「まだやる?」

答えは分かっていたが、金木はあえてそう尋ねた。

その問いに、ギーシュはふるふると首を横に振りながら震えた声で言う。

「ま、参った」

その声に金木はさっきまでの恐ろしげな表情とはうって変わってにっこりと笑顔になると、青銅でできた剣をギーシュの右横の地面に突き刺した。

「もう、二股なんかしちやダメだよ。あと、酷い事を言ったんだからル

イズちゃんに後で謝っておいてね」

そう言うと、金木はくるとギーシュに背を向けて歩き出した。

あの平民、やるじゃないか！ とか、ギーシュが負けたぞ！ とか、見物していた連中からの歓声が届く。

しかしそんな歓声など、金木にとっては何の価値もない。彼が観衆の中の一人に視線を向けると、その人物は自分の方に向かって走ってきている所だった。

「カネキ！」

その人物——ルイズは金木に駆け寄ってくると、金木の顔をまじまじと見つめながら、

「ど、どうやら怪我とかはしてないみたいね。少し安心したわ……、

………ねえ、カネキ」

一旦言葉を区切ると、ルイズはこんな事を尋ねた。

「あなた一体何者なの？ 本当に平民？」

すると金木は前にも見せた優しい笑みをルイズに向けながら、こう返す。

「僕はルイズちゃんの使い魔の、金木研だよ」

そう答えると、金木は学院へと戻っていく。その後ろ姿を見ながら、ルイズは金木の事を考えていた。

今までは弱そうな平民だと思っていたのに、さっきの決闘ではギーシュのワルクキューレ達を圧倒的な強さで叩き伏せていた。しかも、片目が眼帯で塞がっているという状況でだ。

その上、今の金木の様子は貴族との決闘を終えた後のものとは思えない。もしかしたら、さっき彼が見せた実力は彼の本気では無かったのかもしれない。

(………もしかして………)

さっきの彼の戦いぶりを思い出して高鳴る鼓動を手で抑えながら、ルイズは思う。

(もしかしてわたし、すごい奴を召喚したのかも………)



オスマンとコルベールは、『遠見の鏡』で一部始終を見終えると、顔を見合わせた。

コルベールは震えながらオスマンの名前を呼ぶ。

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、勝ってしまいましたな……」

「うむ」

「ギーシュは一番レベルの低いドットメイジですが、それでもただの平民に後れをとるとは思えません。そしてあの動き！ あんな平民見た事ない！ やはり彼はガンダールヴ！」

「うむむ……」

コルベールは、オスマンを促した。

「オールド・オスマン。さっそく王室に報告して、指示を仰がない事は……」

「それには及ばん」

オスマンはそう言いながら、重々しく頷いた。白いひげが、厳しく揺れる。

「どうしてですか？ これは世紀の大発見ですよ！ 現代に蘇ったガンダールヴ！」

「ミスタ・コルベール。ガンダールヴはただの使い魔ではない」

「その通りです。始祖ブリミルの用いたガンダールヴ。その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文を唱える時間が長かった。その強力な呪文ゆえに、な。知つての通り、詠唱時間中のメイジは無力じゃ。その無力な間、己の体を護るために始祖ブリミルが用いた使い魔がガンダールヴ。その強さは……」

オスマンの台詞を、コルベールが興奮した調子で引き取った。

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並のメイジではまったく歯が立たなかったとか！」

「で、ミスタ・コルベール」

「はい」

「その青年は、本当にただの人間だったのかね？」

「はい。どこからどう見ても、ただの平民の青年でした。ミス・ヴァリエールが呼び出した際に、念のため『ディテクト・マジック』で確かめたのですが、正真正銘ただの平民の青年でした」

「あれを見てただの青年とは、お主も鈍いのう……」  
「はっ？」

ため息とともに離れたオスマンの呟きに、コルベールは思わず間抜けな声を出した。オスマンはさっきの決闘を思い出しながら、

「あの青年は、青銅のゴーレムを蹴り飛ばしたじゃろう？」

「はい。しかしあれも、ガンダールヴの力では……」

「彼があのようなまでの速度を叩き出したのは、武器を持った後じゃ。そしてゴーレムを蹴り飛ばしたのは武器を持つ前。ただの青年が、青銅でできたゴーレムを蹴り飛ばせると思うかね？」

あつ、とコルベールは思わず声を出した。確かにその通りだ。青銅は硬度と強度では鉄に劣るが、それでもれつきとした金属である。蹴り飛ばさそうものなら、人間の足の方が折れてしまう。

だがあの青年は、青銅のゴーレムを蹴り飛ばしたというのにけろりとしている。魔法を使ったというのなら話は別だが、彼からは魔力が感じられなかったのでメイジではない。

それが意味するのはどういう事かは、コルベールにも分かった。ゴーレムを蹴り飛ばしたのは魔法でもなんでもなく、青年自身の膂力だったのだ。だが、それほどの膂力を持つ人間などコルベールは今まで見た事が無い。

コルベールはさっきまで見ていた白髪と眼帯が特徴的な青年を思い出しながら、ごくりと唾を飲みこんでオスマンに問いかける。

「では……オールド・オスマンは彼がただの平民ではないと？」

「断定できないが、可能性は高いじゃろうな。さて、話がそれってしまったが、その青年を現代のガンダールヴにしたのは誰なんじゃね？」

「ミス・ヴァリエールです」

「彼女は優秀なメイジなのかね？」

「いえ、というか、むしろ無能というか……」

結構酷い言い方だが、それが教師の間での彼女の評価なのでそれ以外に言いようがない。

「さて、今はその二つが謎じゃ」

「ですね」

「無能なメイジと契約した青年が、何故『ガンダールヴ』になったのか。まったく、謎じゃ。理由が見えん」

「そうですね……」

「とにかく、王室のボンクラ共にガンダールヴとその主人を渡すわけにはいくまい。そんなオモチヤを与えてしまつては、またぞろ戦でも引き起こすじやろうて。宮廷で暇を持て余している連中はまったく、戦が好きじゃからな」

「ははあ。学院長の深謀には恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃぞ、ミスタ・コルベール」

「は、はい！ かしこまりました！」

オスマンは杖を握ると窓際へ向かった。そして遠い歴史の彼方へと、想いを馳せる。

「伝説の使い魔ガンダールヴか……。一体、どのような姿をしておつたのだろうなあ」

コルベールは学院長の背中を見ながら、夢見るように呟く。

「ガンダールヴはあらゆる武器を使いこなし、敵と対峙したとありますか……」

「ふむ」

「とりあえず、腕と手はあつたんでしようなあ」

## 第四話 誘惑

ギーシュとの決闘に勝利した金木が学院内を歩いていると、後ろからけたたましい足音が聞こえてきた。金木が振り返ると、シエスタが自分に向かって走ってきているのが目に入った。

「カ、カネキさん！」

シエスタは金木の目の前まで走ってくるなり、荒い息を落ち着かせるように深呼吸を何回かする。

「どうしたの、シエスタちゃん」

それに目を丸くした金木が尋ねると、ようやく落ち着いたシエスタが言った。

「さっきの決闘、見ました。それであの、お怪我とかはありませんでしたか？」

「う、うん。無いけど」

金木が困惑しながらもそう答えると、シエスタは「良かった……」と言った直後、安心したように息をつく。それから、何故かはにかんだように顔を伏せた。

「どうしたの？」

「あ、はい……。あの時はすいません。逃げ出してしまつて……」

「いや、良いよ。僕は全然気にしてないし」

食堂で金木がギーシュを怒らせた時、彼女は怖がって逃げ出してしまった。恐らくその事を言っているのだろう。

「本当に、貴族は怖いんです。私みたいな、魔法を使えないただの平民にとつては……」

それからシエスタはぐつと顔を上げた。その目は、キラキラと輝いているように金木には見えた。

「でも、もう、そんなに怖くないです！ 私、カネキさんを見て感激したんです。平民でも貴族に勝てるんだって！ 本当にカツコ良かったです！」

「あ、あはは……。ありがとう」

女性に褒められた経験があまりない金木は、どうにも照れくさく

なつて頬を搔きながらそう言った。そして、シエスタは何かを思いついたようにパン！と手を打った。

「そうだ！ 決闘の後ですし、金木さんお腹が空きましたよね？ せめてものお詫びに、厨房に来てください！ とびきりのご馳走をご用意いたします！」

ご馳走、という単語に金木は顔面を蒼白にした。その言葉は、半喰種の金木にとっては最悪の一言にしかならない。金木は両手を軽く前に突き出して後ろに後ずさりながら、

「だ、大丈夫だよシエスタちゃん、お詫びなんて……。さつきも言ったけど、僕は全然気にしてないからさ……」

しかしシエスタは金木の片手を掴むと、悪意なんてひとかけらもない綺麗な笑顔で、

「金木さんが気にしなくても、私が気にします！ 大丈夫ですよカネキさん、コック長のマルトーさんの料理はとても美味しくて貴族の方々にも好評ですし、それに厨房の皆もカネキさんに会いたがってるんです。さあ、早く行きましょう！」

「ちよ、ちよつと!? ねえシエスタちゃん！ ねえつたら!?!」

金木の必死に抵抗も空しく、彼は厨房へと連れて行かれた。

『『我らの剣』が来たぞ!』

まるで死刑執行寸前の受刑者のような顔をして連れて来られた金木を見てそう叫んだのは、四十過ぎの太った男性だった。丸々と太った体に立派なあつらえの服を着こんでおり、恐らく収入はかなりのものだろう。一方、死にそうな顔をしていた金木はその単語を聞いて、思わず怪訝な表情になった。

「我らの剣……?」

するとその呟きが聞こえたのは、男性は豪快な笑い声を上げながら金木の肩をバンバンと叩く。

「貴族のゴーレムを、目にも止まらない速さでぶった切ったって言うじゃねえか！ さすがは我らの剣だぜ！」

そう言いながら、男性は今度は金木の背中を勢いよく叩き始めた。本当はその前にゴーレムを蹴り飛ばすという荒業もしているのだが、どうやら剣で斬り伏せたインパクトの方が強いらしい。せき込みそうになりながらも、金木は横で笑みを浮かべているシエスタに尋ねる。

「ねえシエスタちゃん。この人が？」

「はい。コック長のマルトーさんです。あの、マルトーさん。できればカネキさんに、シチューを作ってあげて欲しんですけど……」

やめて、と金木は声を大にして言いたかったが、彼女の善意の言葉にそんな事を言えるはずもない。そしてそれを聞いたマルトーはシエスタの頼みを快諾した。

「おう、任せとけ！ ちよつと待ってるよ、すぐに作ってやるからな！」

そう言うのとマルトーはシチューを作るのを開始した。金木はシエスタが持つてきてくれた専用の椅子に座ると、冷や汗を流しながらシチューの完成を待った。もう気分は死刑囚のそれである。

「さあ、できたぞ！ 今日のシチューは特別だ！」

自慢げに言いながら、マルトーは金木の目の前にシチューの入った皿をでん！ と置いた。

「……………っ!!」

普通の人間から見たらとても美味しそうなシチューの匂いを嗅いだだけで、金木はもう吐き出しそうになった。しかしそんな表情を出すわけにもいかないので、金木は必死に笑顔を取り繕う。それからスプーンを手に取り、かすれた声を出しそうになりながら言った。

「い、いただきます……」

そして覚悟を決めて、スプーンにすくったスープを口に運んだ。

「――」

その瞬間、口の中に地獄が広がった。金木は思わず吐き出したい衝動に駆られたが、自分をキラキラと輝いた目で見るシエスタの目の前でそんな事はできない。意地と根性でスープを飲みこむと、にっこりと脂汗が浮かぶ笑顔で言った。

「お、美味しい、です……」

そう言うと、マルトーは腕を組んで自慢げに言った。

「そりやそうだ。そのシチューは、貴族連中に出してるものと、同じもんさ」

「こんなに美味しいものを、毎日食べてるんですね……」

吐き気を懸命にこらえながら金木が言うと、マルトーは得意げに鼻を鳴らす。

「ふん！ あいつらは確かに魔法はできる。土から鍋や城を作ったり、とんでもない炎の玉を吐き出したり、果てはドラゴンを操ったり、大したもんだ！ でも、こうやって絶妙の味に料理を仕立てあげるのだって、言うなら一つの魔法さ。お前もそう思うだろ？」

「は、はい。そう思います……」

冗談抜きに意識が薄れてきたが、金木は足をつねって必死に意識を保つ。

「良い奴だな！ お前はまったく良い奴だ！」

マルトーは、金木の首根っこに太い腕を巻き付けた。

「なあ、『我らの剣』！ 俺はお前の額に接吻するぞ！ こら！ いいな！」

「その呼び方と接吻はやめてください……」

もう拷問みたいな気分だが、これでもかつて受けた拷問よりは遙かにマシだと自分に言い聞かせる。作ってくれたマルトーにダイブ失礼になってきたが、こうしなければ今にも吐き出してしまいそうなのだ。これぐらい勘弁してほしい。

「どうしてだ？」

「どつちも照れくさいです……」

マルトー親父は金木から体を離すと、両腕を広げてみせる。

「お前はメイジのゴーレムを斬り裂いたんだぞ！ 分かっているのか！」

「はい……」

「なあ、お前はどこで剣を習った？ どこで剣を習ったら、あんな風に振れるのか、俺にも教えてくれよ！」

マルトーは金木の顔を覗き込んだ。金木はふるふると首を横に振りながら、

「分からないです。剣なんて握った事もないですし……」

「お前達！ 聞いたか！」

マルトーは厨房に響くように怒鳴った。

若いコックや見習い達が、返事をよこす。

「聞いてますよ、親方！」

「本当の達人というのは、こういうものだ！ 決して己の腕前を誇ったりしないものだ！ 見習えよ！ 達人は誇らない！」

それにコック達が嬉しそうに唱和した。

「達人は誇らない！」

するとマルトーはくるりと振り向き、金木を見つめた。

「やい、我らの剣。俺はそんなお前がますます好きになったぞ、どうしてくれる」

「あ、あはは……。ありがとうございます……」

本当の事を言ったつもりなのだが、どうやらマルトーはそれを謙遜を受け取ったらしい。気さくなこの人物を騙しているように気分になるが、正直言って今の金木はそれどころではない。笑顔を浮かべながら、必死にシチューを食べなければならぬ。

顔をしかめようにも、横でシエスタがニコニコと見守っているのだから、そんな事も出来ない。

まさかこんな所で美味しそうに食事をしているフリをする練習を行うとは思わなかったと内心思いながら、金木は必死に咀嚼し続けた。

それからシチューを食べ終わり、マルトーやシエスタ達と笑顔で別れた数分後。

「おええええええええっ!!」

学院のトイレで胃の中の全てを吐き出してだいぶ楽になった金木は、ふらふらとトイレから出てきた。本当ならこんな事はしたくない



のだが、普通の食べ物を食べた喰種は胃の中のものを吐き出さなければ体調に支障をきたす。それを防ぐためにも、消化が始まる前に嘔吐しなければならぬのだ。

「……………これ、どうしよう……………」

金木は手に持っていた袋を困ったような表情で見つめた。袋の中に入っているのは、やや大きめの骨付きの肉である。金木が食堂を去る際に、シエスタがまた来てくださいと言ってくれたのだ。しかし今盛大に吐いたというのに、これを食べてまた吐き出すような真似はしたくない。

金木はため息をつくとき、とりあえず外に向かう事にした。新鮮な空気を体内に取り入れて、気分転換をしたかったのだ。

廊下をしばらく歩くと、金木は中庭にたどり着いた。今日の天気も見事に快晴で、穏やかな風が吹いている。それに金木が思わずずんずんと両腕を上には伸ばしていると、中庭にある生物がいる事に気付く。どうやら自分よりも先にここには先客がいたらしい。金木はその生物に近づくと、驚きと感動が入り混じった声で呟く。

「すごい……………ドラゴンか……………」

それはまさしく、金木がよく本などで読んでいたドラゴンだった。鱗の色は鮮やかな青色で、陽の光を照り返してキラキラと光っている。どうやら昼寝の最中なのか、その目は閉じられていてく〜く〜と寝息を立てている。

金木が地面に座り込んでじっと見つめていると、ドラゴンが目を見ました。ドラゴンはふあとあくびをすると、緑色の瞳で自分をじっと見つめ返す。金木は頬をポリポリと掻きながら話しかけた。

「あ、起こしちやった？ ごめんね」

言葉が通じているのかと思っただ、ドラゴンはきゅいきゅいと鳴いて首を横に振った。どうやら人間の言葉が分かるほどに知能が高いらしい。金木が恐る恐るドラゴンの頭部を撫でてみると、ドラゴンは気持ちよさそうに目を閉じた。どうやら危害を加える気はないようだ。

そうだ、と金木はある事を思い出してポケットの中に入れてあった

袋を取り出す。袋の中から骨付きの肉を取り出すと、その瞬間ドラゴンの目が輝いた。金木は肉を目の前まで持っていきながら、

「これ、あげるよ。僕は今お腹が空いてないから」

そう言うと、ドラゴンはぱくりと金木が持っていた肉を器用に口で咥えてもぐもぐと食べ始めた。その様子をニコニコと見ていた金木は、ある用事を思い出して立ち上がると短パンについた草や草をぱっぱと払う。

「ごめん、僕行く所があったんだ。またね」

金木が手を振りながら言うと、ドラゴンはきゅいきゅいと鳴きながら前脚を振って別れを告げる。自分の予想以上に人間らしいドラゴンだな、と金木は思った。

ドラゴンと別れた金木が向かったのは、図書館だった。食堂でシチューを食べていた時、シエスタから図書館の場所を聞いたのだ。入口には司書がいたので、見つからないように図書館に忍び込む。

そして金木は、目の前に広がる光景に圧倒された。

「すごい……！」

本棚の大きさに、金木は思わず驚きの声を出した。三十メートルほどの高さの本棚が、壁際に並んでいるのだ。本好きでこれに感動を覚えない人間はいないだろう。

金木はとりあえず生徒も自由に閲覧できる一般の本棚に向かうと、適当に本を一冊取り出して中を見る。

そして、思わず顔をしかめた。

「何だ……この文字……」

本に書かれていた文字は、日本語でもなければ英語でもない、不思議な言語で書かれていた。どうやらこの世界の言語は自分の住んでいた世界とはだいぶ異なるらしい。周りの人達とは会話が成り立っていたため安心してはいたが、これでは文字などを読む事が出来ない。

参ったな……と金木は思いながら、ある事に気付く。

（あれ？　じゃあ僕は何で、ルイズちゃん達の言葉が分かるんだ……？）

言語が違うのなら、話している言葉も分からないはずだ。それなの

に自分はルイズ達の言葉が分かるし、反対にルイズ達も自分が話している言葉が分かる。文字が読めないのに言葉は分かるというのは、いくら何でもおかしいだろう。他に何か理由があるのだろうか。

「でも困ったな……。これじゃ何も調べられないし、このルーンの事も分からない……」

金木は自分の左手に刻まれているルーン文字を見つめながら、一人呟いた。

ギーシュとの決闘の時、剣を握った瞬間体が軽くなり今まで振った事すらない剣を自在に扱えるようになった。この図書館ならばそれについて何か分かるかもしれないと思ったのだが……。どうやらあては外れてしまったようだ。

気を取り直して、金木は今度は地図を探す事にした。地図ならば文字が読めなくても大陸の形が分かるし、どれぐらいの数の国家があるか調べる事が出来る。

それから本棚から地図が載った本を数冊引っ張り出して、中にあった地図を広げる。やはり文字は読めないが、大体の地理は理解する事ができた。

「やっぱり結構大きいな……。ってそう言えば、この学院もどこにあるか分からないんだよな……」

場所が分からなければ、この大陸のどの辺が学院がある位置なのかも分からない。幸先が不安になってきた、と金木はため息をつきながら目の前に広がる本棚を見つめる。

「……どうせこの後は特に予定もないし、読める本でも探そうかな……」

これだけの本を目の前にすると、どうしても本好きの血が騒いでしまう。もしかしたらこの膨大な数の本の中に自分が読める本もあるかもしれないので、金木はさっそく身近な本を手にとって中を読み始めた。

「ま、あるわけないよね……」

金木は図書館からルイズの部屋への道を歩きながら、一人呟いた。

結局あれから何冊か本を取り出して読んでみたのだが、金木が読める本は一冊も無かった。そのため、現在の時刻はすっかり夜である。

しかし今の金木にとっては、文字が読めないという問題の方が深刻だった。読書好きの金木としては読書ができないというのは結構耐えがたいものがあるし、この世界での生活にも支障を生じる。近い内にルイズかシエスタから文字を習う必要があるだろう。

やがて金木がルイズの部屋の前まで戻ってくると、隣のキュルケの部屋の扉が開いた。

出てきたのはサラマンダーのフレームだった。フレームはちよこちよこ金木の方に近づいてきて、金木はしゃがみ込みながらフレームに言う。

「どうしたの？」

するとフレームは案外人懐っこい感じで、きゆるきゆると鳴いた。どうやら害意は無いらしい。

フレームは金木の上着の袖を啞えると、まるでついて来いと言うように首を振った。

「わ。ちよ、ちよっと」

慌てて金木が言うが、フレームはぐいぐいと強い力で金木を引っ張る。

見てみると、キュルケの部屋の扉は開けっ放しだった。どうやらあそこに金木を引っ張り込むつもりらしい。

ただ単なるフレームの気まぐれには見えない。だとすると、これは主人であるキュルケの命令なのだろう。だが、キュルケが自分に一体何の用なのだろうか。

考えれば考えるほど疑問が湧いて出てくるが、その答えは恐らく部屋に入れば分かるのだろう。

金木はフレームに引っ張られるまま、キュルケの部屋の扉を潜った。

いざ入ってみると、部屋の中は真っ暗だった。フレームの周りだけ、ぼんやりと明るく光っている。

「扉を閉めて？」

突如どこからかキュルケの声がして、金木は少し驚いた。それから言われた通りに、背後の扉を閉める。

「ようこそ。こちらにいらっしやい」

彼女がそう言った直後、ぱちんと指を弾く音がどこからか聞こえてきた。

すると、部屋の中に立てかけられた蝋燭が一つずつ灯っていく。

金木の近くに置かれた蝋燭から順番に火は灯っていき、キュルケのそばの蝋燭がゴールのようだった。道のりを照らす街灯のように、蝋燭の明かりが浮かんでいる。

ぼんやりと光る淡い幻想的な光の中に、ベッドに腰掛けたキュルケの悩ましい姿があった。彼女の姿を見て、金木は思わず頬を赤らめてしまう。

彼女はベビードールとうのだろうか、そういう誘惑するための下着をつけていたのだ。というよりも、それしかつけていない。

そして彼女のあられもない姿を見て、キュルケの胸が上げ底ではない事が確認できた。メロンのようなそれが、レースのベビードールを持ち上げている。

「そんな所に突っ立ってないで、いらっしやいな」

キュルケが色っぽい声で言うと、金木はぎこちない動きで頷きながらキュルケの元へと歩いて行く。キュルケはにつこりと笑いながら再び口を開いた。

「座って？」

金木は言われた通りにキュルケの隣に腰掛けた。裸に近いキュルケの体がすぐ横にあるので、自分の顔の熱がさらに上がるのを感じる。

「ど、どうして僕をここに呼んだんですか？」

金木は緊張した声でキュルケに尋ねた。燃えるような赤い髪を優雅にかき上げて、キュルケは金木を見つめた。彼女の褐色の肌はぼんやりとした蝋燭の明かりに照らされて、野性的な魅力を放っている。

キュルケは大きいため息をつく、悩ましげに首を振った。

「あなたは、あたしをはしたない女だと思うでしょうね」

「い、いや、そんな事は……」

「思われても、仕方がないの。分かる？ あたしの二つ名は『微熱』」

「それは知ってるけど……」

「あたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの。だから、いきなりこんな風にお呼び立てしたりしてしまうの。分かっている。いけない事よ」

そう言われて、金木の困惑が段々強くなってきた。話の筋が全く見えない。

「でもね、あなたはきつとお許しくださると思うわ」

キュルケは潤んだ瞳で金木を見つめた。その瞳に思わず金木はごくりと唾を飲み込んでしまう。

「な、何をですか？」

キュルケはすつと金木の手を握ってきた。キュルケの手は温かった。そして一本一本金木の指輪を確かめるようになってざり始める。その行為に、金木の心臓の鼓動が高鳴った。

「恋してるのよ、あたし。あなたに。恋はまったく、突然ね」

「は、はあ？」

彼女の口から放たれた予想外すぎる言葉に、金木は思わず間抜けな声を出した。一瞬からかっているのかと思っただが、キュルケの顔は真剣そのものである。

「あなたがギーシュを倒した時の姿……。カッコ良かったわ。まるで伝説のイーヴァルデイの勇者みたいだったわ！ あたしね、それを見て痺れたのよ。信じられる！ 痺れたのよ！ 情熱！ ああ、情熱だわ！」

「じよ、情熱ですか……」

「二つ名の微熱はつまり情熱なのよ！ あれを見てから、あたしはぼんやりとしてマドリガルを綴ったわ。マドリガル。恋歌よ。あなたのせいなのよ、カネキ。あなたがどうしても気になるものだから、フレイムを使って様子を探らせたり……。ほんとに、あたしってばみつともない女だわ。そう思うでしょ？ でも、全部あなたのせいなのよ」

金木はなんと答えれば良いのか分からずに、じつと座っていた。キユルケは金木の沈黙をイエスと受け取ったのか、ゆつくりと目を瞑って唇を近づけた。だが金木は、キユルケの肩を押し戻した。

何故かは分からないが、今までに散々騙されてきた金木の勘が目の前の誘いには乗るなと警告を発していたのだ。

どうして？　と言わんばかりにキユルケは金木を見つめた。

「だって、君はどうやら惚れっぽいようだし、それに僕は……」

そこで金木は目を伏せて、続きを言うのを止めた。

彼女は人間で、自分は半分とはいえ喰種だ。彼女の恋愛感情が本当にせよそうでないにせよ、自分にそういった感情を向けるのは良い事とは思えない。今は何かしらの理由で空腹が抑えられているが、もしも限界が近づいたら彼女を食べてしまうかもしれないのだ。大切なものを失ったというのに、これ以上もう何かを失いたくない。

突然黙ってしまった金木をキユルケがきよんとした瞳で見つめていると、突然窓の外が叩かれた。

二人が目を向けてみると、そこには恨めしげに部屋の中を覗く一人のハンサムな男の姿があった。

「キユルケ……。待ち合わせの時間に、君が来ないから来てみれば……」

「ペリッソン！　ええと、二時間後に」

「話が違うー！」

ここは確か三階である。どうやら彼は魔法で浮いているらしい。

キユルケはうるさそうに、胸の谷間に差した派手な魔法の杖を取り上げて、男の方を見もしないで杖を振るう。

蠟燭の火から炎が大蛇のように伸び、窓ごと男を吹き飛ばした。

「まったく、無粋なフクロウね」

金木は目の前の光景に、思わずぽかんと口を開けていた。

「でね？　聞いている？」

「……えっと、今の誰？」

「彼はただのお友達よ。とにかく今、あたしが一番恋しているのはあなたよ。カネキ」

キュルケは再び金木に唇を近づけようとした。金木が慌ててそれから逃れようとする、今度は窓枠が叩かれた。

二人が再び見てみると、今度は悲しそうな顔で部屋の中を覗き込む、精悍な顔立ちの男がいた。

「キュルケ！ そいつは誰だ！ 今夜は僕と過ごすんじゃないのか！」

「ステイツクス！ ええと、四時間後に」

「そいつは誰だ！ キュルケ！」

怒り狂いながら、ステイツクスと呼ばれた男は部屋に入ってこようとした。キュルケはうるさそうに、再び杖を振るう。

再び蠟燭の火から太い炎が伸び、男は火にあぶられて地面に落ちた。

「……今のも友達？」

「彼は、友達というよりはただの知り合いね。とにかく時間をあまり無駄にしたくないの。夜が長いなんて誰が言ったのかしら！ 瞬きする間に、太陽はやってくるじゃないの！」

それからキュルケが金木に唇を近づけようすると、窓だった壁の穴から悲鳴が聞こえた。金木は大体の予想を思い浮かべながら振り向く。

そこには予想通り、男がいた。しかし先ほどとは違い、今度は三人もの男が窓枠で押し合いへし合いしていた。

三人は同時に、同じセリフを吐いた。

「「キュルケ！ そいつは誰なんだ！ 恋人はいないって言ってたじゃないか！」」

「マニカン！ エイジャックス！ ギムリ！」

今まで出てきた男が全員違うので、金木はもう驚きを通り越して感心してしまった。

「ええと、六時間後に」

「朝だよ……」

その場の誰よりも早く、金木が小さく呟いた。それからキュルケがうんざりした声で、フレイムに命令する。



「フレイム」

きゆるきゆると部屋の隅で眠っていたフレイムが起き上がり、三人が押し合っている窓だった穴に向けて、炎を吐いた。三人は仲良く地面に落下していった。

「……今のも知り合い？」

半眼で金木が聞くと、キュルケはしれつとした声で答えた。

「さあ？ 知り合いでもなんでもないわ。とにかく！ 愛してる！」

キュルケが金木に体を近づけようとして、金木が腰を浮かして逃げようとしたその時。

キュルケの部屋の扉が物凄い勢いで開けられた。

また男か、と思ったら違った。そこにはネグリジエ姿のルイズが立っていた。

ルイズは部屋を照らす蠟燭を一本一本忌々しげに蹴り飛ばしながら、金木とキュルケに近づく。

「キュルケー」

ルイズがキュルケの方を向いて怒鳴ると、キュルケはやれやれと肩をすくめながらルイズの方を向く。

「取り込み中よ、ヴァリエール」

「ツエルプストー！ 誰の使い魔に手を出してんのよ！」

「仕方ないじゃない。好きになっちゃったんだもん」

キュルケは両手を上げながらそう言った。

「恋と炎はフォン・ツエルプストーの宿命なのよ。身を焦がす宿命よ。恋の業火で焼かれるなら、あたしの家系は本望なのよ。あなたが一番ご存知でしょう？」

キュルケはそう言いながら今度は両手をすくめた。金木は何の事を言っているのか分からなかったが、ルイズの方は心当たりがあるらしい。彼女の手がわなわなと震えていたからだ。

「来なさい、カネキ」

ルイズは金木をじろりと睨んだ。

「ねえルイズ。彼は確かにあなたの使い魔かもしれないけど、意思だってあるのよ。そこを尊重してあげないと」

「い、いいえ。僕は今日は帰ります」

金木はキュルケの助け舟を蹴ると、さささとルイズの方に歩いて行く。

「あら。お戻りになるの？」

キュルケは悲しそうに金木を見つめた。キラキラとした瞳が、悲しそうに潤む。

しかしそれも彼女のお得意の手なのだろう。金木はごめんね、と頭を下げると、ルイズに手を握られて部屋を出る。

そんな金木に、キュルケは「またいらしてね」と言いながらひらひらと手を振った。

部屋に戻ったルイズは、慎重に内鍵をかけると、金木に向き直った。唇をぎゅつと噛み締めると、両目が吊り上がる。

「まるで盛りのついた野良犬じゃないのー!!」

声が震えている。どうやらルイズは、怒りが頂点に達すると声が震えるらしい。

ルイズは顎をしゃくった。

「ど、どうしたの？」

「そこに這いつくばりなさい。わたし、間違ってたわ。あんたを一応、人間扱いしてたみたいね」

「え、あれで？」

それはどう見ても嘘だろうと思った。今まで金木は、ルイズは自分の事をペットか何かと勘違いしているんじゃないかと思っていたのだ。

「ツエルプストーの女に尻尾を振るなんてー! 白犬ー!」

「どうして白犬!?! 髪の毛が白いから!?!」

「そうよ!」

「そんな安直な……」

金木が呆れると、ルイズは机の引き出しから何を取り出した。乗馬用の鞭だ。

ルイズはその鞭で床を叩きながら、

「のの、野良犬なら、野良犬らしく扱わなくちゃね。いいい、今まで甘かったわ」

「どうして鞭なんて持つてるんだよ……」

金木はルイズが持った見事な鞭を眺めた。立派な革製の鞭である。まあ、これでは自分を傷つけられないだろうが。

「乗馬用の鞭だから、あんたにや上等ね。あんたは、野良犬だもんね！」

「野良犬ですか……」

ルイズがそれで金木を叩こうとするが、金木は素早い動きで鞭をかわす。必死に自分に迫ってくる鞭をかわしながら、金木はルイズに言った。

「それにしても、どうしてルイズちゃんはキュルケちゃんの事を目の敵にするの？」

するとルイズはキュルケの表情を思い出したのか、苦虫を噛み潰したような表情になる。そして鞭を振るう手を止めると、その理由を話し始めた。

「まずね、キュルケはトリステインの人間じゃないの。隣国ゲルマニアの貴族よ。それだけでも許せないの。わたしはゲルマニアが大嫌いな」

「えっと、それで？」

「わたしの実家があるヴァリエールの領地はね、ゲルマニアとの国境沿いにあるの。だから戦争になるといつも先頭切ってゲルマニアと戦ってきたの。そして国境の向こうの地名はツエルプストー！キュルケの生まれた土地よ！」

ルイズは歯軋りしながら叫んだ。

「つまり、あのキュルケの家系は……。フォン・ツエルプストー家は、ヴァリエールの領地を治める貴族にとって不倶戴天の敵なのよ。実家の領地は国境挟んで隣同士！ 寮では隣の部屋！ 許せない！」

「そう言えば、恋する家系とも言ってたね」

「ただの色ボケの家系よ！ キュルケのひいひいおじさんのツエルプストーは、わたしのひいひいおじさんの恋人を奪ったのよ！」

「今から二百年前に！」

「大分昔だね……」

「それから、あのツエルプストーリーの一族は、散々ヴァリエールの名を辱めたわ！ ひいひいおじいさんは、キュルケのひいひいおじいさんに、婚約者を奪われたの」

「へえ」

「ひいおじいさんのサフラン・ド・ヴァリエールなんかね！ 奥さんを取られたのよ！ あの女のひいおじいさんのマクシミリ・フォン・ツエルプストーリーに！ いや、弟のデューデイツセ男爵だったかしら……」

「つまり、ルイズちゃんの家系はあのキュルケちゃんの家系に恋人を取られまくったって事？」

「それだけじゃないわ。戦争のたびに殺し合ってるのよ。お互い殺され殺した一族の数は、もう数えきれないわ！」

「そこで一旦言葉を区切ると、水差しからコップに水を注ぎ、一息に飲み干した。」

「というわけで、キュルケはダメ。禁止」

「別に僕は彼女の恋人になる気はさらさら無いけど……」

「良い心がけね。その方が賢明よ。あんな奴の恋人なんて、ロクな事にならないに決まってるんだから！」

ルイズはそう憎々しげに吐き捨てた。どうやら彼女とキュルケの因縁は、自分の想像以上に深いらしい。

それからルイズは何かを思い出したように手をパンと打つと、金木に向かって言った。

「そうだ、カネキ。明日は街に買い物に行くわよ」

その言葉に、金木は思わず目を丸くしてルイズを見つめた。

「え、どうして？」

すると、ルイズは照れくさそうにそっぽを向きながら、

「……決闘の後、ギーシュがわたしに謝ってきたのよ。何の事か聞いてみたら、あんたあいつがわたしを侮辱した事に怒って決闘を引き受けたんですって？ ……勝手な事をしたのには許せないけど、使い魔

の忠誠心に答えるのも主人の役目よ。明日の買い物はそのご褒美みたいなものね。安心しなさい、剣ぐらいは買ってあげるわ」

「あ、ありがとう……。でも明日の授業はどうするの？」

「それも大丈夫よ。明日は虚無の曜日だから、授業は無いわ。分かっていたら、早く寝なさい」

どうやらこちらの世界でも曜日によって休みの日が決まっているらしい。ルイズがもぞもぞとベッドに潜り込むのを見ながら、課役も早く寝るために床に寝転がって毛布に包まる。

それから、ベッドでこんもりしている塊を見てから、ふと思う。

自分が今ここにいるのは、自分を召喚したルイズを護るためだ。だが、自分は喰種だ。本当に彼女の事を想うのならば、その本能が彼女や周りの人達に向かう前に早くここから立ち去らなければならぬ。それなのにここにいるのは、彼女を護るという目的を果たす事であるていくを守れなかったという事実から目を逸らすためかもしれない。

何をしようとも、自分が芳村達を護れなかったという事実は変わらないのに。

「……………」

金木はギリ……と奥歯を噛み締めると、ゆっくりと目を閉じて眠りについた。

## 第五話 魔剣

翌日、キュルケは昼前に目覚めた。今日は授業の無い、虚無の曜日である。窓を眺めて、窓ガラスが入っていない事に気付いた。良く見てみると、周りが焼け焦げている。しばらくぼんやりと寝ぼけた気分ですれを眺めていたが、そこで昨晚の出来事を思い出した。

「そうだわ、色んな連中が顔を出すから、吹っ飛ばしたんだっけ」

そして窓の事など全く気にせず、起き上がると化粧を始めた。今日はどのようなように金木を口説こうかと考えるとウキウキしてくる。キュルケは生まれつきの狩人なのだ。

化粧を終えると、自分の部屋から出てルイズの部屋の扉をノックする。

だが、ノックの返事はない。開けようとしたが鍵がかかっていた。

キュルケは何のためらいもなく、ドアに『アンロック』の呪文をかけた。すると、ガチャリと鍵が開く音がした。本来ならば学院内で『アンロック』を唱える事は重大な校則違反なのだが、キュルケはまったく気にしていない。恋の情熱は全てのルールに優越する、というのがツエルプストー家の家訓なのだった。

しかし、部屋はもぬけの殻である。二人共いない。

キュルケはきよろきよろと部屋を見回した。

「相変わらず、色気のない部屋ね……」

ルイズの鞆が無い。虚無の曜日なのに、鞆が無いという事はどこかに出かけたのだろうか。念のために窓から外を見回してみる。

すると、門から馬に乗って出ていく二人の姿があった。よく目を凝らしてみると、それは金木とルイズだった。

「なによー、出かけるの?」

キュルケはつまらなさそうに呟いた。

それからちよつと考えて、ルイズの部屋を飛び出した。

キュルケの友人であるタバサは寮の自分の部屋で、読書を楽しんで

いた。青みがかかった髪と、ブルーの瞳を持つ彼女は、眼鏡の奥の目をキラキラと海のように輝かせて本の世界に没頭していた。

タバサは年より四つも五つも若く見られる事が多い。身長は小柄なルイズより五センチも小さく、体も細かったからだ。しかし、本人はそんな事はまったく気にしていない。

他人からどう見られるかというよりも、とにかく放っておいてほしいと考えるタイプの少女だった。

タバサは虚無の曜日が好きだった。何故なら、自分の世界に好きにだけ浸っていられるからである。彼女にとつての他人は、自分の世界に対する無粋な闖入者である。数少ない例外に属する人間でも、よほどの場合でない限り鬱陶しく感じるのだった。

その日も、どんと扉が激しく叩かれたのでタバサはとりあえず無視した。

その内に、激しく叩かれ始めた。タバサは立ち上がらずに、面倒臭そうに小さな唇を動かしてルーンを呟き、机に立てかけてあった自分の身長より大きい杖を振った。

『サイレント』という、風属性の魔法である。タバサは風属性の魔法を得意とするメイジだった。サイレントによって、彼女の集中を妨げるノックの音はすぐに消え去った。

タバサはそれに満足し、再び本に向かう。その間、表情はぴくりとも変わらなかった。

しかし、扉は勢いよく開かれた。タバサは闖入者に気付いたが、本から目を離さない。

入ってきたのは、キュルケだった。彼女は大げさに何かを喚いたが、サイレントの呪文が効果を発揮しているため、声がタバサに届かない。

するとキュルケはタバサの本を取り上げ、タバサの肩を掴んで自分に振り向かせた。タバサは無表情にキュルケの顔を見つめていたが、その顔からはいかなる表情も窺う事は出来ない。だが、歓迎していない事だけは確かだった。

しかし、入ってきたのはキュルケだ。数少ないタバサの友人であ

る。これが他の相手なら何のためらいもなく部屋から『ウィンド・ブレイク』でも使って吹き飛ばす所なのだが、キュルケは数少ない例外だった。

仕方がないので、タバサはサイレントの魔法を解除した。

いきなりスイッチを入れたオルゴールのように、キュルケの口から言葉が飛び出してくる。

「タバサ。今から出かけるわよ！早く支度をしてちょうだい！」

タバサは短くぼそつとした声で自分の都合を友人に述べた。

「虚無の曜日」

それで十分であると言わんばかりに、タバサはキュルケの手から本を取り返そうとした。キュルケは高く本を掲げた。背の高いキュルケがそうするだけで、タバサの手は本に届かなくなる。

「分かっている。あなたにとつて虚無の曜日がどんな日なのか、あたしは痛いほどよく知ってるわよ。でも、今はね、そんな事言ってもらえないの。恋なのよ！恋！」

それで分かるでしょ？と言わんばかりのキュルケの態度だが、タバサは首を振った。キュルケは感情で動くが、タバサは理屈で動く。どうにも対照的な二人である。そんな二人は、何故か仲が良かった。

「そうね。あなたは説明しないと動かないのよね。ああもう！あたしね、恋したの！でね？その人が今日、あのにっくいヴァリエールと出かけたの！あたしはそれを追って、二人がどこに行くのか突き止めなくちゃいけないの！分かった？」

ヴァリエールという単語に、タバサはぴくりと反応した。それからキュルケの目を見て、尋ねる。

「……その人というのは、彼女の使い魔？」

「ええ、そうよ」

するとタバサは珍しく何か考え込んでいるかのように顎に手を当ててから、言った。

「分かった」

するとキュルケは、自分の要望が通ったというのに思わずきよとんとした表情を浮かべた。いつもならもう少し渋るはずのタバサが、案



外あつさりと了承したからだ。こんな事、今までほとんど言っていないほど無かった。

「……………」

一方、タバサは頭の中でルイズの使い魔——金木研の事を考えていた。

正直言つて、彼の事はこの前まで興味を持っていなかった。タバサの金木への印象が明らかに興味を持ったのは、この前のギーシュとの決闘の時だ。

とは言つても、興味を引かれたのは金木の強さではない。確かに彼は強かったが、それ以上にタバサの興味を惹きつけるものがあった。それは、決闘の際に金木の目に現れた冷たさと鋭さだ。

自分の二つ名である『雪風』以上ではないかと思わせるほどの冷たさには、見た者の心を斬り裂くような鋭さ。その二つが、あの時の金木の目には確かに現れていたのをタバサは見ていた。

一体どういう経験をすれば、あんな氷の刃のような目になるのか。あの目を見た瞬間から、他人に滅多に興味を抱かないタバサは金木研という青年に強い興味を持っていた。

なお、ある人物はタバサが金木の事を話すと、

『お姉様が男の人に興味を持ったのね！ しかもお相手はシルフィにお肉をくれたあの優しいお兄様！ シルフィ、すごく嬉しい！ きゅいきゅい！』

とはしゃいでいたが、うるさかったのでタバサに物理的に黙らされたのはまた別の話である。

タバサは窓を開けて口笛を吹くと、窓枠によじ登り外に向かって飛び降りた。

何も知らない人間が見たら、おかしくなつたとしか思えない行為だが、キュルケはまったく動じない。そんな彼女も少しの間タバサの様子について考え込んでいたが、やがて考えるだけ無駄だと思つたのかタバサの後に続いて飛び降りた。ちなみに、タバサの部屋は五階にある。

タバサは、外出の際はあまり扉を使わない。こっちの方が早いから

だ。

落下する二人をその理由が受け止めた。

二人を受け止めたのは、昨日金木がシエスタからもらった肉をあげたウインドドラゴンだった。

「いつ見てもあなたのシルフィードは惚れ惚れするわね」

キュルケが突き出た背びれに掴まり、感嘆の声を上げる。

タバサから風の妖精の名前を与えられた風竜は、寮塔に当たって上空に抜ける上昇気流を器用に捕えて、一瞬で二百メートルも空を駆け上った。

「どつち？」

タバサが短くキュルケに尋ねる。

するとキュルケは、あつと声にならない声を上げた。

「分かんない……。慌ててたから」

タバサは別に文句をつけるでもなく、シルフィードに命じた。

「馬二頭。食べちゃだめ」

シルフィードはきゅいと短く鳴いて了解の意を主人に伝えると、青い鱗を輝かせ、力強く翼を振り始めた。

高空に上り、その視力で馬を見つけてるのである。草原を走る馬を見つけてる事など、この風竜にとっては容易い事だった。

自分の忠実な使い魔が仕事を開始した事を認めると、タバサはキュルケの手から本を取り返し、尖った風竜の背びれを背もたれにしてページをめくり始めた。

トリステインの城下町を、金木とルイズは歩いていた。魔法学院からここまで乗ってきた馬は、街の門のそばにある駅に預けてある。

町の中を歩きながら、金木は周りを見回していた。白い石造りの街はまるでテーマパークのようである。魔法学院に比べると、質素な身なりの人間が多かった。

道端で声を張り上げたり、果物や肉、籠などを売る商人たちの姿が金木の目を楽しませる。こうした光景だけ見ていれば、まるで外国にいるかのような気分である。

のんびり歩いたり、忙しく歩いている人間がいたり、老若男女取り混ぜて歩いている。その辺は元の世界とあまり変わらなかつたが、道は狭い。

「狭いね……」

「狭いって、これでも大通りなんだけど」

「え、これでなの？」

道幅は五メートルもない。そこを大勢の人が行き来するのだから、歩くのも一苦労である。

「ブルドンネ街。トリステインで一番大きな通りよ。この先にトリステインの宮殿があるわ」

「へえ」

金木が相槌を打つと、ルイズが言った。

「そんな事より、あんた上着の中の財布は大丈夫でしょうね？ この辺はスリが多いんだから……」

ルイズは財布は下僕が持つものだ、と言って財布をそっくり金木に持たせているのだ。中にはぎっしりと金貨が詰まっているので、ずっしりと重い。

「うん、あるよ。でも、これぐらいの重さの財布を盗むのも大変だと思うけど」

「魔法が使われたら一発でしょ？」

え？ と金木は怪訝な表情を浮かべて、

「貴族がスリなんてするの？」

「貴族は全員がメイジだけど、メイジの全てが貴族ってわけじゃないわ。いろんな事情で、勘当されたり家を捨てたりした貴族の二男や三男坊なんか、身をやつして傭兵になったり犯罪者になったりするのよ」

「そうなんだ……。でも、平民からメイジが生まれるって事は無いの？」

「無いわね。少なくとも私は一度も聞いた事が無いわ。そもそも魔法っていうのは始祖ブリミルから伝えられた奇跡の業よ。平民に使えるはずがないわ」

そうなんだ、と言いながら金木この世界の魔法について考える。どうもこの世界の魔法は、自分がよく本で読んでいた魔法とは違って遺伝性のものでらしい。だから、この世界では魔法が使えるという事は貴族である事と同義なのだろう。

(多分、それが原因で貴族の傲慢をさらに助長してるんだろうけど……)

そんな事を思っていると、金木はある看板に目を付けた。

「あの壘の形をした看板は何？」

「酒場よ」

「あのバツテンの印は？」

「衛士の詰め所」

「じゃあ、あの本の形をした看板は……」

「本屋ね」

本屋、という単語を聞いて金木の眉がびくりと動いた。それから、恐る恐るとルイズに言う。

「……ルイズちゃん、悪いんだけど、ちよつと本屋に行つて良い？」

「駄目」

しかし、ルイズはきつぱりとそれだけ返した。

「わたし達は剣を買いに来たのよ。本を買いに来たんじゃないわ。それに、本なら学校の図書館にたくさんあるわよ」

「一回！一回だけで良いから……」

それでも金木が食い下がると、ルイズはしばらくうーんと悩んだような声を出した後、渋々と頷いた。

「……分かったわよ。だけど、長居はしないわ。遅くなると嫌だし」

「うん。ありがとう」

そう言うと、ルイズと金木は本屋の扉を開けて中に入った。

さすが本屋というだけあって、たくさんの本が本棚に並んでいた。しかし背表紙に書かれているのはどれも金木の知識にない文字ばかりで、何が書いてあるのかさっぱり分からない。ルイズを入口の近くに待たせ、金木は書棚に並んでいる本の背表紙を見てみる。そして、背表紙の文字を見てため息をついた。

(……やっぱり、ここにもないか……)

ここに自分が読める本が無いかと来てみたのだが、やはりここにも無いらしい。とは言っても大量の本がある学院の図書館に無かった本がこんな所にあるというのも、少しむしが良すぎる話ではあるが。そして、金木が諦めかけたその時だった。

「……あれ？」

金木の目が、棚に並んでいる真新しい三冊の本に向けられた。その背表紙に書かれている文字は、明らかに他の本の文字とは形が違っている。金木は思わずその三冊の本を取り出して、本の表紙を見る。

「……………!!」

その三冊の表紙を見て、金木は思わず背筋が凍りつくのを感じた。

「何だよ……………！ どうしてこの三冊が、この世界に……………!?!」

三冊の本の表紙には、こんなタイトルが書かれていた。

拝啓カフカ。

虹のモノクロ。

そして……………黒山羊の卵。

それは、間違いなく金木研が住んでいた世界に存在していた小説だった。

中を開いて読んでみると、中に書かれていたのは間違いなく自分が長く慣れ親しんだ日本語だ。

おまけに著者の欄には、自分が敬愛している作家『高槻泉』たかつきせんの文字がある。

金木はその三冊を抱えてレジに向かうと、店主に聞いた。

「す、すみません！ この本、どうしたんですか？」

すると、眼鏡をかけた初老の店主はその本を見るなりああ、と声を上げて、

「その本は、つい最近貴族様が売りに来たものなんだよ。なんでも魔法の実験が失敗した時に、どこからか現れたらしい。だけど中の文字は誰にも読めないから、あまり高くは買えなかったんだけどね」

やはり店主や売りに来た貴族にも、この文字は読めなかったらしい。それも当然だろう、と金木は思う。この文字は、自分の世界の文

字なのだから。だが、何故この三冊が異世界であるここにあるのだろうか。

色々と気になる事はあるが、とりあえずそれは後で考えるところ。金木はその三冊を持って、ルイズに尋ねた。

「ねえ、ルイズちゃん。この本を買っちゃ駄目かな？」

その言葉にルイズは少し顔をしかめて、

「つて言っても……。ねえ、この本ってどれぐらいするの？」

「ああ。その三冊なら九ドニエで構わないですよ」

ルイズが貴族と気付いたのか、店主から返ってきた丁寧な言葉が返ってきた。しかしルイズは店主の告げた値段に、思わず驚いて問い返す。

「そんなに安くて良いの？」

「うちとしては、読めない本を置いても仕方ないですからね。流石にただで売ってわけにもいかんが、それぐらいの値段なら構わないですよ」

店主の言葉を聞いて、金木は財布を取り出してからルイズに尋ねる。

「ドニエってどれ？」

「銅貨よ」

金木は中から銅貨を九枚取り出すと、店主に渡した。買い物を終えた二人が本屋を出ると、ルイズが金木に言う。

「あんたって本好きなの？」

「あ、うん。まあね」

「ふーん。それより、どういう本なの？　ちよつと貸しなさいよ」

「たぶん読めないと思うけど……」

そう言ってから金木は虹のモノクロをルイズに手渡すと、ルイズは本を開いて読み始める。しかし一分も経たないうちに、眉をひそめると本を金木に返した。

「何よこれ、全然読めないじゃない。本当に本なの？」

「本だよ。書かれてる文字は僕の故郷の文字だけ」

「そうなんだ……。ねえ、その三冊の本の著者って全部同じ文字に見

えるけど、もしかして同じ著者？」

「うん。この人は高槻泉って言って……」

二人が本の話題で盛り上がっている内に、ようやく二人は武器屋に辿り着いた。

武器屋には剣の形をした看板が下がっており、見るからに武器屋だと分かりやすい外見をしていた。

ルイズと金木は石段を上り、羽扉を開けて、店の中に入った。

店の中は昼間だというのに薄暗く、ランプの灯りが灯っていた。壁や棚に、所狭しと剣や槍が乱雑に並べられ、立派な甲冑が飾られている。

店の奥でパイプを啜っていた五十絡みの親父が、入ってきたルイズを胡散臭げに見つめた。紐タイ留めに描かれた五芒星に気付き、パイプを離してドスの利いた声を出す。

「旦那。貴族の旦那。うちはまっとうな商売をしまさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これぽっちもありませんや」

「客よ」

ルイズは腕を組んで告げた。

「こりやおったまげた！ 貴族が剣を！ おったまげた！」

「どうして？」

「いえ、若奥様。坊主は聖具を振る。兵隊は剣を振る。貴族は杖を振る。そして陛下はバルコニーからお手をお振りになる、と相場は決まっておりますんで」

「使うのはわたしじゃないわ。使い魔よ」

「忘れておりました。昨今は貴族の使い魔も剣を振るようで」

主人は商売っ気たっぷりに愛想を言った。それから金木をじろじろと見て、

「剣をお使いになるのは、このお方で？」

ルイズは頷きながら、店主に言った。

「わたしは剣の事なんか分からないから、適当に選んでちょうだい」

主人はいそいそと奥の倉庫に消えると、聞こえないように小声で呟いた。

「……こりや、鴨がネギしよってやってきたわい。せいぜい、高く売りにつけるでしょう」

彼は一メートルほどの長さの細身の剣を持って現れた。

随分華奢な剣である。片手で扱うものらしく、短めの柄にハンドガードが付いている。主人は思い出すように言った。

「そういや、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たすのが流行っておりましてね。その際にお選びになるのが、このようなレイピアでさあ」

確かにきらびやかな模様がついており、貴族に似合いそうな綺麗な剣である。

「貴族の間で、下僕に剣を持たすのが流行ってるの？」

ルイズが尋ねると、店主はもっともらしく頷いた。

「へえ、なんでも最近このトリスティンの城下町を盗賊が荒らしておりまして……」

「盗賊？」

「そうでさ。なんでも『土くれ』のフーケとかいう、メイジの盗賊が貴族のお宝を盗みまくってるって噂で。貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末で。へえ」

ルイズは盗賊には興味が無かったので、じろじろとレイピアを眺めた。しかし、すぐに折れてしまいそうなほどに細い。金木は確か、この前もつと大きな剣を軽々と振っていた。

そして金木も、不安そうな表情で剣を眺めていた。この剣が、自分の怪力に果たして耐えられるかどうか心配なのだ。贅沢かもしれないが、できればもう少し大きめの剣が好ましい。

「もつと大きくて太いのが良いわ」

「お言葉ですが、剣と人には相性つてもんがございます。見た所、若奥様の使い魔とやらには、この程度が無難なようで」

「大きくて太いのが良い、と言ったのよ」

ルイズが言うと、店主はぺこりと頭を下げて店の奥に消えた。その際に小さく「素人が！」と毒づくのを忘れない。

今度は立派な剣を油布で拭きながら、主人は現れた。



「これなんかいかがです?」

それは見るも見事な剣だった。一・五メートルはあろうかという大剣で、柄は両手で扱えるよう長く、立派な拵えである。ところどころに宝石が散りばめられ、鏡のように両刃の刀身が光っている。見るからに切れそうな、頑丈な大剣である。

「店一番の業物でさ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいは腰から下げて欲しいものですな。と言っても、こいつを腰から下げるのは、よほどの大男でないと無理でさあ。やつこさんなら、背中にしよわんといかんですな」

金木は近づいて、その剣を見つめた。それから店主の方に目を向けて尋ねる。

「すいません、これ少し振ってみても良いですか?」

「ええ。構いませんよ」

店主の了解を得てから、金木は両手で持ったための大剣を片手で軽々と持ち上げた。それにルイズと店主は目を丸くして驚くが、もう慣れつこの金木は軽く素振りをする。

「……………」

金木は剣を困ったような表情で見つめてから、店主を見つめて言った。

「あの……………これ以外に大剣ってありますか?」

その言葉には店主よりもルイズが驚いていた。彼女は奇妙な事を言いだした金木に、

「ちよ、ちよつと! 何言ってるのよ! 別に良いじゃないそれで!

店一番だつて言ってたし!」

店一番の所が強調されていたのは、ルイズが剣よりもその言葉を気に入っていたからだろう。貴族はとにかく、なんでも一番でないと気が済まないのである。一方、金木は変わらず困ったような表情を浮かべながら、

「だってこの剣、装飾がありすぎて邪魔だし…………。それに上手く言えないけど、変だよこの剣。とてもじゃないけど、戦いには使えなさそうなのがする」

そう言った瞬間だった。

「へえ、人は見かけに寄らないって言うが、お前さんはその通りみたいだな」

乱雑に積み上げられた剣の中から、低い男の声がした。ルイズと金木が目を向けるが、そこには積み上げられた剣しかなかった。

「その剣は買わない方がよいぜ。そいつはなまくらだ。大根一本切れやしねえよ」

「おいデル公！ ふざけた事言ってるじゃねえ！」

「はっ、本当の事言って何が悪いってんだ！」

店主が大声を出すと、先ほどの声が再び返ってきた。金木は声のする方に歩み寄るが、やはり人の姿は無い。

「やつぱり、誰もいないな……」

「おいおい、おめえの目は節穴か！」

ようやく声の出所を特定し、金木は少し目を見開いた。なんと、声の主は一本の剣だったのだ。錆の浮いたボロボロの剣から、声が発せられているのだ。

「け、剣が喋ってる？」

金木は思わずその剣をまじまじと見つめた。先ほどの大剣と長さは変わらないが、刀身が細い、薄手の長剣である。ただ表面には錆が浮き、お世辞にも見栄えが良いとは言えない。

「それって、インテリジエンスソード？」

金木に続いて、ルイズが当惑した声を上げた。

「そうでき、若奥様。意志を持つ魔剣、インテリジエンスソードでさ。いったい、どこの魔術師が始めたんでしようかねえ、剣を喋らせるなんて……。とにかくこいつはやたらと口は悪いわ、客に喧嘩は売るわで閉口してまして……。やいデル公！ これ以上デタラメ抜かすんだったら、貴族に頼んでてめえを溶かしちまうからな！」

「おもしろええ！ やってみろ！ どうせこの世にやもう、飽き飽きしてたところさ！ 溶かしてくれるんなら、上等だ！」

「やってやらあ！」

主人が歩き出すと、金木がインテリジエンスソードを持って愛想笑



ように口を閉ざした。

「ルイズちゃん、僕この剣にするよ」

金木が言うと、ルイズは嫌そうな声を上げた。

「えー。そんなのにするの？ もっと綺麗で喋らないのにしなさいよ」

「べ、別に良いと思うけど。喋る剣って面白いと思うし、それに安そうだし」

「それもそうだけど……」

ルイズはぶつくさと文句を言ったが、やがてため息をつきながら店主に尋ねる。

「あれおいくら？」

「あれなら、新金貨百で結構さ」

「結構安いわね」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなものさ」

主人は手をひらひらと振りながら言った。

金木はポケットからルイズの財布を取り出し、中に入ってた金貨を全てカウンターに落とす。店主は慎重に枚数を確かめると、頷いた。「毎度」

それから剣を手に取り、鞘に収めると金木に手渡した。

「どうしても煩いと思つたら、こうやって鞘に入れとけば大人しくなりませあ」

金木は頷いて、デルFRINGガーという剣を受け取った。

剣を背中に担いで店を出て歩くと、ルイズは剣を背負った金木を見ながら言う。

「でもあんた、よくあんな剣を軽く振れるわよね。ギーシュのゴーレムも蹴り飛ばしちゃうし……。見た目は完璧にもやしって感じなのに」

「おいおい。相棒をもやしって呼ぶとは、娘っ子の目も随分節穴みてえだな」

「な、なんですってえ!?!」

デルFRINGガーから放たれた暴言に、ルイズは目を吊り上げて金木

の背中 of 剣を睨み付けた。そんな二人の会話にあはは……と苦笑を浮かべながら、金木が背中 of デルフリンガーに尋ねる。

「ねえデルフリンガー」

「デルフ、で構わねえぜ。相棒」

「じゃあデルフ。さつき君が言ってた、使い手って何？」

「忘れた」

あまりに簡潔なその答えに、金木とルイズは思わずこけそうになった。

「わ、忘れたって……」

「仕方ねえだろ。もうだいぶ前の話だ。一つや二つ、忘れる事だってある」

悪びれる事無く、デルフはそんな事を言った。金木はため息をつきながら小さく呟く。

「……買う剣間違えたかな」

「あら、じゃあ私がおっと良い剣を買ってあげる」

「良いよ、悪いし」

突然背後から割り込んできた声に金木は思わずそう返したが、そこでぴたりと動きを止めた。今聞こえてきた声は、先ほどの場になかったはずの人物のものだ。それにルイズも気付いたのか、彼女も自分の横で驚いた表情を浮かべている。金木とルイズは勢いよく後ろを振り返った。

「こんにちは、カネキ、ルイズ」

「……」

するとそこには、ひらひらと笑顔を浮かべて手を振るキュルケと、じつと金木を見つめているタバサの姿があった。

ルイズと金木は、その後学院に戻る道中でキュルケから何故あの場所に行ったのか理由を聞いた。

何でも朝出かけて行くルイズと金木を見て、タバサに頼み込んで彼

女の使い魔に乗り急いでブルドンネ街に向かったらしい。そして武器屋から出てきた金木とルイズを見つけて、二人に声をかけたというのだ。

「まったく、昨日も思ったけどあんなもやしのごとこが良いのよ」

「あら、あたしが狙ってるって分かったらプレゼント攻撃で気を引こうとしたあなたに言われたくないわね」

「べ、別にプレゼントとかそういうのじゃないわよ！ 使い魔の忠誠に応えるのが主人の義務だから……！」

「はいはい。そういう事にしておくわ。だけど、それにしたって、あんなボロボロの剣をプレゼントするのは主人としてどうなの？ あなたは胸に加えてお財布の中身も『ゼロ』なのかしら」

「あいつが欲しいって言ったのよ！ って、誰が胸もゼロなのよ！ わたしの魔法で吹き飛ばすわよ！」

「できるものならやってみなさい」

ルイズとキュルケは学院に戻ってくるなり、中庭で言い争いを始めてしまった。一方、金木はそんな二人を苦笑しながら見ていたが、やがて読んでいた本に視線を戻した。

今読んでいる本は、黒山羊の卵だ。もうすでに読んだ本ではあるものの、たまに読んでみるとやはり本の世界に引き込まれる。それに加えてこっちの世界に来てからようやく日本語に巡りあえたので、懐かしい感じが胸にこみ上げてくる。

金木が本を読んでいると、自分に誰かが近づいてくるのを感じた。

顔を上げると、そこには青い髪に眼鏡をかけた少女が無表情で立っていた。確かキュルケの友人で、彼女からタバサと呼ばれていた少女である。彼女は感情が読み取れない瞳で金木を見ると、静かな声で尋ねた。

「好きなの？」

「えっ？」

「本」

彼女の目は、金木が持っている本に向けられていた。金木は少し戸惑いながらも首を縦に振る。

「そう」

するとタバサはそう言いながら、金木の横まで来て本を覗き込む。しかし次の瞬間、タバサは微妙に眉をひそめた。それは本当に些細な変化で、タバサの表情を良く知るキュルケか、間近で彼女の表情を見ている金木しか分からなかっただろう。彼女は本の文章を見たまま、呟いた。

「読めない」

それに金木はああ、と言いながら、

「この文字、僕の故郷の文字なんだ。トリステインとは文体とか全然違うしね。読めなくても仕方ないよ」

すると、タバサは続いてこんな事を尋ねた。

「この本、面白い？」

「え？ うん、僕はすごく面白いと思ってるけど……」

金木の感想を聞くと、タバサはしばらく宙を見つめたまま黙りこくってしまった。確証はないが、金木はタバサが何かを考え込んでいるように見えた。やがてタバサは金木に視線を戻すと、小さな唇を動かして言った。

「頼みたい事がある」

「何？」

「わたしに、あなたの故郷の文字を教えて欲しい」

え？ と金木は思わず困惑した表情を浮かべた。どうしてこの少女は、いきなりそんな事を言い出したのだろう。金木の表情を見て察したのか、タバサがその理由を淡々と告げる。

「その本を読みたい。だけど、文字が分からない。だから教えて欲しい」

どうやら、彼女も自分と同様かなりの活字中毒らしい。よく見てみれば彼女も本を持っているので、恐らく間違いないだろう。金木は快諾しようとしたが、ちょうどその時ある考えが頭に浮かんだので、その提案を口にした。

「条件があるけど、それでも良い？」

「構わない。何？」

「実は僕もここの文字が読めないんだ。最近召喚されたばかりだし、文字も全然違うし……。だから僕が君に故郷の文字を教える代わりに、君には僕にハルケギニアの文字を教えて欲しいんだ。それで良い？」

そう言うと、タバサはこくりと頷いた。どうやらその条件で良いらしい。良かった、と金木は胸をなで下ろした。彼女からこの世界の文字を教えてもらえば、文字が読めないなどの問題は解決する。それなら仮にこの世界に長く滞在する事になったとしても、あまり大きな問題にはならないだろう。

金木がそんな事を思っていると、タバサがすつと手を出してきた。

「わたしの名前は、タバサ」

「僕は金木研。よろしくね、タバサちゃん」

そう言いながら、金木はタバサの小さな手を握った。

一方、金木の手を握ったタバサは、金木の指のある異常に気付いた。

（爪が……赤黒い？）

普通の人間ならば、大抵爪は薄い桃色である。しかし彼の爪の色は、赤黒い色をしていた。一体何をどうしたら、こんな色に変色するのだろうか。

タバサがそう思っていると、

「カ〜ネ〜キ〜？」

やけに間延びした声に金木が思わず振り返ると、そこには目を吊り上げたルイズが立っていた。彼女はタバサと手を握ってる金木の姿を見ながら、

「あああああんだ、なななにご主人様を放っておいて女と手なんて握ってるのよ？ キュルケの次は、その子ってわけ？ 折角剣まで買ってあげたのに、ご主人様は放っておいて種づけに夢中って事？

まったく、手に負えない馬鹿犬ね」

そう言ったルイズの声はかなり震えていた。どうやら、かなり頭に來ているらしい。

その一方で、彼女の後ろにいるキュルケは目を丸くしていた。一瞬ルイズのあまりの怒りに驚いているのかと思ったが、そうではないら



しい。彼女から、こんな声が聞こえてきたからだ。

「……タバサが誰かと話してるなんて珍しいわね。あの子、あたし以外の人間とは滅多に話なんてしないのに」

どうやら金木が今手を握っている少女は、予想以上に無口らしい。しかし今の金木にそんな事を気にしている余裕はない。彼は目の前のルイズを落ち着かせようと、引きつった笑みを浮かべながら、

「ま、待ってルイズちゃん。とりあえず落ち着こうよ、ね？」

「あああ安心しなさい。わたしは冷静よ。ここここのとおりね」

全然冷静じゃない。これを見て冷静だと言える人間は、もう眼科に行った方が良く。金木が冷や汗をたらりと垂らすと、ルイズが杖を振り上げるが見えた。

まずい、と思った金木は素早くタバサの手を振りほどき、横に転がった。それと同時に、本塔の壁が爆発した。金木が爆発した場所を見てみると、そこにはヒビが入っている。ヒビが入った壁を見て、ルイズが悔しそうな声を出した。

「どうやら、外しちやったみたいね。でも、次は外さないわよ」

「僕を殺す気!?!」

「うるっさい! 恩知らずな使い魔なんて、わたしが直々に粛正してあげるわ!」

怒りの叫び声を上げながら、ルイズは再び杖を構えた。どうやら冗談抜きに自分を爆発させるつもりらしい。いくら自分の体が頑丈でも、あれほどの爆発が直撃したらひとたまりもないだろう。こうなったら、自分の身体能力を生かしてルイズの杖をどうにかするしかない。

と、その時だった。

金木が、ルイズとキュルケの背後を見て目を見開いていた。しかもいつもは無表情なタバサも、驚いたような表情で彼女達二人の背後を見ている。

その表情が気になったルイズとキュルケが後ろを見てみると、自分達の目に映った光景に思わず二人は我が目を疑った。

「な、何よこれ!」

キュルケは口を大きく開けた。土で構成されていたゴーレムが、四人に向かって歩いてきていたのだ。その肩には、黒ローブの人間が乗っている。

「きやあああああつ!!」

キュルケは悲鳴を上げて逃げ出した。金木は素早く状況を判断すると、そばにいたタバサを左腕で抱えてルイズの方に走り出す。ゴーレムを見て呆然とするルイズを右腕で抱えると、ゴーレムに背を向けて走り出した。いくら半喰種の力でも、あそこまで体格差があつては話にならない。今はこの場から撤退した方が良いだろう。

金木が全速力で走っていると、タバサがどこかに向かって甲高い口笛を吹いた。すると上空から青い鱗のドラゴン、シルフィードが滑り込んできて、二人を抱えた金木をがっしり掴んで上空に舞い上がった。

「君は、あの時の……………」

金木がシルフィードを見てそう呟くと、シルフィードはきゅいと鳴き声を返した。シルフィードは、前に金木がシエスタにもらった骨付きの肉を上げたドラゴンだった。どうやら、タバサの使い魔だったらしい。

眼下のゴーレムを見ながら、金木が言う。

「なんて大ききだ……。あれも、ゴーレムなの？」

「だと思っわ。だけどあんな大きなゴーレムを操れるなんて……。きつと作つたのは土のトライアングルクラスのメイジだわ」

金木に抱えられながらルイズが答えた直後、ゴーレムはひびが入った壁に向かって拳を打ち下ろした。

インパクトの瞬間、ゴーレムの拳が鉄に変えられ、壁に拳がめり込む。バカツと鈍い音がして、壁が崩れた。するとゴーレムの肩に乗っていた黒ローブの人間がゴーレムの腕を伝い、壁に空いた穴から中に入り込んだ。

本当なら飛び降りてその人間を捕まえたかったが、生憎今はルイズとタバサを抱えている。この二人を危険にさらすような真似は、できればあまりしたくない。

やがて黒ローブのメイジを肩に乗せて、ゴーレムは歩き出した。魔  
法学院の城壁を一跨ぎで乗り越えると、ずしんずしんと地響きを立て  
て草原を歩いて行く。

そのゴーレムの上空を、シルフィードが旋回する。

金木に抱えられながらタバサが身長より長い杖を振るうと、三人の  
体が足からシルフィードの背中に移動した。

巨大なゴーレムを見下ろしながら、金木が尋ねる。

「壁を壊してたけど……、あそこには何があるの？」

「宝物庫」

タバサが短く答えた直後、ルイズが続けた。

「あの黒ローブのメイジ、壁の穴から出てきた時に、箱みたいな物を  
持ってたわ」

「泥棒って事かな」

草原の真ん中を歩いていた巨大なゴーレムは突然ぐしゃつと崩れ  
落ち、巨大な土の山になった。

三人は地面に降りてみたが、月明かりに照らされた小山のように盛  
り上がった土山以外は、何もない。

そして、肩に乗った黒ローブのメイジの姿も、どこかに消え失せて  
しまっていた。

## 第六話 秘宝

翌朝、トリステイン魔法学院では昨夜からの蜂の巣をつついたような騒ぎが起きていた。

何せ、学院の秘宝である『破壊の箱』が盗まれたのだ。それも、巨大なゴーレムが壁を破壊すると言った大胆な方法で。

宝物庫には学校中の教師が集まり、壁に空いた大きな穴を見て、口をあんぐりと開けていた。

壁には、『土くれ』のフーケの犯行声明が刻まれている。

『破壊の箱、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』

教師達は、口々に好き勝手な事を喚いていた。

「土くれのフーケ！ 貴族たちの財宝を荒らしまくっているという盗賊か！ 魔法学院にまで手を出しおつて！ 随分と舐められたもんじゃないかー！」

「衛兵は一体何をしていたんだね？」

「衛兵など当てにならない！ 所詮は平民ではないか！ それより当直の貴族は誰だったんだね！」

シュヴルーズはその言葉に震えあがった。昨晚の当直は彼女だったのだ。まさか学院を襲う盗賊がいるなどは夢にも思わずに、当直をサボって自室で眠っていたのである。本来なら、夜通し門の詰め所を待機していなければならぬのに。

「ミセス・シュヴルーズ！ 当直はあなたなのではありませんか！」

教師の一人がさっそくシュヴルーズを追求し始めた。オスマンが来る前に、責任の所在を明らかにしておこうというのだろう。そうすれば、自分がとぼちちりを食わずに済む。

すると、問い詰められたシュヴルーズはボロボロと泣き出してしまった。

「も、申し訳ありません……」

「泣いたってお宝は戻ってこないのですぞ！ それともあなた、『破壊の箱』の弁償ができるのですかな！」

「わたくし、家を建てたばかりで……」

シユヴルーズはよよよと床に崩れ落ちた。

そこにタイミングよく現れた人物が一人いた。オスマンである。

「これこれ。女性を苛めるものではない」

呑気な口調でオスマンが言うのと、シユヴルーズを問い詰めていた教師がオスマンに訴えた。

「しかしですな！ オールド・オスマン！ ミセス・シユヴルーズは当直なのに、ぐうぐう自室で寝ていたのですぞ！ 責任は彼女にありません！」

オスマンは長い口髭を擦りながら、口から唾を飛ばして興奮するその教師を見つめた。

「ミスタ……何だっけ？」

「ギトーです！ お忘れですか！」

「そうそう。ギトー君。そんな名前じゃったな。君は怒りっぽくないか。さて、この中でまともに当直をした事のある教師は何人おられるかの？」

オスマンが辺りを見回すと、教師達はお互い顔を見合わせてから、恥ずかしそうに顔を伏せた。名乗り出る者は、呆れた事に一人もいなかった。

「さて、これが現実じゃ。責任があるとするなら、我々全員じゃ。この中の誰もが……、もちろん私も含めてじゃが、まさかこの魔法学院が賊に襲われるなど夢にも思っていなかった。何せ、ここにいるのはほとんどがメイジじゃからな。誰が好き好んで、虎穴に入るのかっちゅうわけじゃ。しかし、それは間違いじゃった」

オスマンはフーケによって開けられた穴を見つめながら、

「この通り、賊は大胆にも忍び込み、『破壊の箱』を奪っていきおった。つまり、我々は油断していたのじゃ。責任があるとするなら、我々全員にあると言わねばなるまい」

オスマンの言葉に、それまで騒いでいた貴族達は黙り込んだ。そしてその中で、感激したシユヴルーズがオスマンに抱き着いた。

「おお、オールド・オスマン。あなたの慈悲のお心に感謝いたします！ わたくしはあなたをこれから父と呼ぶ事にいたします！」

オスマンはそんなシュヴルーズの尻を撫でた。

「ええのじゃ。ええのよ。ミセス……」

「わたくしのお尻でよかつたら！ そりやもう！ いくらでも！ はい！」

オスマンはほとんど咳をした。誰も突っ込んでくれなかったのが、気まづくなつたのだ。オスマンとしては、場を和ませるつもりで尻を撫でたのだ。しかしそんな冗談など通用せず、全員一様に真剣な目でオスマンの言葉を待っている。

「で、犯行の現場を見ていたのは誰だね？」

「この三人です」

オスマンが尋ねると、コルベールがさつと進み出て自分の後ろに控えていた三人を指差した。

ルイズ、キュルケ、タバサの三人だ。金木も一応そばにいたのだが、使い魔なので数には入っていない。

「ふむ……、君達か」

オスマンは興味深そうに金木を見つめた。金木はその目がどこか自分を観察しているように見えて、居心地悪い気分になった。

「詳しく説明したまえ」

オスマンに促されると、ルイズが説明を始めた。

突然巨大なゴーレムが現れて、壁を壊した事。壁に乗っていた黒いメイジが宝物庫の中から『破壊の箱』と思われる物品を盗み出した事。そして、再びメイジを肩に乗せたゴーレムが城壁を超えて歩き出した後に土に変わり、肩に乗っていた黒いメイジがどこかに消えてしまった事。

それら全てをルイズが話し終えた後、オスマンは髭を撫でた。

「後を追おうにも、手がかり無しというわけか……」

それからオスマンは、気付いたようにコルベールに尋ねた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

「それがその……、朝から姿が見えませんが」

「この非常時に、どこに行ったのじゃ」

「どこなんでしょう？」

オスマンとコルベールが噂をしていると、部屋にロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル！ どこに行っていたんですか！ 大変ですぞ！ 事件ですぞ！」

興奮した調子でコルベールがまくしたてる。しかしミス・ロングビルは落ち着いていた調子でオスマンに告げた。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」「調査？」

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこの通り。すぐに壁のフーケのサインを見つけたので、これが国中の貴族を震え上がらせている大盗賊の仕業と知り、すぐに調査をいたしました」

「仕事が早い。ミス・ロングビル」

コルベールが慌てた調子でロングビルを促した。

「で、結果は？」

「はい。フーケの居所が分かりました」

「な、何ですと!？」

ロングビルの報告を聞いて、コルベールが思わず素っ頓狂な声を上げた。

「誰に聞いたんじゃね？ ミス・ロングビル」

「はい。近所の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃屋に入っていた黒ずくめのローブの男を見たとす。恐らく彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

黒ずくめのローズという単語に、ルイズが叫んだ。

「黒ずくめのローブ？ それはフーケです！ 間違いありません！」

オスマンは目を鋭くして、ロングビルに尋ねた。

「そこは近いのかね？」

「はい。徒歩で半日。馬で四時間と行った所でしょうか」

(え?)

ロングビルのその言葉に、金木は思わず心の中で疑問の声を上げた。

彼女の言葉には、ある大きな矛盾があったからだ。

しかしちようどその時、コルベールが叫んだ。

「すぐに王室に報告しましょう！ 王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し向けてもらわなくては！」

するとオスマンは首を振って、目をむいて怒鳴った。

「馬鹿者！ 王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまうわ！ その上、身にかかる火の粉を己で払えぬよう何が貴族じゃ！

魔法学院の宝が盗まれた！ これは魔法学院の問題じゃ！ 当然我らで解決する！」

オスマンの言葉を聞いて、何故かロングビルは微笑んだ。まるで、この答えを待っていたかのように。

オスマンは一度咳払いをすると、有志を募った。

「では、搜索隊を編成する。我と思う者は、杖を掲げよ」

しかし、誰も杖を掲げなかった。困ったように、顔を見合わすただだ。

「おらんのか？ おや？ どうした！ フーケを捕まえて、名を上げようと思う貴族はおらんのか！」

金木の横でルイズは俯いていたが、やがてすつと杖を顔の前に掲げた。

「ミス・ヴァリエール！」

それを見てシュヴルーズが驚いた声を上げた。

「何をしているのです！ あなたは生徒ではありませんか！ ここは教師に任せて……」

「誰も掲げないじゃないですか」

ルイズはきつと唇を強く結んで言い放った。さらにキュルケも、しぶしぶと杖を掲げた。

「ツエルプストー！ 君は生徒じゃないか！」

コルベールが驚いた声を上げると、キュルケがつまらなさそうに言う。

「ふん。ヴァリエールに負けてられませんわ」

キュルケが杖を掲げたのを見て、タバサも掲げた。



「タバサ。あんたは良いのよ。関係ないんだから」

キュルケがそう言うと、タバサはキュルケの目を見つめて短く告げる。

「心配」

キュルケは感動した面持ちで、自分の小さな友人を見つめた。ルイズも唇を噛み締めて、彼女にお礼を言う。

「ありがとう……、タバサ……」

そんな三人の様子を見て、オスマンが笑った。

「そうか。では、頼むとしようか」

「オールド・オスマン！ わたしは反対です！ 生徒達をそんな危険

にさらすわけにはー！」

「では、君が行くかね？ ミセス・シユヴルーズ」

「い、いえ……、わたしは体調が優れませんので……」

「彼女達は、敵を見ている。その上、ミス・タバサは若くしてシユヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが？」

タバサは返事もせずにはげつとした表情で突っ立っている。そんな彼女とは対照的に、教師達は驚いたようにタバサを見つめていた。

「本当なの？ タバサ」

キュルケも驚いているが、金木は何故教師達がそこまで驚いているのかいまいちよく分かっていなかった。

金木は異世界人のため知らなくて当然だが、『シユヴァリエ』は王室から与えられる爵位としては最下級なのだが、タバサの年齢でそれを与えられるという事自体が驚きなのである。男爵や子爵の爵位ならば領地を買う事で手に入れる事も可能なのだが、シユヴァリエは違う。純粹に業績に対して与えられる爵位、実力の称号なのだ。

タバサの件で宝物庫の中がざわめくと、オスマンは続いてキュルケを見つめた。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も、かなり強力と聞いているが？」  
キュルケは得意げに、髪をかきあげた。

それからルイズが自分の番と言うかのように可愛らしく胸を張る

が、オスマンは困ってしまった。褒める所が中々見つからなかったからである。

こほん、と咳をすると、オスマンは目を逸らしながら言った。

「その……、ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、なんだ、将来有望なメイジと聞いているが？　しかもその使い魔は！」

そして、ルイズの横の金木を熱っぽい目で見つめた。

「平民ながらあのグラモン元帥である、ギーシュ・ド・グラモンと決闘して勝ったという噂だが」

オスマンは思った。この青年が、本当に、伝説の使い魔『ガンダールヴ』ならば。

土くれのフーケに、後れをとる事はあるまい。

オスマンの言葉に、コルベールが興奮した調子で続いた。

「そうですね！　なにせ、彼はガンダー……」

途中まで言いかけたコルベールの口を、オスマンが慌てて塞いだ。そんな二人を見て、金木の目がすつと細くなったが、コルベールとオスマンはその目に気付かなかった。

「この三人に勝てるという者がいるのなら、前に一步出たまえ」

オスマンが威厳のある声で言うが、前に出る者は一人もいなかった。オスマンは金木を含む四人に向き直った。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

ルイズとタバサとキュルケは真顔になって直立をすると、「杖にかけて！」と同時に唱和し、スカートの上そをつまんで恭しく礼をする。それから金木も、オスマンに向かって軽く頭を下げた。

「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじゃ。魔法は目的地にくまで温存したまえ。ミス・ロングビル！」

「はい。オールド・オスマン」

「彼女達を手伝ってやってくれ」

ロングビルはそれを聞いて、頭を下げた。

「元よりそのつもりですわ」

四人はロングビルを案内役に、早速出発した。

馬車と言つても、屋根なしの荷車のような馬車である。襲われた時に、すぐに外に飛び出せる方が良いという事で、このような馬車にしたのだ。

一同が目的地に向かっていると、キュルケが黙々と手綱を握る彼女に話しかけた。

「ミス・ロングビル……、手綱なんて付き人にやらせれば良いじゃないですか」

キュルケの言葉に、ロングビルはにっこりと笑った。

「良いのです。わたくしは貴族の名を無くした者ですから」

それを聞いて、キュルケは思わずきよとんとした表情を浮かべた。

「だって、あなたはオールド・オスマンの秘書なのでしょ？」

「ええ。でも、オスマン氏は貴族や平民だという事に、あまり拘らないお方です」

「差支えなかったら、事情をお聞かせ願いたいわ」

だがロングビルは優しい微笑みを浮かべたまま黙ってしまった。恐らく言いたくないのだろう。

「良いじゃないの。教えてくださいね」

キュルケは興味津々といった顔で御者台に座るロングビルににじり寄るが、その肩をルイズが掴んだ。キュルケは振り返ると、ルイズを睨み付けた。

「なによ、ヴァリエール」

「よしなさいよ。昔の事を根掘り葉掘り聞くなんて」

キュルケはふんと鼻を鳴らすと、荷台の柵に寄りかかって頭の後ろで腕を組んだ。

「暇だからお喋りしようと思っただけじゃないの」

「あなたのお国じゃどうか知りませんが、聞かれたくない事を無理矢理聞き出そうとするのはトリストインじゃ恥ずべき事なのよ」

キュルケはそれに答えず黙って足を組むと、質問の矛先を金木に変えた。

「ねえ、ダーリン」

「だ、ダーリンって……」

その呼び方に金木が困惑していると、キュルケは色気たつぷりに流し目を送りながら聞いた。

「ダーリンって、召喚されて学院に来たんでしょ？ ご両親は心配してない？ 大変よね、ゼロのルイズなんかにいきなり召喚されて……」

どうやら退屈なのは本当らしい。それにルイズが再びキュルケを睨み付けながら口を開こうとすると、金木が苦笑を浮かべながら言った。

「大変じゃないって言えば嘘になるけど、その心配はないかな」

「あら、どうして？」

「僕の両親、二人共もう死んじゃってるから」

金木の口から放たれた言葉に、馬車の中が痛いほどの沈黙に包まれた。ルイズはおろか、今まで黙って本を読んでいたタバサも金木の顔をじっと見つめている。金木は目を見開いて驚いているキュルケに笑みを浮かべながら、

「……キュルケちゃん。ルイズちゃんの言う通り、人には聞かれたくない事があるんだよ。それを無理矢理聞き出す事はあまり良い事とは言えないから、今後は控えた方が良いよ？ ……じゃないと、今みたいな雰囲気になったりするからね」

そう言いながら金木は人差し指を唇の前に立てた。それを聞いたキュルケは複雑な表情を浮かべて言う。

「……そうね。ごめんなさい、ミス・ロングビル。カネキもごめんなさいね。嫌な事を言わせて……」

キュルケが詫びると、ロングビルとカネキは笑みを浮かべながら、「いいえ、私は大丈夫です。お気になさらず」

「僕も平気だよ。分かってくれればそれで良いから」

こうして馬車は再び沈黙を取り戻すと、さらに先へと突き進んで行った。

やがて馬車は深い森に入った。鬱蒼とした森が金木以外の恐怖をおおる。昼間だというのに薄暗く、気味が悪い。今にも何か出そうな

雰囲気である。

「ここから先は、徒歩で行きましょう」

ロングビルがそう言うと、全員が馬車から降りた。

森を通る道から、小道が続いている。五人はその小道からさらに先へと歩いて行った。

すると、一行は開けた場所に出た。森の中の空き地といった風情で、広さはおよそ魔法学院の中庭ぐらいの広さだ。真ん中には、確かに廃屋がある。もとは木こり部屋だったのかもしれない。隣には、朽ち果てた炭焼き用と思われる窯と、壁板が外れた物置が並んでいる。

五人は小屋の中から見えないように、森の茂みに身を隠したまま廃屋を見つめた。

「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという話です」

ミス・ロングビルが廃屋を指差して言った。人が住んでいる気配はまったく無いが、フーケは本当にあの中にいるのだろうか。

金木達はゆっくりと相談を始めた。とにかく、あの中にいるのなら奇襲が一番だ。寝ていてくれたらなおさらである。タバサは地面にちよこんと正座をすると、全員に自分の立てた作戦を説明するため杖を使って地面に絵を描き始めた。まず、偵察兼囿が小屋のそばに向かい、中の様子を観察する。そして中にフーケがいればこれを長蓮して、外に出す。小屋の中にゴーレムを造り出すほどの土は無いからだ。外に出ない限り、得意の土ゴーレムは使えないだろう。

最後に、フーケが外に出た所を魔法で一気に攻撃する。土ゴーレムを造り出す暇を与えずに、集中砲火でフーケを沈めるというわけだ。

「偵察兼囿は誰がやるの？」

ルイズが尋ねると、タバサは短く簡潔に言った。

「すばしっこいの」

全員が一斉に金木を見つめて、金木も了承するかのように首を縦に振った。

金木は少し身を屈めてから、素早い動きで小屋のそばまで近づく。この程度の距離ならば、ガンダールヴの力が無くても半喰種の力だけで充分である。それから窓に近づいて、中を覗いてみる。

どうやら小屋の中は一部屋しかないようだった。部屋の真ん中には埃の積もったテーブルと、転がった椅子、そして崩れた暖炉も見える。テーブルの上には酒瓶が転がっており、部屋の隅には薪が積み上げられていた。やはり、元は炭焼き小屋だったらしい。

そして薪の隣には木でできた大きな箱がある。

中には人の気配は無いし、どこにも人が隠れるような場所は見えない。

金木は一瞬、フーケはここにはいないのかもしれないと考えたが、フーケはメイジである。もしかしたら魔法を使ってどこかに隠れているのかもしれない。

金木はしばらく考え込んだ後、ルイズ達を呼ぶ事にした。罨があるにせよフーケが隠れているにせよ、同じメイジの彼女達ならば何か分かるかもしれない。

金木が大きく腕を振ってルイズ達を呼ぶと、隠れていた全員が恐る恐る近寄ってきた。

「誰もいない。罨とかある？」

金木が言うと、タバサがドアに向かって杖を振るう。それからふるふるとう首を横に振った。どうやら罨も無いらしい。

タバサとキュルケと金木はドアを開けて、中に入った。ルイズは外で見張りをすると、後に残り、ロングビルは辺りを偵察してきますと言つて、森の中に消えた。

小屋に入った金木達はフーケが残した手がかりがないかを調べ始める。

しばらく三人が小屋の中を調べていると、タバサがチェストの中からある物を見つけた。

それは、フーケが盗んだはずの『破壊の箱』だった。

「破壊の箱」

タバサが無造作にそれを持ち上げてみんなに見せると、キュルケが叫んだ。

「あつけないわねー！」

しかし、金木はその『破壊の箱』を目にした瞬間、思わず自分の呼

吸が停止するのを感じた。自分の目に狂いが無ければ、その箱は金木が何回も目にした事のある物だった。

(何で、これがこの世界に……!?)

それは、人間の天敵である喰種を駆逐するために作られた武器。

今は箱——金木の世界でいう所のスーツケースの形状になっているが、喰種との戦闘になれば驚異的な力を発揮する、喰種捜査官達にとっての最上の正義の武器。

その名前は……。

「きゃあああああつ!!」

突然、ルイズの悲鳴が響き渡った。悲鳴に反応して、金木達が一斉にドアに振り向いた直後。

凄まじい轟音を立てて、小屋の屋根が吹き飛んだ。

屋根が無くなったおかげで、空がよく見えた。そして青空をバックに、巨大なフーケの土ゴーレムの姿があった。

「ゴーレムー」

キュルケが叫んだ直後、タバサが真っ先に反応した。

自分の身長よりも大きな杖を振り、呪文を唱える。巨大な竜巻が舞いあがり、ゴーレムに直撃した。

だが、ゴーレムはまったくビクともしていない。タバサに続くかのようにキュルケが胸に差した杖を引き抜き、呪文を詠唱する。杖から炎が伸びてゴーレムを包み込むが、やはりゴーレムはまったく意に介していなかった。

「無理よこんなのー」

「退却」

キュルケとタバサは一目散に逃げ出し始めるが、ルイズの姿が見えない。

金木が辺りを見回すと、すぐにルイズの姿が見つかった。

彼女はゴーレムの背後に立っていた。ルイズはルーンを呟き、ゴーレムに杖を振りかざす。

すると巨大なゴーレムの表面で、何かが弾けた。恐らくルイズの魔法だろう。その爆発でルイズに気付いたのか、ゴーレムが振り向い

た。小屋の入り口に立っていた金木は、二十メートルほど離れたルイズに向かって怒鳴る。

「ルイズちゃん、逃げて!!」

が、ルイズは唇を噛み締めながら、  
「嫌よ!! あいつを捕まえれば、誰ももうわたしをゼロのルイズなんて呼ばないでしょ!」

彼女の目は、真剣そのものだった。

ゴーレムは近くに立ったルイズを踏み潰すか、逃げ出したキュルケ達を追うか、迷っているように首を傾げた。

「今の君じゃ無理だ!」

「やってみなくちゃ、分かんないじゃない!」

「ルイズちゃん!!」

金木が再び叫ぶと、ルイズは金木を睨み付けた。

「こんな所で逃げるわけにはいかないのよ!! わたしにだって、さきやかだけどプライドってもんがあるのよ。ここで逃げたら、ゼロのルイズだから逃げたって言われるわ!」

「そんな奴ら、放っておけば良いじゃないか!」

「わたしは貴族よ! 魔法が使える者を、貴族と呼ぶんじゃないわ」

そう言いながら、ルイズはさらに強く杖を握りしめた。

「敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのよ!」

ゴーレムはやはりルイズを先に叩きのめす事にしたらしい。ゴーレムの巨大な足が持ち上がり、ルイズを踏みつぶそうとする。ルイズは魔法を詠唱し、杖を振るう。

だが、やはりゴーレムにはまったく通用しない。ゴーレムの胸が小さく爆発したが、それだけだ。ゴーレムはビクともせず、変化と言えばわずかに土がこぼれただけだ。

金木は弾丸のような速度で、ルイズに向かって走り出した。ルイズの視界に、ゴーレムの足が広がった。ルイズは自分に迫ってくる巨大な死の権化に、思わず目を瞑る。

その刹那、全速力で走ってきた金木がルイズの身体を抱きかかえ、ゴーレムの足をかわした。地面に足を押し付けて停止すると、呆然と



しているルイズの顔を覗き込んで、厳しい口調で言った。

「ルイズちゃん。君の気持ちは分かるよ。だけど、今の君じゃあのゴーレムは倒せない。確かに敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶのかもしれない。だけど、弱いままで敵に立ち向かうのは勇気でもなんでもない、ただの蛮勇だ。……今の君は、弱い」

本当ならこんな事は言いたくない。だが金木自身、自分の弱さが原因で様々なものを失ってきたのだ。だから金木は、今のルイズの行動がどれほど無謀な事かよく分かっていた。

すると、ルイズの目からボロボロと涙がこぼれた。

「……でも、わたし……悔しくて……。いっつも馬鹿にされて……」

目の前で端正な顔をぐしゃぐしゃにして泣くルイズの頭を、金木は優しく撫でた。それからゴーレムを振り向くと、巨大なゴーレムが拳を振り上げているのが見えた。金木はゴーレムを鋭く睨みつけると、背中のデルフリンガーを抜いて構える。左手のルーンが輝き、体が羽のように軽くなった。

その直後、ゴーレムの拳が唸りを上げて飛んできた。拳は途中で鋼鉄の塊に変わる。

金木が剣の腹で拳を受け止めると、金木の両足が少し後ろに下がった。デルフから苦情が金木に飛ぶ。

「おい相棒！ 折れるかと思っただぞ！」

しかし、金木はそのデルフの言葉に返事をしなかった。彼はゴーレムを睨みながら、左手の人差し指を曲げてから親指で押し鳴らし、低い声で告げる。

「……ルイズちゃんに手を出すなよ。潰すぞ」

ちょうどその時、タバサを乗せたシルフィードが二人を助けるために飛んできた。金木達の目の前の地面に着陸したその時、金木の目にタバサが持っている破壊の箱が目に入った。金木はデルフを背中の鞆に収めながら、タバサに急いで叫ぶ。

「タバサちゃん、それをちょうだい！ 早くー！」

タバサは微かに驚いた表情を浮かべながらも、言われた通りに、手にしている破壊の箱を金木に手渡した。

破壊の箱を手にした瞬間、使い方、さらに搭載されている生体認証装置を無理矢理解除する方法などが金木の頭に流れ込む。理屈は分からないが、今はそれどころではない。

金木が破壊の箱——スーツケースをかちやかちやと操作し始めると、ギヤリギヤリギヤリ!! という音を立ててスーツケースの中にあつた兵器が金木の手に収まった。

それは、外見はバズーカ砲のような形状だった。しかし砲身から赤色の光をぼんやりと放っており、まるで武器そのものが生きているような錯覚を使用者に感じさせる。

金木はそれを肩に担いで構えると、ゴーレムの上半身を睨み付ける。

そして最後に、呟いた。

「吹っ飛べ」

トリガーを引いた、直後、

砲口から赤色の巨大な弾丸のような物が真っ直ぐゴーレムに向かい、狙い違わず上半身に命中した。

その瞬間、森の中に鼓膜を破るんじゃないかと思わせるほどの爆音が響き渡り、ゴーレムの体が吹き飛んだ。下半身だけはまだ残っているものの、その下半身も一歩前に踏み出そうとした前に、膝が折れてそのまま動かなくなった。

そして滝のように腰の部分から崩れ落ち、ただの土の塊へと還っていく。

この前と同じように、後には土の小山だけが残されていた。

ルイズはその様子を呆然と見ていたが、腰が抜けたのかへなへなど地面に崩れ落ちた。

「おでれーた……」

背中のデルフがそんな事を呟き、後ろのタバサとシルフィードも土の小山をぼかんと見つめている。

木陰に隠れていたキュルケが駆け寄ってくるのが見えてくる。

金木は手にしている兵器をスーツケースに戻すと、疲れたような溜息をついた。

そんな金木に、駆け寄ってきたキュルケが抱き着く。

「カネキ！　すごいわ！　やっぱりダーリンね！」

二人をよそに、ようやく我に返ったタバサが崩れ落ちたフーケのゴーレムを見つめながら呟く。

「フーケはどこ？」

全員は一斉にはつとした。

すると、辺りを偵察に行っていたロングビルが茂みの中から現れた。

「ミス・ロングビル！　フーケはどこからあのゴーレムを操っていたのかしら」

キュルケがそう尋ねると、ロングビルは分からないと言うように首を振った。

その時だった。

金木がスーツケースを放り出してデルフを抜刀、左手でロングビルの首を勢いよく掴んで木に叩き付けた。

「ごはっ!？」

ロングビルの肺から酸素が吐き出され、意識が一瞬遠のきそうになる。しかし金木はロングビルの首にデルフの剣先を突きつけると、鋭い声で言った。

「魔法を使うな。使ったら、あなたの首をへし折る」

ぐぐつ、と金木の左手にさらに力がこもる。金木の突然の行動にルイズ達が驚愕する中、最初に声を発したのは金木に首を掴まれているロングビルだった。

「い、一体何を……!？」

「しらばっくれるなよ。僕達をここまで連れてくるのが目的だったんだろ？　ミス・ロングビル。……いや、こう言えば良いですか？　土くれのフーケ」

金木の口から出た単語に、ルイズ達は驚愕で目を見開いた。それにロングビルが何か言おうとしたが、無駄だと悟ったのだろう。ロングビルは苦しみながらもこう言った。

「……どこで分かった？」

それは、自分自身がフーケだと認めたものだった。金木はフーケの動きに注意しながら、唇を動かす。

「あなたは今朝方起きた後に調査を始め、この辺りの農民に聞き込みをした。それから学院に戻って来た……。でも、変なんですよ」

「な、何がだい……?」

「ここに来るまでには、徒歩で半日。馬でも四時間はかかる。朝起きて調査を始めたあなたが、どうしてあの場にいたんですか?」

それを聞いて、ルイズは思わずあつと声を上げた。確かに金木の言う通りだ。朝から調査を始めたならば、例えばどんなに急いでも学院に戻ってくるのは昼近くになる。ロングビルの言う事を信じるならば、彼女があの場合にいるはずがないのだ。

その矛盾にはフーケも気が付いたらしく、目を大きく開く。金木はさらに自分の推理を続けた。

「恐らくあなたはあれを盗んだ後、使い方が分からなかったんじゃないですか? あれには生体認証機能がついているようでしたし、ただ単に使用しようとしても使えない。だから僕達をこの場に誘き寄せた事で使用させて、使い方を知ろうとした……。確証はありませんでしたけど、ゴレムが崩れた後にあなたが現れたから、ようやく確信が持てましたよ。……まあ、あのクインケはエネルギー消費が激しいですから、僕達が使った後に使おうとしても使えないでしょうけど」

「え、エネルギー? クインケ? どういう事!? あんた、破壊の箱が何なのか知ってるの!」

「さあ、どうでしょうね?」

金木がはぐらかすと、フーケが必死に逃げ出そうとするかのように身をよじる。金木はため息を一度つくつくと、フーケの耳元に口を近づけて囁いた。

「(……人の耳に生きたムカデを入れると、どんな音がするか知ってますか?)」

「……っ!」

それに驚いたフーケが金木の目を見た瞬間、彼女は凍りついた。見た者を心すら凍らせるような、冷たく鋭い瞳。いくつもの修羅場

を潜り抜けてきたフーケは、それだけで目の前の青年がただの平民ではない事を悟った。ただの平民に、こんな目ができるはずもない。一体どれぐらいの悲劇を経験すれば、こんな目ができるのだ？

金木は口元に冷たい笑みを浮かべたが、目はまったく笑っていない。ルイズ達に聞こえないように、さらに続ける。

「……人間にはそういう事はしたくないので、できれば穏便に捕まってもらえると助かるんですが……」

その言葉に心が折られたのか、フーケは唇を噛み締めるとがっくりとうなだれた。

金木はフーケを左手で吊り上げたまま振り返ると、目を丸くしているルイズ達に言った。

「フーケを捕まえて、『破壊の箱』は取り戻したよ。学院に帰ろう」

ルイズ、キュルケ、タバサは顔を見合わせると、歓声を上げながら金木に駆け寄った。

## 第七話 舞踏

フーケを捕まえた後、金木達は学院に戻りオスマンに報告をした。「ふむ……。ミス・ロングビルが土くれのフーケじゃったとはな……。美人だったので、なんの疑いもせず秘書に採用してしまっただけだ。」

「一体、どこで採用されたんですか？」  
隣に控えたコルベールが尋ねた。

「街の居酒屋じゃ。私は客で、彼女は給仕をしておったのだが、ついこの手がお尻を撫でてしまっただけだ。」

コルベールが促すと、オスマンは照れたように告白した。

「おほん。それでも怒らないので、秘書にならないかと言ってしまっただけだ。」

「何で？」

コルベールが本当に理解できないという口調で尋ねる。

「カアーツ！」

すると、オスマンは目をむいて怒鳴った。とても年寄りとは思えない迫力である。できればこんな所で発揮してほしくないほどだ。それからオスマンはこほんど咳をして、真顔になった。

「おまけに魔法も使えるというもんでな」

「死んだ方が良いのでは？」

コルベールがぼそりと本音を呟いた。オスマンは軽く咳払いをすると、コルベールに向き直り重々しい口調で言う。

「今思えば、あれも魔法学院に潜り込むためのフーケの手じゃったに違いない。居酒屋でくつろぐわたしの前に何度もやってきて、愛想よく酒を勧める。魔法学院学院長は男前で痺れます、などと何度も媚を売り売り言いおって……。終いにや尻を撫でて怒らない。惚れてる？ とか思うじゃろ？ なあ？ ねえ？」

コルベールは、それを聞いてはっとした表情を浮かべた。実はフーケに、物理攻撃に弱いという宝物庫の壁の弱点を教えたしまったのは彼なのである。それもオスマンがやられたのと同じような方法で、

だ。

コルベールはその一件は自分の胸に秘めておこうと思うと、オスマンに合わせた。

「そ、そうですね！ 美人はただそれだけで、いけない魔法使いですな！」

「その通りじゃ！ 君は上手い事を言うな！ コルベール君！」

ルイズとキュルケ、タバサの三人は呆れた表情で二人を見ていたが、美人に騙された経験のある金木だけは何とも言えない表情を浮かべていた。

生徒達のそんな表情に気付き、オスマンは照れたように咳払いをすると、厳しい顔つきに変わった。

「さてと、君達はよくぞフーケを捕まえ、『破壊の箱』を取り返してきた」

誇らしげに、三人が礼をした。金木もそれにならって、小さく礼をする。

「君達のシユヴァリエの爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじやろう。と言ってもミス・タバサはすでにシユヴァリエの爵位を持っているから、精霊勲章の授与を申請しておいた」

金木を除いた三人の顔が、ぱつと輝いた。

「本当ですか？」

キュルケが驚いた声で尋ねると、

「本当じゃ。良いのじゃ、君達はそのぐらいの事をしたんじやから」

オスマンがそう言うのを聞いてから、ルイズは横の金木をちらりと見てオスマンに尋ねる。

「オールド・オスマン。カネキには、何もないんですか？」

「残念ながら、彼は貴族ではない」

すると金木は両手をパタパタと振りながら遠慮するように言った。

「興味はないですし、別に良いですよ」

金木の言葉を聞いてから、オスマンが手をポンポンと叩いた。

「さてと、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。この通り、『破壊の箱』も戻って来たし、予定通り執り行う」

それを聞いて、キュルケの顔がぱつと輝いた。

「そうでしたわ！ フーケの騒ぎで忘れておりました！」

「今日の舞踏会の主役は君達じゃ。用意をしてきたまえ。精々、着飾るのじゃぞ」

三人は礼をするとドアに向かったが、金木だけは何故かその場から動かない。

ルイズが金木をちらりと見つめると、金木は笑みをルイズに向けながら言った。

「先に行つてて」

その言葉を聞いてもルイズは心配そうに金木を見つめたまま動かなかったが、やがてこくりと頷くと扉を開けて部屋を出て行った。ルイズ達が出て行くの確認すると、金木の意図を知っているかのようにオスマンが口を開いた。

「何か、私に聞きたい事があるのようじゃな」

金木は無言で頷いた。

「言つてごらんさい。できるだけ力になろう。君に爵位を授ける事は出来んが、せめてものお礼じゃ」

そう言うとオスマンは二人のやり取りを見守っていたコルベールに退室を促した。わくわくして金木の話を待っていたコルベールは、項垂れて渋々と部屋を出ていった。

コルベールが部屋を出るのを確認すると、金木がオスマンを真っ直ぐ見据えて尋ねた。

「あの『破壊の箱』は、この世界の物じゃありません。僕の世界にあつた武器です」

僕の世界、という言葉聞いて、オスマンの目が光る。

「ふむ。君の世界、とは？」

「僕は、この世界の人間じゃありません」

「本当かね？」

「はい。僕はルイズちゃんの召喚で、違う世界からこの世界に呼び出されたんです」

「なるほど。そうじゃったか……」



オスマンはそう呟きながら、目を細めた。

「そもそもあれは、『破壊の箱』なんて名前じゃありません。僕達の世界では……クインケと呼ばれていました」

喰種達の宿敵、CCG捜査官が使う武器。

喰種だけが持つ臓器、赫胞かくほうから造り出された兵器……それがクインケだ。

しかもあの破壊の箱と呼ばれていたクインケはただのクインケではない。ゴーレムを一瞬で粉々にした破壊力から見て、恐らく相当な実力を持つ喰種から造り出されたのだろう。それを持つ人間も、かなりの実力者だったに違いない。それが誰かを知るために、金木はオスマンに対して質問を発した。

「あのクインケを持っていたのは、誰なんですか？」

それを聞くと、何故かオスマンはため息をついた。

「あれを私にくれたのは、私の命の恩人じゃ」

「その人はどうしたんですか？ クインケを持ってたって事は、きつと僕と同じ世界の人間のはずです」

「死んでしまった。今から、三十年も昔の話じゃ」

「なっ……!?!」

オスマンの口から放たれた事実には、金木は思わず目を見開いてそんな声を出す。驚愕している金木を見ながら、オスマンは悲しそうな表情を浮かべて語り出した。

「三十年前、森を散策していた私はワイバーンに襲われた。そこを救ってくれたのがあの破壊の箱の持ち主じゃ。彼は破壊の箱を使ってワイバーンを吹き飛ばすと、ぼつたりと倒れおった。怪我をしていたのじゃ。しかも相当深い怪我をの。私は彼を学院に運び込み、手厚く看護した。しかし、看護の甲斐なく……」

「……死んで、しまったんですか」

オスマンはゆっくりと頷いた。

「私は、彼が使った武器を『破壊の箱』と名付け、宝物庫にしまい込んだ。恩人の形見としてな……」

その時の事を思いだしているのか、オスマンは遠い目になった。

「彼はベッドの上で、死ぬまでうわ言のように繰り返しておった。『ここはどこだ。元の世界に帰りたい。そして、奴らを皆殺しに……』とな。奴らというのは分からんが、きっと彼は君と同じ世界から来たんじゃないだろう」

それを聞いて、金木は顎に手を添えてその捜査官の事を考え始めた。

その捜査官が言っている奴らというのは、十中八九喰種で間違いないだろう。捜査官には家族や仲間を殺された恨みから、喰種に対して強い殺意や敵意を持つ者も少なくない。オスマンが最期を見届けた捜査官も、喰種に対しては相当強い殺意を抱いていたのだろう。それから金木はオスマンに視線を戻すと、こんな質問をした。

「誰がその人をこっちに呼んだか、分かりませんか？」

クインケの持ち主がハルケギニアに現れたという事は、自分と同じように誰かから召喚されてこちらに来たという可能性も考えられる。しかしオスマンは首を横に振りながら、

「それは分からん。どんな方法で彼がこっちの世界にやって来たのか、最後まで分からんかった」

「……そうですか」

それを聞いて、金木は小さく項垂れた。そんな金木の左手を、オスマンが掴んだ。

「おぬしのこのルーン……」

「……そうだ、これも聞きたかったんです。このルーンが光ると、何故か武器を自在に使えるようになるんです。剣だけじゃなくて、あのクインケまで……」

オスマンは金木に話そうかどうかしばし悩んだ素振りを見せた後に、ようやく口を開いた。

「これなら知っておるよ。ガンダールヴの印じゃ。伝説の使い魔の印じゃよ」

「伝説の使い魔の印……ですか？」

「そうじゃ。その伝説の使い魔はありとあらゆる『武器』を使いこなしたそうじゃ。『破壊の箱』を使ったのも、そのおかげじゃろう」

金木は自分の左手に刻まれたルーンをじっと見つめながら、オスマンに聞く。

「どうして、僕はその伝説の使い魔なんかになったんでしょうか」

「分かん」

「……分からない事だらけだ」

「すまんの。ただ、もしかしたらお主がこつちの世界にやって来た事と、そのガンダールヴの印は、何か関係しているのかもしれない」

「……………」

金木はオスマンの言葉を聞きながら、左手のルーンから視線を外した。

すると、オスマンが金木の顔をまっすぐ見て言った。

「それで……。実はわしからも君に一つ聞きたい事があるんじゃないが、構わないかの？」

「…………… はい」

金木が何の事だろうと思いつつ頷くと、オスマンは真剣そのものの表情で続ける。

「君はギーシュ・ド・グラモンと戦った時、青銅のゴーレムを蹴り飛ばしたじゃろ？ ……正直言って、あんな事は普通の人間には不可能じゃ。もしかしたら君には、ガンダールヴ以外に何か特別な力があるんじゃないのかね？」

「……………」

それを聞いて、金木はぐっと拳を握りしめた。それからこの老人に本当の事を話しか迷った後、事実を話す事にした。短い間に話しただけだが、この老人になれば本当の事を言っても誰にも話さないだろうと思っただからだ。金木はオスマンの目を真っ直ぐ見据えて、口を開く。

「……………僕達の世界には、喰種<sup>グール</sup>という生き物がいるんです」

「グール？ この世界では、それは吸血鬼に血を吸われて動く屍になった者の事じゃが……それと同じものかね？」

「いいえ、違います。僕達の世界ではその生き物は屍じゃなくて、ちゃんと生きてます。そして何よりも人と違うのは……人を食べる事」

「人を……」

「はい。恐らくオスマンさんを助けた人は喰種を殺す人間……喰種捜査官だと思えます。クインケはそもそも喰種を殺すための物ですし、それを持てるのは基本的に捜査官しかいませんから」

「しかし、それが君と一体どういう関係が……。……まさか……」

オスマンは何かに気付いたようにはっと目を見開き、金木を見つめた。金木は悲しそうな笑みを浮かべて、自分の正体を告げる。

「僕も、喰種なんです」

そう言うと、オスマンはじつと金木の顔をまっすぐ見た。金木もオスマンの顔から視線を逸らさずに、話を続ける。

「今まで黙っててすいません。何か問題があるというのなら今すぐここから出て行きますし、僕を殺すというのならそれでも構いません」  
「……君は、それで良いのかね？」

そんな金木の言葉を奇妙に思ったのか、オスマンが静かな口調で尋ねた。金木はあはは……と笑いながら、

「……こんな化け物と一緒にいたらみんな怖がるでしょうし、ここで死んでも、僕にはもう帰る場所も待ってくれる人もいない。だから問題は無いですよ」

あんでいくも、芳村も、入見も、古間も。自分は自分が守りたかったもの全てを失った。それなのに生きていくのは、正直言つて辛すぎる。拾った命を無駄にするのはもったいないかもしれないが、運命だと思つて受け入れるしかないのかもしれない。

金木がそんな事を考えていると、オスマンは一つため息をついてから金木に言った。

「出て行けなど言わんよ。君を殺すつもりもない。君には今までと同じように、ここにいてもらう」

その言葉に驚いたのは金木の方だった。彼はオスマンを驚いた表情で見ながら、

「ど、どうしてですか？　僕は喰種ですし、ここにいたら……」

「わしはそう思わんよ。もし君が本当にそんな危険人物なら、今頃生徒の一人か二人が君の胃袋に収まっているだろう。だが君はこの学

院の生徒には誰一人手を付けておらん。それは、君に人を殺して食べる気が無いという事じゃろう？　これはわしの想像じゃが……恐らくその喰種とやらは、別に生きた人間じゃなくても良いのではないかのう。死んだ人間を食べても問題はないんじゃないのかね？」

「それは……そうですけど」

「さすがに生きた人間を殺して食べるのであれば話は別じゃが、死んでしまった人間まで食べるなどは言えんよ。それは今生きている君にとつて、あまりに傲慢すぎる。まあ、残された者から見たらあまり気分が良い話ではないかもしれないが。……そして何より君は、生きている人間を殺すつもりはない。そんな人間を学院から追い出すつもりも、殺すつもりもわしにはない」

「だ、だけど僕は……」

「カネキ君」

そこでオスマンは、初めて金木の名前を呼んだ。オスマンは金木の戸惑いの表情を真っ直ぐ見据えながら、何の偽りもない言葉を紡ぎだす。

「化け物と言うのはな、人を殺してもなんとも思わない者の事を言うのじゃよ。そして君のように人を思いやる心を持つ者は化け物とは言わん。だからそれ以上自分を追いつめるような事を言うのはやめなさい。それは誰よりも、君自身に失礼じゃよ」

「……………」

金木は反論しようとしたが、目の前の老人の言葉に何も言い返せなかった。とぼけた所を見せているが、やはり魔法学院の学院長を名乗るだけあってその言葉には力がある。オスマンは真剣な表情からにっこりと笑顔になって、

「例え周りの人間が化け物と言っても、君の味方になってくれる人は必ずおる。わしもその内の一人じゃ、カネキ君」

そう言うってから、オスマンは金木を抱きしめた。

「よくぞ恩人の箱を取り戻してくれた。改めて礼を言うぞ」

「は……」

金木は小さな声で返事をした。

「お主がどういう理屈で、こちらの世界にやって来たのか、私なりに調べつもりじゃ。でも……」

「でも、何ですか？」

「何も分からなくても、恨まんでくれよ。なあに。こちらの世界も住めば都じゃ。嫁さんだつて探してやる」

「……恨みませんよ、そんな事で」

金木はそう言うと、オスマンから離れてぺこりと一度お辞儀をした。それから背中を向けて、学院長室から出て行った。金木が出た行ったのを見送つてから、オスマンは学院長室の机に座ると、ふーと長いため息を漏らした。

「喰種、か……。それにしても、彼の秘密はそれだけではないような気がするが……」

オスマンがそう言った根拠は、金木の目にあつた。彼の目には様々な感情が渦巻いていたが、その目は孤独に酷く怯えているようだった。恐らく彼はここに来るまでに、長年生きてきた自分でも想像がつかないぐらいの悲劇に苛まれてきたのだろう。そうでなければ、あんな目には到底ならない。

しばらく黙つて天井を見上げていると、机の上に小さなハツカネズミが現れた。オスマンの使い魔、モートソグニルである。オスマンはポケットからナッツを取り出すと、モートソグニルに与えた。ちゅうちゅうと嬉しそうにナッツをかじる使い魔の頭を優しく撫でながら、オスマンは呟いた。

「例え違う世界の人間であっても、彼には幸せになつて欲しいのう……。なあ、モートソグニルや」

アルヴィーズの食堂の上の階が大きなホールになっており、舞踏会はそこで行われていた。金木はバルコニーで、華やかな会場をじつと見つめていた。

中では着飾つた生徒や教師達が豪華な料理が盛られたテーブルの周りで歓談している。金木は外からバルコニーに続く階段からここ

まで上ってきて、中を眺めているのだった。金木のそばの枠にはシエスタが持つてきてくれた肉料理の皿とワインの瓶がのっかっていたが、金木はそれらにまったく手を付けていない。

「なんでえ相棒、食わねえのか？」

「……喰種は、人間が食べられる物は食べられないんだよ。僕達が食べられるのは、基本的に人肉だけだ」

「へえ、不便だねえ喰種っていうのは。」

バルコニーの枠に立ってかけているデルフがのんびりとした口調で言った。今この場にいるのは、金木とこの剣だけである。

先程までは綺麗なドレスに身を包んだキュルケが金木のそばにいて、なんやかんやと話しかけてくれていたのだが、パーティが始まる中に入ってしまった。彼女は今、ホールの中でたくさんの男に囲まれて笑っている。キュルケは金木に後で一緒に踊りましょ、と言っていたが、あの調子では何人待ちになるか分からないだろう。

黒いパーティドレスを着たタバサは、一生懸命にテーブルの上の料理と格闘している。

それぞれに、パーティを満喫しているようだ。

金木がそれらの様子を見てため息をつくとき、デルフが再び声を発する。

「ため息が多いな、相棒。元の世界の事を思っだしてんのか？」

デルフの言葉に、金木はコクリと頷いた。この剣に自分が違う世界の住人だとは一言も話していないはずなのだが、大方先ほどのオスマンとの話を聞いていたのだろう。

「変だよな。もう帰る場所も、待ってる人もいないのに、元の世界の事を思っだすなんて……」

すると、デルフはしばらく黙りこんでから再び口を開いた。

「なあ相棒。お前さんには本当に、帰る場所も待ってる人もいないのか？」

金木は少し驚いたような表情を浮かべ、それから悲しそうな笑みを浮かべてからデルフに視線を向けた。

「……いないよ。だって僕は間に合わなかったんだ。大切なものを守

る戦いに。今頃、あんていくは無くなっちゃってるよ……」

「その目で見たのか？」

立て続けに繰り返されたデルフからの質問に、金木は思わず言葉を詰まらせた。

「……見てない、けど」

「だったら、まだ可能性はあるんじゃないか？ 確かに相棒は間に合わなかったのかもしれないけど、直接見たわけじゃないんだろ？ だったら絶望するのはまだ早いと思うがね」

「……」

「それに、だ。案外待ってる人間はもういなくなっちゃって思っても、案外ちゃんというもんだぜ、そういう人間は。相棒にも、一人ぐらいいるんじゃないの？ ……例えどんだけ時間がかかっても、お前さんの帰りを待ってる人間が、さ」

「……そんなの、いるわけ……」

そう言いかけた金木の脳裏に、ある人物の顔と言葉が思い浮かんできた。

—— お前なんかあんていくに帰ってくるな!!

—— なんて、そんななっちゃったのよ……。

それらを思い出して、金木は思わずあつ、と声を出した。

「いるのか？」

「……いや、分かんないよ。彼女とは喧嘩別れみたいになっちゃったし……」

「だけど、待ってないって言われたわけじゃないんだろ？ ……それを確かめるにも、相棒はそいつに会わなきゃならないんじゃないか？ ……」

それを聞いて、金木は再び黙り込んだ。

あの時の彼女は、今にも泣きだしてしまいそうな表情をしていた。もしかしたら彼女は、口ではああ言っていたが、本心では金木に自分達の所に帰ってきてほしかったのではないだろうか。

この世界に来る前の戦いでは、彼女はあの戦いに参戦していなかったはずだ。だとすると、あの少女は今も元の世界で生きている可能性



が大きい。ならば、彼女は今も自分の帰りを待っていてくれるのだろうか。

……もしも本当にそうだとするならば。あの少女が、自分の帰りを待っていてくれるのだとしたら。

例えどんなに小さな可能性だとしても、その可能性が残っているのだったら。

金木はぐつと拳を握ると、デルフに言った。

「……デルフ。決めたよ。僕は……」

と、ちようどそんな時、門に控えた呼び出しの衛士がルイズの到着を告げた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなぐり〜！」

現れたルイズは、長い桃色がかった髪をバレッタにまとめ、ホワイトのパーティドレスに身を包んでいた。肘までの白い手袋がルイズの高貴さをいやになるぐらい演出し、胸元の開いたドレスが作りの小さい顔を、宝石のように輝かせている。

主役が全員揃った事を確認した楽士達が、小さく流れるように音楽を奏で始めた。ルイズの周りにはその姿と美貌に驚いた男達が群がり、さかんにダンスを申し込んでいる。今までゼロのルイズと呼んではからかっていたノーマークの少女の美貌に気付き、いち早く唾をつけておこうという事だろう。

ホールでは貴族達が優雅にダンスを踊り始めた。しかしルイズは誰の誘いをも断ると、バルコニーにいる金木に気付いて近寄ってきた。

ルイズは金木の目の前に立つと、腰に手をやって首を傾げる。

「楽しんでる……ようには見えないわね」

「まあね……」

金木は苦笑しながらそう答えた。デルフがルイズに気付き、「おお、馬子にも衣装じゃねえか」とからかうような口調で言う。

「うるさいわね」

ルイズは剣を睨むと、腕を組んで金木の顔をじつと見据える。

「ルイズちゃんは踊らないの?」

「相手がいないのよ」

ルイズはやれやれと言うように肩をすくめると、金木にすつと手を差し伸べた。

「だから……踊ってあげても、よくつてよ」

目を逸らして、ルイズは少し照れたように言った。

突然のルイズの台詞に金木は戸惑ったが、やがて柔らかな笑みを浮かべながら答えた。

「喜んで」

そして、ルイズの手を握ると二人は並んでホールへと向かった。

ダンスなどした事のない金木だったが、ルイズはその事を予測していたのか「わたしに合わせて」と言つて金木の手を軽く握った。金木は見よう見まねで、ルイズに合わせて踊り出す。ルイズは金木のぎこちない踊りに文句をつけるでもなく、澄ました顔でステップを踏んでいる。流石に彼女の方は貴族だけあって、こういう事には慣れてい  
るらしい。

「ねえ、カネキ」

ルイズは軽やかに優雅にステップを踏みながら、金木に呟く。

「何?」

「あんたは、元の故郷に帰りたいの?」

金木はぎこちないステップを踏みながら少しの間黙つてから、口を開いた。

「うん。帰りたい」

「でも、ちよつと前はそうでもなかったみたいだけど?」

そう言われると、金木は苦笑して、

「確かにそうかもしれないけど……。でも今は、帰りたいと思う。僕の帰りを待つてる人が、いるかもしれないんだ」

全てを失つた自分を待つているかもしれない存在。

自分に色々な事を教えてくれた少女……霧嶋きりしま董香とうか。

いや、彼女だけではない。それ以外にも、自分を待つている人達がいるかもしれない。

あんでいくは無くなってしまうたが、そこにいた全ての人達も全員いなくなってしまうたわけではないかもしれない。それを確かめるためにも、自分は元の世界に帰る必要がある。

そして、もしもまだ自分の大切なものが全て無くなってしまったわけではないとしたら……、いつかは彼らのいる場所に帰りたいた、金木は強くそう思っていた。

そのためにはまず、自分の世界に帰る必要がある。

だから金木は、目の前のルイズに言った。

「元の世界に帰るための手段は探すけど、さすがに簡単には見つからないと思うから、しばらくは君の使い魔をするよ。それまでは……君を護る」

「……そう」

ルイズは小さく呟くと、しばらく無言で踊り始めた。

それからルイズは少し頬を赤らめると、金木の目から目を逸らした。そして、思い切ったように口を開く。

「ありがとう」

「え？」

金木は不思議そうな表情を浮かべると、ルイズは何かを誤魔化すように呟いた。

「その……、フーケのゴーレムに潰されそうになった時に、助けてくれたじゃない」

ああ、と金木はその言葉を聞いて、その時の事を思い出した。

楽士達がテンポの良い曲を奏でた。金木はその演奏を聞きながら、ルイズに柔らかい表情を向ける。

「気にしないでよ。当然だから」

「どうして？」

「だって僕は、ルイズちゃんの使い魔でしょ？」

金木はそう言いながら、ルイズと一緒に踊り続けた。

そんな様子をバルコニーから眺めていたデルフが、こっそりと呟いた。

「おでれーた！」

二つの月がホールに月明かりを送り、蠟燭と絡んで幻想的な雰囲気を作り上げている。

「相棒！・ てーしたもんだ！」

踊る相棒とその主人を見ながら、デルフはひたすら驚いたように繰り返す。

「主人のダンスの相手を務める使い魔なんて、初めて見たぜ！」

## 第八話 王女

ルイズは自分のベッドの上で、夢を見ていた。トリスティン魔法学院から、馬で三日ほどの距離にある、生まれ故郷のラ・ヴァリエールの領地にある屋敷が舞台だ。

夢の中の幼いルイズは屋敷の中庭を逃げ回っていた。迷宮のような植え込みの陰に隠れ、追っ手をやり過ぎす。

「ルイズ、ルイズ。どこに行つたの？ ルイズ！ まだお説教は終わっていませんよ！」

そう言つて騒いでいるのは、ルイズの母親だった。夢の中でルイズは、出来の良い姉達と魔法の成績を比べられて、物覚えが悪いと叱られていたのだつた。

隠れた植え込みの下から、誰かの靴が見えた。

「ルイズお嬢様は難儀だねえ」

「まったくだ。上の二人のお嬢様はあんなに魔法がおできになるつていうのに……」

ルイズは悔しさと悲しきで歯噛みすると、召使い達は植え込みの中をさがさごと捜し始めた。このままでは見つかると思つたルイズはそこから逃げ出した。

そして、彼女自身が『秘密の場所』と呼んでいる中庭の池に向かう。そこは、ルイズは唯一安心できる場所だつた。あまり人の寄り付かない、うらぶれた中庭だ。池の周りには季節の花々が咲き乱れ、小鳥が集う石のアーチとベンチがあつた。池の真ん中には小さな島があり、そこには白い石で造られた東屋が建っている。

島のほとりに小舟が一層浮いていた。舟遊びを楽しむための小舟だつた。しかし、今ではもうこの池で舟遊びを楽しむ者はいない。姉達はそれぞれ成長して魔法の勉強で忙しかつたし、軍務を退いた地方のお殿様である父は近隣の貴族との付き合いと、狩猟意外に興味は無かつた。母は娘達の教育と、その嫁ぎ先以外目に入らない様子だつた。

そんなわけで、忘れさられた中庭の池とそこに浮かぶ小舟を気に留

める者は、この屋敷にルイズ以外にいない。ルイズは叱られると、決まってこの中庭の池に浮かぶ小舟の中に逃げ込むのだった。

夢の中の幼いルイズは小舟の中に逃げ込み、用意してあった毛布に潜り込む。

そんな風に行っていると、中庭の島にかかる霧の中から一人のマントを羽織った立派な貴族が現れた。

歳の頃は十六歳ぐらいだろう。夢の中のルイズは、六歳ぐらいの背格好だから、十ぐらいは年上に見える。

「泣いているのかい？ ルイズ」

つばの広い、羽根つき帽子に隠れて顔が見えない。だが、ルイズは自分の目の前にいるのが誰だかすぐに分かった。

子爵だ。最近、近所の領地を相続した年上の貴族。夢の中のルイズはほんのりと胸を熱くした。憧れの子爵。晩餐会をよく共にした。そして、父と彼との間で交わされた約束。

「子爵様、いらしてたの？」

幼いルイズは慌てて顔を隠した。みつともない所を憧れの人に見られてしまったので、恥ずかしかったのだ。

「今日は君のお父上に呼ばれたのさ。あのお話の事でね」

「まあ！」

子爵の言葉に、ルイズはさらに頬を染めて俯いた。

「いけない人ですわ。子爵様は……」

「ルイズ。ぼくの小さなルイズ。君はぼくの事が嫌いかい？」

おどけた調子で子爵が言うと、夢の中の小さなルイズは首を振った。

「いえ、そんな事はありませんわ。でも……わたし、まだ小さいし、よく分かりませんわ」

ルイズははにかんで言った。帽子の下の顔が、につこりと笑った。そして、手をそつと差し伸ばしてくる。

「子爵様……」

「ミ・レイデイ。手を貸してあげよう。ほら、つかまって。もうじき晩餐会が始まるよ」

「でも……」

「また怒られたんだね？ 安心しなさい。ぼくからお父上にとりなしてあげよう」

島の岸部から小舟に向かって手が差し伸べられる。大きな手。憧れの手……。

ルイズは頷いて立ち上がり、その手を握ろうとした。

その時、風が吹いて貴族の帽子が飛んだ。

「え？」

ルイズは思わず戸惑いの声を上げた。

貴族の帽子が飛んだ直後、周りの景色ががらりと変わったのだ。さっきまでいた子爵の姿は消え、自分一人しかない。しかも自分の姿は六歳の姿から、今の十六歳の姿に変わっていたのだ。

「何よ……良い所だったのに」

それにしても、とルイズは周りの光景を見渡した。

一体、ここはどこなのだろう。自分が今まで見た事も無い建築様式の建物に、来た事も無ければ見た事も無い風景。辺りは暗いから、恐らく今は夜なのだろう。

そんな事をルイズが思っていた時、男女の声がルイズの耳に届いてきた。

「——それで、みんながヒデをロケット花火で集中砲火して……」

「えーヒドイー！ でも、ちよつと楽しそう……」

聞こえてきた声を聞いて、ルイズは思わず目を見開いた。女性の方の声は聞き覚えがないが、男の方は聞き覚えがある。それは、つい最近よく聞くようになった声だったからだ。

「カネキ？」

自分の使い魔の名前を呟きながら、その方向に目を向ける。するとそこには、やはり使い魔……金木研の姿があった。

しかし、そこにいたのは確かに金木だったが、ルイズが知っている金木の姿とは少し違う点があった。

まず、ルイズの知っている金木の髪の色は白なのだが、今ルイズの目の前にいる金木の髪の色は黒髪だった。それに雰囲気も、自分

の知っている金木よりもやや柔らかいように感じる。

だが何よりも、ルイズが気になるのは彼の横にいる女性だった。

「何この美人……」

ルイズが思わずそう呟いてしまうほど、その女性は美しかった。男性ならば誰でも目を引きつけられるほどの容姿に、艶やかな長髪。その顔には今眼鏡がかかっているが、その眼鏡を外したらもつと美しく見えるだろう。

が、ルイズが何よりも注意を引いたのは、彼女の胸部だった。

キュルケと匹敵するぐらいには、大きい。まな板の自分とは雲泥の差である。ルイズはショックのあまり自分の胸をぺたぺたと触つてから、その顔を般若のように変化させて金木に襲いかかった。

「この馬鹿犬ううううううううっ!! そんなたかが脂肪に惑わされてんじやないわよおおおおおっ!!」

叫びながら何かの絵が描かれた紙を女性に見せている金木に背後から飛び蹴りをかましたが、すかっとその蹴りは金木を通過した。やはり今の光景は夢のようなものであるらしく、ストレス発散ができなかったルイズはギリギリと悔しそうに奥歯を噛み締めた。

そんな事をしてしていると、女性が唐突に口を開いた。

「……でも不思議ですね。高槻さんの本がきっかけで、こうしてカネキさんと私が一緒に歩いてるのって……」

（タカツキ? タカツキって……確か、この前こいつが買った本の著者よね?）

この美女の言葉を信じるならば、美女と金木はもしかしたら高槻という著者が書いた本のファンなのかもしれない。

「ホント不思議……」

そんな美女を、金木は呆けたような表情で見つめている。美女は金木を一瞬の間見つめ返してから、スツ……と金木の胸に静かに寄り添った。

（なあっ!?!）

ルイズは思わず呼吸が止まるほどの衝撃を受けたが、それは当の本人である金木も同じだったらしい。彼は見事なまでに動揺を露わに



して、吐息が感じられるほどの距離にいる美女を見ている。

「——カネキさん。ホントは私、気付いてたんです……」

そう言いながら、美女は金木の顔を見上げる。彼女の頬は、自然と赤く色づいていた。

「あなたが私を……見ていてくれた事……」

(ちよ、ちよっとおとおおおおおっ!?)

何やら良い雰囲気になってきている二人に、ルイズは思わず心の中で絶叫した。もう下手をしたらこのままキスでもかましかねない空気である。そんな中で、美女はさらに言葉を続けた。

「カネキさん……私も……」

そして、その美女は。

「あなたを見てたの!」

囁。

ルイズの頭に浮かんだのは、その一文字だけだった。

それは、金木に甘い言葉をささやいていた美女が、突然金木の肩に噛みついたからだだった。

それも甘噛みなどというレベルではなく、まるで肉食獣が獲物を食いちぎるような、そんな力で。

「へ?」

思わず漏らしたルイズの呟きに、同じく状況を理解できていない金木の呟きが重なる。

呆然とルイズと金木が美女を見ていると、美女は恍惚とした声で呟いた。

「はあああ、おいし……」

彼女の目を見て、ルイズは背筋に寒気が走るのを感じた。

彼女の両目が、赤く変色していたのだ。

その目は血のように赤く光り、見ているルイズにまで恐怖を抱かせ

る。

「うわあああつ!!!」

左肩から出血しながら金木が悲鳴を上げて尻餅をつく、美女が口元に手を当てて笑った。

「あらっ……。大丈夫ですか？ ウフフフフ……」

仕草は非常に上品に見えるのに、それを見ていたルイズにはその笑顔がとても恐ろしいものに見えた。

まるで、これから仕留めようとしている獲物を前にして、舌なめずりをしているような……。

「ねえカネキさん。私……『黒山羊の卵』でとっても好きなシーンがあるんです……」

カツカツ、とまるでわざとしているかのように靴音を立てながら、金木に近寄る。その音が自分に向かってくるのを聞いて、金木は恐怖で顔をさらに歪ませた。

「黒山羊が逃げ惑う男の臓物をゼーんぶ引きだしちゃうところ……。私、あの部分何ツツ回読んでも……。ゾクゾクしちゃうの!」

髪の毛のリボンを外し、唇についた金木の血液を舐めとりながら美女はそんな事を言う。そこでルイズは、自分の両足がガタガタと震えるのを感じていた。

いや、足だけではない。

手も、歯も。自分の全てが目の中の『捕食者』に恐怖を感じて、脳が今すぐここから逃げろと警報を発している。それでも逃げる事が出来ないのは、目の前の美女の恐怖がそれほどまでに強いのか、それともこれは金木の記憶なので勝手な行動が許されないのか、はたまたその両方か。

ガタガタと震える金木、さらには見えてないはずのルイズの表情も見えているかのように、美女がさらに楽しそうに告げてくる。

「……ウフフフ……。その表情、素敵ですよ。そうですね……。まさか『そう』だなんて……。思いもしなかったでしょう？ 私が喰種グールだなんて!!!」

直後、眼鏡を外した美女の腰から何かが勢いよく飛び出した。

それは、先端が鉤爪のような形をした触手だった。全部で四本あり、触手の色はまるで彼女の両目のように赤い。

(グール……!?) それって、吸血鬼に血を吸われてできる、あの……!?)

ハルケギニアで生まれたルイズにはその生き物の方が頭に思い浮かぶが、その可能性を彼女は即座に否定する。

彼女が知っているグールというのは、吸血鬼に血を吸われて生きる屍となった人間の事である。彼らは血を吸った吸血鬼の思うがままに操られ、二度と人間に戻る事は無い。

しかし、目の前の美女は何かには操られているような様子はない。それ以前に、グールは彼女のような赤い目も、あんな触手も持っていない。

「カネキさああん……。感じさせてエ………」

「うわあああああああ!!!」

悲鳴を上げながら、金木が彼女に背を向けて勢いよく走り出す。だが金木の足に美女の触手の内の一本が巻きつき、金木は地面に転んでしまう。

「つかまえた♡」

いつの間にか距離を詰め、この場にまったくそぐわない笑みを浮かべながら、美女がそう言った。彼女の腰から伸びている触手が、ビキキ……と不穏な音を立てる。

「カネキさあん……。喰種グールの『爪』は初めてでしょう……? お腹の中

優しくかき混ぜてあげますよ……ウフフ……」

「ひあああああッ……!」

怯えた声を出しながら、金木は無我夢中で地面に転がっていたペンを触手に突き刺す。ペンそのものは折れてしまったが、そのペんに美女の意識が向き、金木は慌ててその場から逃げ出した。彼の後を追って、ルイズも美女の恐怖に駆られて勢いよく走り出す。

その、直後だった。

美女の触手の一本が金木の横腹を突き刺し、そのまま彼の体を勢いよく壁に叩き付けた。

「カネキ！」

思わずルイズが声を上げるが、壁に叩き付けられた金木はぴくりとも動かない。口と鼻から血を流して、ぐったりとしている。ルイズがそんな金木の姿に呆然としてしていると、笑顔の美女がゆつくりと歩み寄ってきた。

「……あら、死んじやった？」

そんな事を呟きながら、美女はさらに金木との距離を詰めていく。ルイズはまるで金木を護るように美女の前に立ち塞がるが、この世界での自分は無力である。この世界では、自分は誰からも認識されていないのだから。

それでもルイズは、自分の使い魔である金木がただ傷つけられるのを見ていられなかった。ガタガタと全身を震わせながら、必死に震える声で言い放つ。

「こ、こいつをこれ以上傷つけるんじゃないわよ!! まだやるって言うなら……わたしが相手よ！」

だが、その声が美女に聞こえているはずもない。ルイズを無視するかのように、美女はルイズの後ろで血を流している金木に言った。

「ウフフ……。私、カネキさんみたいな体型の人好きよ。ほどよく脂ものってるし、筋肉質じゃないから柔らかくて食べやすそう……。今週食べた二人とどっちが美味しいかしら……」

と、その時だった。

不意に美女の視線が、上に向けられた。

「……あらっ！」

彼女の視線につられるように、ルイズも上を見上げる。

直後。

ドガア!!! という轟音を立てて、上から降ってきた何かは美女の体を押しつぶした。

「え……!?! な、何が……!?!」

突然の事態にルイズは驚いて声を出した。

彼女は知らないが、降ってきたのは鉄骨である。真上にあつたそれが、美女の体を押しつぶしたのだ。

口から大量の血を吐き出しながら、美女が苦しげに言う。

「なんで……あ……たツ……が……」

そう言うってから、美女の両目はぐるんと白目を剥いた。実体ではないためか鉄骨の直撃を免れたルイズはまだ自分の中の恐怖が消えない事を確認しながらも、消え入りそうな声で呟く。

「死ん……だの？」

それから、後ろの金木に視線を移す。急いで彼に駆け寄ろうとした瞬間、彼女を凄まじい眠気が襲いかかってきた。思わず膝をつきながらも、自分の右手を金木に必死に伸ばす。

「カ……ネ……キ……」

使い魔の名前を口にして。

ルイズは、意識を失った。

「ん……」

小さく声を漏らしながら、ルイズは自分の部屋のベッドの上で目を覚ました。窓を見てみると、すでに日が昇っている。授業の間にはまだ早いだろうが、ルイズはさすがに二度寝をする気にはなれなかった。

それから部屋の片隅を見てみると、すーすーと寝息を立てながら揺れる白色の髪の毛が目に入った。

「あれって……カネキの過去……？」

今思い出してみても、とても恐ろしい夢だった。しかしルイズは首を横にぶんぶん振って、あの夢が現実に起こった事だという事を否定する。

本当にあれが現実に起こった事ならば、金木は今頃ここにはいない。髪の毛だって黒かったし、きつとあれは本当にただ単なる夢だったのだろう。自分の夢の中に金木が現れたという事が、非常に不愉快ではあったが。

ルイズは気合を入れるようにパンと両頬を張ると、ベッドから起き上がった。

彼女は知らない。

今まで自分が見ていた夢が、現実起こった事だという事を。そしてその事件をきっかけにして、金木研という青年の運命が大きく変わってしまった事を。

彼女はまだ、知らなかった。

朝食を終えたルイズと金木（無論、金木は朝食を抜いた）が教室で座っていると、扉が開いてミスタ・ギトーが現れた。ミスタ・ギトーはフーケの一件の際、当直をほっぽり出して寝ていたミセス・シユヴルーズを責め、オスマンに『君は怒りっぽくていかん』と言われた教師である。

長い黒髪に漆黒のマントを身に纏ったその姿は、言つては悪いが不気味である。まだ若いのに、その不気味さと冷たい雰囲気からか、生徒達には人気が無かった。

「では授業を始める。知つてのとおり、私の二つ名は『疾風』。疾風のギトーだ」

教室中が、しーんとした雰囲気包まれる。その様子を満足気に見つめると、ギトーは言葉を続けた。

「最強の系統は知つているかね？ ミス・ツエルプストー」

「虚無じゃないんですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いてるんだ」

いちいち引つかかる言い方をするギトーに、キュルケは少しカチンとした。

「火に決まってますわ。ミスタ・ギトー」

キュルケが不敵な笑みを浮かべて言い放つと、ギトーは表情をピクリとも変えずに再び尋ねる。

「ほほう。どうしてそう思うね？」

「全てを燃やし尽くせるのは、炎と情熱。そうじゃございせん事？」「残念ながらそうではない」

ギトーは腰に差した杖を引き抜くと、キュルケに向かって言い放つ。

「試しに、この私に君の得意な火の魔法をぶつけてきたまえ」

いきなりそんな事を言われて、キュルケはギョツとした表情を浮かべた。

「どうしたね？ 君は確か、火系統が得意ではなかったかな？」

彼の口調には、どこかキュルケを挑発するような響きが込められていた。キュルケは目を細めながら、

「火傷じゃすみませんわよ？」

「構わん。本気で来たまえ。その有名なツエルプストー家の赤毛が飾りではないのならね」

瞬間、キュルケの顔からいつもの相手を小馬鹿にしたような笑みが消えた。

胸の谷間から杖を引き抜くと、炎のような色をした赤毛が熱したようにざわめき、逆立つ。

キュルケが杖を振るうと、目の前に差し出した右手の上に小さな炎の玉が現れる。キュルケがさらに呪文を詠唱し続けると、その球は次第に膨れ上がり、直径一メートルほどの大きさになった。それを見て、生徒達が慌てて机の下に隠れる。

キュルケは手首を回転させた後、右手を胸元に引きつけて炎の玉をギトーに向かって押し出した。

唸りを上げて自分目掛けて飛んでくる炎の玉を避ける仕草すら見せずに、ギトーは腰に差した杖を引き抜くと剣を振るうようにして薙ぎ払う。

烈風が舞い上がり、一瞬にして炎の玉が掻き消え、その向こうにいたキュルケを吹き飛ばした。

悠然として、ギトーは教室にいる全員に言い聞かせるように告げる。

「諸君、風が最強たる所以ゆえんを教えよう。簡単だ。風は全てを薙ぎ払う。火も、水も、土も、風の前では立つ事すらできない。残念ながら試した事は無いが、虚無さえ吹き飛ばすだろう。それが風だ」

(いくら何でもそれは言いすぎじゃないかなあ……)

熱弁を振るうギトーを見ながら、金木は内心そう思った。シュヴ

ルーズも自分の土系統の事をやや自慢げに話していたが、ギトーという男性教師は風の魔法を過信しすぎているような気がする。異世界人である金木にとっては、どんなに素晴らしい魔法でも相性が存在するのではないかというのが正直な感想だった。

しかしそんな金木の心の声が伝わる事は当然なく、ギトーはさらに自分の風系統の自慢を続ける。

「目に見えぬ風は見えずとも諸君らを護る盾となり、必要とあらば敵を吹き飛ばす矛となるだろう。そしてもう一つ、風が最強たる所以は……」

そう言いながら、ギトーは杖を立てた。

「ユビキタス・デル・ウインデ……」

低く、呪文を詠唱する。しかしその時、教室の扉がガラツと開き、緊張した顔のミスタ・コルベールが現れた。

彼は珍妙ななりをしていた。頭にやたらと馬鹿でかい、ロールした金髪のかつらをのっけているのだ。良く見てみると、ローブの胸にはレースの飾りやら刺繍が踊っている。何をそんなにめかしているのだろうか。

「ミスタ？」

コルベールのその姿を見て、ギトーが眉をひそめた。

「あややや、ミスタ・ギトー！ 失礼しますぞ！」

「授業中です」

コルベールを睨んでギトーは言うが、それを無視してコルベールが咳払いをする。

「おっほん。今日の授業は全て中止であります」

コルベールは重々しい調子で告げると、その途端教室から歓声が上がった。すると歓声を抑えるように両手を振りながら、コルベールが言葉を続ける。

「えー、皆さんにお知らせですぞ」

もったいぶった調子で、コルベールは仰け反った。その拍子に頭に乘せたカツラが取れて、床に落っこちる。ギトーのおかげで重苦しかった教室の雰囲気が一気にほぐれた。



教室中がくすくす笑いに包まれる。

一番前に座ったタバサが、コルベールのつるつるに禿げ上がった頭を指差して、ぽつんと呟いた。

「滑りやすい」

滅多に口を開かない彼女の一言で、教室が爆笑に包まれた。彼女の言葉には、さすがの金木も少し口元に苦笑を浮かべている。キュルケが笑いながらタバサの肩をぽんぽんと叩く。

「あなた、たまに口を開くと、言うわね」

コルベールは顔を真つ赤にさせると、大きな声で怒鳴った。

「黙りなさい！ ええい！ 黙りなさい小童共が！ 大口を開けて下品に笑うとはまったく貴族にあるまじき行い！ 貴族はおかしいときは下を向いてこっそり笑うものですぞ！ これでは王宮に教育の成果が疑われる！」

コルベールのその剣幕に、教室中がおとなしくなった。ようやく冷静になったコルベールは再び咳払いをしてから、

「皆さん、本日はトリステイン魔法学院にとって、良き日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります」

コルベールは横を向くと、後ろ手に手を組んだ。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸なされます」

予想外の言葉に、教室中がざわめいた。

「したがって、粗相があつてはいけません。急な事ですが、今から全力を挙げて歓迎式典の準備を行います。そのために本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列する事」

生徒達は緊張した面持ちになると、一斉に頷いた。コルベールはうんうんと重々しげに頷くと、目を見張って怒鳴った。

「諸君が立派な貴族に成長した事を、姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ！ 御覚えがよろしくなるように、しっかりと杖を磨いておきなさい！ よろしいですかな！」

それから数時間後。

魔法学院の正門をくぐって、王女の一行が現れると整列した生徒達は一斉に杖を掲げた。しゅん！と小気味よく杖の音が重なった。

正門をくぐった先に、本塔の玄関があつた。そこに立ち、王女の一行を迎えるのは学院長のオスマンだ。

馬車が止まると、召使い達が駆け寄り、馬車の扉まで緋毛氈ひもうせんのじゅうたんを敷き詰めた。

呼び出しの衛士が緊張した声で、王女の登場を告げる。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおな—りー!!」

しかし、がちやりと扉が開いて現れたのは枢機卿のマザリーニだった。

生徒達は一斉に鼻を鳴らしたが、マザリーニは意に介した風もなく馬車の横に立つと、続いて降りてくる王女の手を取った。

生徒の間から歓声が上がる。

王女はにつこりと薔薇のような微笑を浮かべると、優雅に手を振った。

「あれがトリステインの王女？ ふん、あたしの方が美人じゃない」

キェルケがつまらなさそうな口調で言った。

「ねえ、ダーリンはどっちが綺麗だと思う？」

「ど、どっちで言われてもなあ……。まあ確かに、綺麗だとは思うけど……」

金木は苦笑しながら、笑顔で手を振っている王女に視線を向けて呟く。

「そう言えば、国王様と女王様はここに来てないんだね」

金木のその言葉に答えたのは、彼の横で本を読んでいるタバサだった。彼女とハルケギニアと日本語を互いに教え合う約束を交わしてから、タバサは金木とよく喋るようになっていた。

「トリステインの国王は、すでに崩御している」

「崩御……。ああ、死んじやたって事か。じゃあ、今は彼女のお母さんが女王様なの？」

するとタバサはふるふると首を横に振った。

「彼女は王妃としての立場。だから女王には即位していない」

「え、じゃあ誰がトリステインの政治とかを取り仕切ってるの？」

金木が尋ねると、タバサはすつとマザリーニを指差した。

「そうなんだ……」

「だから、街で小唄が流行ってる」

「小唄？」

金木が再び聞くと、タバサは唐突にその小唄を歌い始めた。

「トリステインの王家には、美貌はあっても杖が無い。杖を握るは枢機卿。灰色帽子の鳥の骨……」

それは、王家を仕切っているのはあの枢機卿だという事を暗に示唆している歌だった。王家って大変だな、と金木は内心思いながら、ふと横にいるルイズの方を見た。

彼女は真面目な顔をして王女を見つめていたが、突然その顔がはつとした顔になった。それから顔を赤らめる。その変化が気になった金木はルイズの視線の先を確かめる。

彼女の視線の先には、見事な羽帽子を被った凛々しい貴族の姿があった。鷲の頭と獅子の体を持った見事な幻獣——金木の記憶が正しければ、グリフオンだ——にまたがっている。

ルイズはぼんやりとその貴族を見つめていた。どうやらあの貴族に心を奪われているらしい。高飛車なルイズも、どうやらそういう所では年頃の少女らしい。

金木がそんな事を思っていると、タバサがちよんと金木の手を引く張った。

「どうしたの？ タバサちゃん」

「……これが終わったら、勉強会をしたい」

勉強会というのは、言わずもがなタバサとの約束の事だ。金木とタバサは時々勉強会という名目で、互いの国の言葉を勉強している。金木は口元に笑みを浮かべながら、

「うん、良いよ。じゃあ場所はいつもと同じで図書室で良いよね？」

「構わない」

そう言うとタバサは、少し嬉しそうな表情を浮かべながら本に視線を戻す。

金木も、タバサから再び王女一向に視線を移すのだった。

その日の夜、タバサとの勉強会を終えた金木は勉強会の場所である図書室からルイズの部屋へと歩いていった。彼の右腕には、自習で使うための本が数冊抱えられている。平民である彼では図書室の本は借りられないので、タバサに代わりに借り出してもらったのだ。

二つの月の光が差し込む廊下を歩きながら、金木は一人呟く。

「でも、一体どういう事なんだろう……」

金木がそう呟いたのは、ある理由があった。

勉強会の初日、タバサからハルケギニアの言語を習っている最中に気が付いたのだが、どうも自分の言語の学習が早いような気がするのだ。これがただの気のせいならば何の問題もなかったのだが、そうではなかった。何せタバサからハルケギニアの言語を教えてもらったその日の内に、金木は簡単な文法などをマスターしてしまったのだから。

そしてそれから文字や文法の勉強、さらにタバサから借りた本を読むなどの自習を重ねた結果、難解な文法や文字などでもすらすらと読めるようになってしまった。これはいくら何でも奇妙である。

金木がその事をタバサに尋ねると、何でも使い魔となった生き物には特殊な能力が与えられる事があるという。金木の学習能力の上昇も、もしかしたらその事が関係しているのかもしれない、というのが彼女の推測だった。

しかし、それでは何故異世界であるハルケギニアの言葉が、金木には分かったのだろうか。金木はその理由を知っていそうな、背中に背負った剣に尋ねる。

「ねえ、ゲルフ」

すると直後に、剣から声が返ってきた。

「何だよ、相棒」

「君は何か知らない？ 異世界から来たはずの僕が、誰かに教わったわけでもないのにこの世界の言葉が分かる事について」

金木が尋ねると、デルフはうーんと何かを考えているような声を出した後、

「相棒はどうやってこの世界に来たんだ？」

「それは、ルイズちゃんに召喚されてだよ」

「召喚された時に、相棒は何か見なかったか？」

「……正直、あまり覚えてない」

金木はやや顔を険しくしながら答えた。金木がこのハルケギニアに召喚された時は、東京の地下で有馬貴将に殺されかけていた所だったのだ。だからその時に自分の身に何が起こったのか、金木自身よく覚えていないのだ。

ただ、

「確か……自分の体が光る鏡みたいなものに包み込まれた気はすると言えはするけど……」

それももう覚えてないので、はつきりとした確証はない。そんな金木の疑問に、デルフはあっさりと答えた。

「たぶん、それは召喚のゲートだな。ゲートに呑み込まれた際に、相棒に特殊な力が宿ったんだらうよ」

「僕の体中の傷が治ったのも、言語を早く覚える事が出来るのも、そのおかげかな」

「さてね。ゲートの仕組みについては俺も詳しくは分かんね。でもそれ以外に思い当たる節が無いって言うなら、それぐらいしか考えられねえだろ」

デルフの言葉に、金木は内心で確かにそうだなと呟いた。デルフの説が合ってるかどうかは分からないが、それを否定できる証拠も根拠もない。だとしたら、それが一番可能性のある話なのだ。

ちなみに、タバサの日本語学習も結構順調である。現在の金木には劣るが、タバサも彼女特有の勤勉さで日本語の知識をどんどん吸収している。今ではもうひらがなやカタカナ、さらには簡単な漢字も少し

読めるようになってきている。このまま勉強を続けていけば簡単な漢字はほぼマスターするので、そうだったら難しい漢字の読み書きに入ろうかと金木は思っていた。

そしてようやく金木はルイズの部屋の前にたどり着くと、そろそろと部屋の扉を開けた。前に勉強会から返って来た時は、帰るのが遅すぎるとルイズに叱られたのだ。

ルイズはぼんやりとした表情で枕を抱いて、ベッドに腰掛けていた。金木がただいまと声をかけるが、まったくの無反応だった。金木は首を傾げながらも、持ってきた本を読むために部屋の片隅にある藁束の上に座り込んだ。あの状態のルイズに何を言っても恐らく聞いてないだろうし、無理矢理喋らせるような真似をしても彼女の逆鱗に触れる可能性が高い。ならば、こうして静かに過ごしていた方がまだマシである。

金木が本を開こうとすると、突然ドアがノックされた。

誰だろう、と金木は思う。こんな時間に誰かが尋ねてくるのは、今までなかったからだ。

ノックは規則正しく叩かれた。初めに長く二回、それから短く三回。

ルイズの顔がはつとした表情になった。急いで立ち上がると、ドアに駆け寄って開く。

そこに立っていたのは真っ黒な頭巾をすっぽりと被った少女だった。少女は辺りを窺うように首を回すと、そそくさと部屋に入ってきて後ろ手に扉を閉める。

「……あなたは？」

ルイズは驚いたような声を上げた。

頭巾をかぶった少女はしつと言わんばかりに口元に指を立てた。それから頭巾と同じ漆黒のマントの隙間から魔法の杖を取り出すと、軽く振った。同時に短くルーンを呟くと、光の粉が部屋に舞う。

「……ディテイクトマジック？」

ルイズが尋ねると、頭巾の少女は首を縦に振った。

「どこに耳が、目が光っているか分かりませんかね」

どうやら少女は部屋に聞き耳を立てる魔法の耳や、どこかに通じる覗き穴が無いか調べていたらしい。それらが無い事を確かめ終えると、少女は頭巾を取った。

現れたのは、なんとアンリエッタ王女だった。予想外の人物の顔が現れた事に、金木は思わず目を丸くして王女の顔を凝視する。

「姫殿下！」

ルイズが慌てて膝をつくとき、金木もそれにならうように床に膝をついた。

アンリエッタは二人を見て、心地よい声で言った。

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

## 第九話 任務

ルイズの部屋に現れたアンリエッタ王女は、感極まった表情を浮かべて膝をついてルイズを抱きしめた。

「ああ、ルイズ、ルイズ、懐かしいルイズ！」

「姫殿下、いけません。こんな下賤な場所へ、お越しになられるなんて……」

抱きしめられたルイズは、かしこまった声でそう言った。

「ああ！ ルイズ！ ルイズ・フランソワーズ！ そんな堅苦しい行儀はやめてちょうだい！ あなたとわたくしはおともだち！ おともだちじゃないの！」

「もつたいないお言葉でございます。姫殿下」

ルイズが硬い緊張した声を返す。金木はと言うと、二人の美少女が抱き合う様を見て軽く困惑していた。それはそうだろう。片や自分の主人、片やこの国の王女なのである。これで困惑するなど言う方が無理があるだろう。

「やめて！ ここには枢機卿も、母上も、あの友達面をしてよってくる欲の皮の突っ張った宮廷貴族達もいないのですよ！ ああ、もう、わたくしには心を許せるおともだちはいないのかしら。昔なじみの懐かしいルイズ・フランソワーズ、あなたにまで、そんなよそよそしい態度を取られたら、わたくし死んでしまうわ！」

「姫殿下……」

悲しげな声を出すアンリエッタに、ルイズは顔を持ち上げた。

「幼い頃、一緒になって宮廷の中庭で蝶を追いかけたじゃないの！泥だらけになって！」

幼少期の頃を思い出したのか、はにかんだ表情を浮かべながらルイズは応えた。

「……ええ、お召し物を汚してしまって、侍従のラ・ポルト様に叱られました」

「そうよ！ そうよルイズ！ ふわふわのクリーム菓子を取り合つて、掴み合いになった事もあるわ！ あ、喧嘩になるといつもわたく



しが負かされたわね。あなたに髪の毛を掴まれて、よく泣いたものよ」

「いえ、姫様が勝利をお収めになった事も、一度ならずございました」ルイズが懐かしそうに言った。

「思い出したわ！ わたくし達がほら、アミアンの包囲戦と呼んでいゝるあの一線よ！」

「姫様の寝室で、ドレスを奪い合った時ですね」

「そうよ、『宮廷ごっこ』の最中、どっちがお姫様をやるかで揉めて取っ組み合いになったわね！ わたくしの一発が上手い具合にルイズ・フランソワーズ、あなたのお腹に決まって」

「姫様の御前でわたし、気絶いたしました」

それから二人はあははは、と顔を見合わせて笑った。金木は思わずルイズと話しているアンリエッタ王女の顔をじつと見つめる。おしとやかに見えるが、どうやら中身はとんだお転婆娘であるらしい。

「その調子よ、ルイズ。ああいやだ、懐かしくて、わたくし涙が出てしまうわ」

「……ねえ、ルイズちゃん。お姫様とルイズちゃんって、一体どういう関係なの？」

金木が尋ねると、ルイズは懐かしむように目を瞑って答えた。

「姫様がご幼少のみぎり、恐れ多くもお遊び相手を務めさせていただいたのよ」

それからルイズはアンリエッタに再び向き直った。

「でも、感激です。姫様が、そんな昔の事を覚えてくださってるなんて……。わたしの事など、とつくにお忘れになったかと思いました」

ルイズの言葉に王女はため息をつく、と、ベッドに腰掛けた。

「忘れるわけじゃないじゃない。あの頃は、毎日が楽しかったわ。なんにも悩みなんかなくて」

それは、深い、憂いを含んだ声だった。

「姫様？」

そんなアンリエッタの様子に心配になり、ルイズは彼女の顔を覗き込んだ。

「あなたが羨ましいわ。自由って素敵ね。ルイズ・フランソワーズ」  
「何をおっしゃいます。あなたはお姫様じゃない」

「王国に生まれた姫なんて、籠に飼われた鳥も同然。飼い主の機嫌一つで、あっちに行ったり、こっちに行ったり……」

アンリエッタは窓の外の月を眺めて、寂しそうに言う。それからルイズの手を取ると、につこりと笑いながら言った。

「結婚するのよ。わたくし」

「……おめでとうございます」

アンリエッタの声の調子に、何か悲しいものを感じたルイズは沈んだ声で言う。

そこでアンリエッタは、自分達を見つめている金木に気付いた。

「あら、ごめんなさい。もしかして、お邪魔だったかしら」

「お邪魔？ どうして？」

「だって、そのの彼、あなたの恋人なのでしょう？ いやだわ、わたくしったら。つい懐かしさにかまけて、とんだ粗相をいたしてしまったみたいね」

「はい？ 恋人？ あの生き物が？」

ルイズは目を大きく見開くと、首を横にぶんぶんと振った。

「姫様！ あれはただの使い魔です！ 恋人だなんて冗談じゃないわ！」

するとアンリエッタはきよとした表情で、金木の顔をじっと見つめる。

「使い魔……ですか？ 人にしか見えませんが……」

「まあ、一応……」

金木は頬をぽりぽりと掻きながら、曖昧な笑みを浮かべて言った。本当は半分人間半分喰種なのだが、当然そんな事をこの場で言うわけにもいかない。

「そうよね。はあ、ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこか変わっていたけれど、相変わらずね」

「好きであれを使い魔にしたわけじゃありません」

ルイズが無然とした口調で言うと、アンリエッタが再びため息をつ

いた。

「姫様、どうなさったんですか？」

「いえ、何でもないわ、ごめんなきいね……。嫌だわ、自分が恥ずかしいわ。あなたに話せるような事じゃないのに……。わたくしつてば……」

「おつしやってください。あんなに明るかった姫様が、そんな風になめ息をつくって事は、何かとんでもないお悩みがおありなのでしょう？」

「……いえ、話せません。悩みがあると言った事は忘れてちょうだい。ルイズ」

その言葉に、金木は眉をピクリとひそめた。彼女は自分に悩みがあるなどとは一言も言っていない。悩みがあるというのは、あくまでもルイズの想像である。しかしアンリエッタは、それを肯定した。つまり彼女は、最初からその悩みをルイズに打ち明けるつもりだったのだ。

「いけません！ 昔はなんでも話し合ってたじゃございませんか！ わたしとお友達と呼んでくださったのは姫様です。そのお友達に、悩みを話せないのですか？」

ルイズがそう言うと、アンリエッタが嬉しそうに微笑む。とんだ茶番だ、と金木は内心思った。

「わたくしをお友達と呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。とても嬉しいわ」

アンリエッタは決心したように頷くと、真剣な表情を浮かべる。

「今から話す事は、誰にも話してはいけません」

そして物悲しい調子で、アンリエッタは説明を始めた。

「わたくしは、ゲルマニアの皇帝に嫁ぐ事になったのですが……」

「ゲルマニアですって！」

ゲルマニアが嫌いなルイズは、驚いた声を上げた。

「あんな野蛮な成り上がり共の国に！」

「そうよ。でも、仕方がないの。同盟を結ぶためなのですから」

アンリエッタは現在のハルケギニアの政治の情勢を、ルイズに説明

した。

アルビオンの貴族達が反乱を起こし、今にも王室が倒れそうな事。反乱軍が勝利を収めたら、次にトリステインに侵攻してくるであろう事。

それに対抗するために、トリステインはゲルマニアと同盟を結ぶ事になった事。

同盟のために、アンリエッタ王女がゲルマニア皇帝に嫁ぐ事になった事……。

(政略結婚って事か……。王女様の感情を無視してるけど、合理的と言えば合理的だな……)

顎に手をつきながら考え込んでいる金木とは反対に、ルイズは沈んだ声で言った。

「そうだったんですか……」

アンリエッタの気持ちを想像して、ルイズは唇を噛み締めた。アンリエッタがその結婚を望んでいないのは、口調から明らかであったからだ。

「良いのよ、ルイズ。好きな相手と結婚するなんて、物心ついた時から諦めていますわ」

「姫様……」

「礼儀知らずのアルビオンの貴族達は、トリステインとゲルマニアの同盟を望んでいません。二本の矢も、束ねずに一本ずつなら楽に折れますからね」

アンリエッタはそこで一旦間を置くと、話を続ける。

「従って、わたくしの婚姻を妨げるための材料を、血眼になって探しています」

「もし、そのような物が見つかったら……」

(トリステインは、たった一国でアルビオンと戦わなきゃならなくなる)

ルイズの言葉を、金木が心の中で引き継いだ。この世界に来たばかりの金木にはまだトリステインとアルビオンの戦力の差は分からないうが、アンリエッタの口ぶりからしては余裕があるとは言えなさそう

である。

「で、もしかして姫様の婚姻を妨げるような材料が？」

ルイズが顔を蒼白にして尋ねると、アンリエッタは悲しそうに頷いた。

「おお、始祖ブリミルよ……。この不幸な姫をお救いください……」

アンリエッタは顔を両手で覆うと、床に崩れ落ちた。まるで芝居がかった仕草である。もしかしたらこの王女は、悲劇のヒロインという立場を演じたいだけなのかもしれない、と彼女以上の不幸を散々味わってきた金木はアンリエッタを冷えた眼差しで見つめていた。

「言って！ 姫様！ 一体、姫様のご婚姻を妨げる材料って何なので  
すか？」

ルイズもつられたのか、興奮した様子でまくしたてる。両手で顔を覆ったまま、アンリエッタは苦しそうに呟いた。

「……わたくしが以前したためた一通の手紙なのです」

「手紙？」

「そうです。それがアルビオンの貴族達の手に渡ったら……。彼らはすぐにゲルマニアの皇室にそれを届けるでしょう」

「どんな内容の手紙なんですか？」

「……それは言えません。でも、それを読んだらゲルマニアの皇室は……。このわたくしを許さないでしょう。ああ、婚姻は潰れ、トリステインとの同盟は反故。となると、トリステインは一国にてあの強力なアルビオンの立ち向かわねばならないでしょうね」

ルイズは息せきって、アンリエッタの手を強く握った。

「一体、その手紙はどこにあるのですか？ トリステインに危機をもたらす、その手紙とやらは！」

その言葉に、アンリエッタは首を振った。

「それが、手元にはないのです。実は、アルビオンにあるのです」

「アルビオンですって！ では！ すでに敵の手中に？」

「いえ……。その手紙を持っているのは、アルビオンの反乱勢ではありません。反乱勢と骨肉の争いを繰り返している、王家のウェールズ皇太子が……」

「プリンス・オブ・ウエールズ？ あの凜々しき王子様が？」

アンリエッタはのけぞると、ルイズのベッドに体を横たえた。

「ああ！ 破滅です！ ウエールズ皇太子は遅かれ早かれ、反乱勢に囚われてしまうわ！ そうしたら、あの手紙も明るみに出てしまう！ そうなったら破滅です！ 破滅なのです！ 同盟ならずして、トリステインは一国でアルビオンと対峙せねばならなくなります！」

ルイズは息を呑んだ。金木もアンリエッタが彼女に何を頼みに来たのかと察して、心の中で舌打ちする。

「では姫様。わたしに頼みたい事というのは……」

「無理よ！ 無理よルイズ！ わたくしつたら、なんて事でしょう！ 混乱しているんだわ！ 考えてみれば、貴族と王党派が争いを繰り広げているアルビオンに赴くなんて危険な事、頼めるわけがありませんわ！」

「何をおっしゃいます！ 例え地獄の釜の中だろうが、竜のアギトの中だろうが、姫様の御為とあらば、何処なりと向かいますわ！ 姫様とトリステインの危機を、このラ・ヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・フランソワーズ、見過ごすわけには参りません！」

ルイズは膝をついて恭しく頭を下げた。そんなルイズとは対照的に、金木は痛む頭を抑えるように額に手を当てながら、険しい表情を浮かべてため息をつく。

『土くれ』のフーケを捕まえたこのわたくしめに、その一件是非ともお任せくださいますよう」

おまけに金木の手柄までちやつかり自分のものになっている。もうここまで来ると、怒りを通り越して呆れるしかない。

「このわたくしの力になってくれるというの？ ルイズ・フランソワーズ！ 懐かしいお友達！」

「もちろんですわ！ 姫様！」

ルイズがアンリエッタの手を握って、熱した口調でそう言うと、アンリエッタはボロボロと泣き始めた。

「姫様！ このルイズ、いつまでも姫様のお友達であり、まったくき理解者でございます！ 永久に誓った忠誠を、忘れる事ありませんよう

か！」

「ああ、忠誠。これが誠の友情と忠誠です！ 感激しました。わたくし、あなたの友情と忠誠を一生忘れません！ ルイズ・フランソワーズ！」

そしてアンリエッタの手を握っていたルイズはアンリエッタから金木に視線を向けると、アンリエッタに向けるものとは違うキツイ口調で言い放った。

「というわけだから、あんたもついて来なさいよ。あんたはわたしの使い魔なんだから、それぐらいの事はしなさいよね」

この時ルイズは、金木が困ったような笑みを浮かべながら、しようがないなあと言うのを予想ではなく確信していた。それは金木の事を本当に信頼しているがゆえの確信ではなく、主の自分が言うのだからついてくるに違いないという、もはや勝手な思い込みから来る確信でしかなかった。

だから、ルイズは金木が冷え切った目をしていた事に気付かなかつたし、金木の口から予想外の言葉が飛び出すなど微塵も思っていなかった。

「嫌だ」

「そう、嫌よね。だからあんたは……」

しかしそこでルイズは目の前の青年が何を言ったのかを遅れて理解すると、目を真ん丸に見開いてもう一度尋ねた。

「……は？ あんた、今何て言ったの？」

「嫌だって言ったんだよ、ルイズちゃん。少なくとも僕はアルビオンに行きたくないし、君がアルビオンに行くのにも反対だ」

金木の発言に、ルイズだけではなくアンリエッタも目を見開いて驚いていた。ルイズは呆然とした表情から一転、怒りの表情を浮かべると勢いよく金木に詰め寄った。

「あんた、何言ってるの!? これは姫様直々の任務なのよ!? それを断るなんて……!」

「姫様の任務だろうが何だろうが、僕は嫌だ。この任務には、デメリットが多すぎる」

「デメリット？」

そう言うと金木はルイズから彼女の後ろにいるアンリエッタに一瞬視線を向けてから、説明を始める。

「まず、仮に任務を受けるとして、僕達が行こうとしているのは戦争中のアルビオンだ。正直言って、危険すぎる」

「だから何よ。わたしは土くれのフーケを捕まえたのよ？ 別にそれぐらい……」

『捕まえた』だけだよ？ これから僕らが行くのは『殺し合い』の場だよ。……それとルイズちゃん。フーケを捕まえたのは君じゃなくて、僕だ。もしも君が一人だけフーケを捕まえに行ったら、君は今頃この世にはいないよ」

自慢を言っているわけではなく、ただ淡々と事実だけを述べているような金木の口調に、ルイズは思わず黙り込んだ。確かにフーケを捕まえに行った時、自分はフーケを捕まえるどころか危うくゴーレムに踏みつぶされかけた。金木に助けられなかったら、自分は今頃死んでいるかもしれない。

「ルイズちゃん。君は魔法が満足に使えない。そんな君が武器を持った平民や強力な魔法を使うメイジ達がいる戦場に足を踏み入れたら、どうなると思う？ 死ぬよ、間違いなく。しかも何の意味もない、ただの犬死だ」

それはルイズをけなしているわけではなく、実際にルイズが戦場に向かったらどうなるかを冷静に語っているだけだ。だがそれを語る金木の口調はいつも以上に容赦がなく、ルイズは目頭が熱くなるのを感じながら唇を噛み締めるしかできなかった。

「それに、この任務の重要な鍵の手紙がどんな手紙かすらも分からない。はつきり言って話にならない。大切な物を手に入れて欲しいなら、その中身を相手に話すのが当然ですよ？ それすら話さないでただ手紙を手に入れろって言うのは、少し強引すぎるんじゃないですか？」

「そ、それは……」

金木の言葉にアンリエッタが反論しようとするが、その前に金木が



さらに畳みかける。

「そして僕が一番引つかかるのは、その手紙を入手するのをルイズちゃんに頼んだ事です。ただ単純に手紙を手に入れるだけなら、事情の知らない兵士か誰かに入手させれば良い。なのにあなたはお友達のはずのルイズちゃんに事情も話さずにいる。それは何故か。……恐らくその手紙は世間に公表されればトリステインとゲルマニアの同盟を崩すだけじゃなく、トリステイン内部をも揺るがしかねない物だから。違いますか？」

「……………?!」

アンリエッタは目の前に立つ白髪青年を、驚愕の眼差しでじっと見つめた。

この青年は、わずかな手がかりとアンリエッタの話を聞いただけで自分とアルビオンにいる王子しか知らないはずの手紙の真実にまで、手を伸ばしている。恐るべき推理力だ。

しかしアンリエッタは動揺の表情を消すと、金木に真正面から向き合って言う。

「わたくしの身近には、信頼できる人間はおりません。だからこそ、お友達のルイズに……………」

「黙れよ」

——その瞬間、強烈な殺意がルイズの部屋を満たした。

殺意を発しているのは、もちろんアンリエッタの目の前にいる金木だ。彼は両目を鋭くして、アンリエッタを視線で殺すと言わんばかりに睨み付けている。

「ひっ……………」

金木の殺気に、アンリエッタは思わず怯えた声を出した。王女と言っても、所詮はただかだか十七歳の少女。いくつもの殺し合いを経験してきた金木の視線を受けて、アンリエッタはカチカチと歯を鳴らしながら、蛇に睨まれた蛙のように硬直する。

いや、その表現すらも正確には生ぬるい。それはまるで、心臓を鷲掴みにされたような感覚だった。金木の様子を見ていたルイズも、初めて見る使い魔の様子に口を出す事ができない。気が付くと、自分の

右手がかすかに震えているのをルイズは感じた。

(……怖い。カネキが、怖い……！)

そんなルイズの気持ちなど全く知らず、バキリ……と金木は右手の人差し指を親指で押し鳴らすと、さらに言葉による追撃を行う。

「あなたはルイズちゃんの事をお友達だとか言ってますけど、ならどうして肝心の手紙が何なのかを教えないんですか？ 本当にあなたがルイズちゃんの事を心から信頼しているなら、別に話しても問題は無いはずですよ？ なのにあなたはルイズちゃんに本当の事を何も話さず、しかも彼女を戦場に送り込もうとしている。……何が友達だ。結局はあなたは、ルイズちゃんの事をただ単なる駒としか見てないじゃないですか」

この部屋にいるアンリエッタとルイズは気づいていないが、金木は敵対している人間などには非常に攻撃的になるが、初対面、しかも一国の王女相手にここまで冷徹で攻撃的になる事は滅多にない。

金木がここまでアンリエッタに対して攻撃的になっているのは、彼女が大切なお友達であるはずのルイズに手紙の内容の事は何も話さずに戦場に送り込もうとしているからだ。

戦場に送り込むというのは言葉にすればそれだけだが、実際はそんなに単純なものではない。ルイズはメイジだが魔法を上手く使う事が出来ないし、何よりもまだ戦闘などロクに経験した事が無い学生である。訓練された兵士などならばともかく、学生のみであるルイズを戦場に行かせるのはあまりに無謀すぎる。最悪、戦場で命を散らしてもまったくおかしくはない。大切な友人であるはずのルイズを死なせに行くようなアンリエッタの言動が、金木にはどうしても我慢ならなかったのだ。

それは、金木の親友でもある永近の存在が大きいと見える。

まだ金木が半喰種の体になって日が浅く、喰種達をただ単なる人食いの化け物だと思っていたある日、金木と永近は自分達の大学に在籍していた喰種、西尾錦に襲われた。

まだ戦闘慣れしていなかった金木は錦に叩きのめされ、永近も錦による強烈な一撃を食らって意識を失っていた。

なのに、気を失っていてもなお永近は金木を無意識に助けようとしていた。

いや、その時だけではない。

永近はそれ以前にも金木の事を気にかけて、助けてくれていたのだ。だから金木は永近を傷つけないために、自分が半喰種である事を隠し、喰種の世界で生きる方法を模索し始めたのだ。

ある時期から永近とは会わなくなってしまうものの、永近の存在が自分の支えになっていた事に変わりはない。有馬と戦う前に地下道で出会った時も、永近は変わり果てた自分の姿にまったく怯えずに、それどころか『いつも通り』の態度で接してくれたのだから、それはなおさらだった。

だからこそ、金木は目の前の少女の行為をを許す事が出来なかった。

王女としての立場もあるかもしれないが、それでもお友達という言葉を利用してルイズを駒のように扱い戦場に向かわせるような事だけは、金木は許す事できない。自分には関係が無いと言われてしまえばそれまでだが、だからと言って黙っている事もしたくない。

右手の拳を強く握りしめながら、金木はさらに続ける。

「そもそも、あなたが蒔いた種でしよう？ それを何の関係も無いルイズちゃんに押し付けるぐらいだったら、最初からそんな手紙出さなければ良かったんじゃないですか？ それとも、こうなる事が予想できなかった？ だとしたら、随分無責任なお姫様もいたものですね」

「だ、だって、こんな事になるなんてわたくしだって……！」

必死にアンリエッタがその口から言い訳じみた言葉を絞り出すと、金木は口元に冷たい笑みを浮かべて言った。

自分が決定的に変わった原因を作った、その一言を。

「…………この世の不利益は、全て当人の能力不足」

金木の発したその一言は、アンリエッタの動きを再び止めるには十分なほどの響きを持っていた。

だがこの時、金木の言葉に反応したのはアンリエッタだけではなかった。

それは、金木の後ろにいるルイズだった。彼女はその言葉を聞くと今まで自分を縛っていた恐怖をどうにか振り払い、拳を強く握りしめると金木の背中を鋭く睨みつける。彼女の視線には金木はもちろん、金木が壁になってルイズが見えないアンリエッタも気付かなかった。「こんな事になったのを自分の不幸のせいにするぐらいなら、最初からこんな事になる事を想像できなかった自分を恨んだらどうですか？ ……まあ、あなたの都合なんて僕には何の関係も無い事です」冷徹とも言えるその口調に、アンリエッタは怯えた表情でその場に立ち尽くす事しかできなかった。ここで泣きながら反論できたら楽だろうが、そんな事をしたら金木の容赦のない言葉が再び襲いかかってくるのも分かっているから、何も言い返す事が出来ない。

金木はアンリエッタを見つめたまま、話を打ち切るように告げる。「……そういうわけで、この話にはデメリットが多すぎる。その大事な手紙とやらはあなたがどうにかしてください。王女のあなたなら簡単でしょう？ ……ま、大切な友達を利用する事でしか問題を解決できない王女様に、そんな事が出来るとは思いませんが」

「……………」  
金木の言葉に、アンリエッタは自らの唇を強く噛み締めた。それから金木は殺意を消して振り返ると、少し申し訳なさそうな口調で言う。

「……勝手に決めちゃってごめん。だけど、この話は危険すぎる。乗らない方が良いよ」

「……………」  
え？ と金木が怪訝な表情でルイズの顔を見ようとした瞬間。

「……………」  
うるっさいって言うてんのよ!! たかが使い魔が、あたしに意見しないで!!

ルイズの叫び声が、彼女の部屋に響き渡った。突然の彼女のその声

に金木とアンリエッタが思わず固まると、ルイズは呆然としている金木を無視してアンリエッタに勢いよく歩み寄った。

「姫様、今回の任務はこのルイズ・フランソワーズにお任せください。必ず手紙を手に入れてみせます」

「え？」

「ちよ、ちよつとルイズちゃん!？」

ルイズの言葉に金木は焦った表情を浮かべた。たった今この任務の危険性を説明したばかりなのに、どうしてこの少女はそれを無視して戦場に向かおうとしているのか。金木がルイズの肩を掴むと、彼女は苛立たしげに金木の手を払い自分の使い魔の顔をギロリと睨む。

「触らないで!! ……言っておくわよ。カネキ、あんたはわたしの使い魔なの。使い魔は、主人のわたしに、黙ってついてくれば良いのよ!!」

ルイズの様子に、金木は怒りを通り越して困惑していた。確かに彼女は時々傲慢な面を覗かせる事もあるが、それ以上に努力家で戦うのが嫌いな少女のはずだ。…………自分とは違う人種の少女なのだ。

なのに何故、今の彼女はこんなにも激怒し、使い魔の自分の無理矢理従わせるような事をするのか、今の金木にはまったく分からなかった。そんな金木を無視して、ルイズは金木に言う。

「返事は!？」

「…………分かったよ、ルイズちゃん」

渋々と、金木は頷きながら言った。正直言っただまだルイズが戦場に向かうのは反対が、今の彼女には何を言っても火に油を注ぐだけになってしまうだろう。ならば、自分が護るしかない。フーケを捕まえた舞踏祭で、そう約束してしまったのだから。

（そうだ…………。僕が護るんだ…………。もう誰も…………死なせない…………!）

金木は奥歯を噛み締めながら、拳を強く握る。あまりに強く握りすぎて拳から血が流れるが、その傷も半喰種の体質ですぐに治る。

一方、さつきまでルイズに任務を頼もうとしていたはずのアンリエッタは困ったような顔をしながら、

「しかし…………本当に構わないのですか？ ルイズ」

「ええ、姫様。この命、姫様に捧げられるのなら本望です。必ずアルビオンに無事に赴きウェールズ皇太子を捜し、手紙を取り戻してみせます」

ルイズのきつぱりとした言葉に、まだ納得していない様子を見せながらもアンリエッタは分かりましたと呟いて頷いてから自分を落ち着かせるように数回深呼吸をした。どうやら、先ほどの金木の殺意がまだ彼女に脳裏に残っていたらしい。

「…………あなた達には悪いですが、これは急ぎの任務です。アルビオンの貴族達は、王党派を国の隅つこまで追い詰めていると聞き及びます。敗北も時間の問題でしょう。一刻も早く、アルビオンに向かってもらう必要があります」

「分かりました。では早速、明日の朝にでもここを出発いたします」

明日の朝か……と金木は内心呟いた。正直言つてアルビオンの状況などをもう少し詳しく調べてから赴きたい所だが、アンリエッタの口ぶりからすると状況はかなり切羽詰まっている。ルイズの言う通り、ここは早めに出発した方が良くもしいない。

と、そんな時だった。

当然ルイズの部屋の扉が勢いよく開き、誰かが飛び込んできた。

「姫殿下！ その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せ付けますよう」

そんな事を叫びながら飛び込んできたのは、以前金木と決闘したギーシュ・ド・グラモンだった。その手には相変わらず薔薇の造花が握られていた。突然の乱入者に、不機嫌奏に顔をしかめていたルイズも思わず目を丸くしている。金木は驚きながら落ち着いた態度でギーシュに尋ねる。

「色々聞きたい事はあるけど……一体いつ頃から部屋の前にいたの？」

金木の問いに、ギーシュはうむと頷きながら、

「廊下を歩いていたら、偶然薔薇のように見目麗しい姫様を見つけてね……。それで後を追ってみたら、ここに入って行ったんだ。それからは、ドアの鍵穴からまるで盗賊のように様子をうかがっていたんだ

よ」

「あまり褒められる行為じゃないね……」

そう言いながら、金木はため息をついた。この様子だと、どうやら最初から全て聞いていたらしい。困った事になったなど金木が思っている、今度はギーシュが金木に尋ねてきた。

「話は聞かせてもらった。それで提案なんだが……、この僕も仲間に入れてくれないかい？」

その言葉に、金木は思わずきよとんとした表情を浮かべた。

「どうして、そんな事を？」

すると何故か、ギーシュはぼつと顔を赤らめた。

「姫殿下のお役に立ちたいのです……」

金木はギーシュのその様子を見て、ある事実に感じた。それから呆れた表情を浮かべて言う。

「……君、もしかして王女様に惚れてるの？」

「失礼な事を言うんじゃない。僕はただただ、姫殿下のお役に立ちたいだけだ」

そう言いながらも、ギーシュは激しく顔を赤らめている。アンリエッタを見つめる熱っぽい目つきといい、惚れてるのは確かだろう。

「でも、彼女がいたよね？ 確か……モンモランシーって名前の。あの人はどうしたの？」

金木が尋ねても、ギーシュは無言だった。それを見て、ああ、完璧にフラれたんだな……と金木は察した。まあ彼の性格上、いつ本命の彼女にフラれてもおおかしくなかっただろうし、その件に関しては完全にギーシュの自業自得だろう。

なお、ついさつき金木がアンリエッタを侮辱するような事を言い放ったのにギーシュが激昂して飛び込んでこなかったのは、金木に簡単にあっさりと返り討ちにされる事をギーシュが本能的に察していたからだ。そうして聞いてみると情けない話かもしれないが、それはその時の金木の危険性を察していたという証拠でもあるので、ある意味賢い選択と言える。

と、そこでギーシュの家名に気付いたアンリエッタがギーシュに尋

ねた。

「グラモン？ あの、グラモン元帥の？」

するとギーシュは仰々しく頷きながら言った。

「息子でございませう。 姫殿下」

それからアンリエッタに向かって恭しく一礼すると、アンリエッタが再びギーシュに質問をした。

「あなたも、わたくしの力になってくれると言うの？」

「任務の一員に加えてくださるなら、これはもう望外の幸せにございませう」

熱っぽいギーシュの口調に、アンリエッタは微笑を浮かべた。

「ありがとうございます。 お父様も立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるようね。 ではお願いしますわ。 この無力な姫をお助けください、ギーシュさん」

「姫殿下が僕の名前を呼んでくださった！ 姫殿下が！ トリステインの可憐な花、薔薇の微笑みの君がこの僕に微笑んでくださった！」  
ギーシュは感動のあまり、そんな事を叫んでから後ろに仰け反って失神した。 倒れたギーシュを見下ろしながら、金木は先が思いやれるなど……と呟きながら呆れた表情を浮かべる。

一方、ルイズはその騒ぎには目もくれず、真剣な声で言った。

「では明日の朝、アルビオンに向かって出発するといえます」

「ウェールズ皇太子は、アルビオンのニューカッスル付近に陣を構えていると聞き及びませう」

「了解しました。 以前、姉達とアルビオンを旅した事がございますゆえ、地理には明るいかと存じます」

「旅は危険に満ちています。 アルビオンの貴族達は、あなたがたの目的を知ったら、ありとあらゆる手を使って妨害しようとするでしょう」

アンリエッタは机に座るとルイズの羽ペンと羊皮紙を使い、さらさらと手紙を書き始めた。 王女はじっと自分が書いた手紙を見つめていたが、その内悲しげに首を振った。

「姫様？ どうなさいました？」



アンリエッタの様子を怪訝に思ったルイズが声をかけた。

「な、なんでもありません」

アンリエッタは顔を赤らめると決心したように頷き、末尾に一行付け加えてから小さな声で呟く。

「始祖ブリミルよ……。この自分勝手な姫をお許してください。でも、国を憂いても、わたくしはやはりこの一文を書かざるを得ないので……。自分の気持ちに、嘘をつく事は出来ないのです……」

密書だというのに、まるで恋文でもしたためたようなアンリエッタの表情だ。ルイズはそれ以上何も言う事が出来ず、ただじつとアンリエッタを見つめる事しかできない。

アンリエッタは書いた手紙を巻くと、杖を振るう。するとどこから現れたのか、巻いた手紙に封蝋がなされ、花王が押された。その手紙をルイズに手渡ししながら、

「ウェールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡してください。すぐに件の手紙を返してくれるでしょう」

それからアンリエッタは、右手の薬指から指輪を引き抜くと、ルイズに手渡す。

「母君から頂いた『水のルビー』です。せめてものお守りです。お金が心配なら、売り払って旅の資金にあててください」

アンリエッタの言葉にルイズが深々と頭を下げると、王女の視線がルイズから金木に移った。彼女はやや怯えたような表情を浮かべながら、口を開く。

「使い魔さん。私の大切なお友達を、よろしく願います」

「……大切なお友達、ね」

先程の事をまだ忘れていない金木が冷たい口調で呟くと、アンリエッタは悲しげな表情を浮かべながら、

「誤解されてもおかしくない事をしているという事は、分かっています。だけど、わたくしがルイズの事を大切な友人だと思っている事は本当です。それだけは、分かってください……」

「……………」

金木は返事をせず、ただアンリエッタから視線を外しただけだっ

た。一方アンリエッタはその場の全員を見渡すと、よく通るはつきりとした声で告げた。

「この任務にはトリステインの未来がかかっています。母君の指輪が、アルビオンに吹く猛き風からあなた方を護りますように」

その日の深夜、金木はハルケギニアの地理に関する本を片っ端から読み漁っていた。明日向かうアルビオンという国は、まぎれもない戦場である。地理を知っておくに越した事はない。

そして、本に載っているアルビオンの項目を読んで、金木は思わず壁に立てかけているデルフに尋ねた。

「アルビオンって、空に浮かんでいるの？」

金木の問いに、デルフは金具をカチカチと鳴らしながら、

「ああ。どういう原理で浮かんでいるのかは俺も忘れたが、地上三千米ルの高さに浮かんでいるんだ。通称、『白の国』」

「へえ……。どうしてそんな通称なんだろう……」

その理由は、金木が読んでいる本に記載されていた。

アルビオンの大河から溢れた水が空に落ち、その際に白い霧となつて大陸の下半分を包んでいる。その様子から、アルビオンは『白の国』と呼ばれているようだ。

ちなみに、その時に生じた霧は雲となり、大雨を広範囲にわたってハルケギニアの大陸に降らすらしい。

金木がさらに本に目を通そうとすると、デルフが声をかけてきた。「もうそろそろ寝た方が良いんじゃないかねえか？　これで寝坊でもしたら、娘っ子の機嫌がさらに悪くなるぞ」

「それもそうだね……」

デルフの言葉に頷くと、金木は藁束の上に寝転がり毛布を被った。だがある事が気になり、ちらりとルイズが眠っているベッドに目を向ける。

「でも、どうしてルイズちゃんはあるに怒ったんだろう……」

部屋からアンリエッタが退出した後、ルイズが金木に話しかける事

は一度も無かった。金木はごろりと寝返りを打ちながら、デルフに話しかける。

「やっぱり、王女様を悪く言ったのが原因なのかな？」

すると、金木の話を黙って聞いていたデルフが言う。

「俺としては、相棒が『この世の不利益は、全て当人の能力不足』って言った直後に、娘つ子の機嫌が悪くなったように感じたがね」

「だけど、なんでそれでルイズちゃんが怒ったんだろう……」

わけが分からないと言うような金木の口調に、デルフがぽつりと呟く。

「簡単だよ。相棒のその台詞は確かにその通りなのかもしれないねえ。だけど、それが時に誰かを傷つける事もあるって事だ」

「けど、別に僕はルイズちゃんに言ったわけじゃ……。それに、この任務は別にルイズちゃんのせいでも起こったわけじゃないし……」

「そのつもりが無くても、そう受け取っちゃう事があるって事だよ。……それに俺に言わせてみりゃ、相棒の言葉は半分は合ってるが、半分は間違ってる」

思いがけない言葉に、金木は思わず混乱した。間違っているとは、一体どういう事なのだろうか？

自分にもっと力があれば、芳村や入見や古間、さらに自分が護れなかった人々を護る事が出来たはずだ。そののどろが、間違っているというのだ。

だが金木の混乱を知ってか知らずか、デルフが言葉を続けてくる。

「ま、今は寝とけよ相棒。もう夜も遅いしな。こんな時間に何か考えようとしてもまとまりっこねえ」

「……うん」

小さく頷くと、金木は毛布を被る。するとすぐに金木に睡魔が襲いかかってきて、金木は目をゆっくりと閉じて眠りにつくのだった。

## 第十話 旅路

朝もやの中で、金木とルイズとギーシュは馬に鞍をつけていた。金木はいつも通りの服装に、背中にデルフリンガーを背負っている。ルイズはいつもの制服姿だったが、今回は長く馬に乗るため乗馬用のブーツを履いていた。

そんな風に出発の準備をしていると、ギーシュが困ったような口調で言う。

「お願いがあるんだが……」

「どうしたの？」

金木は馬の鞍に荷物をくくりつけながらギーシュに尋ねた。

「僕の使い魔を連れて行きたいんだ」

「それは別に良いけど……どこにいるの？」

「……」

ギーシュが地面を指差した。

「いないじゃないの」

ルイズが乗馬鞭を片手にすました顔で言うのと、ギーシュはにやつと笑って足で地面を叩いた。

するとモコモコと地面が盛り上がり、茶色の大きな生き物がそこから顔を出す。

ギーシュはすきつ！ と膝をつくのと、地面から出てきたその生き物を抱きしめた。

「ヴェルダンテ！ ああ！ 僕の可愛いヴェルダンテ！」

金木は突然現れた巨大な生き物に目を丸くしながらもギーシュに尋ねた。

「な、何それ？」

「何それ、などと言ってもらっては困る。大いに困る。僕の可愛い使い魔のヴェルダンテだ」

「あんたの使い魔ってジャイアントモールだったの？」

ギーシュの使い魔は、巨大なモグラだった。大きさは小さいクマほどもある。

「そうだ。ああ、ヴェルダンデ、君はいつ見ても可愛いね。困ってしまっうね。どばどばミミズはいっぱい食べてきたかい？」

モグモグモグ、とギーシュの言葉に答えるように、ヴェルダンデは嬉しそうに鼻をひくつかせた。

「そうか！ そりゃ良かった！」

ギーシュはヴェルダンデに頬を擦り寄せた。その様子を金木が呆れた目で見ていると、唐突にルイズが言った。

「ねえ、ギーシュ。ダメよ。その生き物、地面の中を進んで行くんでしよう？」

「そうだ。ヴェルダンデはなにせ、モグラだからな」

「そんなの連れていけないわよ。わたし達、馬で行くのよ」

ルイズは困ったように言ったが、ギーシュはそれがどうしたと言うような態度で、

「結構、地面を掘って進むの早いんだぜ？ まあ、ヴェルダンデ」

ヴェルダンデは、うんうんと頷いた。

「わたし達、これからアルビオンに行くのよ。地面を掘って進む生き物を連れていくなんてダメよ」

ルイズがそう言うと、ギーシュは地面に膝をついた。

「お別れなんて、辛い、辛すぎるよ……、ヴェルダンデ……」

その時、巨大モグラが鼻をひくつかせた。くんかくんか、とルイズに擦り寄る。

「な、何よこのモグラ！」

ルイズが思わず叫んだ直後、ヴェルダンデは何故かルイズを押し倒し、鼻で体をまさぐり始めた。

「やー！ ちょっとどこ触ってるのよー！」

ルイズは体をヴェルダンデの鼻でつつきまわされ、地面をのたうち回った。スカートが乱れ、派手にパンツをさらけ出しながら、ルイズは暴れ続ける。

金木がどうしようかと困っていると、ヴェルダンデがルイズの右手の薬指に光るルビーを見つけ、そこに鼻を擦りよせた。

「この！ 無礼なモグラね！ 姫様に頂いた指輪に鼻をくつつけないで！」

すると、ギーシュが頷きながら呟いた。

「なるほど、指輪か。ヴェルダンデは宝石が大好きだからね」

「どうして？」

「ヴェルダンデは貴重な鉱石や宝石を僕のために見つけてきてくれるんだ。『土』系統のメイジの僕にとって、この上ない素敵な協力者さ」

「へえ」

どうやら、このヴェルダンデという使い魔は見かけによらずギーシュにとつて結構有能な使い魔のようだ。金木は思わず感心した声を漏らすと、未だ暴れているルイズが金木に怒鳴った。

「カネキ！ 馬鹿な話してないで、さっさと助けなさいよ！」

はいはい、と金木は肩をすくめながらルイズを助け出そうとした瞬間だった。

突然一陣の風が舞い上がり、ルイズに抱き着くヴェルダンデを吹き飛ばした。

「誰だ！」

ギーシュが激昂してわめくと、朝もやの中から羽帽子をかぶった長身の貴族が現れた。彼の姿に、金木は見覚えがあった。確か魔法学院にアンリエッタが訪問した時に、王女の一行の中にいた貴族である。

「貴様、僕のヴェルダンデに何をするんだ！」

ギーシュがすつと薔薇の造花を掲げるが、一瞬早く羽帽子の貴族が杖を引き抜き薔薇の造花を吹き飛ばす。吹き飛ばされた模造の花びらが宙を舞った。

「僕は敵じゃない。姫殿下より、君達に同行する事を命じられてね。君達だけではやはり心もとないらしい。しかし、お忍びの任務であるゆえ、一部隊つけるわけにもいかぬ。そこで僕が指名されたってわけだ」

長身の貴族は帽子を取ると、三人に向かって優雅に一礼した。

「女王陛下の魔法騎士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

文句を言おうと口を開きかけたギーシュは相手が悪いと知ってうなだれた。目の前の貴族が所属している魔法騎士隊は、全貴族の憧れである。それはギーシュも例外ではない。

ワルドはそんなギーシュの様子を見て、首を振った。

「すまない。婚約者が、モグラに襲われているのを見て見ぬ振りはできなくてね」

ワルドの口から飛び出した単語に、金木は思わず目を見開いた。ルイズの年齢と目の前の貴族の年齢、さらに貴族社会の事を考えると別に不思議ではないが、こうして目の前でそういう話を聞かされると、ここは自分が住んでいた世界とは別の世界でルイズは大貴族の娘だという事を改めて認識させられる。

「ワルド様……」

立ち上がったルイズが、震える声で言った。

「久しぶりだな！ ルイズ！ 僕のルイズ！」

ワルドは人懐っこい笑みを浮かべると、ルイズに駆け寄って抱え上げた。

「お久しぶりでございます」

一方のルイズは頬を染めて、ワルドに抱きかかえられていた。

「相変わらず軽いな君は！ まるで羽のようだね！」

「……お恥ずかしいですわ」

「彼らを、紹介してくれたまえ」

ワルドはルイズを地面に下ろすと、再び帽子を目深にかぶって言った。

「あ、あの……、ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のカネキです」

ルイズは交互に指差して言った。ギーシュは深々と頭を下げ、金木はワルドに向かって軽く頭を下げる。

「君がルイズの使い魔かい？ 人とは思わなかったな」

ワルドは気さくな感じで金木に近寄った。

「僕の婚約者がお世話になっているよ」

「あ、はい」

金木は上から下までワルドを観察するように見つめた。

彼もギーシュと同じように美少年だが、正直言ってもレベルが違う。目つきは鋭く鷹のように光り、形の良い口ひげが男らしさを強調している。

そして、ワルドの体付きを見た金木はこう思った。

(……強いな、この人)

こうして見ているだけでも全身の体つきは逞しく、筋肉がしっかりとついている事が分かる。彼のその体格が、ただ魔法を使うだけのメイジではない事を金木に悟らせていた。並大抵の剣士やメイジでは、彼には決して勝てないだろう。

それから金木がルイズに目を向けると、彼女はワルドが現れた途端に落ち着きを無くし、何やらそわそわしていた。どうやら突然の婚約者の登場に照れているらしい。

ワルドが口笛を吹くと、朝もやの中からグリフォンが現れた。驚の頭と上半身に、獅子の下半身がついた幻獣である。背中には立派な羽も生えていた。

ワルドはひらりとグリフォンに優雅に跨ると、ルイズに手招きをした。

「おいで、ルイズ」

するとルイズは少し躊躇うようにして俯き、しばらくモジモジした。しかしワルドに抱きかかえられて、グリフォンに跨る。金木とギーシュも自分達の馬に跨ると、ワルドが手綱を握って杖を掲げて叫んだ。

「では諸君！ 出撃だ！」

グリフォンが駆け出した。ギーシュは感動した面持ちで後に続き、金木も馬の手綱をしっかりと握って彼らの後に続いた。

アンリエッタは出発する一行を学院長室の窓から見つめていた。

目を閉じて、手を組んで祈る。

「彼女達に加護をお与えください、始祖ブリミルよ……」



その隣では、オスマンが鼻毛を抜いている。

アンリエツタは振り向くと、オスマンに向き直った。

「見送らないのですか？ オールド・オスマン」

「ほほ、姫、見ての通りこの老いぼれは鼻毛を抜いておりますのでな」  
そんな事を言うオスマンに、アンリエツタは首を振った。

その時、扉がどんと強く叩かれた。「入りなさい」とオスマンが  
呟くと、慌てた様子のコルベールが部屋に飛び込んできた。

「いいいい、一大事ですぞ！ オールド・オスマン！」

「君はいつでも一大事ではないか。どうも君はあわてんぼでいかん」

「慌てますよ！ 私だってたまには慌てます！ 城からの知らせです

！ なんと！ チェルノボーグの牢獄から、フーケが脱獄したそうで

す！」

「ふむ……」

コルベールの報告に、オスマンは口ひげをひねりながら唸った。

「門番の話では、さる貴族を名乗る怪しい人物に『風』の魔法で気絶させられたそうです！ 魔法衛士隊が王女のお供で出払っている隙に、何者かが手引きをしたのですぞ！ つまり、城下に裏切者がいるという事です！ これが大事でなくてなんなのですか！」

裏切者、という単語を聞いてアンリエツタの顔が青くなった。

オスマンは手を振ると、コルベールに退室を促した。

「分かった分かった。その件については、あとで聞こうではないか」

コルベールがいなくなると、アンリエツタは机に手について深いため息をついた。

「城下に裏切者が！ 間違いありません、アルビオン貴族の暗躍ですわ！」

「そうかもしれませんな。あいだ！」

オスマンは鼻毛を抜きながら呑気な口調で言った。学院長のその様子を、アンリエツタは呆れた表情で見つめていた。

「トリステインの未来がかかっているのですよ。何故、そのような余裕の態度を……」

「すでに杖は振られたのですぞ。我々にできる事は、待つ事だけ。違

いますかな?」

「そうですね……」

なおも不安そうな表情を変えないアンリエッタに、オスマンは安心させるような声でさらに続ける。

「なあに、彼ならば道中どんな困難があろうとも、やってくれますでな」

「彼とは? あのギーシュが? それとも、ワルド子爵が?」

オスマンは首を横に振った。そこでアンリエッタはオスマンの言う彼が誰であるかようやく気づき、信じられないように言う。

「ならば、あのルイズの使い魔の青年が? まさか! 彼はただの平民ではありませんか!」

「姫は始祖ブリミルの伝説をご存知かな?」

「通り一遍の事なら知っています……」

オスマンはにっこりと笑った。

「では、『ガンダールヴ』のくだりはご存知か?」

「始祖ブリミルが用いた、最強の使い魔の事? まさか彼が?」

オスマンはそこで自分が喋り過ぎた事に気づいた。『ガンダールヴ』の事は自分の胸一つに収めている。アンリエッタが信用できないというわけではないが、まだ王室の人間に話すのはまずいと思っていた。

「えーおほん、とにかく彼は『ガンダールヴ』並に、もしかしたらそれ以上に使える人間ではないかと、そういう事ですな。ただ、彼は異世界から来た青年なのです」

「異世界?」

「そうですね。ハルケギニアではない、どこか。『ここ』ではない、どこか。そこからやってきた彼ならばやってくれると、この老いぼれは信じておりますでな。余裕の態度もその所為なのですじゃ」

「そのような世界があるのですか……」

アンリエッタはルイズの使い魔の青年の事を思い出す。

あの、見ている人間が凍り付くほどの目をした青年。一体どんな経験をすれば、あんな目をする事ができるのだろうか。平和な世界でぬ

くぬくと育ってきた自分には、きつと想像すらできないだろう。

だが、そんな凍り付くような目をしていてもなお、彼は自分からルイズを護ろうとしていた。まだ会って間もないが、あの青年は例え自分がどれだけ傷ついても、誰かを護ろうとする優しすぎる人間なのだろう。

そんな彼ならば、ルイズ達の前に立ち塞がるどんな『悲劇』も切り裂いて前に進んでくれるかもしれない。アンリエッタはそう思いながら、こう呟いた。

「ならば祈りましょう。異世界から吹く風に」

魔法学園を出発してから、ワールドはグリフォンを疾駆させっぱなしだった。金木達は途中の駅で二回馬を交換したが、ワールドのグリフォンは疲れを見せずに走り続ける。乗り手のようにタフな幻獣だった。「もう半日以上走りっぱなしだ。どうなってるんだ。君と魔法衛士隊の連中は化け物か？」

ぐつたりと馬に体を預けたギーシュが、隣の金木に声をかけた。声をかけられた金木はケロリとした表情で馬に跨りながら、あはは……と苦笑を浮かべている。実際金木は半喰種だし体も鍛えているので、これぐらいの道のりは苦にならない。金木は前を走るワールドのグリフォンを視界に収めながら呟いた。

「でも、ルイズちゃん婚約者がいたんだ……」

「おや？　もしかして、やきもちかね？」

にやにやといやらしい笑みを浮かべながらギーシュが言うと、金木は再び困ったように笑いながら返す。

「違うよ。ただ突然だったから、少し驚いただけだよ。ところで、ワルドさんって魔法衛士隊の所属なんだよね？　やっぱり、相当地位が高いのかな？」

しかし金木自身、この質問は愚問だと感じていた。昨日ワールドの所属している魔法衛士隊が王女の護衛を務めていたのを見るだけで、彼の地位がどれだけ高いのかすぐに分かる。

すると案の定、ギーシュからこんな言葉が返ってきた。

「そりやそうさ。トリスティンの魔法衛士隊と言ったら、王家と王城を守る親衛隊であり、全ての貴族の憧れだよ。男子ならばその黒マントを身に着ける事を誰もが憧れ、女子ならばその花嫁になる事を誰もが望む……。いわば、トリスティン騎士の花形なのさ！」

ばつ、ばつと馬の上だというのに大げさに身振り手振りを交えながら金木に教える。金木はふーんと相槌を打ちながら、ワルド達の乗っているグリフォンを見て尋ねる。

「魔法衛士隊の人達はみんなグリフォンに乗ってるの？」

「いや。魔法衛士隊は彼らの操る幻獣にちなんで三つの隊に分かれているんだ。一つはマンティコア隊、もう一つはヒポグリフ隊、最後がワルド子爵のグリフォン隊さ」

「へえ……」

どの幻獣も、金木が本の世界でしか見た事がない生き物ばかりだった。いつかはその幻獣達も見てみたいなど、本好きの金木は思った。

それから馬を何度も替えて飛ばしてきたので、金木達はその日の夜中にラ・ロシエールの入り口についた。金木は興味深そうに辺りを見回した。港町という名はついてはいるが、どう見ても山道である。ここからどうやって空に浮かぶというアルビオンに向かうというのだろうか。

月夜に浮かぶ険しい岩山の中を縫うようにして進むと、峡谷に挟まれるようにして街が見えた。街道沿いに、岩を穿って作られた建物が並んでいる。

そんな時だった。

不意に金木達の跨った馬めがけて、崖の上から松明が何本も投げ込まれた。松明は赤々と燃え、金木達が馬を進める峡谷を照らす。

「な、何だ!？」

突然の襲撃に、ギーシュが怒鳴った。

いきなり松明の炎に戦の訓練を受けていない馬が驚き、前足を高くと上げたので、金木とギーシュは馬から放り出されたが、金木は空中で体勢を立て直すと地面に着地する。

そこを狙って、何本もの矢が夜風を裂いて飛んでくる。

「奇襲だー！」

ギーシュが喚くと同時、軽い音を立てて矢が地面に突き刺さった。ひゅんひゅんと飛んで来る矢を金木が素早い動きでかわしていくと、突如一陣の風が舞い起こり、金木達の前の空気が歪んで小型の竜巻が現れる。竜巻は飛んできた矢を巻き込むと、あさつての方向に弾き飛ばした。

グリフォンに跨ったワルドが、杖を掲げている。

「大丈夫かー！」

ワルドの声が金木に飛ぶと、金木は頷いてからワルドに言った。

「ギーシュ君とルイズちゃんをお願いします」

それから金木は怪訝そうな表情を浮かべているワルドをよそにデルフを抜き、ガンダールヴの力を開放する。左手のルーンが輝き、全身がまるで羽のように軽くなるのを確認すると、金木は全力で目の前の崖を駆け上り始めた。

「「なっ!?!」」

崖の下で驚愕しているギーシュとワルド、さらにルイズの声が聞こえてくるが金木は気にせずにあつという間に崖を登り切る。タン！と軽い音を立てて高く跳躍しながら崖の上の光景を見てみると、そこには数人の男達が突然現れた金木の姿を目を見開いて見つめていた。その手には弓矢が握られている。

金木は崖に着地すると、未だに呆然としている男達に向かって素早い動きで突進する。まず鋭い回し蹴りで二人の男を蹴り飛ばし、さらに剣の柄の部分で近くにいた男の顔面を殴り飛ばす。鼻の骨が折れる感触がしたが、金木は無視して素早い動きで男達を攪乱し、剣の峰を巧みに使つてその場にいる全員を崖の上から下に転がり落とした。

「やるねえ、相棒」

金木の活躍を見ていたデルフから賛辞の言葉が飛び出すが、金木はそれを無視してデルフを背中の鞆に納める。するとその直後、上空からパチパチと拍手の音が聞こえた。金木が振り返って見上げると、そこには青い鱗を持つ風竜がいた。それを見て、金木の目が見開かれる。タバサの使い魔の、シルフィードだ。

どうしてこんな所に、と思った直後、風竜の背から赤い髪の少女が飛び出した。

「すごいわ、ダーリン！ あの数の男達を一瞬で倒しちゃうなんて！」  
「キュルケちゃん？」

感動したような声を出すその少女は、魔法学院にいるはずのキュルケだった。しかもキュルケの後ろには彼女の友人であり、金木の勉強仲間でもあるタバサまでいた。何故かパジャマ姿の彼女はペチペチと小さく拍手をしている。

「どうして、こんな所に？」

至極当然の質問が金木の口から飛び出す。キュルケは金木の問いに答えず崖の下を指差しながら言った。

「その説明は下でしましょう。その方が手間が省けるでしょ？」

そう言う。キュルケは金木をシルフィードに乗せて、崖の下に向かった。地面にシルフィードが降り立つと、キュルケは風竜からぴよんと飛び降りて髪をかき上げる。

「お待たせ」

すると、シルフィードの出現に驚いていたルイズがグリフォンから飛び降り、キュルケに怒鳴った。

「お待たせじゃないわよ！ 何しに来たのよ！」

「助けに来てあげたんじゃないの。朝方、窓から見てたらあんた達が馬に乗って出掛けようしてるもんだから、急いでタバサを叩き起こして後をつけたのよ。ま、ダーリンがみんな倒しちやっただから私達の出番はなかったけどね」

そう言いながら、キュルケは風竜に乗ったままのタバサを指差した。どうやらタバサがパジャマ姿なのは、キュルケの言う通り寝ている所を叩き起こされたかららしい。それでもタバサは気にした風もなく、どこからか取り出した本を読んでいる。

「ツエルプストー。あのねえ、これはお忍びなのよ？」

「お忍び？ だったら、そう言いなさいよ。言ってくれなきゃ分からないじゃない」

そんな事を言うキュルケをルイズはしばらく睨んでいたが、やがて

時間の無駄だと悟ったのか彼女から視線を外して金木に倒された男達に視線を向けた。動けない男達は口々に罵声をルイズ達に浴びせかけている。ギーシュが近づいて、尋問を始めた。

一方、キュルケはグリフォンに跨ったワルドにしなを作ってにじり寄っていた。どうやら彼の顔は、キュルケのお眼鏡にかなったらしい。

「おひげが素敵よ。あなた、情熱はご存知？」

ワルドはちらりとキュルケを見つめると、左手で押しやった。

「あらん？」

「助けに来てくれたのは嬉しいが、これ以上近づかないでくれたまえ」  
「何で？ どうして？ あたしが好きだって言ってるのに！」

取りつく島のない、ワルドの態度だった。今までこんな冷たい態度を男にとられた事のないキュルケは、驚きのあまり口をあぐりと開けてワルドの顔を見つめた。

「婚約者が誤解するといけないのでね」

そう言つて、ルイズを見つめる。ルイズの頬が赤く染まった。

「なあに？ あんたの婚約者だったの？」

キュルケがつまらなさそうに言う、ワルドが頷く。ルイズは困ったようにもじもじし始めている。キュルケはワルドをじつと観察するような目で見つめた。

遠目では分からなかったが、目が冷たい。まるで氷のような目だ。キュルケは鼻を鳴らし、何こいつ、つまらないと思った。そして金木はと言うと、袋を手にもって中身をじつと見つめていた。その袋はいさつき戦闘の際に男達の一人が落とした物で、密かに回収していたのである。

そこに、男達を尋問していたギーシュが戻ってきた。

「子爵、あいつらはただの物取りだ、と言ってます」

「ふむ……、なら捨て置こう」

ひらりとグリフォンに跨ると、ワルドは颯爽とルイズを抱きかかえた。

「今日はラ・ロシエールに一泊して、朝一番の便でアルビオンに渡ろ

う」

ワルドは一行にそう告げた。

キュルケは金木の馬の後ろに跨って、楽しそうにきやあきやあ騒いでいる。ギーシユも馬に跨り、風竜の上のタバサは相変わらず本を読んでいた。

金木は袋を短パンのポケットにねじ込むと、自分の馬に跨って再び移動を開始した。

ラ・ロシエールで一番上等な宿、『女神の杵』亭に泊まる事にした一行は、一階の酒場でくつろいでいた。一日中馬に乗っていたのでくたびれていたのである。

『女神の杵』亭は貴族を相手にするだけあって、豪華な作りである。テーブルは、床と同じ一枚岩からの削り出しでピカピカに磨き上げられていた。顔が映るぐらいである。

そこに、『栈橋』にへ乗船の交渉に行っていたワルドとルイズが帰ってきた。

ワルドは席に着くと、困ったように言う。

「アルビオンに渡る船は明後日にならないと、出ないそうだ」

「急ぎの任務なのに……」

ルイズは口を尖らせている。彼らの言葉に、金木以外の全員がほつとした。これで明日は休んでいられるからだ。

「あたしはアルビオンに行った事がないから分かんないんだけど、どうして明日は船が出ないの？」

キュルケの方を向いて、彼女の問いに答える。

「明日の夜は月が重なるだろう？ 『スヴェル』の月夜だ。その翌日の朝、アルビオンが最もラ・ロシエールに近づくんだけだ。……さて、お喋りはここまですべてして今日はもう寝よう。部屋は取った」

ワルドは鍵束を机の上に置いた。

「キュルケとタバサは相部屋だ。そして、ギーシユとカネキが相部屋。僕とルイズは同室だ」

ワルドの言葉に、誰よりもルイズが驚いていた。ルイズがワルドの



方を向くと、ワルドは当然と言うような口調で、

「婚約者だからな。当然だろう?」

「そんな、ダメよ! まだ、私達結婚してるわけじゃないじゃない!」  
それには確かに金木も同感だった。二人は婚約者だが、そうだとし  
てもまだ結婚もしていない男性と女性が一緒の部屋で寝るとい  
うのはいくら何でも時期尚早だろう。しかしワルドは首を横に振って、ル  
イズを見つめながら告げた。

「大事な話があるんだ。二人きりで話したい」

『女神の杵』亭で一番上等な部屋だけあって、ワルドとルイズの部屋  
はかなり立派な作りをしていた。誰の趣味なのか、ベッドは天蓋付き  
の大きなものだったし、高そうなレースの飾りまでついている。テー  
ブルに座ると、ワルドはワインの栓を開けて杯についてから、それを  
一気に飲み干す。

「君も腰かけて、一杯やらないか? ルイズ」

ルイズは言われたままに、テーブルについた。ワルドがルイズの杯  
にワインを満たしていく。自分の杯にもついで、ワルドはそれを掲げ  
た。

「二人に」

ルイズは少し俯いて、杯を合わせた。かちん、と陶器のグラスが触  
れ合う。

「姫殿下から預かった手紙は、きちんと持っているかい?」

ルイズはポケットの上からアンリエッタから預かった封筒を押さ  
えた。一体、どんな内容なのだろうか。

そして、ウェールズから返してほしいという手紙の内容は何なのだ  
ろう。なんとなく、それは予想がつく気がした。アンリエッタとは、  
幼い頃共に過ごした仲である。彼女がどういう関にあんな表情を  
……最後の一文を書き添える関に見せた表情をするのか、ルイズには  
よく分かっていた。

考え事をしている自分を、興味深そうにワルドが覗き込んでいる。  
ルイズはワルドの問いに頷いた。

「……ええ」

「心配なのかい？ 無事にアルビオンのウェールズ皇太子から、姫殿下の手紙を取り戻せるのかどうか」

「そうね。心配だわ……」

ルイズは可愛らしい眉を、への字に曲げて言った。

「大丈夫だよ。きつとうまくいく。なにせ、僕がついているんだから」  
「……そうね、あなたがいればきつと大丈夫よね。あなたは昔から、とても頼もしかったもの。で、大事な話って？」

ワルドは遠くを見る目をしながら、話し始めた。

「覚えているかい？ あの日の約束……。ほら、君のお屋敷の中庭で……」

「あの、池に浮かんだ小舟？」

ワルドは頷いた。

「君は、いつもご両親に怒られた後、あそこでいじけていたな。まるで捨てられた子猫みたいに、うずくまって

……」

「ほんとにもう、変な事ばかり覚えているのね」

「そりゃ覚えているさ」

ワルドは楽しそうな口調で言った。

「君はいつもお姉さんと魔法の才能を比べられて、出来が悪いなんて言われてた」

ルイズは恥ずかしそうに頬を赤くして、俯いた。

「でも僕は、それはずっと間違いだと思ってた。確かに、君は不器用で失敗ばかりしていたけれど……」

「意地悪ね」

あまりの言いように、ルイズは頬を膨らませた。ワルドはそんなルイズの様子に苦笑しながら、

「違うんだルイズ。君は失敗ばかりしていたけれど、誰にもないオーラを放っていた。魅力と言っても良い。それは君が、他人にはない特別な力を持っているからさ。僕だって並のメイジじゃない。だからそれが分かる」

「まさか」

「まさかじゃない。例えばそう、君の使い魔……」

それを聞いて、ルイズの目が意外そうに見開かれた。

「カネキの事？」

「そうだ。彼が武器を掴んだ時に左手に浮かび上がったルーン……。あれは、ただのルーンじゃない。伝説の使い魔の印さ」

「伝説の使い魔の印？」

「そうだ。あれは『ガンダールヴ』の印だ。始祖ブリミルが用いたという、伝説の使い魔さ」

ワルドの目が光った。

「ガンダールヴ？」

「ああ。実際に彼はあの数の傭兵達を、たった一人で倒している。ただの平民では絶対に不可能な事だ。そんな使い魔は、誰もが持てる使い魔じゃない。そしてその彼を召喚した君は、それだけの力を持ったメイジなんだよ」

「信じられないわ」

ルイズは首を振った。ワルドは冗談を言っているのだと思った。確かに金木は武器を握るとさらに速くなり、信じられないほど強くなるが、伝説の使い魔だなんて信じられない。そこまで考えた所で、今まで抑え込んでいた金木への怒りが再び沸々と沸いてくるのが分かった。

その怒りの引き金は、自分の部屋で金木がアンリエツタに言い放った、あの言葉だ。

『この世の不利益は、全て当人の能力不足』

それは今まで、ゼロだと言われながらも必死に努力してきた自分を否定するような言葉だった。お前がゼロだと言われるのは、全てお前に魔法の才能がないからだ。お前に、そんな能力が無いからだ。まるでそう言われているような気がして、気づいたら自分は金木に怒鳴っていた。その時の事を思い出すと、今でも腹が立つ。

だけど……とルイズは思う。落ち着いて考えてみると、自分は実際に魔法の一つも使えない落ちこぼれだ。もしも仮に彼が伝説の使い

魔だとしても、何かの間違いだと今では思う。こんな、魔法の才能など全くない自分に、ワルドの言うような力があるなど思えないからだ。

「君は偉大なメイジになるだろう。そう、始祖ブリミルのように、歴史に名を残すような、素晴らしいメイジになるに違いない。僕はそう予感している」

ワルドは熱っぽい口調で、ルイズを見つめた。

「この任務が終わったら、僕と結婚しようルイズ」

「え……」

いきなりのプロポーズに、ルイズははつとした表情になった。

「僕は魔法衛士隊の隊長で終わるつもりはない。いずれはこの国を……このハルケギニアを動かすような貴族になりたいと思っている」  
「で、でも……」

「でも、何だい？」

「わ、わたし……まだ……」

「もう、子供じゃない。君は十六だ。自分の事は自分で決められる年齢だし、父上だって許してくださってる。確かに……」

ワルドはそこで言葉を切ると、再び顔を上げてルイズに顔を近づけた。

「確かに、ずっとほったらかしだった事は謝るよ。婚約者だなんて、言えた義理じゃない事も分かってる。でもルイズ、僕には君が必要なんだ」

「ワルドは……」

ルイズは考えた。何故か、金木の事が頭に浮かぶ。ワルドと結婚しても、自分は金木を使い魔としてそばに置いておくのだろうか？

何故か、それはできないような気がした。これがカラスやフクロウだったら、こんなに悩まなくても済んだに違いない。

もし、あの青年をほっぽりしたら、どうなるのだろうか。

キュルケか、それとも金木とやけに仲が良いあのメイドとかが世話を焼くかもしれない。

そんなのやだ、とルイズは思った。少女のワガママさと独占欲で、

ルイズはそう思った。金木は……見た目は弱そうだし、腹の立つ事を言う事もあるが、他の誰でもない自分の使い魔なのだ。

ルイズは顔を上げた。

「でも、でも……」

「でも?」

「あの、その、わたしまだ、あなたに釣り合うような立派なメイジじゃないし……、もっともつと修行して……」

ルイズは俯きながら、自分の想いを言葉にして紡ぐ。

「あのねワールド。小さい頃、わたし思ったの。いつか、皆に認めてもらいたいって。立派な魔法使いになって、父上と母上に褒めてもらおうだって。でもまだ、わたし、それができてない」

「君の心の中には、誰かが住み始めたみたいだね」

「そんな事ないの! そんな事ないのよ!」

ルイズは慌てて否定した。

「良いさ、僕には分かる。分かった。取り消そう。今、返事をくれとは言わないよ。でも、この旅が終わったら、君の気持ちは僕に傾くはずさ」

ルイズは頷いた。

「それじゃあ、もう寝ようか。疲れただろう」

そう言うとワールドはルイズに近づき、唇を合わせようとした。

ルイズの体が一瞬こわばる。それから、すっとワールドを押し戻した。

「ルイズ?」

「ごめん、でも、なんか、その……」

ルイズはもじもじとして、ワールドを見つめた。ワールドは苦笑いを浮かべて、首を振る。

「急がないよ、僕は」

ルイズは再び俯いた。

どうしてワールドはこんなに優しくして、凛々しいのに。憧れていたのに。

結婚してくれと言われて、嬉しくないわけではない。でも、何かが

心に引つかかる。

引つかかったそれが、ルイズの心を前に歩かせないのだった。

翌日、金木がギーシユとの相部屋で目を覚ますと、扉がノックされた。ノックの音を聞いて、金木は怪訝な表情を浮かべる。今日は船が出ないはずだし、何よりもこんな時間に一体誰がノックをしているのだろうか。

金木はベッドのすぐそばにある机の上の白い眼帯を手にとると、左目に着けて起き上がる。それから扉を開けると、そこには羽帽子をかぶったワルドが金木を見下ろしていた。

「おはよう、使い魔君」

突然訪問者に驚きながらも、金木はとりあえず言葉を返す。

「おはようございます。だけど、出発は明日の朝のほうですよ？  
こんな時間に一体どうしたんですか？」

金木の問いに、ワルドはにっこりと笑った。

「君は伝説の使い魔『ガンダールヴ』なんだろう？」

ぴくり、と金木の眉が動いた。その事を知っているのは、自分の知る限りオスマンだけのはずである。それなのに、どうして目の前の男はその事を知っているのだろうか。

金木の疑問を感じ取ったのか、ワルドは何故か誤魔化すように首を傾げて言った。

「……その、あれだ。フーケの一件で、僕は君に興味を抱いたのだ。先ほどグリフォンの上でルイズに聞いたが、君はここよりも遙か遠くにある場所から召喚されてきたそうじゃないか。おまけに伝説の使い魔『ガンダールヴ』だそうだね」

「……どうしてその事を知っているんですか？」

警戒を込めた声で金木が尋ねると、ワルドは先ほどとは違ってきてぱりとした口調で返してきた。

「僕は歴史と兵つわものに興味があつてね。フーケを尋問した時に、君に興味を抱き、王立図書館で君の事を調べたのさ。その結果、『ガンダールヴ』に辿り着いた」

「……………」

怪しいと言えば怪しいが、一応の筋は通っている。金木が変わらずに警戒心を込めた目でワルドを見つめていると、彼はこんな事を言うてきた。

「あの『土くれ』を捕まえた腕がどのぐらいのものだか、知りたいんだ。ちよつと手合わせ願いたい」

「手合わせ?」

「つまり、これさ」

ワルドは腰に差した魔法の杖を引き抜いた。どうやら彼は、自分と戦いたいという事らしい。一瞬迷ったが、金木はその手合わせを受けざる事にした。

正直言つてそんな事を受ける義理も義務も自分にはないが、ワルドは魔法衛士隊、つまり陛下を護る護衛隊の隊長である。その強さのレベルを知っておくのは、この世界で戦っていくのは重要だろう。金木は分かりましたと言つてから、ワルドに尋ねた。

「どこでやるんですか?」

「この宿は昔、アルビオンからの侵攻に備えるための砦だったんだよ。中庭に練兵場があるんだ。そこでやろう」

そう言つて、ワルドは金木に背を向けて去つて行つた。彼の後ろ姿を見送つた後に部屋に視線を戻すと、ちよつどギーシュが起きた所だった。彼はふあくとかくびをすると、部屋の入り口に立っている金木に気づいた。

「おや? どうしたんだいこんな時間に」

「うん……ちよつとワルドさんと手合わせをする事になつて」

「て、手合わせ!?!」

金木の発言に、ギーシュは目を見開いて驚いた。それもそうだろう、と金木は思う。自分だつてギーシュの立場に置かれたら、どうしてそうなったんだと言いたくなるに違いない。

そんな事を思っていた時、金木の背後から声が聞こえてきた。

「面白い話をしてるわね」

金木が振り返ると、そこには寝間着姿のキュルケとタバサが立つて

いた。どうしているんだと金木が尋ねる前に、キュルケが理由を説明する。

「起きて部屋を出ようとしたら、あなたとワルド子爵が何か話してるのを聞いたのよ。途切れ途切れで何を言ってるのかよく分からなかったけれど、そんな話を話してたのね」

そう言うキュルケの目は、好奇心で輝いていた。よく見てみるとタバサの瞳は、いつもより生き生きとしているように見える。完全に手合わせを見る気満々だった。

一方、ギーシュの方も顎に手を当ててこんな事を呟いていた。

「ワルド子爵と、僕のワルキュールを打ち倒したカネキの手合わせか……。確かに興味があるな」

「そうよね？　ちよつと見物させてもらいましようよ。ねえタバサ」

タバサはコクリと頷いて、キュルケに同意を示す。

自分が引き受けた事とはいえ、面倒な事になったな……と金木はため息をついた。

金木とワルドはかつて貴族達が集まり、陛下の閲兵を受けたという練兵場で二十歩ほど離れて向かい合っていた。彼らの様子を、キュルケ、タバサ、ギーシュの三人が興味深そうに見つめていた。

練兵場は今ではただの物置き場になっている。樽や空き箱が積まれ、かつての栄華を懐かしむかのように、石でできた旗立台が苔むして佇んでいる。

「昔……と言っても君は分からんだろうが、かのフィリップ三世の治下には、ここでよく貴族が決闘したのさ」

「決闘……ですか」

「ああ。古き良き時代、王がまだ力を持ち、貴族達がそれに従った時代……貴族が貴族らしかった時代……、名誉と誇りをかけて僕達貴族は魔法を唱えあった。でも、実際はくだらない事で杖を抜きあったものさ。そう、例えば女を取り合ったりね」

「……分かりましたから、早く始めませんか？　時間の無駄です」

やや棘がある口調で金木が言うと、それを制するようにワルドは左



手を突き出した。

「立ち合いには、それなりの作法というものがある。介添え人がいなくては何ね」

「介添え人？」

「安心したまえ。もう、呼んである」

ワルドがそう言うのと、物陰からルイズが現れた。ルイズは二人を見ると、はっとした顔になる。

「ワルド、来いって言うから来てみれば、いったい何をする気なの？」

「彼の実力を、ちよつと試したくなつてね」

「もう、そんな馬鹿な事やめて。今はそんな事している時じゃないでしょう？」

「そうだね。でも、貴族というヤツは厄介でね。強いが弱い、それが気になるのもう、どうにもならなくなるのさ」

ワルドを説得するのは無理だと思ったのか、ルイズは今度は金木を見た。

「やめなさい。これは、命令よ」

「そう言われてもなあ……」

金木は困ったように笑いながら頬を掻く。この手合わせを受けたのは自分だし、何よりやめようと言つてもワルドが聞き入れそうにな。すると、キュルケとギーシュがルイズのそばまで歩き、彼女の手を引つ張つて行つた。

「落ち着きなさいよ、ルイズ。何も殺し合いをするわけじゃないんだから、ここは見物させてもらいましよう」

「そうだよルイズ。こんなの、中々見れるものじゃないよ」

「は、離しなさいよ二人共！ てか、あんた達も止めなさいつたらー！」

ぎやあぎやあ騒ぐルイズを金木が苦笑しながら見つめてみると、ワルドが言った。

「では、介添え人も来た事だし、始めるか」

ワルドは腰から杖を引き抜いた。フェンシングの構えのように、それを前方に突き出す。金木はため息をつく、両手の拳を上げて、まるでボクシングのようなファイティングポーズをとる。

それを見て、ワルドはおろかルイズとキュルケ、ギーシユ、さらにはいつもは無表情のタバサすらもきよとんとした表情を浮かべた。ようやく我に返ったワルドは金木のポーズを見て、眼を鋭くして金木を見る。

「どういうつもりだ？ まさか、剣を取るまでもないとも言う気かい？」

ワルドの怒ったような口調は当然だろう、とルイズ達は思う。今までの戦いを見る限り、金木の戦闘方法は主に剣を使った白兵戦である。しかし今の彼は剣すら手に取っていない。あれではまるで手加減をしていると言っているようなものだ。

しかも、強いとはいえ金木は平民でワルドはスクウエアクラスのメイジである。そんな相手に武器無しで戦おうというのだから、馬鹿にされていると思うのも当然だろう。

だが、金木は変わらず困ったような笑みを浮かべながら言った。

「だってこれはあくまでも手合わせですし……、アルビオンに出發するのは明日の朝なんですから、怪我でもしたら大変ですよ？ そのためにですよ」

それを聞いてルイズ達は顔をさっと青ざめさせ、ワルドの顔が怒りで少し紅潮する。

何を考えているんだとルイズは金木に思う。今の言い方ではまるで、ワルドが剣を持った自分より弱いと言っているようなものだ。その証拠に、ワルドは怒りで手をふるふると震わせている。そして自分のその怒りを必死に抑え込んで、ワルドが金木に言った。

「良いのかい？ それでは逆に僕が、君に怪我を負わせてしまうかもしれないよ？」

「怪我をしないように努力はしますから、大丈夫です」

折角の忠告も無視され、ワルドは怒りと苛立ちで奥歯を強く噛み締めた。

「そうか……。では悪いが、全力で行かせてもらおうぞ！」

そう叫んだ直後、ワルドは瞬時に金木との距離を詰めて金木の顔面に強烈な突きを放った。並大抵の人間ならば、間違いなく食らってし

まうほどの威力である。

しかし金木は顔を横にずらしてかわすと、ワルドとの距離を取ろうとする。だがワルドはすぐに体勢を立て直すと、再び金木との距離を詰める。

「どうやら少しはやるようだね。だけど、それでは勝てない事を教えてあげよう！」

言いながら、鋭い突きを次々と金木に放っていく。金木がその攻撃をかわしていく様子をルイズ達のはらはらとした表情で見つめていると、ギーシュが小さな声で言った

「や、やはりいくら彼でもワルド子爵が相手では分が悪すぎるんじゃないのか？」

それに、二人の攻防をじつと観察するように見つめているキュルケが厳しい口調で返した。

「そうね……。こうして見てると分かるけど、かなりの使い手ねあの子爵。動作の一つ一つが洗練されてる……。傭兵どころか、それなりの腕を持ったメイジでも歯が立たないかもしれないわ」

「だからやめなさいって言ったのに！ あの馬鹿使い魔！」

今のままでは、本当に大怪我を負ってしまうかもしれない。ルイズが戦いをやめさせるために駆け出そうとすると、その肩をタバサが掴んだ。

「何よ！ 離しなさいよタバサ！」

「……彼なら、大丈夫」

え？ とタバサ以外の全員が、彼女の顔を見た。彼女の青色の目はまっすぐ金木とワルドの戦闘に向けられている。キュルケはタバサの顔を見て尋ねた。

「ねえタバサ、カネキなら大丈夫ってどういう意味？」

「……彼、ちっとも苦しそうじゃない」

そう言われてルイズ達三人は金木とワルドの戦いを改めてよく観察してみる。

すると、ある事が分かった。ワルドが必死に長い魔法の杖での攻撃をしているのに対し、金木の方はそれらの攻撃をまったく食らわずに

かわし続けている。しかも息一つ切らしていない。その光景は、はつきり言って異常だった。

今の金木は、剣を握ってすらいない。つまり、本気を出していない状態なのだ。それに対して、ワルドの方は明らかに全力で金木を倒しにかかっている。それなのに、金木には攻撃がまったく当たっていない。それがどういう意味なのかを察し、三人は目を大きく見開いた。

そして三人の考えを代弁するように、タバサが呟く。しかしその声には、言っている本人も信じられないという感情が込められていた。

「……彼の實力は、子爵以上」

(くそ……！ どうして攻撃が当たらない!?)

先ほどから攻撃を続けているワルドは焦っていた。先ほどからほぼ全力での攻撃を放ち続けているというのに、目の前の白髪の青年にまったく当たらない。それどころか青年の表情には焦りの色などはまったく浮かんでおらず、これではまるで逆に自分が追い詰められているようだ。

(ならば……！)

「デル・イル・ソル・ラ・ウインデ……」

一定のリズムと動きを持つ突きを何度も繰り返しながら、ワルドは低く呪文を呟き出す。

そして呪文を唱え終わった時、空気の槌が横殴りに金木に襲い掛かる。見えない巨大な空気のハンマーで相手を攻撃する魔法、『エア・ハンマー』だ。

勝った、とワルドは心の中でほくそ笑んだ。相手は確かに中々の手練れのようなだが、所詮は平民。攻撃を見る事が出来ない風の魔法で攻撃すれば勝負は決まると思っていたからだ。

だが、ワルドの予想は裏切られる事になる。

まるで攻撃位置が分かっていたかのよう、金木が一步後ろに下がって攻撃をかわしたからだ。そのおかげで空気の槌は目標を逃し、何もない空間を通過する事になった。自分の攻撃を容易くかわされ

た事で、ワールドは信じられないと言うように目を大きく見開く。

(馬鹿な……！ 奴には、僕の魔法が見えていても言うのか!?)

一方、焦っているワールドとは対照的に金木は非常なまでに落ち着いて戦況を分析していた。ワールドのうろたえようから見て、やはり今は魔法による攻撃だったらしい。

(……見えない攻撃っていうのは厄介だけど、それを使うのが人間なら話は別だ)

確かにかわす事は難しいかもしれないが、相手の目線、杖の動き、そして魔法が発動する時の風の音などを考慮すれば、攻撃をかわす事は決してできないではない。

面白いように動揺しているワールドを眺めながら、金木は内心ため息をついた。

(……強い事は強いけど、この程度か)

魔法衛士隊の隊長と言うだけあって、ワールドの動きは確かに素晴らしいものだった。喰種の宿敵であるCCGで言えば準特等捜査官、最低でも上等捜査官ぐらいの力はあるだろう。

しかし、一番上の階級である特等捜査官ほどではない。彼らはまさしく、人間側の化け物と呼べる存在だった。彼らの実力は、SSレートと認定された金木でさえ手を焼くほどである。

そして、数多の強敵を撃破してきた金木が完敗した敵が、二人ほどいる。

一人は、CCGの死神、有馬貴将。

もう一人は、金木と同じSSレートの喰種、しやち鯨。

かつてはコクリアと呼ばれる喰種が収監される牢獄に入っていたが、喰種集団のアオギリがコクリアを襲撃した際に脱獄してアオギリに加入した喰種である。見た目はまさに武人と呼べるほど屈強な体格の男性であり、人間の世界で鍛え上げられた肉体と彼の名の由来となった鯨の尾のような尾赫の赫子の威力は、金木を二回も敗北に追い込んだほどだ。

あの二人に比べるとワールドは全然遅いし、攻撃も弱い。

正直言つて、赫子も剣も無くても勝てるレベルである。

(……そろそろ決めるか)

そう決めると、金木は呪文を唱えようとしているワルドの喉に鋭い手刀を放つ。首に手刀の一撃を食らったワルドは魔法の詠唱が阻害され、魔法を唱える事が出来なくなった。

その隙に金木はワルドに接近すると、顔面を二回ほど殴り、さらにわき腹に右フック、最後に彼の腹に左ストレートを放つ。一連の攻撃の上に腹に強烈な一撃を食らったワルドが腹を抑えてうずくまった所ですくい上げるようなアッパーで彼の頭を上にはね上げると、最後に軽く跳躍して強烈な蹴りを放つ。

金木の蹴りで吹き飛ばされたワルドは積み上げた樽に激突し、樽がガラガラと崩れ落ちた。

金木は無表情のまま倒れているワルドに歩み寄ると、吹き飛ばされた際に彼が取り落とした杖を踏みつけ、デルフを抜くと切っ先をワルドの鼻先に突き付けた。

「勝負あり、ですね」

ワルドは唇の端から血を流しながら金木を睨んでいたが、少し悔しそうな表情を浮かべながらこくりと頷く。金木はデルフを鞘に納めると、その場から歩き去っていた。

戦闘を今まで見ていたルイズ達は、金木の圧倒的勝利という結末に思わずぽかんと口を開けてしまっていた。

「ま、魔法衛士隊の隊長に勝つなんて……」

「彼……あんなに強かったの……?」

「……すごい」

金木が強い事は分かっていたが、まさかスクウェアクラスのメイジに勝つほどまでとはまったく思っていなかった。しかも金木は剣すら抜いていない、完全に本気を出していない状態での戦いだっただけ。一体、彼が本気を出したらどれぐらい強いのだろうか。もしかしたら、ドラゴンすら倒してしまうかもしれない。そう考えて、キュルケとギーシュ、タバサは思わず身震いした。

そして、戦いを見ていたルイズは驚きながらも昨日のワルドの話を思い出していた。伝説の使い魔、ガンダールヴ。かつて始祖が用いた

という、強力な力を持つ使い魔。最初は信じられなかったが、金木のあの強さからすると、もしかしたら本当なのかもしれないとルイズは思う。

だが、それと同時にルイズの胸にはある思いがあった。唇を噛み締めて俯きながら、ルイズは心の中で呟く。

(……金木はあんなに強いのに……あんなにすごいのに……どうしてわたしは、魔法が使えない無能なの……?)

一方、金木に見事に叩きのめされたワルドはというと、

(くそ……!)

痛む体を起こしながら、ワルドは拳を強く握りしめていた。ここでルイズと金木に自分の實力を見せつけるつもりだったのに、蓋を開けてみれば自分の完敗という結果に終わった。さらに、あの白髪の青年は本当の實力すら見せていない。その事が、ワルドのプライドを激しく傷つけていた。

正直言つて、平民の金木を侮っていたのは事実である。ガンダールヴと言うだけあつて確かにそれなりの實力は持っているようだが、スクウェアアクリスのメイジである自分が本気になれば簡単に勝てると思っていた。だが、それは大きな間違いだった。あの青年は、自分が本気でかかってでも簡単に倒してしまうほどの力を持っている。ギリ……と怒りで奥歯を噛み締めながら、先ほどの金木の後ろ姿を思い出す。

(……まあ良い。今の手合わせは僕の負けだが、この旅の本当の目的を達する事ができれば、僕の勝ちだ。精々いい気になっていると良い、ガンダールヴ……!)

そしてワルドは、誰にも見られないように顔を伏せたまま、歪んだ笑みを浮かべた。

練兵場を去った金木がしばらく黙って歩いていると、背中に担いでいるデルフが唐突に口を開いた。

「なあ相棒。一つ聞いていいか？」

「どうしたの？ デルフ」

「相棒が本気を出さなかったのは、本当にワルドに怪我をさせないためだけか？」

デルフが放った一言に、金木はその場に立ち止まる。それから振り返ってデルフを見ると、彼はさらに言葉を紡いでくる。

「相棒のさっきの戦いを見てたが、俺には相棒がワルドに本気を見せないように戦ってたように見えたぜ？ ワルドに怪我をさせたくなかったってのは嘘じゃないが、それ以外にも理由があるんじゃないか？」

すると凶星だったのか、金木は困ったように笑いながら頬をポリポリと掻く。

「よく分かったね」

「俺をあまり舐めんなよ。伊達に長く生きてねえしな。で、どうしてあんな戦い方をしてたんだ？」

デルフの言葉に、金木は表情を真剣なものに切り替えながら答える。

「……よく分からないけど、ワルドさんに本気を見せるのは危険な気がしたんだ。だから、本気を見せるのは避けたかった」

理屈も何もあつたものではなく、それはただの勘に近い。しかし、金木は今までに何回も騙されてきて、そのたびに大切なものを失ってきた。そんな金木の直感と呼べるものが、金木に警告していたのだ。こいつに自分の本当の力を見せるのは危険だ、警戒しろと。

険しい表情を浮かべながら、金木はさらに続ける。

「……ルイズちゃんの婚約者だし、あまり疑いたくないけど、あの人には何か引つかかる。だから、できれば全力で戦いたくなかった」

「……なるほどな。ま、俺が見てた限りあいつはあれがほぼ全力だったみたいだぜ。ほぼだからもしかしたらさらに上があるかもしれないが、ルーンの力を使ってすらいなかった相棒に完敗したんなら大丈夫だろ」

「……楽観はできないよ。これから何か起こるかもしれないし。油断



大敵、だよデルフ」

「慎重だねえ、相棒は」

それに金木は再び苦笑しながら、『女神の杵』亭へと戻るのだった。

## 第十一話 襲撃

ワルドとの決闘に勝利した夜、金木は一人部屋のベランダで座っていた。ギーシュ達は一階の酒場で酒を飲んで騒ぎまくっている。明日はいよいよアルビオンに渡る日だという事で盛り上がりつつあるらしい。キュルケが誘いに来たが、人間と同じ食べ物が食べられない金木は当然断った。

金木はベランダに座りながら、昨日自分達を襲ってきた傭兵の一人が落とした袋の中から金貨を一枚取り出し、じっと眺めていた。そんな金木に、背中のデルフが声をかける。

「金貨なんて眺めて何をしてんだ？」

すると金木は金貨を眺めたまま、デルフに言った。

「おかしいと思わない？ あの傭兵達は、ただの物取りだって言ってる僕達を襲ってきたんだよ？ だけどこんな金貨がたくさん詰まった袋を持っているんだから、物取りなんてする必要ないと思わない？」

金木が昨日拾った袋には、エキュー金貨がどつきり詰め込まれていてた。金木の言う通り、それだけの金があれば別に物取りなどする必要がない。金木の言葉を真意を悟ったのか、デルフが呟く。

「ははあ……なるほどな。つまり、あの傭兵達はアルビオンの貴族達が相棒達を妨害するために雇った連中だって言いたいわけだな」

デルフの言葉に金木は頷きながら、

「だけど、そうだとしても手際が良すぎる。ちょうどあの時間僕達が通る事なんて、アルビオンの貴族達も予測できるはずがない。何よりもこの任務は極秘のはずなんだ。けどあの傭兵達は、まるで僕達が通るのを知っていたかのように襲撃してきた。……あまり考えたくないけど、僕達の身近な人間に……」

「内通者がいるってわけか」

もう一度金木が首肯すると、デルフがカチャカチャと剣の鏢を鳴らしながら尋ねる。

「その事、娘っ子達には言ったのか？」

「ままだだよ。確証があるわけじゃないし、今このタイミングで彼女達

を不安がらせるのはまずい。しばらくは黙っておこうと思う」

そう言った直後、自分の背後で足音がするのを金木は感じた。目の前の床に置いてある金貨が詰まった袋を素早くポケットにねじ込むと、平静を装った表情で背後を振り向く。

そこにいたのは、何故か沈んだ表情をしたルイズだった。

「どうしたの？ ルイズちゃん」

「……騒ぎたい気分じゃないのよ。隣、座って良い？」

コクリと金木が頷くと、ルイズは無言のまま金木の隣に座った。そのまましばらく無言の状態が続き、やや気まずい雰囲気が漂ってきたので金木はポリポリと頬を掻いた。すると、ルイズが唐突に口を開く。

「……ねえカネキ、ごめんね。わたしなんかがあんたを召喚しちゃって」

「えっ？」

突然のルイズの言葉に、金木は思わず目を丸くする。今の彼女の発言が、いつもプライドが高いルイズが放ったものとは思えなかったからだ。いつものルイズならば、貴族のわたしに召喚されたんだから、感謝しなさいよね！ ぐらいい言いいそうである。金木は戸惑いながらも、ルイズに尋ねた。

「ど、どうしたのルイズちゃん？」

「……決闘の時、あんたワルドを簡単にやつつけちゃったじゃない？」

あの時わたしはあんたの事を本当にすごいと思ったけど……、同時にこうも思ったの。どうして、あんたみたいなすごい奴がわたしの使い魔になったのかなって」

「……………」

「あんたはスクウェアのメイジを簡単にやつつけちゃうほどの力を持つている。それに比べて、わたしは魔法の一つすら成功できない無能……。こんなに釣り合わないメイジと使い魔もそういないわよね」

そう言うと、ルイズの目からボロボロと涙がこぼれだした。突然のルイズの涙に金木は慌てながらも、フォローの言葉を口にする。

「そんな事ないよ。それに前も言ったよね？ 君はちゃんと魔法を使えたじゃないか。そうじゃなかったら、僕は今頃ここにいないよ」

そう、金木はルイズが召喚の魔法に成功したからこの場にいるのだ。もしもルイズの魔法が成功していなかったら、自分はあの東京の地下に死体となっていただろう。だがルイズはその可能性を否定するかのようふるふると首を横に振った。

「あんなの、どうせまぐれよ……。あれから何回か魔法を唱えても、何にも変わらない。出るのは爆発ばかり……。コモンマジックすら成功しやしない。結局、わたしはあんたを召喚できてもゼロのまんまなんだわ……」

それを突かれると、さすがの金木も何も言う事が出来なかった。確かにルイズはサモン・サーヴァントに成功して金木を召喚したが、それ以外の魔法は相変わらず爆発ばかりだ。これでは金木の言う事にも説得力が無くなってしまふ。ルイズは涙を流しながら、さらに続ける。

「だからわたし、思うの。あんたは本当はもつと有能なメイジに召喚されるはずだったのに、それをわたしが横取りしたんじゃないかって。あんたはもつとわたしより立派なふさわしいメイジに出会えたかもしれないし、あんたを待ち望んでいたメイジだっているかもしれない。なかったのに……。それをわたしが邪魔したんじゃないかって」

「そんな……」

それを否定しようとした金木の言葉が、途中で止まる。ルイズの説を否定できるほど、自分はまだこの世界や魔法についての知識が豊富ではない。何よりもサモン・サーヴァントという魔法はこの世界の住人であるルイズ達にとつても、まだまだ謎が多い魔法なのだ。自分と同じ属性の使い魔が召喚されるといふ事だが、その使い魔を呼び出す基準など解き明かされていない部分も多々ある。そうでなければ、半喰種である自分が呼び出された原理も解明されているはずなのだ。だから、本来ならばすぐに論破できるかもしれないルイズの説も、金木はすぐに否定する事ができなかった。

「ごめんね、カネキ……。わたしなんか召喚しちゃって……」

溢れる涙を両手で止めようとしながら、ルイズが金木に謝罪の言葉を紡ぐ。金木は戸惑いの表情を浮かべながらも、何も言う事ができない。唇を噛み締めて、金木が夜空を仰いだその時だった。

「……あれ？」

目の前の光景に、金木は思わず戸惑いの声を上げた。それにルイズもつられたのか、目を赤くしながら空を見上げる。

何かが、おかしい。

上空に浮かんでいるはずの、一つに重なった月が見えないのだ。

いや、違う。正確には月が巨大な何かに隠れて見えなくなっているのだ。

月明りをバツクに、巨大な影の輪郭が動く。金木が目を凝らしてよく見てみると、その巨大な影は岩でできた巨大なゴーレムだった。こんな巨大なゴーレムを操れる人間は、金木とルイズの知る限り一人しかない。

巨大なゴーレムの肩に、誰かが座っている。その人物は長い髪を、風にたなびかせていた。

「フーケ！」

二人は同時にその人物に叫んでいた。ゴーレムの肩に座った人物——土くれのフーケは嬉しそうな声で言った。

「感激だわ。覚えててくれたのね」

「どうしてこんな場所に？ あなたは牢獄に入ったと思ってたんですか……」

ルイズを後ろにかばいながら、金木がフーケを鋭く睨んで尋ねる。「親切な人がいてね。わたしみたいな美人はもつと世の中のために役に立たなくてはいけないと言って、出してくれたのよ」

よく見てみると、フーケの隣には黒マントをまとった貴族が立っていた。恐らくその貴族がフーケを脱獄させたのだろう。黒マントの貴族は喋るのをフーケに任せ、だんまりを決め込んでいる。白い仮面をかぶっているので顔が分からないが、体格からして男性のようだ。

「……なるほど。それで、こんな所に何しに来たんですか？」

金木が右手の人差し指を親指で押して鳴らしながら尋ねると、フー

ケの目が吊り上がり狂的な笑みが浮かんだ。

「素敵なバカンスをありがとうって、お礼を言いに来たんじやないの！」

フーケの巨大ゴーレムの拳が唸り、硬い岩でできたベランダの手すりを粉々に破壊した。どうやら岩で構成されたゴーレムの破壊力は、以前より強くなっているようだった。

「ここらは岩しかないからね。土がないからって、安心しちやだめよ！」

フーケの声を聞きながら、金木はルイズの手を掴んで駆け出すと、部屋を抜けて一階へと階段を駆け下りた。

下りた先の一階も修羅場になっていた。いきなり玄関から現れた傭兵の一隊が、一階の酒場で飲んでいたワルド達を襲撃したらしい。

ギーシュ、キュルケ、タバサにワルドが魔法で応戦しているが、多勢に無勢、どうやらラ・ロシエール中の傭兵が束になってかかっているらしく、手に負えないようだ。

キュルケ達は床と一体化したテーブルの脚を折り、それを立てて盾の代わりにして傭兵達に応戦していた。歴戦の傭兵達はメイジとの戦いに慣れており、緒戦でキュルケ達の魔法の射程を見極めると、まず魔法の射程外から矢を射かけてきた。暗闇を背にした傭兵達に地の利があり、屋内の一行は分が悪い。

魔法を唱えようと立ち上がるものなら、矢が雨のように飛んで来る。

金木はテーブルを背にしたキュルケ達の下に姿勢を低くして素早く駆け寄ると、上にフーケがいる事を伝えた。しかし巨大ゴーレムの足が吹きさらしの向こうに見えており、どうやら伝える必要はなかったようだ。

他の貴族の客達はカウンターの下で震えている。でつぷりと太った店の主人が必死に傭兵達に何事かを訴えかけていたが、矢を腕に食らって床をのたうち回った。

「参ったね」

ワルドの言葉に、キュルケが頷いた。

「やっぱり、この前の連中はただの物盗りじゃなかったわね」

「あのフーケがいるって事は、アルビオン貴族が後ろにいるという事だな」

キュルケが杖をいじりながら呟いた。

「……奴らはちびちびとこつちに魔法を使わせて、精神力が切れた所を見計らい、一斉に突撃してくるわよ。そしたらどうすんの？」

「僕のゴーレムで防いでやる」

ギーシュがちよつと青ざめながら言うが、それを淡々と戦力を分析していたキュルケが切り捨てる。

「ギーシュ、あんたのワルキューレじゃ一個小隊が関の山ね。相手は手練れの傭兵達よ？」

「やってみなくちゃ分からない」

「あのねギーシュ。あたしは戦の事なら、あなたよりちよつとばっか専門家なの」

「僕はグラモン元帥の息子だぞ。卑しき傭兵ごときに後れを取ってなるものか」

「ったく、トリスティンの貴族は口だけは勇ましいんだから。だから戦に弱いだよ」

ギーシュは立ち上がって呪文を唱えようとしたが、その前に金木が彼のシャツの襟を力強く掴んで強引に床に引きずり倒す。半喰種の力で無理やり床に引きずり倒されたギーシュは、少し涙目になりながらせき込んだ。

「良いか諸君」

ワルドが低い声で言うと、金木達は黙ってワルドの声に頷いた。

「このような任務は、半数が目的に辿り着ければ、成功とされる」

こんな時でも優雅に本を広げていたタバサが本を閉じて、ワルドの方を向く。それから自分とキュルケとギーシュを杖で指して、「囧」と呟いた。

それからタバサはワルドとルイズと金木を指して「棧橋へ」と続けて言う。そんなタバサに、ワルドが手短かに尋ねた。

「時間は？」

「今すぐ」

「よし、聞いての通りだ。裏口に回るぞ」

「え？ え？ ええー！」

それを聞いてルイズが驚きの声を漏らすと、ワールドがルイズに向かって言った。

「今から子ここで彼女達が敵を引き付ける。精々派手に暴れて、目立ってもらおう。その隙に、僕は裏口から出て棧橋に向かう。以上だ」

「で、でも……」

ルイズがキュルケ達を見ると、キュルケは魅力的な赤髪をかきあげ、つまらなさそうに唇を尖らせながら言う。

「ま、仕方ないかなって。あたし達、あなた達が何しにアルビオンに行くのかすら知らないもんね」

「うむむ、ここで死ぬのかな。どうなのかな。死んだら、姫殿下とモンモランシーには会えなくなってしまうな……」

それから、タバサは金木に向かって頷いた。

「行って」

そんなタバサ達を金木はしばらく黙って見つめていたが、やがて真剣な口調で三人に告げた。

「みんな、ここは任せるよ。だけどお願いだから、死なないでね」

本当なら金木もここに残って戦いたいが、この先ルイズに危険が絶対に及ばないとも限らない。ルイズのそばにはワールドがいるが、もしも貴族派の追手が複数だったりした場合、彼だけでは不安である。襲撃の可能性がある以上、自分も行った方が良いだろうし、作戦の成功率も上がる。

金木が三人に告げると、キュルケは魅力的な笑みを金木に向けながらこう返した。

「死んだりしないから、早く行きなさいな。帰ってきたら……キスでもしてもらおうかしら」

「本を一冊、買ってもらう」

ちやつかり自分達の要求をするキュルケとタバサに、金木は今が襲



撃されている最中だという事を一瞬忘れて苦笑を浮かべた。キュルケはルイズに向き直ると、

「ねえ、ヴァリエール。勘違いしないでね？ あんたのために囷になるんじゃないんだからね」

「わ、分かっているわよ」

ルイズはそれでも、キュルケ達にペこりと頭を下げた。

金木達は低い姿勢で歩き出した。矢がひゅんひゅんと飛んできたが、タバサが杖を振って風の防御壁を張ってくれたおかげで、矢はあらぬ方向に逸れて行った。

酒場から厨房に出て金木達が通用口に辿り着くと、酒場の方から派手な爆発音が聞こえてきた。

「……始まったみたいね」

爆発音を聞いたルイズが言った。一方のワルドはぴたりとドアに身を寄せると、向こうの様子を探る。

「誰もいないようだ」

ドアを開けて、三人は夜のラ・ロシエールの街へと躍り出た。

「棧橋はこつちだ」

ワルドが先頭をゆき、それにルイズが続き、金木がしんがりを受け持つ形で三人は棧橋へと走っていく。月明りで道は明るい。とある建物の間の階段にワルドは駆け込むと、そこを登り始めた。

長い階段を上ると、丘の上に出た。現れた光景を見て、金木は思わず息をのんだ。

巨大な樹が、四方八方に枝を伸ばしている。

大きさが山ほどもある、巨大な樹だ。夜空に隠れて正確な高さは分からないが、それでも相当高いという事だけは分かった。

そして、目を凝らすと樹の枝にはそれぞれ大きな何かがぶら下がっていた。巨大な木の実にも見えるが、違う。それはなんと船だった。飛行船のような形状をしており、枝にぶら下がっている。

「これが棧橋で……あれが船？」

金木が目を見開いて言うと、ルイズが怪訝な顔で聞き返した。

「そうよ。あんたの故郷じゃ違うの？」

「うん。僕の故郷は棧橋も船も全部海にあるんだ。……すごいな」

目の前の光景に感嘆の声を漏らすが、こんな所で立ち止まっている暇はない。金木達はすぐに行動を再開した。

ワルドは樹の根元へと駆け寄った。樹の根元は巨大なビルの吹き抜けのホールのように空洞になっていた。枯れた大樹の幹を穿って造り上げたものらしい。

夜なので人影はなかった。各枝に通じる階段には、鉄でできたプレートが貼ってある。そこには何やら文字が躍っており、まるで駅のホームを知らせるプレートのようである。

ワルドは目当ての階段を見つけると、その階段を上り始めた。

木でできた階段は一段ごとにしなる。手すりがついているものの、ボロくて心もとない。階段の隙間、闇夜の眼下にラ・ロシエールの街の明かりが見えた。

途中の踊り場で、後ろから追いつがる足音に金木が気づく。振り向くと、黒い影が自分達目がけて走ってきているのが見えた。その影はさつと翻って金木の頭上を飛び越そうとしたが、それに気づいた金木は両足に力をこめると、その場で影よりも高く跳躍する。そしてその勢いを保ったまま縦に一回転し、強烈な右足のつま先での一撃を黒い影に食らわしてやる。黒い影は、階段に強かに叩きつけられた。

金木は影の前に立つと、デルフリンガーを抜いて目の前の襲撃者を睨みつける。襲撃者はゆっくりと起き上がって、金木と向かい合った。よくよく観察してみると、その襲撃者は先ほどフーケのゴーレムの肩に乗っていた、白い仮面の男だった。フーケが一緒ではない所を見ると、どうやら彼女とは別行動をとっているらしい。

背格好はワルドと同じくらいだろうか。男は剣を構えている金木を見ると、自らは腰から杖を引き抜いた。黒塗りの、長い杖である。(……メイジ。なら、魔法を使われる前に倒す！)

金木は半喰種の力を発揮して、一気に男との距離を詰めるとその顔面に掌底を放つ。まともに食らえば人間ならば頭が吹き飛ぶか潰れるほどの威力だが、男はそれをかわすと金木との距離を取ろうとする。だが、半喰種の身体能力にガンダールヴの力が加わった金木から

逃げられるはずもない。金木は瞬時に距離を詰めなおすと、デルFRINGERで男の杖を強引に弾き飛ばす。さらに腹に強烈な膝蹴りを食らわすと、男の体は階段の手すりにぶつかつた。一瞬手すりがへし折れるのではないかと思つたが、運よく手すりは男の体を支えてくれた。

金木は男の前まで歩み寄ると、デルFRINGERの切っ先を男の仮面に突き付けた。

「杖も無くなりましたし、話してもらいましょうか？ 一体どうやって僕達の情報を知つたのか。話してくれば何もしませんが、話さないなら……言う必要はありませんよね？」

金木が冷たい声音で言うと、男はふらつきながらも立ち上がった。

そしてその直後、男は階段の手すりを掴んで手すりを飛び越えると、そのまま地面へと落下していった。それに驚いた金木が地面へと目を向けるが、すでに男の姿はどこにも無かつた。

「くそー！ 逃げられたー！」

苛立ちの声を漏らしながら、金木は左手の拳を階段の手すりに勢いよく叩きつけた。貴族派に所属していると思われるあの男を逃がした事は、明らかに痛烈なミスである。人間相手なのであまり気は進まないが、こうなるぐらいだったら腕か足の一本ぐらいは折っておいた方が良かったもしれない。

金木が奥歯を噛み締めながらデルFを鞘に納めると、そこにワルドとルイズが駆けつけてきた。

「カネキ！ 大丈夫？」

心配そうな表情を浮かべたルイズが言うと、金木は悔しさが滲んだ口調で答えた。

「うん。だけどごめん。あの仮面の男には逃げられた」

「そうか……。だがいつまでも過ぎた事を後悔しても仕方ない。今は一刻も早くアルビオンへと向かおう」

ワルドの言葉に金木とルイズは頷き、三人は再び階段を上り始めた。

階段を駆け上った先は、一本の枝が伸びていた。その枝に沿って、

一艘の船が停泊していた。帆船のような形状だが、空中で浮かぶためか舷側に羽が突き出ている。上からロープが何本も伸び、上に伸びた枝に吊るされていた。金木達が乗った枝からタラップが甲板に伸びている。

ワルド達が船上に現れると、甲板で寝込んでいた船員が起き上がった。

「な、なんでえ？ おめえら！」

「船長はいるか？」

「寝てるぜ。用があるなら、明日の朝改めて来るんだな」

男はラム酒の壺をラツパ飲みしながら、酔って濁った眼で答えた。ワルドが答えずに、すらりと杖を引き抜く。

「貴族に二度同じ事を言わせる気か？ 僕は船長を呼べと言ったんだ」

「ぎ、貴族！」

それで酔いが一気に覚めたらしく、男は素早く立ち上がると船長室にすっ飛んで行った。

しばらくして、寝ぼけ眼の初老の男を連れて戻ってきた。どうやら帽子をかぶったその男が、この船の船長らしい。

「何の御用ですか？」

船長が胡散臭げな視線をワルドに向けながら尋ねた。

「女王陛下の魔法衛士隊長、ワルド子爵だ」

船長の目が丸くなる。相手が身分の高い貴族と知って、急に言葉遣いが丁寧になった。

「これはこれは。して、当船へどういったご用向きで……」

「アルビオンへ、今すぐ出向してもらいたい」

「無茶を！」

「勅命だ。まさかと思うが、王室に逆らうつもりか？」

「あなた方が何しにアルビオンに行くのかこっちは知ったこっちゃありませんが、朝にならないと出港できませんよ！」

「どうしてだ？」

「アルビオンが最もここ、ラ・ロシエールの街に近づくのは朝です！」

その前に出港したんでは、風石が足りませんや！」

「風石って何ですか？」

話を聞いていた金木が尋ねると、船長はそんな事も知らないのか？  
と言いたそうな顔つきで答えた。

「風の魔法力を備えた石の事さ。それで船は宙に浮かぶんだ」

「今船に積んでいる風石で、アルビオンには行けないんですか？」

続けて金木が尋ねると、とんでもないと言うように船長は首を横に振った。

「船が積んだ風石は、アルビオンへの最短距離分しかねえんだ。それ以上積んだら足が出ちまう。だから今は出港できねえ。無理に出港すれば、地面に落っこちる事になる」

「風石が足りぬ分は、僕が補う。僕は風のスクウエアだ」

船長と船員は顔を見合わせた。それから船長がワルドの方を向いて頷く。

「ならば結構で。料金ははずんでもらいますよ」

「積荷はなんだ？」

「硫黄で。アルビオンでは、今や黄金並みの値段がつきますんで。新しい秩序を建設なさっている貴族の方々は、高値を付けてくださいます。秩序の建設には火薬と火の秘薬は必需品ですのでね」

「その運賃と同額を出そう」

船長は小ずるような笑みを浮かべて頷いた。商談が成立したので、船長は矢継ぎ早に命令を下した。

「出港だ！ もやいを放て！ 帆を打て！」

ぶつぶつと文句を言いながらも、よく訓練された船員達は船長の命令に従って船を枝に吊るしたもやい網を解き放ち、横静索により登り、帆を張った。

戒めが解かれた船は、一瞬空中に浮かんだが発動した風石の力で宙に浮かぶ。

帆と羽が風を受け、ぶわっと張り詰めた直後船が動き出す。

「アルビオンにはいつごろ着くんですか？」

「明日の昼過ぎには、スカボローの港に到着するさ」

船長の言葉を聞いてから、金木は地面を見た。棧橋……大樹の枝の隙間に見える、ラ・ロシエールの明かりがぐんぐん遠くなっていく。かなりのスピードのようだ。

金木がルイズが流れていく光景を眺めていると、ワルドが近寄ってきた。

「船長の話では、ニューカッスル付近に陣を配置した王軍は、攻囲されて苦戦中のようだ」

ワルドの言葉を聞いて、ルイズがはつとした表情を浮かべた。

「ウェールズ皇太子は？」

それにワルドは、首を横に振った。

「分かん。生きてはいるようだが……」

「どうせ、港町はすべて反乱軍に抑えられているんでしよう？」

「そうだね」

「どうやって、王党派と連絡を取ればいいのかしら？」

「陣中突破しかあるまいな。スカボローから、ニューカッスルまでは馬で一日だ」

「反乱軍の間をすり抜けて？」

「そうだ。それしかないだろう。まあ、反乱軍も公然とトリステインの貴族に手出しはできないだろう。隙を見て包囲戦を突破し、ニューカッスルの陣へと向かう。ただ、夜の闇には気を付けないといけないがな」

ルイズは緊張した頷くと、ワルドに尋ねた。

「そういえばワルド。あなたのグリフォンはどうしたの？」

ワルドは微笑むと、舷側から身を乗り出して口笛を吹く。すると下からグリフォンの羽音が聞こえてきた。そのまま甲板に着陸し、船員達を驚かせた。

「あのグリフォンでアルビオンまで行けないんですか？」

「竜じゃあるまいし、そんなに長い距離は飛べないわ」

金木の問いに、ワルドの代わりにルイズが答えた。

「どうやらしばらく自分達にできる事はなさそうだと判断した金木は、舷側に座り込んで眠る事にした。これから先、また戦闘にならな

いという保障はない。ならばここで少しでも体力を温存しといった方が効率的である。

金木は目を閉じると、襲ってくる睡魔に逆らわずそのまま眠りについた。

船員達の声とまぶしい光で、金木は目を覚ました。舷側から下を覗き込むと、白い雲が広がっている。どうやら現在船は雲の上を進んでいるようだった。

「アルビオンが見えたぞー!」

鐘楼の上に立った見張りの船員が、大声を上げる。

金木は見張りの船員が見ている方向に視線を向けて、思わず息を呑んだ。

そこには、まさに巨大としか言いようのない光景が広がっていた。雲の切れ間から、黒々と大陸が覗いていた。大陸ははるか視界の続く限り延びている。地表には山がそびえ、瓦が流れていた。

「驚いた?」

いつの間にか隣に立っていたルイズが、どこか楽しそうな笑みを浮かべながら金木に尋ねると、金木は正直にうんと頷いた。

ちょうどその時、鐘楼に立った見張りの船員が大声を上げた。

「右舷上方の雲中より、船が接近してきます!」

金木は言われた方を向いた。船員の言う通り、船が一隻近づいてきていた。金木達が乗り込んできた船よりも、一回りは大きい。舷側に開いた穴からは、大砲が突き出ている。それを見て、ルイズが眉をひそめた。

「嫌だわ。反乱勢……貴族派の軍艦かしら」

一方、後甲板でワールドと並んで操船の指揮を取っていた船長は見張りが指差した方角を見上げた。

黒くタールが塗られた船体は、まさに戦う船を連想させる物だった。こちらにぴたりと二十数個も並んだ砲門を向けている。

「アルビオンの貴族派か? お前達のために荷を運んでいる船だと教

えてやれ」

見張り員は船長の指示通りに手旗を振るが、黒い船からは何の反応もない。

副長が駆け寄ってきて、青ざめた顔で船長に告げた。

「あの船は旗を掲げておりません！」

すると、船長の顔が副長と同じようにみるみるうちに青ざめた。

「してみると、く、空賊か？」

「間違いありません！ 内乱の混乱に乗じて、活動が活発になっていると聞き及びますから……」

「逃げる！ 取り舵いっばい！」

船長は船を空賊から遠ざけようとしたが、もう遅かった。併走し始めた黒船は脅しの一発を、金木達の乗り込んだ船の針路めがけて放った。

鈍い音がして、砲弾が雲の彼方へと消えていく。

黒船のマストに、四色旗流信号がするすると上る。

「停船命令です、船長」

そう言われた船長は苦渋の決断を強いられた。この船にも武装が無いわけではないが、武装と言っても移動式の大砲が三門ばかり甲板に置いてあるに過ぎない。二十数門も片舷側にずらりと大砲を並べたあの船の火力からすれば、役に立たない飾りのようなものである。助けを求めるように、隣に立ったワルドを見つめた。

「魔法はこの船を浮かべるために打ち止めだよ。あの船に従うんだな」

ワルドは落ち着き払った声で言った。船長は口の中でこれで破産だと呟くと、船員達に命令を告げる。

「裏帆を打て。停船だ」

いきなり現れて大砲を放った黒船と、行き足を弱めて停船した自船の様子に怯えて、ルイズは思わず金木に寄り添った。不安そうに、金



木の後ろから黒船を見つめる。

「空賊だ！ 抵抗するな！」

黒船から、メガホンを持った男が大声で怒鳴った。

「空賊ですって？」

ルイズが驚いた声で言った。

黒船の舷側に弓やフリント・ロック銃を持った男達が並び、こちらに狙いを定めた。鉤のついたロープが鼻たれ、金木達の乗った船の舷縁に引っかかる。手に斧や曲刀などの得物を持った屈強な男達が船の間に張られたロープを伝ってやってくる。その数、およそ数十人。

「カネキ……」

ルイズが怯えた声で呟くが、当の金木本人はデルフに剣を伸ばすこともなくただじつと空賊達を観察している。

ここで剣を抜いて男達数人を倒す事は簡単だが、現在自分達の船は二十数個もの大砲に狙いをつけられている状態にある。もしもここで暴れたら、この船ごと砲撃される事になるだろう。ここはじつとして、敵の動向をうかがうしかない。

前甲板に繋ぎ留められていたワルドのグリフォンが、乗り移ろうとする空賊達に驚いてギャンギャンと喚き始めた。するとその瞬間、グリフォンの頭が青白い雲で覆われ、グリフォンは甲板に倒れて寝息を立て始めた。

「あれは……」

「眠りの雲。相手を眠らせる魔法さ。どうやら向こうには、確実にメイジがいるようだな」

金木の呟きに、いつの間にか背後に現れたワルドが答えた。

「どすん、と音を立てて甲板に空賊達が降り立った。派手な格好の、一人の空賊がいた。」

元は白かったらしいが、汗とグリース油で汚れて真っ黒になったシャツの胸をはだけ、そこから赤銅色に日焼けした逞しい胸が覗いている。ぼさぼさの長い黒髪は赤い布で乱暴に纏められ、無精ひげが顔中に生えており、丁寧に左目に眼帯が巻かれていた。どうやらその男が空賊の頭らしい。

「船長はどこでえ」

「荒っぽい仕草と言葉遣いで、辺りを見回す。

「わたしだが」

震えながらも、精いっぱい威厳を保とうと努力しながら船長が答える。頭は大股で船長に近づくと、顔をぴたぴたと抜いた曲刀で抜いた。

「船の名前と、積荷は？」

「トリステインの『マリー・ガラント』号。積荷は硫黄だ」

空賊達の間からため息が漏れた。頭の男はにやりと笑うと、船長の帽子を取りあげて自分が被った。

「船ごと全部買った。料金はてめえらの命だ」

船長が屈辱で震える。それから頭は、甲板に佇むルイズとワルドに気づいた。

「おや、貴族の客まで乗せてるのか」

そう言いながら船長がルイズの顎を手で持ち上げた。

「こりゃあ別嬪だ。お前、俺の船で皿洗いをやらねえか？」

男達は下卑た笑い声を上げた。ルイズはその手をびしやりとはねつけると、燃えるような怒りを込めて男を睨みつけた。

「下がちなさい、下郎」

「驚いた！ 下郎ときたもんだ！」

頭はルイズの言葉など気にせず、大声で笑った。そしてルイズと金木、ワルドを指差すと仲間達に命令を下す。

「てめえら。こいつらも運びな。身代金がたんまりもらえるだろうぜ」

その後、空賊に捕らえられた金木達は船倉に閉じ込められた。『マリー・ガラント』号の組員達は、自分達のものだった船の曳航を手伝わされているらしい。

金木はデルフを取り上げられ、ワルドとルイズは杖を取り上げられた。とは言っても、正直それはあまり意味がない。ルイズは元々魔法

が使えないし、金木に至っては剣が無くても十分すぎる戦闘力を誇るからだ。

周りには酒樽や穀物の詰まった袋、さらに火薬樽が雑然と置かれている。重たい砲弾が、部屋の隅にうず高く積みまれている。ワルドは興味深そうに、そんな積荷を見て回っていた。ルイズはちよこんと部屋の隅に座っており、金木も壁にもたれかかって座っている。

三人がしばらくそうしていると、扉が突然開いた。太った男が、スープの入った皿を持ってやってきたのだ。

「飯だ」

扉の近くにいた金木が受け取ろうとした時、男はその皿をひよいと持ち上げた。

「質問に答えてからだ」

座り込んでいたルイズが立ち上がり、男を真正面から睨み付けた。

「言つてごらんさい」

「お前達、アルビオンに何の用なんだ？」

「旅行よ」

ルイズは腰に手を当てて、毅然とした声で言った。

「トリステイン貴族が、今どきのアルビオンに旅行？ 一体、何を見物するつもりだい？」

「そんな事、あなたに言う必要はないわ」

「子供のくせに、随分と強がるじゃねえか」

ルイズはふんと鼻を鳴らした。空賊は笑うと、皿と水の入ったコップを寄越した。金木はそれを受け取ると、ルイズの元へと持っている。

「はい」

「あんな連中の寄越したスープなんか飲めないわ」

ルイズはそっぽを向いたが、そんな彼女に向かってワルドが口を開く。

「食べないと、体がもたないぞ」

そう言われ、ルイズはしぶしぶといった顔でスープの皿を手を取った。そしてスープを飲もうとしたが、床にしゃがみこんだままの金木

に気づいて言う。

「あんたも食べなさい。昨夜から何も食べてないじゃない」

「僕は平気だから、食べて良いよ」

金木は笑みを浮かべながら答えた。それはただ単純に半喰種だから食べたくないという理由でだったのだが、どうやらルイズはそれを金木の気遣いと思つたらしい。彼女は申し訳なきような顔で「ごめんね」と呟いてから、ワルドと一緒にスープを食べ始めた。

スープを食べ終わると、する事が無くなった。ワルドは壁に背中をつけて、何や物思いにふけつていいる。金木とルイズは先ほどと同じように、床にしゃがみこんでいた。

しばらくそうしていると、再びドアが開いた。今度はやせぎすの空賊だった。空賊はじろりと三人を見回すと、楽しそうに言った。

「おめえらは、もしかしてアルビオンの貴族派かい？」

ルイズ達は何にも答えない。

「おいおい、だんまりじゃ分からねえよ。でも、そうだったら失礼したな。俺達は、貴族派の皆さんのおかげで、商売させてもらつてるんだ。王党派に味方しようとする酔狂な連中がいてな。そいつらを捕まえる密命を帯びてるのさ」

「じゃあ、この船はやっぱり反乱軍の軍艦なのね？」

「いやいや、俺達は雇われてるわけじゃあねえ。あくまで対等な関係で協力し合つてるのさ。まあ、おめえらには関係ねえ事だがな。で、どうなんだ？ 貴族派なのか？ そうだったら、きちんと港まで送つてやるよ」

金木は顎に手をつきながら、この男の問いに対する答えを考える。貴族派だと言えばこの場で自分以外の全員が殺されずに済むし、港まで運んでもらう事もできる。嘘をつくのはあまり好ましい方法とは言えないが、この際背に腹は代えられないだろう。

そう考えて金木が口を開こうとすると、ルイズがそれを遮るかのよように、真っ向からその空賊を見据えて告げた。

「誰が薄汚いアルビオンの反乱軍なものですか。馬鹿言っちゃいけないわ。私は王党派への使いよ。まだ、あんた達が勝ったわけじゃない

んだから、アルビオンは王国だし、正統なる政府はアルビオンの王室ね。わたしはトリステインを代表してそこに向かう貴族なのだから、つまりは大使ね。だから、大使としての扱いをあんた達に要求するわ」

金木は思わず丸くしてルイズを見つめた。そしてルイズの言葉を聞いて、空賊が笑う。

「正直なのは確かに美德だが、お前達ただじゃ済まないぞ」

「あんた達に嘘ついて頭を下げるぐらいなら、死んだ方がマシよ」

そう言うと、空賊は笑みを消してルイズ達に言った。

「頭に報告してくる。その間にゆっくり考えるんだな」

そう言って、空賊は部屋から去って行った。金木はルイズを見てから、ぼそりと呟く。

「……いくらなんでも、まずかったんじゃないの？」

金木の言葉にルイズはふんと鼻を鳴らし、

「最後の最後まで、わたしは諦めないわ。地面に叩きつけられる瞬間まで、ロープが伸びると信じるわ」

「嘘ぐらいは、ついた方が良かったんじゃないの？」

「それとこれとは話は別。嘘なんかつけるもんですか、あんな連中に！」

するとワルドが寄ってきて、そんなルイズの肩を叩いた。

「良いぞルイズ。さすがは僕の花嫁だ」

そんな二人を見て、金木は思わずため息をついた。

「別に僕は良いけど……。ルイズちゃん、君が死んじゃったら任務はどうするの？ まさか、本当に最後にロープが伸びてきてくれると思ってるの？ もしも君が死んで任務が失敗したら、トリステインはたった一国でアルビオンと戦わなくちゃなくなるよ。そこまで考えてたの？」

「そ、それは……」

金木の正論にたちまち、ルイズは言葉に詰まった。案の定、そこまで考えてなかったようだ。金木はもう一度ため息をついてから、

「こんな事は言いたくないけど、もうちよつと状況をよく見て考えよ

うよ。君には覚悟が足りなすぎる」

「うぐぐ……」

何か言い返したそうだったが、正論なので何も言い返す事ができない。そんなルイズを庇うためか、ワルドが金木に言う。

「僕の花嫁をいじめないでくれないかい？ それに、今の僕達じゃ状況をよく見てもできる事は何もないだろう」

「……本当にそう思っているなら、魔法衛士隊の質を疑いますよ」

何？ とワルドが顔をしかめた直後、金木の目が鋭くなる。右手の親指を折り曲げて人差し指で押してバキリと音を鳴らすと、扉の方を睨みつけるように見つめる。

その直後、扉が開いた。先ほどのやせぎすの空賊だ。

「頭が呼び……」

そう言いかけた瞬間、金木は空賊との距離を素早く詰めて腹に強烈な拳を食らわせる。それに空賊が腹をおさえてうずくまろうとすると、金木が空賊の首を掴んで言った。

「騒ぐな。少しでも声を出したら、あなたの首をへし折る」

ぐぐぐ……と首を掴む手に力が入ると、山賊はこくこくと頷きながら大人しくなった。それから振り返って、呆然としているワルドとルイズの方を見ると、静かに言う。

「ここから脱出しましょう」

それから金木達はデルFRINGERとワルドとルイズの杖がある部屋まで空賊を案内させ、武器を取り戻した。途中で他の空賊達に会わなかったのはそういう道を選んで通ったり、空賊を脅して通らなければいけない道にいる空賊の仲間を別の場所に行かせたり、隙について金木が気絶させたりしたためだ。

自分達の武器を取り戻すと、ワルドが金木に言った。

「杖は取り戻したが、これからどうするんだい？ ここは空の上だよ」  
「空賊達の頭の上に行きます。その人を脅せば、港まで連れて行ってくれるでしょう」

「そんなにうまくいくかしら……。護衛もいるでしょうし、メイジも

いるんでしよう?」

「すぐに決着をつけるよ。それより、喋ってる暇はないよ。早く行かなくちゃ」

「どうしてだい?」

ワルドが尋ねると、金木は怯えている山賊にデルフの切っ先を突きつけながら、

「この人は僕達を頭の元まで案内するはずだった人です。その人がいつまでも帰ってこなかったら、何かあったと考える方が自然ですよね? そうなったら、必ず他の空賊がやってくる。その前に、頭の元まで行く必要があるんです」

その後、空賊に無理やり案内させて辿り着いた先は、立派な部屋だった。後甲板の上に設けられたところが、頭……この空賊船の船長室であるらしい。空賊から話を聞くと、部屋の中には豪華なダイナーテーブルがあり、一番上座に頭が腰かけているという事だ。

金木はデルフの柄で山賊の頭を殴って気絶させると、襲撃の作戦を練った。

「僕が頭との距離を一気に詰めて彼を脅します。その間、ワルドさんはルイズちゃんを護ってあげてください。敵にメイジがいるかもしれないですが、スクウェアクラスのあなたなら大丈夫ですよね?」

「ああ。任せておいてくれ」

ワルドが頷く隣で、ルイズは一人不安そうな表情をしていた。先ほど空賊の前で啖呵を切ったのに、自分一人だけ何もできないというのが、彼女には歯がゆかった。これでは、何のためにここにいるのか分からない。

そんなルイズの頭を、金木が優しくなでてから安心させるように告げた。

「大丈夫だよ。君は、絶対に護るから」

ルイズは相変わらず不安げな表情を浮かべながらも、こくりと頷いた。金木は静かにデルフを抜くと、左手のルーンが輝く。それからワルドとルイズを一旦見まわしてから、扉を半喰種の力で一気に蹴り破った。

扉が破られると同時に、金木は半喰種の力とルーンの力を開放して部屋の中を全速力で駆ける。周りで驚愕の表情を浮かべている空賊達を無視し、デイナーテーブルを踏み越えると、上座に座っている空賊の頭の首に刃を放つ。

デルフの刃が首を切り飛ばすと思われた直前、デルフがぴたりと止まった。

「動く事も、魔法を唱える事も許しません。その瞬間、あなたの首を飛ばします」

金木がそう言ったのは、空賊の頭が大きな水晶のついた杖をいじっていたからだ。どうやら、こんな格好だがメイジらしい。デルフの刃は頭の首の皮一枚を切り裂くか切り裂かないかという非常に絶妙な位置で止まっており、金木がその気になれば頭の首を文字通り飛ばすだろう。

その一方、頭は動揺を浮かべる事もなく、ワルドに護られているルイズに視線を向けた。

「……部下から聞いたが、お前ら王党派を名乗ったらしいじゃねえか」「ええ、名乗ったわ」

「何しに行くんだ？ あいつらは、明日にでも消えちまうよ」「あんたらに言う事じゃないわ」

棘のある声でルイズが答えると、剣を向けられているというのに歌うような楽しげな声で頭が言った。一瞬何らかの罠か？ と金木は思ったが、頭からは何の敵意も悪意も感じられない。

「貴族派につく気はないかね？ あいつらは、メイジを欲しがっている。たんまり礼金も弾んでくれるだろうさ」

「死んでもイヤよ」

変わらぬルイズがそう告げると、頭が再びその口を開く。

「もう一度言う。貴族派につく気はないかね？」

ルイズがきつと顔を上げた。腕を腰に当てて胸を張り、口を開こうとした瞬間、金木が頭に言い放つ。

「ないと言ったはずですが？」

「……貴様はなんだ？」



頭がじろりと金木を見ると、金木は頭を睨み付けながら告げた。

「彼女の使い魔です」

「使い魔？」

コクリ、と金木が頷くと、頭は何故か大声で笑った。

「トリステインの貴族は、気ばかり強くつてどうしようもないな。まあ、どこぞの国の恥知らずどもよりは、何百倍もマシだがね」

頭はそう言いながら、わっはっはっはと笑い続ける。金木達は、頭の豹変ぶりに戸惑い、顔を見合わせた。それでもデルフは変わらずに、頭の首に添えられていたが。

「失礼した。貴族に名乗らせるなら、こちらから名乗らなくてはな。だからすまないが、剣を納めてくれるかい？ 君と戦うつもりはない」

そう言うってから頭は、杖をぽいと床に捨てた。金木は戸惑いながらもデルフを引き、一步後ろに下がる。

そして周りに控えた空賊達が、一斉に直立した。

頭は縮れた黒髪をはいだ。なんと、それはカツラだったのだ。眼帯を取り外し、作り物だったらしいひげをびりつとはがした。現れたのは、凛々しい金髪の若者だった。

「わたしはアルビオン王立空軍大将、本国艦隊司令長官……、本国艦隊と言つても、すでに本艦『イーグル』号しか存在しない、無力な艦隊だがね。まあ、その肩書よりこちらの方が通りが良いだろう」

そう言うってから若者は居住まいをただし、威風堂々、名乗りを上げた。

「アルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ」

## 第十二話 哀別

突然の皇太子の出現に、ルイズは口をあんどりと開け、金木も目を大きく見開いている。ワルドは興味深そうに、皇太子を見つめていた。

ウエールズはにつこりと魅力的な笑みを浮かべると、ルイズ達に席を勧めた。

「アルビオン王国へようこそ。大使殿。さて、御用の向きをうかがおうか」

あまりの事態に、ルイズ達は口がきけなかった。ただぼけつと、馬鹿みたいはその場に突っ立っている事しかできない。

「その顔は、どうして空賊風情に身をやつしているのだ？ といった顔だね。いや、金持ちの反乱軍には続々と補給物質が送り込まれる。敵の補給路を絶つのは戦の基本。しかしながら、堂々と王軍の軍艦旗を掲げたのでは、あつという間に反乱軍の船に囲まれてしまう。まあ、空賊を装うのもいたしかたない」

ウエールズはイタズラっぽく笑いながら言った。

「いや、大使殿にはまことに失礼を致した。しかしながら、君達が王党派という事が中々信じられなくてね。外国に我々の味方の貴族がいるなどとは、夢にも思わなかった。君達を驚かせるような真似をして済まない」

そこまで言っても、ルイズは口をぽかんと開けたままだった。いきなり目的の王子に出会ってしまったので、心の準備ができていないのだろう。

一方、ルイズより先に我を取り戻した金木は険しい声でウエールズに尋ねる。

「……失礼ですが、あなたは本当にウエールズ皇太子なんですか？」

その質問にワルドは驚いた表情を浮かべるが、当の本人であるウエールズは特に気分を害した様子もなく、穏やかな表情で金木の質

問に答える。

「まあ、先ほどまでの顔を見れば無理もない。僕はウエールズだよ。正真正銘の皇太子さ。なんなら証拠をお見せしよう」

ウエールズはルイズの指に光る水のルビーを見つめた。自分の薬指に光る指輪を外すと、未だ呆然としているルイズに尋ねる。

「君のその指輪を貸してもらっても良いかな？」

ルイズは少しの間迷っているような表情を浮かべていたが、やがてゆっくりと頷くと、ウエールズに恭しく近づく。それを確認するとウエールズはルイズの手を取り、水のルビーに近づけた。二つの宝石は共鳴しあい、虹色の光を振りまく。

「この指輪は、アルビオン王家に伝わる風のルビーだ。君が嵌めているのは、アンリエッタが嵌めていた水のルビーだ。そうだね？」

その質問に、ルイズは頷いた。

「水と風は虹を作る。王家の間にかかる虹さ。これで、良いかい？」

「……はい。失礼しました」

謝罪の言葉を告げながら、金木は頭を下げた。

万が一目の前のウエールズが偽物で、あの指輪が本物のウエールズ皇太子から奪い取ったものとしても、今ルイズが持っている水のルビーをアンリエッタが持っていた事や、指輪の間にかかる虹の事までは知らないはずだ。何故ならそれは、トリステイン王家とそれに関わる者達しか知らない情報なのだから。その情報を目の前の男性が答えたという事は、この人物が本物のウエールズ皇太子だという事を意味している。

すると、ウエールズは頭を下げた金木を見ながら穏やかな声で尋ねる。

「そう言えば、名前を聞いていなかったね。君の名前は？」

「僕は金木研です。こっちの二人は、トリステイン王国魔法衛士隊の隊長のワルドさんに、僕の主のルイズちゃんです」

「珍しい名前だな……。そうか、カネキというのだね」

ウエールズはしばらく金木を観察するように見てから、どこか悲しげな笑みを浮かべた。

「先ほどの動きは見事なものだったよ。君のような人間が僕の軍にもいてくれたら、このようなみじめな今日を迎える事もなかったろうに。大使殿、君は良き使い魔を得たね」

ウエールズの賛辞に、ルイズは思わず顔を赤くした。それから金木は、ウエールズの顔を見ながら自分達の旅の目的を説明する。

「言うのが遅れてしまいましたけど、僕達がアルビオンに向かおうとしていたのは、あなたにアンリエッタ姫殿下から預かった密書を届けるためだったんです」

「密書？」

はい、と言いながら金木はルイズに視線を向けた。ルイズは胸のポケットからアンリエッタの手紙を取り出すと、一礼してウエールズに手渡す。

ウエールズは愛しそうにその手紙を見つめると、花押に接吻した。そして慎重に、封を開き、中の便箋を取り出して読み始める。

真剣な顔で手紙を読んでいたが、そのうちに顔を上げた。

「姫は結婚するの？ ああ、愛らしいアンリエッタが、わたしの可愛い……従妹は」

ワルドは無言で頭を下げ、肯定の意を表した。再びウエールズは手紙に視線を落とすと、最後の一行まで読んでから微笑んだ。

「了解した。姫は、あの手紙を返してほしいとこの私に告げている。何より大切な、姫からもらった手紙だが、姫の望みは私の望みだ。そのようにしよう」

それを聞いて、ルイズの顔が輝いた。

「しかしながら、今手元にはない。ニューカッスルの城にあるんだ。姫の手紙を、空賊船に連れて来るわけにはいかぬのでね」

ウエールズは笑いながら言葉を続けた。

「多少面倒だが、ニューカッスルまで足労願いたい」

金木達を乗せた軍艦、『イーグル』号は浮遊大陸アルビオンのジグザ

グした海岸線を、雲に隠れるようにして航海した。三時間ほど進むと、大陸から突き出た岬が見えた。

岬の突端には、高い城がそびえている。

ウエールズは後甲板に立った金木達に、あれがニューカッスルの城だと説明した。しかしイーグル号はまっすぐにニューカッスルに向かわずに、大陸の下側に潜り込むような進路を取った。

「何故、下に潜るのですか？」

ウエールズは黙って城の遙か上空を指差した。遠く離れた岬の突端の上から巨大な船が、降下してくる途中だった。慎重に雲中を後悔してきたので、向こうにはイーグル号は雲に隠れて見えないようだった。

「あれは……もしかして、貴族派の？」

金木の問いに、ウエールズはああ、と肯定の言葉を発する。

本当に巨大、としか形容できないまがましい巨艦だった。長さはイーグル号の優に二倍はある。帆を何枚もはためかせ、ゆるゆると降下したかと思うと、ニューカッスルの城めがけて並んだ砲門を一斉に開いた。その際の振動が、イーグル号にまで伝わってくる。砲弾は城に着弾し、城壁を砕いて小さな火災を発生させた。

「かつての本国艦隊旗艦、『ロイヤル・ソヴリン』号だ叛徒共が手中に収めてからは、『レキシントン』号と名前を変えている。奴らが初めて我々から勝利をもぎ取った戦地の名だ。よほど名誉に感じているらしいな」

ウエールズは微笑を浮かべながら言った。

「あの忌々しい艦は、空からニューカッスルを封鎖しているのだ。あのように、たまに嫌がらせのように城に大砲ぶっ放していく」

金木は雲の切れ目に遠く覗く、巨大戦艦を見つめた。無数の大砲が舷側から突き出て、艦上にはドラゴンが舞っている。

「備砲は両舷合わせ、百八門。おまけに竜騎兵まで積んでいる。あの艦の反乱から、全てが始まった。因縁の艦さ。さて、我々のフネはあんな化け物を相手にできるわけもないので、雲中を通り、大陸の下からニューカッスルに近づく。そこに我々しか知らない秘密の港があ

るのだ」

雲中を通って大陸の下を通ると、辺りは真っ暗になった。大陸が頭上にあるために、日が差さないのだ。おまけに雲の中であるので、視界がゼロに等しく、簡単に頭上の大陸に座礁する危険があるため、反乱軍の軍艦は大陸の下には決して近づかないのだ、とウエールズは金木達に説明した。ひんやりとした湿気を含んだ冷たい空気が、金木達の頬をなぶる。

「地形図を頼りに、測量と魔法の明かりだけで航海する事は王立空軍の航海士にとっては、なに、造作もない事なのだが」

貴族派、あいつらは所詮空を知らぬ無粋者さとウエールズは笑った。

しばらく航行すると、頭上に黒々と穴が開いている部分に出た。マストに灯した魔法の明かりの中、直径三百メートルほどの穴が、ぽっかりと開いている様は壮観だった。

「一時停止」

「一時停止、アイ・サー」

掌帆手が命令を復唱する。ウエールズの命令でイーグル号は裏帆を打つと、しかるのちに暗闇の中でもきびきびした動作を失わない水兵達によって帆をたたみ、ぴたりと穴の真下で停船した。

「微速上昇」

「微速上昇、アイ・サー」

ゆるゆるとイーグル号は穴に向かって上昇していく。イーグル号の航海士が乗り込んだマリー・ガラント号が後に続く。

その光景を見て、ワルドが頷いた。

「まるで空賊ですな。殿下」

「まさに空賊なのだよ。子爵」

穴に沿って上昇すると、頭上に明かりが見えた。そこに吸い込まれるように、イーグル号が上がっていく。

眩いばかりの光にさらされたかと思うと、艦はニューカッスルの秘密の港に到着していた。そこは真っ白い発光性のコケに覆われた、巨

大な鍾乳洞の中だった。岸壁の上に、大勢の人が待ち構えている。イーグル号が鍾乳洞の岸壁に近づくと、一斉にもやいの縄が飛んだ。水兵達はその縄をイーグル号にゆわえつける。艦は岸壁に引き寄せられ、車輪のついた木のタラップががらごろと近づいてきて、艦にぴつたりと取り付けられた。

ウェールズはルイズ達を促して、タラップを降りた。

すると背の高い、年老いた老メイジが近寄ってきて、ウェールズの労をねぎらった。

「ほほ、これはまた、大した戦果ですな。殿下」

老メイジはイーグル号に続いてぽっこりと鍾乳洞の中に現れたマリー・ガラント号を見て、顔をほころばせた。

「喜べ、パリー。硫黄だ、硫黄！」

ウェールズがそう叫ぶと、集まった兵隊から歓声が上がった。

「おお！ 硫黄ですと！ 火の秘薬ではござらぬか！ これで我々の名誉も、守られるというものですな！」

老メイジは、そう言うとおいおいと泣き始めた。

「先の陛下よりお仕えて六十年……、こんな嬉しい日はありませんぞ、殿下。反乱が起こってからは、苦汁を舐めっぱなしでありましたが、なに、これだけの硫黄があれば……」

「王家の誇りと名誉を、叛徒共に示しつつ、敗北する事ができるだろう」

「栄光ある敗北ですな！ この老骨、武者震いがいたしますぞ。して、ご報告なのですが、叛徒共は明日の正午に、攻城を開始するとの旨、伝えて参りました。まったく、殿下が間に合って良かったですわい」

「してみると間一髪とはこの事！ 戦に間に合わぬは、これ武人の恥だからな！」

ウェールズ達は、心底楽しそうに笑いあっている。ルイズは、敗北という言葉に顔色を変えた。つまり、死ぬという事だ。この人達は、それが怖くないのだろうか。

「して、その方達は？」

パリーと呼ばれた老メイジが、ルイズ達を見てウエールズに尋ねた。

「トリスティンからの大使殿だ。重要な要件で、王国に参られたのだ」  
パリーは一瞬、滅び行く王政府に大使が一体何の用なのだ？　と言いたそうな顔つきになったが、すぐに表情を改めるとルイズ達に微笑んだ。

「これはこれは大使殿。殿下の侍従を仰せつかっておりまする、パリーでございます。遠路はるばるようこそこのアルビオン王国へいらつしやつた。たいしたもてなしはできませんが、今夜はささやかな祝宴が催されます。ぜひとも出席くださいませ」

ルイズ達はウエールズに付き従い、城内の彼の居室へと向かった。城の一番高い天守の一角にあるウエールズの居室は、王子の部屋とは思えないほど質素だった。

木でできた粗末なベッドに、イスとテーブルが一组。壁には戦の様子を描いたタペストリーが飾られている。

ウエールズが椅子に腰かけて机の引き出しを開くと、そこには宝石がちりばめられた小箱が入っていた。さらにウエールズは先に小さな鍵のついたネックレスを外すと、小箱の鍵穴に鍵を差し込んで箱を開けた。蓋の内側には、アンリエッタの肖像が描かれている。

ルイズ達はその箱を覗き込んでいる事に気づいたウエールズは、はにかみながら言った。

「宝箱でね」

中には一通の手紙が入っていた。どうやらそれが王女のものであるらしい。ウエールズはそれを取り出して、愛しそうに口づけると開いてゆつくりと読み始めた。何度もそうやって読まれたらしい手紙は、すでにボロボロの状態になっていた。

読み返すと、ウエールズは再びその手紙を丁寧にたたみ、封筒に入れるとルイズに手渡した。

「これが姫からいただいた手紙だ。この通り、確かに返却したぞ」



「ありがとうございます」

ルイズは深々と頭を下げると、その手紙を受け取った。

「明日の朝、非戦闘員を乗せたイーグル号が、ここを出港する。それに乗って、トリステインに帰りなさい」

ウエルズがそう言うが、ルイズからの返事はない。彼女はその手紙をじっと見つめた後、決心したように口を開いた。

「あの、殿下……。先ほど、栄光ある敗北とおっしゃっていましたが、王軍に勝ち目はないのですか？」

ルイズが躊躇うように尋ねると、アルビオンの皇太子はあつさりと答えた。

「ないよ。我が軍は三百。敵軍は五万。万に一つの可能性もあり得ない。我々にできる事は、はてさて、勇敢な死にざまを連中に見せる事だけだ」

それを聞いて、ルイズは俯いてしまった。

「殿下の、討ち死になさる様も、その中には含まれるのですか？」

「当然だ。わたしは真つ先に死ぬつもりだよ」

彼のその様子には、動揺した素振りがまったく無い。それが今のこの場を、まるで芝居の中の出来事のように見せる。だが芝居の中の出来事と決定的に違うのは、人が本当に死ぬという事だ。

ルイズは深々と頭を垂れて、ウエルズに一礼した。今の彼女にはウエルズに、どうしても言いたい事があったのだ。

「殿下……。失礼をお許しく下さい。恐れながら、申し上げたい事がございます」

「なんなりと、申してみよ」

「この、ただいまお預かりした手紙の内容、これは……」

「ルイズちゃん、いくら何でもそれは……」

ルイズに、それまで黙っていた金木が声をかけた。さすがにそれは、この任務に首を突っ込み過ぎていると判断したからだ。任務を果たさなければならぬ立場にいる以上、私情を挟むのは任務の達成に支障をきたす恐れがある。しかしルイズはきつと顔を上げると、ウエルズに尋ねた。

「この任務をわたくしに仰せつけられた際の姫様のご様子、尋常ではございませんでした。そう、まるで、恋人を案じるような……。それに、先ほどの小箱の内蓋には、姫様の肖像が描かれておりました。手紙に接吻なされた際の殿下の物憂げなお顔といい、もしや、姫様とウエールズ皇太子は……」

ルイズの指摘に、ウエールズはにっこりと微笑んだ。目の前の少女が何を言いたいのか察したのである。

「君は、従妹のアンリエッタと、この私が恋仲であったと言いたいのかね？」

その言葉に、ルイズは頷いた。

「そう想像いたしました。とんだご無礼を、お許しください。してみると、この手紙の内容とやらは……」

ウエールズは額に手を当てて、言おうか言うまいか少し悩んだそぶりを見せた後に言った。

「恋文だよ。君が想像している通りのものさ。確かにアンリエッタが手紙で知らせたように、この恋文がゲルマニアの皇室に渡ってはまずい事になる。なにせ、彼女は始祖ブリミルの名において、永久の愛を私に誓っているのだからね。知っての通り、始祖に誓う愛は、婚姻の際の誓いでなければならぬ。この手紙が白日の下にさらされたならば、彼女は重婚の罪を犯す事になってしまふであろう。そうなれば、なるほど同盟相成らず。トリステインは一国にて、あの恐るべき貴族派に立ち向かわねばなるまい」

「とにかく姫様は、殿下と恋仲であらせられたのですかね？」

「昔の話だ」

ルイズは熱っぽい口調で、ウエールズに言った。

「殿下、亡命なされませ！ トリステインに亡命なされませ！」

ワルドが寄ってきて、すつとルイズの肩に手を置く。だがルイズの剣幕はおさまらない。

「お願いでございます！ わたし達と共に、トリステインにいらしてくださいませ！」

「それはできませんよ」

ウエールズは笑いながらそう答えた。

「殿下、これはわたくしの願いでございませぬ！ 姫様の願いでございませぬ！ 姫様の手紙には、そう書かれておりませんでしたか？ わたくしは幼き頃、恐れ多くも姫様のお遊び相手を務めさせていただきました！ 姫様の気性は大変良く存じております！ あの姫様にご自分の愛した人を見捨てるわけがございません！ おっしゃってくださいいな、殿下！ 姫様は、たぶん手紙の末尾であなたに亡命をお勧めになっているはずですよ！」

しかしそれを否定するかのようには、ウエールズは首を横に振った。

「そのような事は、一行も書かれていない」

「殿下！」

ルイズがウエールズに詰め寄った。

「私は王族だ。嘘はつかぬ。姫と私の名誉に誓って言うが、ただの一行たりとも私に亡命を勧めるような文句は書かれていない」

ウエールズは苦しそうな表情を浮かべながらルイズに言った。その口ぶりから、ルイズの指摘が当たっていたことがうかがえる。

「アンリエッタは王女だ。自分の都合を、国の大事に優先させるわけがない」

それを聞いて、ルイズはウエールズの意味が果てしなく固いを感じ取った。ウエールズはアンリエッタを庇おうとしているのだ。臣下のものに、アンリエッタが情に流された女だと思われるのが嫌なのだろう。それほどまでに、彼はアンリエッタの事を愛しているのだ。

ウエールズは、優しくルイズの肩を叩いた。

「君は正直な女の子だな、ラ・ヴァリエール嬢。正直で、まっすぐで、良い目をしている」

ルイズは、寂しそうに俯いた。

「忠告しよう。そのように正直では大使は務まらぬよ。しっかりしなさい」

ウエールズは微笑んだ。白い歯が見える、魅力的な笑みだった。

「しかしながら、亡国への大使としては適任かもしれぬ。明日に滅ぶ政府は、誰より正直だからね。何故なら、名誉以外に守るものが他に

無いのだから」

それから机の上に置かれた、水が張られた盆の上に載った針を見つめた。形からして、どうやらそれが時計であるらしい。

「そろそろ、パーティの時間だ。君達は、我らが王国が迎える最後の客だ。是非とも出席してほしい」

金木達は部屋の外に出た。ワルドは残って、ウエールズに一礼した。

「まだ、何か御用が御ありかな？ 子爵殿」

「恐れながら、殿下にお願いしたい議がございます」

「なんなりとかがおう」

ワルドはウエールズに、自分の願いを語って聞かせた。ワルドの願いを聞いて、ウエールズはにっこりと笑った。

「なんともめでたい話ではないか喜んでそのお役目を引き受けよう」

パーティは、城のホールで行われた。簡易の玉座が置かれ、玉座にはアルビオンの王、年老いたジェームズ一世が腰かけ、集まった貴族や臣下を目を細めて見守っていた。

明日で自分達は滅びるというのに、随分と華やかなパーティだった。王党派の貴族達はまるで園遊会のように着飾り、テーブルの上にはこの日のためにとっておかれた、様々なご馳走が並んでいる。

金木達は会場の隅に立ってこの華やかなパーティを見つめていたが、こんな時にやってきたトリスティンからの客珍しいらしく、王党派の貴族達がかわるがわるルイズ達の元へとやってきた。貴族達は悲観にくれたような事は一切言わず、三人に明るく料理を勧め、酒を勧め、冗談を言ってくる。

そして最後には、アルビオン万歳！ と怒鳴って去って行くのだった。

不意に金木が横を見ると、彼女は滅亡を前にしながらも明るく振る舞うこの場の雰囲気にならねず、外に出て行ってしまった。

金木がしばらくその場に立っていると、座の真ん中で歓談していた

ウエールズが近寄ってきた。

「やあ、カネキ君。楽しんでいるかね？」

「ええ、まあ……」

金木は苦笑いを浮かべながら肯定すると、一瞬迷ったような表情を浮かべてから、ウエールズに尋ねた。

「あの……」一つ聞いていいですか？」

「何だい？」

「あなた達は、死ぬのが怖くないんですか？」

金木がそう言うと、ウエールズは笑った。

「案じてくれてるのか！ 私達を！ 君は優しい青年だな」

「いいえ……。正直言つて、護りたいものを護るために、死ぬかもしれない場所に行く気持ちは僕にも分かります。僕も前に一度、同じような事をしましたから」

金木が言っているのは、芳村店長達を助けるためにあんていくへ向かった時の事だ。あの時金木は芳村達と戦闘を繰り広げているCCGの戦力の大きさを十分に理解しながらも、芳村達を助けるために、自分を必死に止めようとした月山を倒し、たった一人であんていくへと向かったのだ。

だが、

「だけどその時の僕は死ぬためじゃなくて、大切な人達と一緒に逃げるために戦場に向かったんです。でもこの人達は違う。こんな言い方は酷いかもしれないけど、あなた達は死ぬために戦場に向かおうとしている。死ぬのが怖くないんですか？」

月山の制止を聞き、それでも芳村達を助けるためにあんていくへと向かい、東京の地下で傷つきながらも有馬と戦った金木だが、それは何もただ単に死ぬために戦ったわけではない。芳村達と、大切な人達を生きるために金木はあの時戦ったのだ。だからこそ、絶対に死ぬのが分かっているのに戦場へと向かおうとしているウエールズ達の気持ちだが、金木にはよく理解できていなかった。

……実は、金木が芳村達の元へと向かい、東京の地下で有馬と出会った時、金木の心にはある感情があつたのだが、今の金木はまだそ

れに気づいていない。彼がその感情に気づくのは、まだ当分先の話になる。

金木の言葉を聞くと、ウエールズは穏やかな笑みを浮かべたまま言った。

「そりゃあ、怖いさ。死ぬのが怖くない人間なんているわけがない。王族も、貴族も、平民も、それは同じだろう」

「じゃあ、どうしてですか？」

「守るべきものがあるからだ。守るべきものの大きさが、死の恐怖を忘れさせてくれるのだ。君もそうだったんじゃないのかね？」

金木は一瞬言葉を詰まらせたが、すぐにウエールズに尋ねる。

「一体、何を守るんですか？ 名誉ですか？ それとも、誇りですか？」

それは……あなたの大切な人の命以上に、大切なものなんですか？」

珍しく金木が語気を強めて言うと、ウエールズは遠くを見るような目で語り始めた。

「我々の敵である貴族派『レコン・キスタ』は、ハルケギニアを統一しようとしている。『聖地』を取り戻すという、理想を掲げてな。理想を掲げるのは良い。しかし、あやつらはそのために流されるであろう民草の血の事を考えぬ。荒廃するであろう、国土の事を考えぬ」

「レコン・キスタ……それが敵の名前なんですか？」

「ああ、そうだ」

ウエールズの返答を聞きながら、金木は顎に手をつけてその名称について考え始める。

実は金木の世界にもそれに似たような名前があり、正式名称はレコンキスタと言うのだ。とは言っても実際それは組織の名前ではなく、はるか昔に行われたキリスト教国によるイベリア半島の再征服活動の名称である。名前はやや違うが、どうやらレコン・キスタとやらも聖地という場所の奪回を目的としているらしい。目的の共通性から考えると、似たような名前が付けられるのも当然という事なのだろう。

考え込んでいる金木に気づいていないウエールズは、さらに話を続

ける。

「そして我らは勝てずとも、せめて勇氣と名譽の片鱗を貴族派に見せつけ、ハルケギニアの王家達は弱敵ではない事を示さねばならぬ。奴らがそれで『統一』と『聖地の回復』などという野望を捨てると思えぬが、それでも我らは勇氣を示さねばならぬ」

「……どうしてですか？」

金木が尋ねると、ウエールズは毅然として告げた。

「何ゆえか？ 簡単だ。それは我らの義務なのだ。王家に生まれた者の義務なのだ。内憂を払えなかった王家に、最後に課せられた義務なのだ」

そんな事を真剣に語るウエールズの姿を見て、金木は自分にはもうこの人を止める事ができないと思った。

この青年は、強い信念を胸にして戦場へと向かおうとしている。その人間に何を言ったとしても、その行動を止める事など決してできない。かつて芳村達を必ず助けるといふ想いを胸にしてあんでいくへと向かった金木だからこそ、ウエールズの気持ち痛いほどによく分かった。

そして金木は、無駄だと知りながらもウエールズにこんなことを言う。

「……アンリエッタさんは、あなたを愛しています。手紙にだって、亡命して欲しいと書かれていたんじゃないですか？」

すると、ウエールズは何かを思い出すように微笑みながら言った。「愛するがゆえに、知らぬふりをせねばならぬ時がある。愛するがゆえに、身を引かねばならぬ時がある。私がトリステインへと亡命したならば、貴族派が攻め入る格好の口実を与えるだけだ」

ウエールズの言う事は正論だった。それを聞いて、金木はもうこの件に関しては何も言うまいと決めた。もうこの青年に何を言っても、彼は絶対にその志を止める事はない。それに何よりも、あんでいくへと向かう時様々な人の忠告を振り切って死地へと向かった自分に、そんな資格があるだなんて思えない。金木がぎゅつと拳を握ると、ウエールズは金木の肩を掴んで、まっすぐに目を見つめた。

「今言った事は、アンリエッタには告げないでくれたまえ。いらぬ心労は、美貌を害するからな。彼女は可憐な花のようだ。君もそう思うだろう?」

金木はこくりと頷いた。彼女には正直言つてあまり好感を持つていないが、彼女の容姿については確かに綺麗だと言える。それからウエルズは目をつむつて言った。

「ただ、こう伝えてくれたまえ。ウエルズは、勇敢に戦い、勇敢に死んでいったと。それで十分だ」

「……はい。必ず伝えます。……ただ」

「何だい?」

「……あなたには、もっと生きていて欲しかったです」

金木が悲しそうな口調で告げるとウエルズは一瞬呆気に取られたような表情を見せるが、すぐに微笑んでぽんぽんと金木の肩を叩いてから、座の中心へと戻つていった。

残された金木は、とりあえず休息を得るために近くにいた給仕にどこで寝れば良いのかを尋ねた。給仕に部屋の間所を教えてもらつてみると、突然後ろから肩を叩かれた。金木が振り向くと、そこにはワルドが立っていて、金木をじつと見つめていた。

「君に言つておかねばならぬ事がある」

「何ですか?」

「明日、僕とルイズはここで結婚式を挙げる」

あまりに想定外すぎるその言葉に、金木は思わず目を限界まで見開いた。

「こんな時に、ここでですか?」

「是非とも、僕達の婚姻の媒酌をあゝの勇敢なウエルズ皇太子にお願いしたくなつてね。皇太子も、快く引き受けてくれた。決戦の前に、僕達は式を挙げる」

それを聞いても金木は、何を考えているんだこいつはと言いたそうな目でワルドを見つめていた。いくら何でも明日戦場となるここで結婚式など、正気の沙汰とは思えない。トリスティンに帰つてからす



れば良いのに、性急すぎる。一体どういうつもりなのだ。

言いたい事がぐるぐると頭の中を回るが、金木はぐつと唇を噛み締めると、ワルドに苦々しい表情で尋ねた。

「あなたは、本当にルイズちゃんのを幸せを考えているんですか？」

「当然だ。そうでなければ、こんな事は言わない」

「……………」

金木はしばらくワルドを鋭い眼差しで睨んでいたが、やがて息をつくとこう言った。

「分かりました。どうぞご自由」

吐き捨てるようにそう告げると、金木はワルドから荒々しい足音を立てて去って行った。

それから金木は真っ黒な廊下を、明かりもつけずに歩いていた。

廊下の途中に、窓が開いていて月が見えた。月を見て、一人涙ぐんでいる少女がいる。長い、桃色がかったブロンドの髪。白い頬に伝う涙は、まるで真珠の粒のように見える。

少女……ルイズはついと振り向いてから、声を出した。

「誰？」

恐らく暗闇のせいで金木の顔が見えなかったせいだろう。金木が月明りの下に出ると、その顔を見て目頭をぐしぐしとぬぐった。ぬぐったが、ルイズの顔は再びふにやつと崩れた。金木が皿に近づくと、力が抜けたようにルイズは金木の体にもたれかかった。

「大丈夫？」

金木が心配そうな声をかけると、ルイズは金木の胸に顔を押し当ててぐしぐしと顔を押し付けてから、ぎゅつと金木の体を抱きしめる。金木はただ悲しそうな表情を浮かべながら、なすがままにされている。

泣きながら、ルイズは言った。

「嫌だわ……あの人達……、どうして、どうして死を選ぶの？ わけわかんない。姫様が逃げてって言うてるのに……、恋人が逃げてって言うてるのに、どうしてウェールズ皇太子は死を選ぶの？」

「大事なも守るためにだよ」

「何よそれ。愛する人より、大事なものがこの世にあるっていうの?」  
「あるからこそ、皇太子もみんなも戦うんだ」

「わたし、説得する。もう一度説得してみるわ」

「……無理だよ」

「どうしてよ」

「あの人達はもう止められない。それに君の仕事は、手紙をアンリエッタさんに届ける事でしょ? 仕事を投げ出しちゃだめだ」

ルイズはぽつりと呟くように言った。涙がぽろりとルイズの頬を伝った。

「……早く帰りたい。トリスティンに帰りたいわ。この国嫌い。嫌な人達と、お馬鹿さんでいっぱい。誰も彼も、自分の事しか考えていない。あの王子様もそうよ。残される人達の事なんて、どうでも良いんだわ」

「……それは、違うよ」

え? とルイズは涙で濡れた瞳で金木は見上げた。金木はルイズの鳶色の瞳をまっすぐ見つめながら、静かに彼女に言葉を紡ぐ。

「残される人達がどうでも良いなんて誰も思っていない。きつとみんな、死にたくないと思ってるし、愛する人達とこれからも一緒に過ごしたいと思ってる。……でも、自分達の大切な王様が、大切な場所が滅ぼされるのを指を咥えて見ていたくない。……何もできないのは、嫌だ。そう思っているからこそ、みんなは死ぬ事も覚悟して戦いに行くんだ」

「……よく、分かるわね。あの人達と会ってから、そんなに経ってないのに」

「分かるんだよ。僕も前に、似たような事をしたから」

え? とルイズは思わず驚いた表情を浮かべて金木の顔を見つめた。金木はルイズの体をそつと離すと、窓の近くまで歩み寄って夜空に浮かぶ月を見上げた。優しい光を放つ月を見ながら、金木はルイズにこの世界に来る前の事を語り始めた。

「ルイズちゃんに召喚される前の事なんだけど、僕の大切な人達とその人達がずっと守り続けてた場所が、ある巨大な組織に潰されようと

してたんだ」

「……その人達は、何か悪い事をしたの？」

ルイズが尋ねると、金木はふるふると首を横に振って、

「確かにその人達は過去に悪い事をたくさんしてきた。だけどその時はそういう事をやめて、静かに暮らしてたんだ。だけどその場所を潰そうとした人達は彼らの危険性を考えて、彼らとその場所を潰す作戦を立てていた。僕はその作戦の事を知って彼らに教えたんだけど、その人達を選んだのは彼らと戦う事だったんだ」

それを聞いて、ルイズの顔がこわばった。自分の知らない人達ではあるが、金木の話す大切な人達と、今自分が目にしてきた人達が同じように思えたのだろう。ルイズはかすれた声を出して、金木に尋ねた。

「そんな……どうして、戦ったの？ 逃げれば良かったのに……」

すると金木はふっと口元に笑みを浮かべた。見ているだけで胸が締め付けられるような、悲しい笑みだった。

「……きつとあの人達は、いつもどこかで『落としどころ』を求めているんだと思う。たくさんの命を奪って罪を犯したけど、ある人と出会って理解したんだ。……自分達のこれまでの、行為の意味を。だけど、いくら心を入れ替えたとしても、罪が消える事は決してない。だから罰を必要としてたんだ。だから彼らとその仲間達は、戦ったんだ。……そして、彼らが戦った理由はもう一つある。その理由は……僕達を逃がすためだったんだ」

「え……？」

「実はその場所は、僕と仲間達が働いていた場所でもあったんだ。その場所で戦ってたくさんの人が死ねば、その中に僕達がいた事なんて誰も分からない。そうすれば、仮に僕達が逃げたとしても、僕達に捜査の手は及ばない……。彼らはその事まで考えて、命を懸けて戦ったんだ」

金木は固く目をつむり、さらに拳を強く握りしめながら、話を続ける。

「立場は違うけど、この人達も、僕の大切な人達も心根はほとんど同

じなんだよ。強い覚悟を持った人達を止める事は、絶対にできない。たとえその相手が、自分の愛する人だとしても、ね」

「……でもカネキ。あんたはあの人達と同じような事をしたって言ったわよね？ それって、一体どういう事なの？」

「簡単な事だよ。僕も向かったんだ。その戦場に」

金木が告げた言葉に、ルイズが息を呑む音が聞こえたが、金木はあえてそれを無視した。

「……僕がしようとした行為が、僕の大切な人達の想いを無駄にしかねない事は分かった。だけど、それでも僕には我慢できなかった。僕の大切な人達が、その人達が守り続けてきた場所が、壊されるって事が。そして向かった戦場で僕はすごく強い人に殺されかけて……そして、ルイズちゃんに召喚された」

それを聞いて、ルイズは金木を召喚した時の事を思い出した。

金木は自分が彼がまったく知らない場所に召喚したと知った時、必死に自分を元の場所に帰してくれと頼みこんでいていた。自分はそれをただ混乱しているだけだと思っていたが……違ったのだ。

彼はなんとしてでも、元いた場所に帰る必要があったのだ。自分にとって大切な人を、大切な場所を守るために。だからこそ彼は元の場所に戻る事ができないと知った時、あれほどまでに落胆していたのだろう。

そして……金木の話が本当ならば、自分は金木が大切な人達を護る事ができたかもしれない可能性を奪い取ったのだ。自分が金木を召喚しなければ、彼は大切な人達の命を護る事ができたかもしれないというのに。その事実を知った時、ルイズは自分の指が震えているのを感じた。

「ルイズちゃん？」

そのルイズの様子に気づいた金木が声をかけて来るが、ルイズの頭の中は真っ白だった。悪意などまったくくない金木の話が、パーティーで騒ぐ貴族達を見て弱ったルイズの心を蝕んでいく。

（……何がメイジよ。何が貴族よ。わたしがした事は、自分の都合でカネキをこの世界に召喚して、こいつから大切な人を奪っただけじゃ

ない。魔法を使うどころか、そんな事しかできないなんて……)

そんな事を考えながら、ルイズは自分の右手をきつく握る。

本当に吊り合わない、と思う。薄々気づいていた事だが、今ここでようやくはつきりした。自分とこの使い魔は、正直言つて吊り合わない。

片や、スクウエアクラスの風のメイジすら圧倒するほどの戦闘能力を持つ使い魔。

片や、魔法を唱えようとするれば爆発ばかり起こる、魔法の成功率ゼロのメイジ。

十人が目にすれば、十人が口をそろえて言うだろう。そんな主人に、この使い魔はもつたいないと。

その事によく気付いたルイズは、口元に虚ろな笑みを浮かべた。

それから自分を心配そうに見つめている金木を見ると、その唇を開いた。

「カネキ。あんたは明日イーグル号に乗ってトリスティンに帰りなさい」

「え？」

言われた言葉の意味が分からず、金木は思わず間抜けな声を上げてからルイズに尋ねる。

「そ、それってどういう意味なの？」

「そのままの意味よ。あんたとわたしはここでお別れよ。あんたの話聞いて、よく分かったわ。あんたとわたしじゃ、吊り合わない。わたしじゃ、あんたの力にはなれない。ゼロのわたしじゃあ、あんたを助ける事ができないのよ……」

ルイズのその言葉は、金木に強い衝撃を与えていた。この世界に召喚されてまだ日が浅い金木ではあるが、今ルイズの様子が明らかにおかしい事だけは分かった。彼女は基本的に自尊心が強いので、自分を卑下するような事を言う事はまずない。だが今の彼女は明らかに自分を見下げるような事を言っている。それは、通常の彼女を知る金木からしてみれば十分に異常事態と言えた。

『この世の不利益は、全て当人の能力不足』……。まったく、その通りね。全然間違っちゃいない。あんたの言う通りよ、カネキ。どれだけ強がりも言っても、わたしに変えられる事なんて一つもない。それが十分に分かったわ。……。さ、早く行きなさい。あんたはもう、わたしの使い魔なんかじゃないわ」

そう言うのとルイズは、金木に背を向けた。顔が見えなくなったルイズに困惑しながらも、金木は必死に言葉を紡ぐ。

「……ルイズちゃん。でも、僕は……」

「——良いから早く行きなさいよ!! わたしはもう、あんたの主人でもなんでもないんだから!!」

「……………」

金木は唇を噛むと、ルイズに背中を向けてから悲しげに言った。

「……さよなら、ルイズちゃん。短い間だったけど、楽しかったよ」

そして、金木は暗闇の中へと消えて行った。それを見送る事も無く、黙って背を向けていたルイズは、両目からポロポロと大量の涙をこぼしながら呟いた。

「さよなら、カネキ。優しくとても強い、わたしの使い魔だった人」

## 第十三話 激闘

翌朝、鍾乳洞に作られた港の中、ニューカッスルから疎開する人々に混じって、金木はイーグル号に乗り込むために列に並んでいた。先日拿捕したマリー・ガラント号にも脱出する人々が乗り込んでいる。「……………」

「これからどうするんだ？ 相棒」

沈んだ表情を浮かべている金木に、デルフが声をかけた。

「……………」とりあえず、しばらくは元の世界に戻る方法を探そうと思う。だけど、そうするためには今の僕には足りないものが多すぎる。だからこれからどうすれば良いのかは、正直言つて僕もよく分からないよ……………」

要するに、まだ何も考えていないという事だった。しかしそれも無理のない事だろう。昨日まではまさかこんな事になるとは微塵も思っていなかったのである。そんな金木にこの広いハルケギニアで元の世界に戻る方法を探せというのは、いくらなんでも無茶苦茶な話だ。

「ならば傭兵でもやるかね」

「傭兵？」

「そうさ。剣一本、肩に担いで今日はこっちの戦場、明日はあっちの戦場と諸国を渡り歩くのさ。あちこち歩いてりゃ元の世界に帰る方法が分かるかもしれないねえだろ？ 実入りも悪くねえし、暴れるのは楽しいぜ？」

「……………」確かに、それも手段の一つではあるかもしれないね」

「だろ？ それに、傭兵なら文字通り食うには困らないだろ？ 相棒にとつては、まさに天職じゃねえか」

金具を鳴らして愉快気に笑うデルフだが、金木の表情は笑っていない。ただ先ほどよりもさらに元気が無くなっているような気がする。それを悟ったデルフは笑うのをやめると、申し訳なきような口調で金木に言った。

「……………」すまねえ。冗談にしてはタチが悪すぎたな」

「いや、良いよ。気にしてないから」

あはは……と顎をこすりながら金木が言うと、二人の間に沈黙が流れた。しばらく二人は何も言わずに黙っていたが、やがてデルフが唐突に口を開いた。

「ところで相棒、この前ちよつと思ひ出した事なんだが……」

「何？」

「相棒、『ガンダールヴ』とか呼ばれてたよな？」

「うん。伝説の使い魔だってね。それがどうしたの？」

「ああ、その名前なんだが……どうもこの前から頭の隅に引つかかっているんだ。何か思ひ出せそうな気もするんだが、随分昔の事なんだから……なかなか思ひ出せねえ……」

デルフはふむ、とかああ、とか何度も呟いた。

そんな事をしている内に、艦に乗り込む順番がようやく金木に回ってきた。タラップをのぼると、そこはさすが難民船でだけあってぎゅうぎゅうに人が詰め込まれていた。これでは甲板に座り込む事もできないだろう。

金木は舷縁に乗り出して、鍾乳洞を眺めた。今頃ルイズは、結婚式の真っ最中だろう。結婚相手のワールドに関しては、やや怪しい雰囲気がないでもなかったが……それも自分の気のせいだろう、と金木は結論付けた。

それが、大きな間違いであることに気づきもしないで。

その頃、始祖ブリミルの像が置かれた礼拝堂でウェールズ皇太子は新郎と神父の登場を待っていた。周りに他の人間は一人もいない。皆、戦の準備で忙しいのであった。ウェールズも、すぐに式を終わらせて戦の準備に駆けつけるつもりである。

ウェールズは皇太子の礼装に身を包んでいた。明るい紫のマントは王族の象徴、そしてかぶった帽子はアルビオン王家の象徴である七色の羽がついている。

扉が開き、ルイズとワールドが現れた。ルイズは何故か呆然と突っ立っている。ワールドに促され、ウェールズの前に歩み寄った。



ルイズは戸惑っていた。今朝方早く、いきなりワルドに起こされてここまで連れてこられたのだ。

戸惑いはしたが、ルイズは言われるがままに、半分眠ったような頭でここまでやってきた。昨日の金木との別れで気分が激しく落ち込んでいた上に、頭がこの状況を理解できていないせいだ。

ワルドはそんなルイズに「今から結婚式をするんだ」と言っ、アルビオン王家から借り受けた新婦の冠をルイズの頭にのせた。新婦の冠は魔法の力で永久に枯れぬ花があしらわれ、なんとも美しく、清楚な作りをしていた。

そしてワルドはルイズの黒いマントを外し、やはりアルビオン王家から借り受けた純白のマントをまとわせた。新婦しか身に着ける事を許されない乙女のマントである。

だが、そのようにワルドの手によって着飾られても、ルイズはまったくの無反応だった。ワルドはそんなルイズの様子を、肯定の意思表示と受け取っていた。

始祖ブリミルの像の前に立ったウェールズの前で、ルイズと並んでワルドは一礼した。ワルドの格好は、いつもの魔法衛士隊の制服である。

「では、式を始める」

王子の声がルイズの耳に届く。しかしどこか遠くで鳴り響く鐘のように、心もとない響きだった。ルイズの心には、未だ深い霧のような雲がかかったままである。

「新郎、子爵ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして妻とする事を誓いますか」

ワルドは重々しく頷くと、杖を握った左手を胸の前に置いた。

「誓います」

ウェールズはにこりと笑って頷き、今度はルイズに視線を移す。

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

朗々と、ウェールズが誓いのための詔を読み上げる。

今が、結婚式の最中だという事に、ルイズはようやく気付いた。相手は憧れていた頼もしいワルド。二人の父が交わした、結婚の約束。幼い心の中、ぼんやりと想像していた未来。

ワルドの事は嫌いじゃない。恐らく、好いてもいるのだろう。

だが、それならばどうしてこんなにせつないのだろ。

何故、こんなに気持ち沈むのだろう。

滅び行く王国を、目にしたから？

愛する者を捨て、望んで死に向かう王子を目の当たりにしたから？

違う。悲しい出来事は、心を傷つけはするけれど、このような雲をかからせはしない。

ルイズは不意に、昨日金木を使い魔から解放した時の事を思い出した。

あの時の金木の表情を思い出して、ルイズは胸が痛むのを感じた。彼がトリステインに來た経緯を聞いて、元いた場所に戻るようと決めた判断なのだが……果たして、それは本当に正しい判断だったのだろうか？

もしかしてそれは、大きな力を持つ使い魔を自分がもうこれ以上見ないようにするためにした事ではないのだろうか？

それは、金木のことを無視した自分のただの我がままではないのだろうか？

それを想像した時、ルイズは昨晚の自分の判断が間違っていたかもしれないと初めて思った。

一方、イーグル号の艦上。

眼帯を掛けているせいで何も見えないはずの金木の左目が、一瞬曇った。

「あれ？」

「どうした？ 相棒」

金木の視界がぼやけた。まるで真夏の陽炎のように、暗闇に閉ざされた左目の視界が揺らいでいく。

「左目がおかしい……」

「疲れてんだよ」

デルフは、とぼけた声でそう言った。

「新婦？」

ウェールズがこつちを見ている。ルイズは慌てて顔を上げた。

式は自分の与り知らぬ所で続いている。ルイズは戸惑った。どうすれば良いんだろうか。こんな時は、一体どうすれば良いのだろうか。誰も教えてくれない。自分の判断が間違っていたかを一緒に考えてくれそうな唯一の青年は、今まさにこの地を離れようとしている。

「緊張しているのかい？ 仕方がない。初めての時は、ことがなんであれ、緊張するものだからね」

にっこりと笑って、ウェールズは続けた。

「まあ、これは儀礼に過ぎぬが、儀礼にはそれをするだけの意味がある。では繰り返し返そう。汝は始祖ブリミルの名において、このものを敬い、愛し、そして夫と……」

そこでようやくルイズは気づいた。誰もこの迷いの答えを、教えてはくれない。

自分で決めなければならぬし、間違っていたならば金木ともう一度話さなくてはならない。

今からでは遅すぎるかもしれないし、あまりにも身勝手すぎるかもしれない。

しかし、この迷いの答えは必ず出さなければならぬ。

そうでないと、あの青年に二度と顔向けできないし、何よりも自分が目指す真の貴族に二度となれないような気がしたからだ。

ルイズは深呼吸して、決心した。

ウェールズの言葉の途中、ルイズは首を横に振った。

「新婦？」

「ルイズ？」

二人が怪訝な顔で、ルイズの顔を覗き込む。ルイズは、ワルドに正面から向き直った。悲しい表情を浮かべて、再び首を横に振る。

「どうしたね、ルイズ。気分でも悪いのかい？」

「違うの。ごめんなさい……」

「日が悪いなら、改めて……」

「そうじゃない、そうじゃないの。ごめんなさい、ワルド。わたし、あなたとは結婚できない」

予想もしてなかった展開に、ウエールズは首を傾げた。

「新婦は、この結婚を望まぬのか？」

「その通りでございます。お二方には、大変失礼を致す事になります  
が、わたくしはこの結婚を望みません」

ワルドの顔に、さつと朱が差した。ウエールズは困ったように、首を傾げると残念そうにワルドに告げた。

「子爵、誠にお気の毒だが、花嫁が望まぬ式をこれ以上続けるわけには  
いかぬ」

だが、ワルドはウエールズに見向きもせず、ルイズの手を取った。

「……緊張しているんだ。そうだろルイズ。君が、僕との結婚を拒む  
わけがない」

「ごめんなさい、ワルド。憧れだったのよ。もしかしたら、恋だったか  
もしれない。でも、今は違うわ」

するとワルドは、今度はルイズの肩を勢い良く掴んだ。その目が吊り上がる。表情がいつもの優しげなものではなく、どこか冷たい、トカゲか何かを連想させるものに変わった。

熱っぽい口調で、ワルドは叫んだ。

「世界だルイズ。僕は世界を手に入れる！ そのために君が必要なんだ！」

豹変したワルドに怯えながらも、ルイズは再び首を横に振った。

「……わたし、世界なんかいらぬもの」

ワルドは両手を広げると、ルイズに詰め寄った。

「僕には君が必要なんだ！ 君の能力が！ 君の力が！」

ワルドの剣幕に、ルイズは恐れをなした。優しかったワルドがこん

な表情を浮かべて、叫ぶように話すなど、夢にも思わなかったのだ。ルイズは思わず後じさった。

「ルイズ、いつか言った事を忘れたか！ 君は始祖ブリミルに劣らぬ、優秀なメイジに成長するだろう！ 君は自分で気づいていないだけだ！ その才能に！」

「ワルド、あなた……」

ルイズの声が、恐怖で震えた。ルイズの知っているワルドではない。何が彼を、こんな物言いをする人物に変えてしまったのだろうか？

イーグル号艦上で、金木は左目の眼帯を取った。

「何だよ相棒」

「ちよつと黙ってて」

金木がデルフにそう言った直後、その左目が像を結んだ。

「これは……？」

金木は思わず小さく呟いた。果たしてそれは、誰かの視界だった。

左目と右目が、別々の物を見ているように金木は感じた。

「もしかして……ルイズちゃんの視界？」

そこで金木は、いつだかルイズが言っていた事を思い出す。

『使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ』

だが、ルイズは自分の見ているものがまったく見えないと言っていた。逆の場合もあるという事だろうか？

しかし、どうして突然ルイズの視界が見えるようになったのだろうか？

金木は左手を見てみた。そこに刻まれたルーンが、武器を握っているわけではないのに光り輝いていた。恐らく、これも伝説の使い魔『ガンダールヴ』の能力の一つなのだろう。

金木がしばらくルイズの視界を見ていると、突然その両目が勢い良く見開かれた。そして次の瞬間、勢いよくイーグル号の艦上から飛び降りる。イーグル号に乗っていた人々から驚いた声が聞こえてくるが、金木はそれらを無視して走り出し始めた。

「そういう事だったのか……！ くそ、どうして気づかなかったんだ！？」 ヒントはいくらでもあったはずなのに!!」

「ど、どうしたんだよ相棒！ 何が見えたんだ!？」

「話はあると！ ルイズちゃん、ウエールズさん……。お願いだ、無事でいてくれ……!!」

奥歯を強く噛み締めながら、金木はルイズとワルドの結婚式が開かれている礼拝堂へと向かって行った。

ルイズに対するワルドの剣幕を見かねたウエールズが、間に入つてとりなそうとした。

「子爵……君はフラれたのだ。いさぎよく……」

だが、ワルドはその手を撥ね退けた。

「黙っておれ!」

ウエールズはワルドの言葉に驚き、立ち尽くした。ワルドはルイズの手を強く握った。その瞬間ルイズは、まるで自分の手が蛇に絡みつかれたように感じた。

「ルイズ！ 君の才能が僕には必要なんだ!」

「わたしは、そんな、才能のあるメイジじゃないわ」

「だから何度も言っている！ 自分で気づいていないだけなんだよルイズ!」

ルイズはワルドの手を振りほどこうとしたが、ものすごい力で握られているために振りほどく事ができない。苦痛に顔を歪めながら、ルイズはワルドを睨み付ける。

「そんな結婚、死んでも嫌よ。あなた、わたしをちつとも愛してないじゃない。分かったわ、あなたが愛しているのは、あなたがわたしにあるという、ありもしない魔法の才能だけ。ひどいわ。そんな理由で結婚しようだなんて。こんな侮辱はないわ!」

ルイズは暴れた。ウエールズが、ワルドの肩に手を置いて引き離そうとする。しかし、今度はワルドに突き飛ばされた。突き飛ばされたウエールズの顔に、赤みが走る。そしてすぐさま立ち上がると、杖を

引き抜いた。

「うぬ、なんたる無礼！ なんたる侮辱！ 子爵、今すぐにラ・ヴァリエール嬢から手を離れたまえ！ さもなくば、我が魔法の刃が君を切り裂くぞ！」

ワルドはそこでようやくルイズから手を離れた。どこまでも優しい笑みを浮かべる。しかし、その笑みは嘘に塗り固められているものだった。

「こうまで僕が言ってもダメかい？ ルイズ。僕のルイズ」

ルイズは怒りで震えながら言い返した。

「嫌よ、誰があなたと結婚なんかするもんですか」

ワルドは天を仰いだ。そこにルイズに結婚を拒否されたという悲壮感は全く見受けられない。

「この旅で、君の気持ちを掴むために随分努力したんだが……」

両手を広げて、ワルドは首を振った。

「こうなっては仕方ない。ならば目的の一つは諦めよう」

「目的？」

ルイズは思わず首を傾げた。どういうつもりだと思ったのだ。

ワルドは唇の端を吊り上げると、禍々しい笑みを浮かべた。

「そうだ。この旅における僕の目的は三つあった。その二つが達成できただけでも、良しとしなければな」

「達成？ 二つ？ どういう事？」

ルイズは不安におのきながら、尋ねた。心の中で、考えたくない想像が急激に膨れ上がっていくのを感じる。ワルドは右手を掲げると、人差し指を立ててみせた。

「まず一つは君だ、ルイズ。君を手に入れる事だ。しかし、これは果たせないようだ」

「当たり前じゃないの！」

次にルイズは、中指を立てた。

「二つ目の目的は、ルイズ。君のポケットに入っている、アンリエッタの手紙だ」

ルイズはその言葉で、何かに気づいたようにはっとした表情を浮か

べた。

「ワルド、あなた……」

「そして、三つめ……」

ワルドの『アンリエッタの手紙』という言葉で、ようやく全てを察したウエルズが杖を構えて詠唱を開始する。しかし、ワルドは二つ名の閃光のように素早く杖を引き抜くと、瞬時に呪文の詠唱を完成させる。ワルドは風邪のように身を翻らせ、ウエルズの胸を青白く光るその杖で貫いた。

「き、貴様……『レコン・キスタ』……」

ウエルズの口から、どつと鮮血が溢れ出る。それを見てルイズは悲鳴を上げた。

ワルドはウエルズの胸を光る杖で深々と抉りながら呟いた。

「三つ目……、貴様の命だ。ウエルズ」

どう、という音を立ててウエルズは床に崩れ落ちた。

「貴族派！ あなた、アルビオンの貴族派だったのね！ ワルド！」

ルイズはわななきながら怒鳴った。しかしワルドはルイズのその怒鳴り声に動揺する素振りも見せず、ただ冷たい声でルイズに言った。

「そうとも。いかにも僕はアルビオンの貴族派、レコン・キスタの一員さ」

「どうして！ トリステインの貴族であるあなたがどうして?!」

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて繋がった貴族の連盟さ。我々に国境はない」

そう言うと、ワルドは再び杖を掲げた。

「ハルケギニアは我々の手で一つになり、始祖ブリミルの光臨せし『聖地』を取り戻すのだ」

「昔は、昔はそんな風じゃなかったわ。何があなたを変えたの？ ワルド……」

「月日と、数奇な運命の巡り合わせだ。それが君の知る僕を変えたが、今ここで語る気にはならぬ。話せば長くなるからな」

ルイズは思い出したように杖を握ると、ワルドめがけて振ろうとし



た。しかしワールドに難なく弾き飛ばされ、床に転がる。さらに杖を弾き飛ばされたルイズにワールドは容赦なく風の魔法『ウィンド・ブレイク』を放つ。魔法を食らい、ルイズは紙切れのように吹き飛ばされた。全身に走る激痛に耐えながら、ルイズは立ち上がろうとしながらワールドを睨み付ける。それを見てワールドはふん、と鼻を鳴らした。

「気に入らぬ目だ」

そしてワールドはさらにルイズに魔法を放つ。空気の槌を放つ魔法『エア・ハンマー』だ。空気で形成された槌を腹にもろに食らい、ルイズの体がくの字に曲がる。

「ごはっ……!!」

しゃがみこむと同時に、口から胃液が床に吐き出される。ワールドはさらに追い打ちのよう魔法を放つ。

「言う事を聞かぬ小鳥は、首を捻るしかないだろう？　なあ、ルイズ」壁に叩きつけられ、床に転がり、ルイズは呻きを上げた。その両目から、涙がこぼれる。

そこで初めて、ここにはいない使い魔に助けを求めた。

「助けて……お願い」

本当に、情けないと思う。昨日自分から勝手に主人と使い魔の契約を切っておいて、ここに来て助けに来てほしいと願うなんて。あまりにも、ムシが良すぎる話だ。

だがそれでも、ルイズは呪文のように繰り返す。楽しそうに、ワールドは呪文を詠唱した。

『ライトニング・クラウド』だ。

「残念だよ……。この手で、君の命を奪わねばならないとは……」

電撃を放つ、風の魔法の中でも上位に存在する魔法。まともに受ければ間違いなく命はないだろう。

体中が痛い。ショックで息が途切れそうだ。ルイズは子供のようになんて怯えて、自分の情けなさに歯噛みし、涙を流す。

「カネキー！　助けてー！」

ルイズは絶叫した。呪文が完成し、ワールドがルイズに向かって杖を振り下ろそうとした瞬間。

礼拝堂の壁が轟音と共に崩れ、外から烈風が飛び込んできた。

「貴様……」

ワルドが呟く。

壁をぶち破り、間髪飛ばさずにきた金木がワルドの杖をデルフで受け止めていたのだ。

「……………」

ワルドに対して、金木は何も言わない。ただ、強烈な殺意が込められた瞳を、ワルドに向けている。

ワルドはそこから後ろに飛び跳ねて距離を空けると、杖を金木に向ける。

金木がルイズを横目で見てみると、彼女は失神したのか床に倒れ、ピクリとも動かない。

そんな金木に向かって、残忍な笑みを浮かべたワルドが言った。

「何故にここが分かった？ ガンダールヴ」

「……………彼女の視界が、見えた」

いつもよりも低い、怒りと殺気が込められた声。しかしそれに動じる事も無く、ワルドがさらに続ける。

「そうか、なるほど、主人の危機が目映ったか。だが……………それにしては何だね？ そのマスクは？ 随分と悪趣味だな」

ワルドの言う通り、金木の顔には歯と歯茎が剥き出しになったデザインの眼帯をイメージした黒いマスクが着けられていた。唯一剥き出しになっている左目をワルドに向けながら、金木が言う。

「……………あなたは、ルイズちゃんを騙していたんですか。いや、ルイズちゃんだけじゃない。アンリエッタさんも、ウエールズさんも、あなたを信頼していた人達を、全員」

「目的のためには、手段を選んでおれぬのでな」

「ルイズちゃんは、あなたを信じていた。婚約者のあなたを……………幼い頃の憧れだったあなたを……………。それでもあなたは、何も感じないんですか？」

「信じるのはそちらの勝手だ」

それを聞いて、金木はデルフの柄を強く握りしめた。

「……決めました。あなたはここで倒します」

「ふん、できるのか？ 女神の杵亭では君に後れを取ったが、あの時は僕も本気ではなかった。本気になった僕に、君が勝てるのもども？」

「……ええ、勝てます。安心してください。殺しはしません。……だけど」

バキリ、と折り曲げた右手の人差し指を親指で押し鳴らしながら、金木は宣告した。

「——腕一本は、覚悟してください」

その言葉にワールドがふっと笑みを浮かべた直後、その体が素早く動いた。ウインド・ブレイクを金木に放つが、金木は上空に高く跳躍して魔法をかわす。チツとワールドは舌打ちしてさらに魔法を放つが、金木は体を捻って魔法をかわすと地面に着地する。その時、金木が手にしているデルフが叫んだ。

「思い出したー！」

「……？ どうしたの、いきなり」

「そうか……ガンダールヴか！ すっかり忘れてたぜ。何せ、今から六千年も昔の話だからな」

「何を、言っているの？」

ワールドから放たれたウインド・ブレイクをかわすと、デルフがさらに声を上げる。

「懐かしいねえ。泣けるねえ。そうかあ、いやあ、なんか懐かしい気がしてたが、そうか。相棒、昔俺を握っていた、あのガンダールヴか！」

「え？ 昔君を握ってたって……どういう事？」

「嬉しいねえ！ そうこなくっちゃいけねえ！ 俺もこんな格好してる場合じゃねえ！」

叫ぶなり、デルフの刀身が突然輝き出した。

金木は思わず戦場にいるという事を一瞬忘れて、デルフを見つめる。

「デルフ？」

その隙をつくように、再びワールドがウインド・ブレイクを放つ。

猛る風が金木目がけて吹きさす。金木が魔法をかわそうとすると、右手のデルフが再び叫んだ。

「相棒！・俺をかざせ！」

それに金木が戸惑った表情を浮かべるも、言われた通りに飛んで来る魔法にデルフをかざした。

「無駄だ！・その剣では魔法を防ぐ事などできん！」

無駄な行為と思ったのかワールドが叫ぶ。しかし、次の瞬間驚くべき現象が起きた。

金木を吹き飛ばすかのように思えた風が、デルフの刀身に吸い込まれたのだ。

さらに、今まで錆びていたはずのデルフの刀身が、まるで今研がれたかのように光り輝いていた。

「これは……」

「これがほんとの俺の姿さ！・相棒！・いやあ、てんで忘れてた！」

そういや、飽き飽きしてた時に、テメエの体を変えたんだった！・なにせ、面白い事はあるやしねえし、つまらん連中ばつくだったからな！」

「……できれば、早く言ってほしかったよ……」

「仕方がねえだろ。忘れてたんだから。でも安心しな、相棒。ちゃちな魔法は全部、俺が吸い込んでやるよ！・このガンダールヴの左腕、デルフリンガー様がな！」

金木の疲れたようなため息と共に放たれた言葉にも、当のデルフはまったく気にしていなかった。そのデルフらしいと言えばデルフらしい態度に、金木は思わず仮面の下で苦笑を浮かべる。

一方、ワールドは興味深そうに金木の握っている剣を見つめていた。「なるほど……ただの剣ではないというわけか。まあ、魔法を吸い込むというのは少々厄介だが、それで私を倒せるかどうかは別問題だ」

デルフの変化を見ても、ワールドは余裕の態度を失っていない。それどころか杖を構えて、薄く笑みすら浮かべている。どうやら自身の勝利をまったく疑っていないようだ。

「さて、ではこちらにも本気を出そう。何故、風の魔法が最強と呼ばれる

のか、その所以を教育いたそう」

させるかと言わんばかりに金木が飛びかかり斬撃を振るうが、逃げに徹して呪文を唱えるワルドはその全ての攻撃をかわし続ける。ちよこまかと……と金木が内心舌打ちした直後、ワルドの呪文が完成した。

その時、呪文を完成したワルドの体がいきなり分身した。

分身した数は、四つ。本体と合わせて、五人のワルドが金木を取り囲んだ。

「分身……？」

「ただの『分身』ではない。風の偏在<sup>ユビキタス</sup>……。風は偏在する。風の吹くところ、何処となくさ迷い現れ、その距離は意思の力に比例する」

ワルドの分身は、すつと懐から真つ白の仮面を取り出すと顔に付けた。それを見た金木の左目が、さらに見開かれる。その姿は、今まで自分達を妨害してきた仮面の男そのものだった。

「仮面の男は、あなただったんですね。なるほど……。どうりで情報が洩れるわけだ」

フーケ、そして仮面の男がまるで計ったかのように自分達の前に現れたのも当然だった。偏在を生み出した当の本人が、今までずっと自分達のそばにいたのだから。もつと早く気付くべきだったと、金木は心の中で呟く。

「しかも偏在って事は、どこにでも現れるっていう事ですか」

「いかにも。しかも一つ一つが意思と力を持っている。言ったらろう？

『風』は偏在する！」

五人のワルドが金木に躍りかかる。さらにワルドは呪文を唱え、杖を青白く光らせた。

『エア・ニードル』。先ほど、ウェールズの胸を貫いた呪文だ。

「杖自体が魔法の渦の中心だ。その剣で吸い込む事はできぬ！」

杖が細かく振動している。回転する空気の渦が鋭利な切っ先となり、金木を襲う。金木はどうかゲルフで攻撃を受け流すが、数が多すぎる。まともに食らえば、いくら刃物を通さぬ体を持つ金木と言えど危ないだろう。

攻撃を受け流す金木を見て、ワールドが楽しそうに笑った。

「手合わせの時も思ったが、平民にしてはやるではないか。流石は伝説の使い魔と言ったところか。しかし、やはりはただの骨董品であるようだな。風の偏在に手も足も出ぬようではな！」

その声を聞きながら、金木は偏在の攻撃を避ける。それからあ、とため息をつく。

(……そろそろ、使うか。ルイズちゃんは気絶してるし、すぐに決着を付ければ問題はない)

心の中でそう思った直後に、金木は動きを止めてその場に立ち止まった。戦うのを諦めたかと思ったのか、五人のワールドが一斉に金木を取り囲んで杖を向ける。

「諦めて死を選ぶとは、拍子抜けだが賢明な判断だな！ 所詮貴様は名前だけの大昔の骨董品に過ぎん！ そんな人間が、僕達レコン・キスタに勝てるはずがない！ 死ぬ、ガンダールヴウウウウウ!!」  
そして、ワールドの魔法が金木に放たれると思われた刹那。

赤色の何かが、四人のワールドの体を貫いた。

「はっ?」

予想外の光景を目の当たりにして、ワールドは思わず間抜けな声を出した。腹を何かで貫かれた偏在達は何が起こったのか分からないという表情を浮かべながら、この世から消滅する。

四人のワールドを貫いたそれは触手のようなものだった。その表面はまるで鱗のように独特であり、先端は鉤爪状、色はまるで血のように赤い。そしてその触手はよく見てみると、金木の腰から生えていた。

触手——赫子を縮める金木を見て、ワールドはかすれた声を出した。

「な、何だ貴様のそれは……!?! 貴様は、一体……!?!」

が、そこでワールドはある事に気づいた。

先ほどまでは普通の目にしか見えなかった金木の左目が、いつの間

にか赤く変色しているのだ。

金木は左目——赫眼でギロリとワールドを睨み付ける。その瞬間、金木からワールドに凄まじい殺気が叩きつけられた。

「ひっ……！」

睨み付けられたワールドの脳から全身に、ある指令が伝えられる。

逃げろ。今すぐここから全力で逃げろ。

さもないと、目の前の敵に食い殺される——！

「ふ……ぎけるな!!」

しかしワールドは本能からの指令を無視すると、再び呪文を唱えて四人の偏在を生み出す。それを金木はくだらなさそうな目で見ながら、右手の人差し指をバキリと鳴らす。

「何人増えようが構いません。すぐに、叩き潰します」

すると、金木の怒りに呼応したのか、左手のガンダールヴのルーンが光り輝き、金木の体に力を与える。

いや、正確には金木の体内に存在する細胞、Rc細胞に。

その結果、ルーンによって力を与えられたRc細胞が変化を遂げた。

金木の腰から新たに二本の赫子が生え、四本だった赫子が六本に増える。そして六本に増えた赫子は、金木の背後に一気に翼のように広がった。

その姿は、まるで神話に伝わる六枚羽の天使だった。

とは言っても、この場合は頭に『死』がつく天使だろうが。

デルフを手にして、赫子を腰から生やした金木がゆらりと動くと、ワールドが表情を恐怖に歪めながら叫んだ。

「く……来るな来るな来るなあああああああああつ!!」

直後、五人のワールドからエア・ハンマーが一齐に金木に向かって放たれた。しかし金木は慌てる事も無く、ただ体勢を低くして偏在の一人に弾丸のようにまっすぐ突っ込む事で、全ての攻撃を回避する。ガンダールヴのルーンの力が加わった今の金木に追いつける者など、数えるぐらいしかないだろう。

金木はデルフで偏在の一人の首を切り落とすと、続いて人間を超え

た蹴りでもう一人の偏在の頭を吹っ飛ばす。自分の近くにバスケットボールのように転がってきた偏在の首を見たワルドは、表情を引きつらせると残った二人の偏在と共に魔法を放つ。金木はワルドから放たれた魔法をデルフで吸収し、残りの魔法を四本の赫子で防ぐ。赫子の中では一番脆い鱗赫の赫子は攻撃を受けて吹き飛ぶが、赫子はまだ二本残っている。残った二人の偏在を、金木は二本の赫子で貫き消滅させた。その間に吹き飛んだ赫子はすぐに再生を始め、再び六本に戻る。

赫子を揺らしながら、金木はワルドに告げた。

「これでもう新たに偏在を生み出す精神力はあなたには残されていない。そろそろ、終わりにしましょうか」

「……ぐっ！　くそ、まだだ！　まだ終わっていない!!」

叫びながらワルドは、素早い動きで金木に剣戟を加えていく。しかし金木はワルド以上の速度でその全てを止めながら、逆にデルフによる攻撃を繰り返す。攻撃を必死に食い止めながら、ワルドが問いかける。

「どうして死地に帰ってきた？　お前を蔑むルイズのため、どうして命を捨てる？　この化け物が!!」

攻撃をしながら、金木は冷静に返す。

「何もできないのは嫌だ。だからこうしてここに帰ってきたんだ。ルイズちゃんを護るために」

「はっ！　貴様のような奴に誰かが護れるわけがないだろう!!　現に、ウエールズはすでに死んだ！　そしてもうすぐ、ルイズも死ぬ！　貴様みたいな化け物は、誰も護れずに死ぬのがお似合いだ!!」

ワルドはそう言いながら杖を突き出すが、その杖を金木が左手で無理やり掴んだ。驚愕するワルドを目の前にして、金木は思いつきり怒鳴りつけた。

「ああ、そうだ。ウエールズさんは死んだ。僕のせいだ。でも、だからこそ、ルイズちゃんだけは絶対に護ってみせる!!　もうこれ以上、誰も死なせたりしない!!」

そして金木は、杖を掴まれて動けなくなったワルドの腹に強烈な蹴



りを放ち、その体を吹き飛ばすとルーンの力を開放してワルドとの距離を一気に詰める。

「……これで、終わりだ」

そう言い放った、直後。

金木の斬撃が、ワルドの左腕を切り飛ばした。

## 第十四話 終幕

金木によって斬り飛ばされたワルドの左腕はくるくると宙を舞い、ぼとりと音と共に床に落下した。一方で左腕を斬り飛ばされたワルドはと言うと、床にうずくまったまま出血している左肩の辺りを右手で押さえている。

「くそ……この『閃光』が、よもや後れを取るとは……」

よろよろと立ち上がりながら、ワルドが金木を忌々しそうに睨み付ける。金木は反撃に備えて剣を構えようとしたが、何故か急に体から力が抜けるような感覚がして足元がふらつく。

「何……これ……」

「ああ、相棒。無茶をすればそれだけガンダールヴとして動ける時間は減るぜ。何せ、お前さんは主人の呪文詠唱を守るためだけに生み出された使い魔だからな」

金木に襲い掛かってきた現象を、デルフが説明する。先ほど金木は決着をつけるために、喰種の力だけではなくガンダールヴのルーンの間も併せて使用していた。恐らくその反動のせいという事だろう。

ワルドは残った右腕で杖を振るって宙に浮かぶと、金木を見下ろしながら言う。

「まあ、目的の一つが果たせただけで良しとしよう。どのみちここには、すぐに我がレコン・キスタの大群が押し寄せる。ほら！ 馬の蹄と竜の羽の音が聞こえるだろう！」

ワルドの言う通り、外から大砲の音や火の魔法が爆発する音が、遠く聞こえてきた。戦う貴族や兵士の怒号や断末魔の音がそれらの轟音に入り混じる。

「愚かな主人ともども灰になるが良い！ ガンダールヴ！」

捨て台詞を残して、ワルドは壁に開いた穴から飛び去った。残された金木はその穴を少しの間睨み付けていたが、やがて視線を外すとふらついた足取りでルイズに駆け寄る。

「ルイズちゃん！」

金木はルイズを抱え起こしてから、彼女の右手の手首に人差し指と

中指と薬指を揃えて当てる。すると金木の指にルイズの脈拍が伝わってきて、金木はほっと安堵の息をついた。

ルイズはボロボロだった。マントはところどころが破れ、膝と頬を擦りむいている。服の下は、打ち身だらけに違う。

ルイズは胸の辺りで、手を固く握っている。その下の胸ポケットのボタンが外れて、中からアンリエッタの手紙が顔を覗かせていた。どうやら、ルイズは意識を失ってもこの手紙だけは守るつもりでいたようだ。

本当に、生きていてくれて良かったと思う。だが、何故かそう思った金木の表情は曇っていた。金木は視線をルイズから、すでに事切れているウェールズに移す。それから手を固く握ると、心の底から辛そうな声を出した。

「……まただ。また僕は、助けられなかった」

ルイズを助ける事は出来たのかもしれない。ワルドからアンリエッタの手紙を守る事は出来たのかもしれない。

だが、死ぬ事を覚悟していたとはいえ、大切な人がいるウェールズを助ける事ができなかった。

結局は、自分は何も変わっていない。例えどれだけ力をつけたとしても、誰かの大切な人を護る事すらできない。金木は奥歯を強く噛み締めて俯いていると、デルフが金木に言葉をかけた。

「なあ相棒。そんなに強く悔しがらる事はないんじゃないやねえのか？ 相棒は、娘っ子の命を助けたじゃねえか」

「……だけど僕は、ウェールズさんの命を助ける事ができなかった。もう少し僕がここに駆けつける事ができたら……」

そんな事を言う金木に、デルフはため息をついた。

「はあ……。つたく、相棒。俺はただの剣だが、お前さんよりも長く生きてる。だからこれぐらいは言わせてもらおうぜ。背負い込み過ぎだ」

「え？」

「ウェールズが死んだのはワルドのせいだろうが。それに例え相棒が間に合ったとしても、その後ウェールズは戦場に向かって死んでるだろうよ。大体、相棒も昨日それを承知していただろうが。それで

ウエールズが戦場で死んだら、それも自分のせいだって背負い込むつもりか？」

「……………」

黙り込む金木に、デルフが諭すように言う。

「なあ相棒。失ったものばかりに目を向けんなよ。今娘っ子はちゃんと生きてお前さんの目の前にいる。お前が、娘っ子の命を救ったんだ。それは間違いなく、誇りに思っただけのいい事だ」

それを聞いても金木は黙ったままだったが、不意にルイズの手をゆつくりと掴む。彼女の白く小さな手は、とても暖かい。自分がその手の温もりを守ったのだと金木が気づいた時、目の奥が熱くなった。たった一つ、たった一つだけかもしれないが、自分は護りたいものを護る事ができたのだ。

金木がルイズの手を握ってそう思った直後、デルフが困った声を上げる。

「しかし、相棒……。これからどうする？ イーグル号はとつくと出港しちまったし……。それにほら、外のわめきが聞こえるだろう？ 皇太子のいねえ王軍は、あつという間に負けちまったみてえだぜ？ すぐに敵はここまでやってくるだろうよ」

デルフの言う通り、確かにそのようだった。怒号、爆発音はすでに城の内部にまで迫っていた。ここに敵が押し寄せるのも時間の問題だろう。

金木はルイズをそつと椅子の上に寝かせると、あるものに視線を向ける。

それは、ワールドから切り離された彼の左腕だった。

金木は左腕の前まで来るとその手を持ち上げ、さらにマスクのジツパーを開けて、呟く。

「……………いただきます」

そして。

ガブリ、という音と共に金木の口が勢いよくワールドの左腕に食らいついた。

それから肉を咀嚼する音、骨をかみ砕く音が礼拝堂内に鳴り響き、

金木の口からこぼれた血が地面に滴り落ちる。やがて金木がワルドの左腕を完全に胃袋に収めてジッパーを閉じると、その様子を見ていたデルフが言う。

「初めて見たが……本当に人を食うんだな……」

「まあね。怖い?」

「前にも言っただろ? お前が何者だろうが、俺には関係ねえ。重要なのは、お前が使い手だって事だけだ。で、腹はふくれたかい?」

デルフの問いに、金木は軽く拳を握ってから頷いた。

「うん。満腹とは言えないけど、それでもさつきよりはだいぶマシになったよ。これなら、大丈夫そうだ」

唯一の不安としては、前に生きた人間の肉を食らった時のように、自我を失ってそばで倒れているルイズまで食べてしまうのではないかという点があつたが、どうやらその心配も杞憂に終わったようである。

金木はデルフを強く握りしめると、まるでルイズを護るかのように彼女の前に立ち塞がった。

「一応聞くが……何をやる気だ?」

「ルイズちゃんを護る」

金木の言葉を聞いて、デルフはびくびくと震えた。

「ま、それよりほかにする事はあるめえな。相棒はガンダールヴで、この貴族の娘っ子は相棒の主人だしなあ。ま、短い付き合いだったが、楽しかったぜ。相棒」

「何言ってるの?」

「あん?」

「悪いけど、死ぬわけにはいかないんだよ。ルイズちゃんを護れなくなるからね」

「分は悪すぎると思うぜ。敵は五万だぞ?」

「だから?」

金木はそれがどうしたと言わんばかりの表情を浮かべながらデルフに言った。例え相手が五万だろうが、十万だろうが、簡単に勝てそうな気がした。すると金木の言葉を聞いたデルフの震えが、ますます

ひどくなった。

「気に入ったぜ！そうこなくつちやいけねえ。そうだな、たかが五万だ。散歩に出かけるみてえなもんだ！」

そうして、金木はデルフを構えて礼拝堂の入り口を睨む。

いずれ現れる、敵を待ち構えて。

だが、その時だった。

ぼこつと、ルイズが横たわった隣の地面が突然盛り上がった。

「……敵？」

金木が地面を睨み付け、剣を構えたその時、ぼこつという音と共に床石が割れて茶色の生き物が顔を出した。

予想外の事態に、金木はここが戦場である事を一瞬忘れて呆然とした表情を浮かべる。一方、茶色の生き物は椅子の上に横たわったルイズを見つけると、モグモグと嬉しそうにその体をまさぐった。

「君は……確かギーシュ君の使い魔のヴェルダンデだね？　って事は……」

そこまで金木が言いかけた所で、ヴェルダンデが出てきた穴からひよこつとギーシュが顔を出した。

「こらー！　ヴェルダンデー！　どこまでお前は穴を掘る気なんだね！　良いけど！　って……」

土にまみれたギーシュは、何故か自分に背中を向けている金木と、横たわっているルイズに気づいてとぼけた声で言った。

「おやー！　君達ー！　ここにいたのかねー！　しかしカネキ、何故か君は僕に背を向けているんだい？」

「な、何でもないよ」

そう答えながら、金木が振り向く。その顔には先ほどまであったマスクはなく、代わりに金木がいつもつけている医療用の白の眼帯が左目に着けられていた。

「そ、それよりどうしてギーシュ君がここにいるの？」

「いやなに。土くれのフークとの一戦に勝利した僕達は、寝る間も惜しんで君達の後を追いかけたのだ。何せこの任務には、姫殿下の名誉がかかっているからね」

「でもここは雲の上だよ？　どうやって……」

すると、ギーシュの傍らにキュルケが顔を出した。

「タバサのシルフィードよ」

「キュルケちゃん！」

「アルビオンについたは良いが、何せ勝手が分からぬ異国だからね。でも、このヴェルダンデがいきなり穴を掘り始めた。そしたら……」

そこでギーシュの言葉を引き継ぐように、キュルケのすぐ隣にタバサも顔を出した。

「ここに出て、あなた達を見つucker事ができた」

「タバサちゃんも……」

どうやら三人とも、特に目立った怪我も無くここに辿り着いたらしい。その事に安堵して、金木は軽く息をつく。

ヴェルダンデはフガフガとルイズの指に光る水のルビーに鼻を押し付けている。ギーシュはそれを見て、うんうんと頷いた。

「なるほど。水のルビーの匂いを追いかけて、ここまで穴を掘ったのか。僕の可愛いヴェルダンデはなにせ、とびつきの宝石が大好きだからね。ラ・ロシエールまで、穴を掘ってやってきたんだよ、彼は」

「そうか……。ありがとね」

まさかモグラに救われるとは思わなかったが、この使い魔のおかげでギーシュ達がここにやってこられたのは紛れもない事実だ。金木がヴェルダンデの頭を撫でると、巨大なモグラは嬉しそうな鳴き声を上げた。

「ねえ聞いて？　あたし、もうちよつとであのフーケを捕まえるところだったんだけど、逃げられちゃった。あの女ってば、メイジのくせに終いにや走って逃げたわ。ところでダーリン、ここで何をしているの？」

キュルケが顔についた土をハンカチで拭い、さらにタバサの顔についている土も拭ってやりながら言った。

そこでようやく現在の状況を思い出し、焦った声で一同に言う。

「早くここから離れよう！　敵がすぐそこにいるんだ！　タバサちゃん、シルフィードはすぐに飛べるよね？」

金木の問いに、タバサはこくりと頷くと、穴の中に潜って行った。相変わらず状況判断が素早い少女である。一方で、ギーシュとキュルケはきよとんとした表情で、

「離れるって、任務は？ ワルド子爵は？」

「手紙は手に入れたし、彼は裏切者だった！ そんな事より早く離れるよー！」

「なあんだ。よく分かんないけど、もう終わっちゃったの」

キュルケがつまらなそうに言うが、正直は今はその事を言っている場合ではない。

ルイズを抱えて穴に潜ろうとした時、金木はある事に気づいてルイズをギーシュに預けると礼拝堂に戻り、倒れているウエールズに近づく。こうして見ていると、安らかに眠っているようにしか見えない。

「おーい！ 何をしてるんだね！ 早くしたまえー！」

ギーシュがそんな金木を呼んだ。

金木はウエールズの体を探った。せめてアンリエッタに渡す、何か形見の品は無いかと探し回った。そして彼が指に嵌めた、大粒のルビーに気づく。

それはアルビオン王家に伝わる、風のルビーだ。

金木は王子の指から指輪を外すと、ポケットに入れる。

「ウエールズさん……あなたの事は忘れません。せめて、安らかに眠ってください」

金木は一礼してから、穴に急いで駆け戻る。

穴にもぐった瞬間、礼拝堂に王軍を打ち破った貴族派の兵士やメイジが飛び込んできた。

ヴェルダンデが掘った穴は、アルビオン大陸の真下に通じていた。

金木達が穴から出ると、すでにそこは雲の中である。落下する四人とモグラを、シルフィードが受け止めた。

ヴェルダンデはシルフィードの口にくわえられたので、抗議の鳴き声を上げた。

「我慢しておくれ、可愛いヴェルダンデ。トリステインに降りるまで



の辛抱だからね」

シルフィードは緩やかに降下して雲を抜けると、魔法学院を目指して力強く羽ばたいた。

金木はルイズをゆつくりと風竜の背中に横たわらせてから、アルビオン大陸を見上げる。

雲と空の青の中、アルビオン大陸が遠ざかる。短い滞在だったが、様々なものを金木に残した白の国が遠ざかる。どっと疲れが襲い掛かってきて、金木はシルフィードの背びれに体を預けた。

その時ルイズは、ぼんやりと夢の中をさまよっていた。

故郷のラ・ヴァリエールの領地の夢である。

忘れ去れた中庭の地。そこに浮かぶ小舟の上で、ルイズは寝ころんでいた。辛い事があるとルイズはいつもここで隠れて寝ていたのであった。自分の世界。誰にも邪魔されない、秘密の場所。

ちくり、とルイズの心が痛む。

もう、ワルドはここへはやってこない。優しい子爵。憧れの貴族。幼い頃、父同士が交わした結婚の約束……。

幼いルイズをそっと抱え上げ、この秘密の場所から連れ出してくれ  
たワルドはもういない。いるのは、薄汚い裏切者。勇気溢れる皇太子  
を殺害し、この自分をも手にかけてしようとした残忍な殺人者……。

ルイズは小船の上で泣いた。

そうしていると、急に自分の周りの空気が変わったような、気がした。

「……何？」

ルイズが顔を上げると、辺りの風景が一変していた。

自分の知らない素材で作られた建築物。訪れた事も無い場所。唯一  
夕日だけが、自分の知っているものと瓜二つの姿で自分を照らして  
いる。

「……ここは……前に夢で見た……」

ルイズは一瞬、金木が女性に襲われる夢に出てきた場所かと思った

が、すぐに心の中で否定する。確かに雰囲気はあの時の場所と似ているが、場所が明らかに違う。

ルイズがその場所をゆつくりと見渡してみると、ひょうたん型のくぼみに砂が満ちた場所に、一人の黒髪の少年が座っているのが目に入った。少年は砂で何かをせつせと作っている。ルイズは少年にゆつくりと近づくと、声をかけた。

「何をしているの?」

そこで少年が振り返り、その顔を見たルイズは思わずあつと声を上げかけた。その顔は、自分の使い魔である金木だったのだ。年齢に合わせて顔立ちも幼くなっているが、その容姿は間違いなく彼のものである。

しかし、金木はきよとんとした表情を浮かべて、何も言わない。それを見て、ルイズはある事に気づいた。

(ああ、わたしとまだ会っていないから、わたしの事が分からないのね……)

何故自分がこの場所にいるのかは分からないが、目の前の金木の様子を見ている限り、この少年は自分と出会うよりも遙か昔の金木研である。だから自分の事が分からなくても、それはそれで仕方ないと言えるだろう。

ルイズが金木の横に座り込むと、金木がルイズに言った。

「おねえちゃん、どうしたの?　すごく、悲しそうな顔をしてるけど……」

どうやら、ワールドに裏切られたという悲しみが自分の表情に出ているらしい。ルイズは笑みを浮かべると、力のこもっていない声で言う。

「わたし、独りぼっちになっちゃったの」

まさに独りぼっちだ、とルイズは思う。

使い魔の金木は自分の勝手なプライドで使い魔の契約を解除し、ワールドには裏切られた。今の自分にはもう何も無い。そう考えると目に涙が溜まってきて、ルイズは泣き顔をこの少年に見られないように膝を抱えて俯いた。

すると直後、幼い金木の声がルイズの鼓膜を震わせた。

「おねえちゃんは一人じゃないよ」

え？ とルイズは顔を上げると、金木が笑みを浮かべながらルイズの顔をじつと見つめていた。少年は無言のまま、自分達の真正面に人差し指を向ける。ルイズが視線を向けると、そこには空中に浮かぶ光のようなものがあつた。

「おねえちゃんを待つてる人がいるよ。だから、いつまでもここにいないで行かなきゃ」

「わたしを……待つてる人？」

「うん。だから……早く行ってあげて。その人が、心配して待つてるよ、ルイズちゃん」

(あ……)

ルイズは目を見開いた。

さつきまで少年だったはずの金木が、いつの間にか自分のよく知っている青年の姿に変わっていたからだ。

しかし、それに驚く暇も無く、ルイズの目の前の光が大きくなっていく。

やがてルイズはその光に呑み込まれ、意識を失った。

「ん……」

ルイズが目を覚ますと、そこはシルフィードの背中の上だった。ルイズが体を起こすと、それに気づいた金木が声をかけた。

「あ、ルイズちゃん目が覚めたんだね。良かった……」

安心したかのように、金木が安堵の息をつく。そしてギーシュ達もルイズが目を覚ましたことに気づいたのか、それぞれルイズに言う。

「おや、目が覚めたかい。良かった良かった」

「あら、おはようルイズ。よく眠れた？」

「……………」

唯一無言なのは、分かると思うがタバサである。彼女は起きたルイズをちらりと横目で見た後、手元の本に視線を戻した。自分を見る一

同を見渡してから、ルイズは今の状況を理解する。

自分は、助かったのだ。

あの裏切り者の、ワルドに殺されそうになった時、金木が飛び込んでくれた。それから自分はしばらく意識を失っていたが……、ここに彼がいるところを見ると、金木は勝ったのだろう。

自分達は助かったが、きっと王軍は負けたのだろう。

ウエールズも死んでしまったのだろう。

助かった喜びと、悲しみが入り交じり、ルイズは泣きそうになった。だがそれをこらえるかのように、ルイズは目をつむってから金木に向き直る。

こんな事を全員の前で言うのは恥ずかしいという気持ちがあったが、今はそんな自分の感情よりも大切な事を言わなければならない。一度深呼吸してから、ルイズは金木に言った。

「……カネキ」

「ん？ 何？」

「あの時、勝手にあんたを放り出すような事言つてごめんなさい……」「放り出すなんて……」

「放り出したのよ……。強いあんたが眩しくて、何でもこなしちゃうあんたがうらやましくて……。あんたと一緒にいたら、どうにかなりそうだったから、わたしはあんたから離れようとしたの。酷い女よね、あんたを勝手に召喚したくせに、その面倒を最後まで見ないで使い魔との契約を解除しようとしたんだから」

「……………」

ルイズの告白に、金木は何も言わない。ルイズも感情が次から次へ溢れ出てきて、言葉が止めどなく出て来る。

「そんな女なのに……。見放されても仕方ないのに……。なのにあんたは、来てくれた。酷い女のわたしを、婚約者に裏切られたわたしを、助けに来てくれた。嬉しかった。……そして、だからこそ、あんたに伝えなきゃならないの」

「伝えたい事？」

金木が静かに聞くと、ルイズは頭を下げて言った。

「こんなわたしだけど……またわたしの使い魔になって欲しいの。身勝手だつて分かつてる。こんな事を言う資格、わたしには無いんだつて分かつてる！ だけど、そばにいてほしい……。もう、一人は嫌だ……。！」

言葉と同時に、ルイズの目から涙が溢れる。

金木はしばらくルイズの髪の毛をじつと見つめていたが……。やがて柔らかい笑みを浮かべると、彼女の頭をそつと撫でた。

「一人になんかしないよ。……。そうだよ、独りぼつちは辛いよね」  
彼女の頭を撫でながら、金木は前にもこんな事があつたのを思い出す。

自分が喰種である事を受け入れ、自分のやりたい事をやるために、あんていくには戻らないと決断したあの時。

金木は自分と共に行動すると言いかけた董香に、自分がこれから踏み込む世界に巻き込まないためにあえて別れを告げた。

あの時自分はそれが一番良い方法だと思つたが……。きつとそれは、正解ではなかつた。

一人にしないでと言つていた彼女に向ける言葉は、それでは駄目だつたのだ。董香と同じような表情を浮かべている今のルイズを見て、金木はそう思う。

だから金木は、あの時董香に言うべきだつた言葉を、一人は嫌だと語る目の前の小さな少女に向けて、言つた。

「僕はどこにも行かない。君のそばにいるよ。前にも言つたけど、僕は君の使い魔だからね」

金木の言葉を聞いたルイズはしやくり上げながら、瞳に溜まる涙を拭う。そして笑顔を浮かべると、金木に告げた。

「……ありがとう、カネキ」

その言葉に金木はにっこりと笑みを浮かべ、キュルケとギーシユは顔を見合わせて笑うと、二人から視線を外して真正面を向いた。タバサは相変わらず本を読んでいる。

そんな一同を癒すかのように。

心地よい風が、全員の体に吹き渡つた。

そして。

金木の背中のデルフは、先ほどのワールドとの戦闘を思い出し出している事を考えていた。

(……相棒の奴、とんでもねえな。普通ルーンの力をあれだけ使えば、並の人間ならしばらくは満足に動けねえつてのに、少しふらつく程度に収まってやがった……。喰種って奴が特別なのか、相棒が特別なのか……)

それともその両方なのか。今のデルフには分からない。

さらに、分からない事がもう一つある。

(だけど何よりも不可解なのは……娘つ子を護るって言った時の相棒の心の震えはかなりのものだったが、それでもまだ全力じゃなかった。相棒のあの言葉が嘘だとは思えねえし、考えられるとしたら……)

金木にとつての本当の願いは、別にある。

信じられない事だが、それしか考えられない。

(だが、誰かを護るって事以上に叶えたい願いつてのは、一体何なんだ？ 相棒……お前さんは本当は何が願いなんだ?)

デルフは心の中で金木に問うが、当然その答えが返ってくる事はない。

五人と一本を乗せた風竜は、疾風のような速度を保ったままトリスティンへと向かうのだった。

## 第十五話 思惑

トリスティンの王宮は、ブルドンネ街の突き当たりであった。王宮の門の前には、当直の魔法衛士隊の隊員達が、幻獣に跨り闊歩している。戦争が近いという噂が、二、三日前から街に流れ始めていたためだ。隣国アルビオンを制圧した結果貴族派『レコン・キスタ』が、トリスティンに進行してくるという噂だった。

よって、周りを守る衛士隊の空気は、ピリピリしたものになっている。王宮の上空は、幻獣、船を問わず飛行禁止令が出され、門をくぐる人物のチェックも激しかった。

いつもならなんなく通される仕立て屋や、出入りの菓子屋の主人までもが門の前で呼び止められ、身体検査を受け、デイトイクトマジックでメイジが化けていないか、『魅了』の魔法等で何者かに操られていないか、など厳重な検査を受けていた。

そんな時だったから、王宮の上に一匹の風竜が現れた時、警備の魔法衛士隊の隊員達は色めきたった。

魔法衛士隊はマンティコア隊、ヒポグリフ隊、グリフォン隊の三隊からなっている。三隊はローテンションを組んで、王宮の警護を司る。一隊が詰めている日は、他の隊は非番か訓練を行っているのだ。今日の警護はマンティコア隊であった。マンティコアに騎乗したメイジ達は、王宮の上空に現れた風竜めがけて一斉に飛び上がる。風竜の上には五人の人影があった。しかも風竜は、巨大なモグラをくわえているというおかしな状態だった。

魔法衛士隊の隊員達は、ここが現在飛行禁止である事を大声で告げたが、警告を無視して風竜は王宮の中庭へと着陸した。

桃色がかったブロンドの美少女に、燃える赤毛の長身の女、そして金髪の少年、眼鏡をかけた小さな少女、そして白髪の青年だった。青年は身長ほどもある長剣を背負っている。

マンティコアに跨った隊員達は、着陸した風竜を取り囲んだ。腰からレイピアのような形状をした杖を引き抜き、一斉に掲げる。いつでも呪文が詠唱できるような態勢を取ると、ごつい体にかめしい髭面

の隊長が大声で怪しい侵入者達に命令する。

「杖を捨てろ！」

一瞬、侵入者達は不満そうな表情を浮かべたが、彼らに対して青い髪の小柄な少女が首を振って言う。

「宮廷」

一行は仕方ないと言うばかりにその言葉に頷き、命令された通りに杖を地面に捨てた。

「今現在、王宮の上空は飛行禁止だ。ふれを知らんのか？」

一人の、桃色がかったブロンドの髪の少女が、とんつと軽やかに竜の上から飛び降りて、毅然とした声で名乗る。

「わたしはラ・ヴァリエール公爵が三女、ルイズ・フランソワーズです。怪しいものじやありません。姫殿下に取次願いたいわ」

隊長は口ひげを捻って、目の前の少女を見つめる。ラ・ヴァリエール公爵夫妻なら知っている。貴族の中でも有数の、高名な一家だ。

隊長は掲げた杖を下した。

「ラ・ヴァリエール公爵様の三女とな」

「いかにも」

ルイズは、胸を張って隊長の目をまっすぐ見つめた。

「なるほど、見れば目元が母君そっくりだ。して、要件を伺おうか？」

「それは言えません。密命なのです」  
「では殿下に取り次ぐわけにはいかぬ。用件も尋ねずに取り次いだ日にはこちらの首が飛ぶからな」

困った声で隊長が言った。そんな隊長に、話を聞いていた白髪の青年——金木が口を開いた。

「そちらの事情も分かりますが、僕達も密命で行動しているんです。どうか姫殿下に取り次ぐわけにはいきませんか？」

隊長は、口を挟んできた金木の容姿を見て、苦い顔つきになった。見た事もない服装だし、鼻は低く、肌も黄色い。そして背中には大きな剣を背負っている。

「どこの国の人間だかは分からぬが、貴族ではない事は確かであった。」



「無礼な平民だな。従者風情が貴族に話しかけるといふ法は無い。黙っている」

それを聞いて、金木は困ったような表情を浮かべて頬を掻いた。平民だからという理由で話も聞かないとは……。貴族とはいえ、自分達を神様か何かと勘違いしているのではないだろうか。ここまで来ると、怒りを通り越して呆れてしまう。

どうするか、と一同が悩みかけた時、宮殿の入り口から鮮やかな紫のマントとローブを羽織った人物がひよつこりと顔を出した。中庭の真ん中で魔法衛士隊に囲まれたルイズの姿を見て、慌てて駆け寄ってくる。

「ルイズー」

駆け寄ってくるアンリエッタの姿を見て、ルイズの顔が薔薇をまき散らしたようにぱあつと輝いた。

「姫様ー」

二人は、一行と魔法衛士隊が見守る中、ひっしと抱き合った。

「ああ、無事に帰ってきたのね。嬉しいわ。ルイズ、ルイズ・フランスワーズ……」

「姫様……」

ルイズの目から、ぽろりと涙がこぼれた。

「件の手紙は、無事、この通りでございます」

ルイズはシャツの胸ポケットから、そつと手紙を見せた。アンリエッタは大きく頷くと、ルイズの手を固く握りしめる。

「やはり、あなたはわたくしの一番のお友達ですわ」

「もつたいないお言葉です。姫様」

しかし、一行の中にウエールズの姿が見えない事に気づいたアンリエッタは、顔を曇らせる。

「……ウエールズ様は、やはり父王に殉じたのですね」

ルイズは目をつむって、神妙に頷いた。

「……して、ワルド子爵は？ 姿が見えませんが。別行動をとっているのかしら？ それとも……まさか、敵の手にかかって？ そんな、あの子爵に限って、そんなはずは……」

ルイズの表情が曇る。彼女に代わって、金木が言いにくそうな表情でアンリエッタに言った。

「彼は貴族派のメイジでした」

「何ですって?」

それを聞いたアンリエッタの顔が、蒼白になった。そして興味深そうにそんな自分達を、魔法衛士隊の面々が見つめている事に気づき、アンリエッタは説明した。

「彼らはわたくしの客人ですわ、隊長殿」

「さようですか」

アンリエッタの言葉で隊長は納得するとあっけなく杖をおさめ、隊員達を促して持ち場へと去って行く。

アンリエッタは再びルイズに向き直った。

「道中、何があったのですか? ……とにかく、わたくしの部屋でお話ししましょう。他の方々は別室を用意します。そこでお休みになってください」

キュルケとタバサ、そしてギーシュを謁見待合室に残し、アンリエッタは金木とルイズを自分の居室に入れた。小さいながらも、精巧なレリーフがかたどられた椅子に座り、アンリエッタは机に肘をついた。

ルイズはアンリエッタに事の次第を説明した。

道中、キュルケ達が合流した事。

アルビオンへと向かう船に乗ったら、空賊に襲われた事。

その空賊が、ウエルズ皇太子だった事。

ウエルズ皇太子に亡命を勧めたが、断られた事。

そして……、ワルドと結婚式を挙げるために脱出船に乗らなかった事。

結婚式の最中、ワルドが豹変し……、ウエルズを殺害し、ルイズが預かった手紙を奪い取ろうとした事。

しかし、このような手紙は取り戻してきた。レコン・キスタの野望……ハルケギニアを統一し、エルフから聖地を取り戻すという大それ

た野望は躓いたのだ。

しかし、無事、トリステインの命綱であるゲルマニアとの同盟が守られたというのに、アンリエツタは悲嘆にくれた。

「あの子爵が裏切者だったなんて……。まさか、魔法衛士隊に裏切者がいるなんて……」

アンリエツタは、かつて自分がウエールズにしたためた手紙を見つめながら、はらはらと涙をこぼした。

「姫様……」

ルイズが、そつとアンリエツタの手を握った。

「わたくしが、ウエールズ様のお命を奪ったようなものだわ。裏切り者を、使者に選ぶなんて、わたくしはなんとという事を……」

「……ウエールズ皇太子は、もともとあの国に残るつもりでした。あなたのせいじゃありません」

自分を責めるアンリエツタを、金木はそう言ってフォローする。彼女の事は正直言ってあまり好きではないが、愛する人を失って悲しむ彼女に鞭打つような事をするほど、金木は非情な人間ではない。

「……あの方は、わたしの手紙をきちんと最後まで読んでくれたのかしら？　ねえ、ルイズ」

ルイズはアンリエツタの言葉に頷くと、

「はい、姫様。ウエールズ皇太子は、姫殿下の手紙をお読みになりました」

「ならば、ウエールズ様はわたくしを愛しておられなかったのね」

アンリエツタは、寂しげに首を振った。

「では、やはり……皇太子に亡命をお勧めになったのですね？」

悲しげに手紙を見つめたまま、アンリエツタは頷いた。

ルイズは、ウエールズの言葉を思い出した。彼は頑なに『アンリエツタは私に亡命など勧めていない』と否定していた。やはりそれは、ルイズが思った通り彼の嘘だったのだ。

「ええ。死んで欲しくなかったんだもの。愛していたのよ、わたくし。それはアンリエツタは、呆けた様子で呟いた。

「わたくしより、名誉の方が大事だったのかしら」

金木は、違うと思った。彼はそんなもののために、アルビオンに残ったわけではない。彼はアンリエッタに迷惑をかけないために……、ハルケギニアの王家が、弱敵ではない事を反乱税に示すために、アルビオンに残ったのだ。

「……それは違います。皇太子は、あなたやこのトリステインを守るためにアルビオンに残ったんです。僕はそう聞きました」

ぼんやりとした顔で、アンリエッタは金木の方を見た。

「わたくしに迷惑をかけたために？」

「自分が亡命したら、反乱勢が攻め入る格好の口実を与えるだけだつて彼は言っていました」

「ウェールズ様が亡命しようがしまいが、攻めて来る時は攻め寄せて来るでしょう。攻めぬ時には沈黙を保つでしょう。個人の存在だけで、戦は発生するものではありませんわ」

「それでも、護りたかつたんだと思います。だからこそ皇太子は、アルビオンに残ったんです。……アンリエッタ姫殿下、お願いです。彼が最後に残した言葉を、あなただけは信じていてください。彼が誰よりも愛した、あなただけは」

金木が悲痛な声で言うと、アンリエッタは悲し気な表情を浮かべて窓の外を見やった。

金木は一度息を吐くと、アンリエッタを見て告げる。

「勇敢に戦い、勇敢に死んでいったと。それだけ伝えてくれてって、皇太子は言っていました」

寂しそうに、アンリエッタは微笑んだ。薔薇のようにきれいな王女がそうしていると、空気まで沈鬱に澱むようだった。アンリエッタは美しい彫刻が施された、大理石削り出しのテーブルに肘をついて、悲し気に金木に問う。

「勇敢に戦い、勇敢に死んでいく。殿方の特権ですわね。残された女は、どうすれば良いのでしょうか」

それを聞いて、金木は唇を噛んだ。かつてある少女を残して一人死地へと向かった金木にとって、その言葉は耳に痛い事の上無い。「姫様……わたしがもつと強く、ウェールズ皇太子を説得していれば

……」

アンリエッタは立ち上がり、申し訳なきように呟くルイズの手を握った。

「良いのよルイズ。あなたは立派にお役目通り、手紙を取り戻してきたのです。あなたが気にする必要はどこにも無いのよ。それにわたくしは、亡命を勧めてほしいなんて、あなたに言ったわけではないのですから」

それからアンリエッタは、にっこりと笑った。

「わたくしの婚姻を妨げようとする暗躍は未然に防がれたのです。我が国はゲルマニアと無事同盟を結ぶ事ができるでしょう。そうすれば、簡単にアルビオンも攻めてくるわけにはいきません。危機は去ったのですよ、ルイズ・フランソワーズ」

アンリエッタは努めて明るい声を出した。

ルイズはポケットから、アンリエッタにもらった水のルビーを取り出した。

「姫様。これをお返しします」

しかし、アンリエッタは首を横に振った。

「それはあなたが持つていなさいな。せめてものお礼です」

「こんな高価な品をいただくわけにはいきませんわ」

「忠誠には、報いるところが無ければなりません。良いから、とっておきなさいな」

ルイズは頷くと、それを自分の指に嵌めた。

その様子を見て、金木は王子の指から抜き取った指輪の事を思い出した。ズボンのポケットに入った今やウエールズの遺品とも言えるそれを取り出すと、アンリエッタに手渡す。

「姫殿下、これを……。ウエールズ皇太子から預かった指輪です」

アンリエッタはその指輪を受け取ると、驚きのあまり目を大きく見開いた。

「これは、風のルビーではありませんか。これを、皇太子から預かったと?」

「はい。ウエールズ皇太子は、最後にこれを僕に託しました。あなた

に渡してくれと」

実際には、風のルビーはウェールズの遺体の指から抜き取ったものだ。だからそんな事を金木に言い残せるはずもない。しかし、金木はあえて嘘をついた。少しでもアンリエッタの心の慰めになればと考えた、金木の優しい嘘である。例えそれが金木のエゴだとしても構わない。大切な人を失った彼女にただ事実だけを伝えるのは、あまりにも残酷な話である。

アンリエッタは風のルビーを指に通した。ウェールズが嵌めていたものなので、アンリエッタの指にはゆるゆるだったが、小さくアンリエッタが呪文を唱えると指輪のリングの部分がすぼまり、薬指にピタリと収まった。アンリエッタは風のルビーを愛しそうに撫でると、金木の方を向いてはにかんだような笑みを浮かべる。

「ありがとうございます。優しい使い魔さん」

寂しく、悲しい笑みだったが、金木に対する感謝の念がこもった笑みだった。金木はその笑みに何も言う事ができず、唇を噛んで俯く。

「あの人は、勇敢に死んでいったと。そう言われましたね」

その言葉に、金木はコクリと頷く。

「はい。その通りです」

アンリエッタは指に光る風のルビーを見つめながら言った。

「ならば、わたくしは……、勇敢に生きてみようと思います」

王宮から魔法学院に向かう空の上、ルイズは黙りっぱなしだった。キュルケが、一体ウェールズから取り返してきた手紙に何が書いてあったのか、ルイズと金木から聞きだそうと、なんやかんや話しかけてきたが、二人は一言も喋らなかった。

「なあに？ あれだけ手伝わせて、どんな任務だったか教えてくれないの？ おまけにあの子爵は裏切り者だって言うし、ワケ分かんないわ」

キュルケは金木を、熱っぽい視線で見つめた。

「でも、ダーリンがやつつけたのよね？」

金木は頷きながらも、険しい表情を浮かべてこう返した。

「でも、逃げられた」

「それでもすごいわ！・ねえ、一体どんな任務だったの？」

彼女からそう言われても、金木は何も言わなかった。ルイズが何も言わない以上自分も言うべきではないし、それ以前に任務の内容は誰にも話さない方が良くと分かっていたからだ。

キュルケは眉をひそめて、それからギーシユの方を向いた。

「ねえギーシユ」

「何だね？」

薔薇の造花をくわえて、ぼけつと物思いに耽っていたギーシユが振り向いた。

「あなた、アンリエツタ姫殿下があたし達に取り戻せと命じた手紙の内容を知ってるんでしょ？」

ギーシユは目をつむって言った。

「そこまでは僕も知らないよ。知ってるのはルイズだけだ」

「ゼロのルイズ！　なんであたしには教えてくれないの！　ねえタバサ！　あなたどう思う？　なんかとつても、バカにされてる気がするわ！」

キュルケは本を読んでいる友人を揺さぶった。しかしタバサは何も言わずされるがまま、ガクガクと首を振るだけだった。

そんな風にキュルケが暴れたおかげで、バランスを崩した風竜はがくんと高度を落とした。その時の揺れでバランスを崩し、ギーシユが風竜の背中から落下する。それを見て金木がぎよつとした表情を浮かべて、周りにいる少女達に叫ぶ。

「ちよ、ちよつと！　ギーシユ君落ちたよ!?!」

「大丈夫よ、相手はギーシユなんだから」

「彼の扱い雑過ぎない!?!」

ギーシユのあんまりな扱いに金木が珍しく大声で叫ぶが、そんな金木の服の裾をタバサがちよいちよいと引っ張る。それに金木がタバサの方を振り返ると、彼女は下の方を何故か指差していた。眉をひそめながら金木が下を見ると、ギーシユがゆつくりとした速度で地

上に向かっているのが見えた。どうやら途中で『レビテーション』の呪文を唱えて落下の速度を落としたりしい。それを見て金木はほつと胸を撫で下ろしてから、ルイズに視線を戻す。

今の彼女は大分落ち着きを取り戻したように見えるが、内心はまだ分からない。婚約者の裏切りに、ウェールズ皇太子の死と、今回の旅で彼女が失ったものはあまりにも多すぎる。そう考えると彼女の心の傷は、きつとまだ癒えていないのだろう。

それから金木はルイズを裏切った婚約者、ワルドと彼の背後の組織『レコン・キスタ』に考えを巡らせる。ワルドの口ぶりからして、レコン・キスタはトリステインのあちこちに根を張り巡らせているようだ。それは、アンリエッタを護る魔法衛士隊という組織にワルドという裏切り者を密かに潜り込ませていた点から分かる。

王女を護るといふ役目を持つ以上、そこに配属される隊員の素性などは厳しくチェックされるはずだ。それなのにワルドが魔法衛士隊に潜り込む事ができたという事は、無論彼の實力もあるだろうがレコン・キスタという組織力も無関係ではないだろう。これは自分の勝手な推測だが、レコン・キスタの活動にはトリステインでも有数の貴族が力を貸している可能性が大きい。

そう考えると、今から自分達が帰るトリステインにはレコン・キスタの息のかかった人間がまだ多くいるかもしれない。ルイズと金木がまだ生きている事が分かれば、追手が自分達の命を狙ってくる可能性だってある。

(……だけど、そんなの関係ない。僕の大切なものを奪うなら……相手が誰だって、摘んでやる」

自分が浮かべているであろう冷たい表情をルイズ達に見られないように真正面を見つめながら、金木はバキリ……と折り曲げた右手の人差し指を親指で押し鳴らした。

富裕大陸の岬の突端に位置した城は、一方向からしか攻める事ができない。密集して押し寄せたレコン・キスタの先陣は、魔法と大砲の



攻撃を何度も食らい、大損害を受けた。

しかし、所詮は多勢に無勢。一旦城壁の内側へと侵入された堅城はもろかった。王軍はそのほとんどがメイジであったため、護衛の兵を持たなかった。王軍のメイジ達は、群がる蟻のように名もなきレコン・キスタの兵士達に一人、また一人と討ち取られ、その命を散らしていった。

敵に与えた損害は大きかったが、その代償として王軍は全滅した。文字通りの全滅だった。最後の一兵に至るまで、王軍は戦い、そして斃れた。

つまり、アルビオンの革命戦争の最終決戦、ニューカッスルの攻城戦は、百倍以上の敵軍に対して、自軍の十倍にも上る損害を与えた戦い……、伝説となったのだった。

戦が終わった二日後、照り付ける太陽の下で死体と瓦礫が入り交じる中、長身の貴族が戦跡を検分していた。羽のついた帽子に、アルビオンでは珍しいトリステインの魔法衛士隊の制服。

それは、金木が左腕を斬り落とした人物、ワルドだった。

彼の隣には、フードを目深にかぶった女のメイジ、土くれのフーケが立っている。彼女はラ・ロシエールから船に乗り、アルビオンに渡ってきたのである。昨夜、アルビオンの首都、ロンディニウムの酒場でワルドと合流し、このニューカッスルの戦場跡へとやってきたのだ。

周りでは、レコン・キスタの兵士達が財宝あさりにいそしんでいる。宝物庫と思われる辺りでは、金貨探しの一団がお目当ての物を探し当てたらしく、歓声を上げていた。

長槍を担いだ傭兵の一団が元は綺麗な中庭だった瓦礫の山に転がる死体から装飾品や武器を奪い取り、魔法の杖を見つけては大声ではしゃいでいる。フーケはその様子を苦々しげに見つめて、舌打ちを鳴らした。

そんなフーケの表情に気づき、ワルドは薄い笑みを浮かべた。

「どうした、土くれよ。貴様もあの連中のように、宝石を漁らんのか。貴族から財宝を奪い取るのは、貴様の仕事じゃなかったのか」

「私とあんな連中を一緒にしないで欲しいわね。死体から宝石を？ぎ取るのは、趣味じゃないわ」

「盗賊には、盗賊の美学があるという事か」

ワルドが笑うと、フーケはふんと鼻を鳴らしながら、

「据え膳に興味はないわ。私は大切なお宝を盗まれて、あたふたする貴族の顔を見るのが好きだったのよ。でもこいつらは……」

フーケはちらりと王軍のメイジの死体を横目で見た。

「もう、慌てる事もできないわね」

「アルビオンの王党派は貴様の仇だろうが。王家の名の下に、貴様の加盟は辱められたのではなかったか？」

ワルドが嘯くように言うと、フーケは冷たい、感情を抑えた声で言った。

「そうね。そうなんだけどね」

それから、ワルドの方を向いた。二の腕の中ほどから左腕が切断されている。主を無くした制服の袖が、ひらひらと風に揺れていた。

「あんたも随分と苦戦したようね」

ワルドは変わらぬ調子の声で答えた。

「ウェールズと腕一本なら、安い取引だったと言わねばならんだろう」  
「大したやつだね。あのガンダールヴ。風のスクウエアのあんたの腕を、ぶった切っちゃうなんて」

「平民だと思って油断したよ。それどころか、とんだ化け狐だった。あの化け物め……」

そこで、今まで無感情だったワルドの声に感情がこもる。それは、明確な敵意と怒りだった。それを見て、フーケは思わず眉をひそめた。自分が前に対峙したあのガンダールヴの青年は、確かに普通の青年には無いものを感じたが、化け物と呼ぶほどの事だろうか？ そりゃあワルドの言う通り、あの青年の強さは化け物じみていたが……。

フーケはワルドの言葉を聞きながら、辺りを見回してから言った。  
「だけど、この城にいたんじゃないやあ、その化け物も生き残れはしなかったみたいだね」

フーケがそう言うと、ワルドは冷たい微笑を浮かべた。

「化け物とはいえ、所詮は生物だ。攻城の隊から、それらしき人物に苦戦したという報告は届いていない。奴は俺と戦って、力を消耗していた。恐らく、ただの平民に成り果てていただろうな。奴を討ち取った兵は、それが伝説の使い魔と気づきもしなかっただろう」

フーケは、気がなさそうに鼻を鳴らした。カネキとか呼ばれていた、妙な格好の青年を脳裏に浮かべる。彼がそんな簡単に死ぬようなタマだろうか？

「で、その手紙とやらはどこにあるんだい？」

「この辺りだ」

ワルドは杖で地面を指した。そこは、二日前まで礼拝堂であった場所だ。ワルドとルイズが結婚式を挙げようとした場所であり、ウエルズが命を失った場所でもある。

だが、今ではただの瓦礫の山になっていた。

「ふーん、あのラ・ヴァリエールの小娘……、あなたの元婚約者のポケットに、その手紙は入っているんでしょう？」

「そうだ」

「見殺し？ 愛してなかったの？」

「愛するとか、愛さないとか、そういった感情は忘れたよ」

抑揚の変わらぬ声で、ワルドは言った。

呪文を詠唱し、杖を振った。小型の竜巻が現れ、辺りの瓦礫が飛び散る。

徐々に、礼拝堂の床が見えてきた。

始祖ブリミルの像と、椅子に挟まれた間にウエルズの亡骸があった。椅子と像に挟まれていたおかげで、亡骸は潰れていなかった。

「あらら。懐かしのウエルズ様じゃない」

フーケが驚いた声を上げた。実は彼女は、元々アルピオンのある貴族だったのだ。そのため、ウエルズの顔を彼女は覚えていた。

しかし、どこにも死体は見つからない。

「ほんとにここに、あいつらは死んだの？」

そのはずだが、と呟いてワルドは辺りを注意深く捜し始めた。

「ふーん……、あら、これってジオルジュ・ド・ラ・トゥールの『始祖ブリミルの光臨』じゃないの」

フーケが床に転がっていた絵画を手に取りながら呟く。

「と、思ったら複製か。ま、そうよね。こんな田舎の城の礼拝堂に……つて、ん？」

フーケは、絵画が転がっていた床の上に、ぽつこりと開いた直径一メートルほどの穴を見つけ、ワルドを呼んだ。

「ねえワルド。この穴、何かしら？」

ワルドは眉をひそめると、しゃがんでフーケが指した穴を覗き込む。ギーシュの使い魔である巨大モグラが掘った穴だが、ワルドは当然その事を知らない。驚愕で引きつくワルドの頬を、穴の奥から吹く冷たい風がなぶった。

「もしかして、この穴を掘ってラ・ヴァリエールの娘とガンダールヴは逃げたんじゃないの？」

フーケが言うと、ワルドは頷いてから苛立った様子で舌打ちをする。

「中に入って、追いかけてみる？」

「無駄だろう。風が入ってくるという事は、空に通じているはずだ。くそ、やられたな……」

ワルドは苦々しい声で言った。そんな様子を見て、フーケがにっこりと微笑む。

「あんたもそんな顔をするのね。ガーゴイルみたいに感情のない男だと思っただけ……、どうしてどうして、気持ちが悪くなるタイプ？」  
からかうな、と言ってワルドは立ち上がった。そんな二人に、遠くから声が掛けられた。

この場にそぐわない、快活で澄んだ声だった。

「子爵！ ワルド子爵！ 件の手紙は見つかったかね？ アンリエツタがウェールズにしたためたという、その、なんだ、ラブレターは……。ゲルマニアとトリステインの婚姻を阻む救世主は見つかったかね？」

ワルドは首を振って、現れた男に応えた。

やってきた男は、年のころ三十代の半ば。丸い球帽をかぶり、緑色のローブとマントをその身に纏っている。一見すると聖職者のような格好に見えた。だが物腰は軽く、まるで軍人のようだった。高い鷲鼻に、理知的な色をたたえた碧眼。そして帽子の裾からカールした金髪が覗いている。

「閣下。どうやら、手紙は穴からすり抜けたようです。私のミスです。申し訳ありません。なんなりと罰をお与えください」

ワルドは地面に膝をつき、頭を垂れた。

しかし閣下と呼ばれた男はにかつと人懐こそうな笑みを浮かべると、ワルドに近寄ってその肩を叩いた。

「何を言うか！ 子爵！ 君は目覚ましい働きをしたのだよ。敵軍の勇将を一人で討ち取る働きをして見せたのだ！ ほら、そこに眠っているのは、あの親愛なるウエールズ皇太子じゃないかね？ 誇りたまえ！ 君が倒したのだ！ 彼は、随分と余を嫌っていたが……こうして見ると不思議だ。妙な友情さえ感じるよ。ああ、そうだった。死んでしまえば、誰もがともだちだったな」

ワルドは台詞の最後に込められた皮肉に気づき、わずかに頬を緩めた。それからすぐに真顔に戻ると、自分の上官に再び謝罪を繰り返す。

「ですが、閣下が欲しがっておられたアンリエッタの手紙を手に入れる任務に失敗いたしました。私は閣下のご期待に沿う事ができませんでした」

「気にするな。同盟阻止より、確実にウエールズをしとめる事の方が大事だ。理想は一步ずつ、着実に進む事により達成される」

それから緑のローブの男は、フーケの方を向いた。

「子爵、その綺麗な女性を世に紹介してくれたまえ。未だ僧籍に身を置く余からは、女性に声をかけづらいからね」

フーケは男の顔を見つめた。このワルドが頭を下げている所を見ると、随分とお偉いさんなのだろう。だが、どうも気に入らない。その体からは妙なオーラを放っている。禍々しい雰囲気、ローブの間から漂ってくる。ワルドは立ち上がると、男にフーケを紹介した。

「彼女が、かつてトリステインの貴族達を震え上がらせた土くれのフーケにごぎいます、閣下」

「おお！ 噂はかねがね存じておるよ！ お会いできて光栄だ。ミス・サウスゴータ」

かつて捨てた貴族の名を口にされたフーケは微笑んだ。

「ワルドに、私のその名前を教えたのはあなたね？」

「そうだとも。余はアルビオンの全ての貴族を知っておる。系図、紋章、土地の所有権……、管区を預かる司教時代に全てそらんじた。おお、ご挨拶が遅れたね」

男は目を丸く見開いて、胸に手を添えた。

「レコン・キスタ総司令官を務めさせていただいておる、オリヴァー・クロムウエルだ。元はこの通り、一介の司教に過ぎぬ。しかしながら、貴族議会の投票により、総司令官に任じられたからには、微力を尽くさねばならぬ。始祖ブリミルに使える聖職者でありながら、『余』などという言葉を使うのを許してくれたまえよ？ 微力の行使には信用と権威が必要なのだ」

「閣下はすでに、ただの総司令官ではありません。今ではアルビオンの……」

「皇帝だ。子爵」

クロムウエルは笑った。だが、その目の色は全く変わっていない。「確かにトリステインとゲルマニアの同盟阻止は、余の願うところだ。しかし、それよりもっと大事な事がある。何だか分かるかね？ 子爵」

「閣下の深い考えは、凡人の私にははかりかねます」

クロムウエルは、かっと目を見開いた。それから両手を振り上げると、大きな身振りで演説を開始し始めた。

『『結束』だ！ 鉄の『結束』だ！ ハルケギニアは我々、選ばれた貴族達によって結束し、聖地をあの手まわしきエルフ共から取り返す！

それが始祖ブリミルより余に与えられし使命なのだ！ 結束には、何より信用が第一だ。だから余は子爵、君を信用する。些細な失敗を責めはしない」

ワールドは深々と頭を下げた。

「その偉大なる使命のために、始祖ブリミルは余に力を授けたのだ」  
フーケの眉が、その言葉を聞いてぴくんと跳ねた。力？ 一体、どんな力だと言うのだろうか。

「閣下、始祖が閣下にお与えになった力とはなんでございましょう？  
よければ、お聞かせ願えませんこと」

自分の演説に酔っているかのような口調で、クロムウエルは続けた。

「魔法の四大系統はご存知かね？ ミス・サウスゴータ」

フーケは頷いた。そんな事は、子供でも知っている。火、風、水、土の四つだ。

「その四大系統に加え、魔法にはもう一つの系統が存在する。始祖ブリミルが用いし、零番目の系統だ。真実、根源、万物の祖となる系統だ」

「零番目の系統……。まさか、虚無？」

フーケは自分でその単語を呟いてから、思わず青ざめた。それは、今では失われてしまった系統だ。どんな魔法だったのかすら、伝説の闇の向こうに消えている。この男は、その零番目の系統を知っているというのだろうか。

「余はその力を、始祖ブリミルより授かったのだ。だからこそ貴族議会の諸君は、余をハルケギニアの皇帝にする事を決めたのだ」

クロムウエルは、ウェールズの死体を指差した。

「ワールド君。ウェールズ皇太子を、是非とも余の友人に加えたいのだが。彼はなるほど、余の最大の敵であったが、だからこそ死して後は良き友人になれると思う。異存はあるかね？」

ワールドは首を振った。

「閣下の決定に異論が挟めようもございません」

クロムウエルは、にっこりと笑った。

「では、ミス・サウスゴータ。貴女に、『虚無』の系統をお見せしよう」

その言葉に、フーケは息を呑んでクロムウエルの挙動を見つめた。

クロムウエルは腰に差した杖を引き抜くと、詠唱を始める。

低い、小さな詠唱がクロムウエルの口から漏れる。フーケがかつて聞いた事のない言葉だった。

詠唱が完成すると、クロムウエルは優しくウエールズの死体に杖を下した。

すると、次の瞬間驚愕すべき事が起こった。冷たい軀であったウエールズの瞳が、ぱちりと開いたのだ。その光景に、フーケの背筋が凍り付く。

ウエールズはゆっくりと身を起こした。青白かった顔が、みるみるうちに生前の面影を取り戻していく。まるでしおれた花が水を吸うように、ウエールズの体に生気がみなぎっていく。

「おはよう、皇太子」

クロムウエルが呟くと、蘇ったウエールズはクロムウエルに微笑み返した。

「久しぶりだね、大司教」

「失礼ながら、今では皇帝なのだ。親愛なる皇太子」

「そうだった。これは失礼した、閣下」

ウエールズは膝をつくと、臣下の礼を取った。

「君を余の親衛隊の一人に加えようと思うのだが。ウエールズ君」

「喜んで」

「なら、友人達に引き合わせてあげよう」

そう言って、クロムウエルは歩き出した。その後を、ウエールズが生前と変わらぬ仕草で歩いていく。

フーケは呆然として、その様子を見つめていた。クロムウエルが思い出したように立ち止まり、振り向いてワルドに告げる。

「ワルド君、安心したまえ。同盟は結ばれても構わない。どのみちトリストインは裸だ。余の計画に変更はない」

ワルドは会釈した。

「外交には二種類あってな、杖とパンだ。とりあえずトリストインとゲルマニアには温かいパンをくれてやる」

「御意」

「トリストインは、なんとしてでも余の版図に加えねばならぬ。あの



王室には『始祖の祈禱書』が眠っておるからな。聖地に赴く際には、是非とも携えたいものだ」

そう言つて満足げに頷くと、クロムウエルは去つて行つた。

クロムウエルとウエールズが視界の外に去つた後、フーケは顔を青くしながらもやつとの思いで口を開いた。

「あれが、虚無……？ 死者が蘇つた。そんな馬鹿な」

その眩きを聞いて、ワルドが言つた。

「虚無は生命を操る系統……。閣下が言うには、そういう事らしい。俺にも信じられんが、目の当たりにすると信じざるを得まいな」

フーケは震える声で、ワルドに尋ねる。

「もしかして、あんたもさつきみたいに、虚無の魔法で動いているんじゃないだろうね？」

するとワルドは、まさかと言うように笑つた。

「俺か？ 俺は違うよ。幸か不幸か、この命は生まれつきのものさ」

それから天を仰ぎながら、

「しかしながら……あまたの命が聖地に光臨せし始祖によって与えられとするならば……全ての人間は『虚無』の系統で動いているとは言えないかな？」

フーケはぎよつとした顔になって、胸を押さえて自分の心臓の鼓動を確かめる。生きていくという実感が、急に欲しくなったのだ。

「そんな顔をするな。これは俺の想像だ。妄想と言つてもよい」

ほつとフーケはため息をついた。それからワルドを恨めしげに見つめると言つた。

「驚かせないでよ」

ワルドは右手で、金木に切り落とされた左腕の辺りを撫でながら言う。

「でもな、俺はそれを確かめたいのだ。妄想に過ぎぬのか、それとも現実なのか。きつと聖地にその答えが眠っていると、俺は思うのだよ」  
そしてぎりつと奥歯を強く噛み締めると、アルビオンの青空を睨み

付けるように見ながら吐き捨てる。

「そのためには、まだ生きているあの化け物が邪魔だ。聖地に向かうために、あいつの命を奪う必要がある」

そんなワルドの様子を見て、フーケはついにさつきから気になっていた事を口に出した。

「あのカネキって奴、そんなに厄介なのかい？ 確かに強いかもしれないけど、それだけだろう？ レコン・キスタって組織でかかれば、すぐに叩き潰せるじゃないか。そんなに気を張る必要はないと思うけどねえ」

するとワルドはふんと鼻を鳴らしながら、フーケに言う。

「お前は奴の本当の力を見ていないからそう言えるのだ。あいつの見目は俺達人間と同じだが、中身は全く違う。奴の持つ、力の質そのものもだ。さつき閣下はウエールズを最大の敵と言っていたが、それは違う。最大の敵は、あいつだ。あいつを殺さなければ、俺達レコン・キスタの野望が果たされる事は無い」

それを聞いて、フーケはさらに困惑した。彼の金木に対する警戒心は尋常なものではない。彼自身だって風のスクウエアの実力者だというのに、だ。無論慢心は注意すべき事だが、それにしても警戒心が強すぎるようにフーケには思えてならない。一体この戦場で、彼は金木の何を見たというのだろうか。

フーケのその疑問に答える者は、その場には誰一人もいなかった。

## 第十六話 変化

金木達が魔法学院に帰還してから三日後に、正式にトリステイン王国女王アンリエッタと帝政ゲルマニア皇帝、アルブレヒト三世との婚姻が発表された。式は一カ月後に行われるはこびとなり、それに先立って軍事同盟が締結される事になった。

同盟の締結式は、ゲルマニアの首府であるヴィンドボナで行われ、トリステインからは宰相マザリーニ枢機卿が出席し、条約文に署名した。

アルビオンの新政府樹立の交付が為されたのは、同盟締結式の翌日。両国の間にはすぐに緊張が走ったが、アルビオン帝国初代皇帝、クロムウエルはすぐに特使をトリステインとゲルマニアに派遣し、不可侵条約の締結を打診してきた。

両国は協議の結果、これを受けた。両国の空軍力を合わせても、アルビオンの艦隊には対抗しきれないからだ。喉元に短剣を突きつけられたような状態での不可侵条約だったが、未だ軍備が整っていない両国にとって、この申し出は願ったりだった。

そして、ハルケギニアに表面上は平和が訪れた。政治家達にとっては夜も眠れない日々が続いたが、普通の貴族や平民にとってはいつもと変わらぬ日々が待っていた。

それは、トリステインの魔法学院でも例外ではなかった。

早朝、金木は一人ヴェストリの広場で一人目を閉じて立っていた。すぐ近くの塔の壁にはデルフが立てかけられている。

金木が静かに意識を集中させると、メキメキ……という音と共に、金木の腰から赫子が出現する。そして六本の赫子が完全に腰から出現すると、金木はふうと息をついてデルフに言った。

「どう思うっ？」

「どう思うっって何がだよ」

ある意味当然とも言える質問をデルフが発すると、六本の赫子をそ

れぞれ自由に動かしながら金木が説明する。

「この世界に来るまでは、僕の赫子は四本だった。それなのに、アルビオンでワルドと戦った後は何故か六本に増えている。何か知らない？」

金木が尋ねると、デルフはうーんと悩んでいるような声を出した後、

「たぶん、ルーンのせいだろ」

「ルーンが？」

「ああ。あの時、相棒は殺されたウェールズと傷つけられた娘っ子を見て完全に心を震わせていた。言っただけでなかったが、ガンダールヴの強さは心の震えで決まる。それは喜び、悲しみ、怒りでも何でも良い。相棒の怒りに反応したルーンが、その相棒のカグネとやらに力を与えた。そういう事なんじゃねえのか？」

「……………」

金木は無言でひゅんひゅんと赫子を動かしていたが、不意に赫子をデルフに伸ばすと先端を柄に巻き付ける形でデルフを掴む。うおつとデルフから驚いた声が出るが、それを無視して赫子に掴まれたデルフを自分に近づけると、再びデルフに尋ねる。

「ルーンに、そんな力があるの？」

「普通はねえよ。使い魔のルーンって言えば聞こえは良いが、一言で言っちゃえば契約完了の証だ。主と視界を共有させたり、ある程度の特殊能力を与える事はあるが、ガンダールヴのルーンほどの力は持っていない。カグネに力を与えたのも、ガンダールヴのルーンだったからだろう」

「…………なるほど、ね。じゃあもう一つ聞いていい？」

「何だよ」

「…………この世界に来てから、いや、正確には子のルーンを左手に刻まれてから僕の空腹が抑えられているような気がする。これも、ルーンの花なの？」

金木はある意味で、最重要と言える質問を口にした。

喰種の空腹は、彼らが生きていく上で最も気にしなければならぬ

事だ。喰種が空腹だと彼らの特徴である驚異的な傷の回復がうまく機能しなくなる上に、赫子を出せない、喰種の特徴とも言える赫眼の制御が効かない、さらには意識に何らかの変異をもたらすなど多くのデメリットが発生する。だからこそ多くの喰種は、空腹になる事を人間と同じぐらいに、いや、下手をしたらそれ以上に避けている。

それは半喰種である金木も例外ではない。だからこそこの世界に來た当初は自分の空腹にいつも以上に気を付けていたのだが、最近確信した事が一つある。何やら、自分の空腹が抑えられているような気がするのだ。

前の自分ならば、これだけ時間が経っていれば人間の肉を食いたくて仕方が無くなってきている所だ。それなのに、空腹感というものをあまり感じず、人間の肉を食いたいとも思わない。今まではそんな事は一度も無かったので、何らかのクラクリがあるに違いないと金木は思っていた。

すると案の定、デルフからこんな言葉が飛び出した。

「ああ、それもルーンだろうな。前に聞いたけど、相棒達喰種とやらは主に人間を食うんだろ？ 空腹のお前さんが我を失って主である娘っ子を襲ったりしたら大変だって判断したルーンが、相棒の空腹感を抑えてるんだよ」

「やっぱりそうか……」

金木は自分の左手のルーンを見つめた。このルーンは自分をルイズに縛り付けている一種の呪縛のようなものだが、こうして色々と自分に力を貸してくれたら空腹を抑えてくれる事を知ると、言葉はおかしいかもしれないが感謝のようなものが生まれて来る。だが、そんな金木に棘を指すようにデルフが言った。

「だけど気を付けろよ？ いくら空腹を抑えられるって言っても完全じゃねえ。食欲っていうのは人間だけじゃなくて、生物が生きるために必要な絶対的な生存本能みてえなもんだ。ルーンがどれだけすごくても、食欲を完全に抑えられるわけじゃないんだ。マジでやばくなったら、最悪死体を食う事ぐらいは考えとけよ」

「……分かった。忠告ありがとうね」

自分の身を案じて言ってくれるデルフに、金木は感謝の念を込めて礼を言った。それからデルフを背中の中納めると続けて言う。

「じゃあ、もうそろそろ帰ろうか。勝手に外に出てる事がバレたら、ルイズちゃんに怒られるし」

「そうか？ 今の娘つ子なら許してくれるんじゃないか？」

「そうとは限らないよ。とりあえず、もう帰ろう。使い魔の仕事だつてあるしね」

「ま、それもそうだな」

一人と一本はそんな会話を交わしながら、主が眠る部屋へと戻って行った。

アルビオンから帰ってきた翌朝から、ルイズの金木に対する態度が変わり始めた。

一言で言うと、優しくなったのである。

前までは金木に対する言動がキツかったルイズだが、ここ最近はそのキツさが鳴りをひそめている。それどころか、金木を気遣う言葉が時々出るほどである。突然の変化について金木は何回も考えたが、これと言った答えは出てこなかった。この世界に来るまでの体験がかなり過酷なものもあるとはいえ、変な所で鈍い青年である。

早朝での赫子の様子を確認した金木は部屋に戻ってくると、ルイズが顔を洗うための水を張った洗面器を用意した。この中の水で寝起きのルイズの顔を洗うのが、前までの金木の日課だった。ちなみに、当の本人は低血圧なのか、眠そうな顔をふにやつと歪めたままベッドに腰かけている。

床に洗面器を置き、金木が両手で水をすくったが、ルイズは動かない。柔らかそうな、桃色がかかったブロンドの髪の毛が、ふにやふにやと崩れて顔にかかっている。眠そうにふがふがと目をこすると、ぼんやりとした表情のまま口を開いた。

「そこに置いて。自分で洗うから、良いわ」

その言葉に、金木は思わず目を丸くした。今まで彼女の口から、そ

んな言葉が出てくるなど一度もなかったからだ。

「良いの？」

頷く代わりにそう言うと、ルイズは拗ねたように唇を尖らせて横を向いた。何故か頬が赤く染まっている。

何故か怒ったような調子で、ルイズが言った。

「自分で洗うから、良いの。放っておいて」

ルイズが洗面器に手を入れて、水を救うと思いきり顔を振って顔を洗った。その拍子に、水が辺りに飛び散る。

その様子をきよんとした顔で見ていた金木だったが、すぐに自分の役割を思い出すと次にルイズの着替えをクローゼットから取り出した。下着をベッドのそばに置くと、後ろを向く。その間に、ルイズが下着を身に着けるからだ。

下着をつけ終わった頃を見計らうと、金木は振り向いた。手にはこれからルイズに着せるための、彼女の制服が握られている。金木が振り向くと、下着姿のルイズは慌てた顔になってさっとシーツを体に巻き付けた。

「服、置いといて」

顔の下半分をシーツで隠してルイズは言った。その言葉に、金木は思わず目を大きく見開く。

いつもならば眠そうな顔をして、だらんと腕を伸ばして『早く着せなさいよね、ぐず』とか言うような少女である。おまけに体をシーツで隠している。いつもならば見ても一部の特殊な嗜好を持つ人しか得しないその体をまったく気にせず晒しているのに、一体どういう風の吹きまわしだろうか。

「え、良いの？」

金木が聞き間違えではないかと思いつつ、ルイズがシーツから顔を出した。

「置いといてって言うてるじゃない！」

それからルイズは再びシーツに顔の下半分をうずめ金木を睨むと、うくと唸った。

そんな彼女の態度に首を傾げながら、金木は言われた通りに服をル

イズのそばに置いた。

「向こうむいてて」

「え?」

「向こうむいてなさいって言ってるの」

「あ、うん」

　　どうやら着替える所を見られるのが嫌なようだ。それは年頃の少女ならば至極当然の感情ならば、今までは見られても平気な顔をしていたルイズである。

　　一体どうしたんだろう、と金木は心の中で考えながら、ルイズに背を向けた。

　　数分ほど経つと、「振り向いて良いわよ」という声が後ろから聞こえた。金木が振り向くと、そこには制服に身を包んだルイズが金木を見つめていた。

「ほら、朝ごはん行くわよ」

「う、うん」

　　ま、良いかと内心呟くと、金木はルイズと一緒に部屋を出た。あのアルビオンでの旅で心境に何らかの変化があったのかもしれないし、彼女の態度が柔らかくなったのは自分にとっても悪い事ではないからだと思っただけである。

　　しかし、ルイズの驚くべき変化はそれだけでは無かった。

　　二人がアルヴィーズの食堂に着くと、金木はいつも通りに床に座り込んだ。しかしそこで、奇妙な変化に気づいた。目の前に、いつもならば置かれているはずのスープの皿が無かったのだ。すると、椅子に座っているルイズが何故か頬を赤く染めて、そっぽを向いたまま言った。

「今日からあんた、テーブルで食べなさい」

「……………え?」

　　金木は驚きを声に出しながら、ルイズを見つめた。今まで床に座る事が当たり前となっていただけに、そんな言葉を掛けられるとは予想もしていなかったのだ。

「良いから。ほら、座って。早く」



呆然としながらも、ルイズの隣に腰かけた。すると、そこにいつも座っている風上のマリコルヌが現れて、抗議の声を上げた。

「おいルイズ。そこは僕の席だぞ。使い魔を座らせるなんて、どういうつもりだ」

ルイズはきつとマリコルヌを睨んだ。

「座る所がないなら、椅子を持ってくれば良いじゃない」

「ふざけるな！ 平民の使い魔を座らせて、僕が椅子を取りに行く？ そんな法は無いぞ！ おい使い魔、どけ！そこは僕の席だ！ そして、ここは貴族の食卓だ！」

マリコルヌは思い切り胸を反らせて、精いっぱい虚勢を張った。見てみると、ちよつと震えている。ギーシユを難なく倒し、あのフーケを捕まえた金木はなんと伝説の使い魔らしい、という事はすでに学院中の噂になっていたのだ。おまけにルイズ達と数日学院を留守にしている間に、なにかとんでもない手柄を立てたらしい、という事さえ昨日の今日なのに噂されていた。

金木はそんなマリコルヌの虚勢に苦笑しながらも、言われた通り席を空ける事にした。貴族の自分に対する態度もいい加減慣れてきたし、ここで言い争っても自分にとって得する事は何一つない。目の前に並べられている食事も半喰種である自分には不味いものでしかないので、むしろ好都合だった。空いた時間は、図書館で本を読めばいいのだし。

そう考えながら金木が立ち上がろうとすると、ルイズが金木に言った。

「どく必要なんてないわよ、カネキ。主のわたしが座つていいって言ってるの。そんな奴の言う事を聞く事は無いわ」

予想外の彼女の言葉に、金木は思わず目を丸くして彼女の顔をじつと見つめた。そして金木と同じようにマリコルヌも呆然とした表情を浮かべていたが、やがて顔を少し赤くしてルイズに叫んだ。

「何だと！ ゼロのルイズの分際で……！」

その瞬間、ルイズの殺気が込められた視線がマリコルヌを貫いた。彼女の視線に、哀れな少年はひつと声を出して尻餅をつく。それから

すつと立ち上がると、マリコルヌを見下ろして言った。

「あんたがわたしの事をどう言おうがあんたの勝手よ。正直、ほんつとうにムカつくけど、聞き流してあげても構わないわ。……だけど、わたしの使い魔を侮辱するのは許さないわよ。こいつを侮辱するつて事は、わたしを侮辱するのと同じ事。それでもこいつをこの食堂から追い出したいって言うなら……相手になるけど、構わない？ あんたの風の魔法とわたしの爆発、どっちが速いか勝負してみる？」

言いながらルイズが杖を取り出すと、マリコルヌは半べそをかきながら首を一生懸命横に振った。それを見てルイズはふんと鼻を鳴らすと、再び自分の席に戻った。その光景に金木が固まっていると、背中の中のデルフが呟く。

「(……こりゃあ、おでれーた。一体、娘っ子に一体何が起こったんだい?)」

「(……僕が知りたいよ)」

背中の中、金木はそう返す事しかできなかった。

教室にルイズが入っていくと、すぐにクラスメイト達が取り囲んだ。ルイズ達は学院を数日空けていた間に、なにか危険な冒険をして、とんでもない手柄を立てたらしいともっぱらの噂だったからだ。

事実、魔法衛士隊の隊長と出発するところを何人かの生徒達が見ていたのである。誰がどう見ても、穏やかじゃない光景である。何があつたのか、クラスメイト達は聞きたくてううずうずしていたのだ。彼らは、潮汐の席には教師達がいるので遠慮していたのである。キウルケとタバサとギーシユは、すでに席についていた。その周りも、やはりクラスメイトの一人が取り囲んでいる。

「ねえルイズ。あなた達、授業を休んで一体どこに行っていたの？」  
腕を組んで、そう話しかけたのは香水のモンモランシーだった。

見ると、キウルケは優雅に化粧を直しており、タバサはじつと本を読んでいる。

タバサはぺらぺらと話すような性格じゃないし、キュルケもお調子者ではあるものの、何も知らないクラスメイトに自分達の秘密の冒険を話すほど口は軽くなかった。

クラスメイト達は押ししても引いても自分のペースを崩さず何も話さない二人に業を煮やし、ギーシュと新たに表れたルイズに矛先を変えた。

ギーシュは取り囲まれてちやほやされるのが大好きなので、調子に乗ったらしい。君達、僕に聞きたいかね？ 僕が経験した秘密を知りたいかね？ 困ったウサギちゃんだな！ あっはっは！ と眩くなり足を組み、人差し指を立てたので人壁をかきわけて近づいたルイズに頭をひっぱたかれた。

「何をするんだね！」

「口が軽いと、姫様に嫌われるわよ。ギーシュ」

アンリエッタを引き合いに出されたので、ギーシュは黙ってしまった。二人のそんな様子で、ますますクラスメイト達は「何かある」と思ったらしい。再びルイズは取り囲み、やいのやいのと騒ぎ始める。

「ルイズ！ ルイズ！ 一体何があったんだよ！」

「何でもないわ。ちょっとオスマン氏に頼まれて、王宮までお使いに行ってただけよ。ねえギーシュ、キュルケ、タバサ、そうよね」

キュルケは意味深な微笑を浮かべて、磨いた爪の滓をふつと吹き飛ばした。

ギーシュは頷き、タバサは変わらずじっと本を読んでいる。

取り付く島がないので、クラスメイト達はつまらなさそうに、自分の席へと戻っていく。

みんなして隠し事をするルイズに頭にきたらしく、口々に負け惜しみを並べた。

「どうせ、大した事じゃないよ」

「そうよね、ゼロのルイズだもんね。魔法のできないあの子に何か大きな手柄が立てられるなんて思えないわ！ フーケを捕まえたのだって、きつと偶然なんでしょう？ あの使い魔が、たまたま破壊の箱の力を引き出して……」

見事な巻き毛を揺らして、モンモランシーが嫌味つたらしく言った。ルイズは悔しそうに唇をきゅつと噛み締めたが、何も言わなかった。

そしてそれと同時に教室にコルベールが入ってきて、授業が始まった。

「さてと、皆さん」

コルベールは禿げ上がった頭をぽんと叩いた。彼は昨日まで、土くれのフーケが脱獄した一件で、城下に裏切者が！ すわトリスティンの一大事！ と怯えていたのだ。

しかし、今朝になつてオスマンに呼び出され、「とにかくもう大丈夫じゃ」と言われたので安心して、いつものの呑気な彼に戻っていた。元々彼は政治や事件にはあまり興味が無い人物なのだ。

興味があるのは学問と歴史と、研究である。だから彼は授業が好きだった。自分の研究の成果を、存分に開陳できるからである。

そして本日、彼は嬉しそうに、でんっ！ と机の上に妙な物を置いた。

「それは何ですか？ ミスタ・コルベール」

生徒の一人が質問した。

果たしてそれは、妙な物体だった。長い、円筒状の金属の筒に、これまた金属のパイプが延びている。パイプはふいごのような物に繋がりが、円筒の頂上にはクランクがついている。そしてクランクは円筒のわきに立てられた車輪に繋がっていた。

さらにそれだけではなく、車輪は扉のついた箱に、ギアを介してくっついている。

一体何の授業を始めるつもりなのだろう？ と生徒たちは興味深くその装置を見守った。

コルベールはおほん、ともったいぶった席をすると、語り始めた。「えー、『火』系統の特徴を、誰かこのわたしに開帳してくれないかね？」

そう言いながら、教室を見回す。すると教室中の視線が自然とキュルケに集まった。だが、それも無理のない事である。ハルケギニアで



差し込む。

それから呪文を唱えると、断続的な発火音が聞こえ、発火音は続いて気化した油に引火して、爆発音に変わる。

「ほらー！ 見てー！ くらんなさいー！ この金属の円筒の中では、気化した油が爆発する力で上下にピストンが動いておる！」

すると円筒の上にくっついたクランクが動き出し、車輪を回転させた。回転した車輪は箱についた扉を開き、ギアを介してぴよこつ、ぴよこつと中からヘビの人形が顔を出した。

「動力はクランクに伝わり車輪を回す。ほら！ するとヘビくんが！ 顔を出してぴよこびよこご挨拶！ 面白いですよ！」

しかし、生徒達はほけつと反応薄げにその様子を見守っている。それを熱心に見ているのは金木だけだった。

誰かがとぼけた声で感想を述べた。

「で？ それがどうしたって言うんですか？」

コルベールは自慢の発明品が、ほとんど無視されているので悲しくなってしまった。おほんと咳をすると、説明を始める。

「えー、今は愉快的なヘビくんが顔を出すだけですが、例えばこの装置を荷車に載せて車輪を回させる。すると馬がいなくても荷車は動くのですぞ！ 例えば海に浮かんだ船のわきに大きな水車をつけて、この装置を使って回す！ すると帆がいりませんぞ！」

「そんなの、魔法で動かせばいいじゃないですか。なにもそんなみようちきりんな装置を使わなくても」

生徒の一人がそう言うと、みんなそうだそうだと言わんばかりに頷きあつた。

「諸君ー！ よく見なさいー！ もつともつと改良すれば、なんとこの装置は魔法が無くても動かす事が可能になるのですぞ！ ほれ、今はこのように点火を『火』の魔法に頼っておるが、例えば火打石を利用して、断続的に点火できる方法が見つければ……」

コルベールは興奮した調子でまくしたてたが、生徒達は「一体それがどうしたって言うんだ？」と言わんばかりの表情だった。コルベールの発明のすごさに気づいているのは、この教室の中では金木だけ

だった。

「すごいな……エンジンか」

金木の眩きは大きなものではなかったが、それは広い教室の中よく聞こえた。教室中の視線が一斉に金木に注がれる。

「えんじん?」

コルベールはきよとんとして、金木を見つめた。金木はしまったと内心思いながら、仕方なくコルベールに言う。

「僕の国ではそれを使って、先生が言ったような事をしているんです」「なんと! やはり気づく人は気づいておる! おお、君はミス・ヴァリエールの使い魔の青年だったな」

コルベールは、彼が確か伝説の使い魔『ガンダールヴ』のルーンを手の甲に浮かび上がらせた青年である事をもい出した。あの件はオスマンが「わしに任せなさい」と言ったので、しばらく忘れていたが……、さきほどの発言と合わせて、金木に改めて興味を抱いた。

「君は一体、どこの国の生まれだね?」

身乗り出して、コルベールは金木に尋ねた。

仕方ないので、金木は仕方なく嘘をつく事にした。

「僕はその……東方の方からやってきたんです」

すると、何故かコルベールは驚いた顔になった。

「東方……まさか、ロバ・アル・カリイエの方から!?!」

「はい……」

金木が相槌を打つと、コルベールは驚いた表情のまま続けた。

「あの恐るべきエルフの住まう土地を通して……。いや、『召喚』されただから、通らなくてもハルケギニアへはやってこれるか。なるほど……、エルフ達の治める東方の地では、学問、研究が盛んだと聞く。君はその生まれだったのか。なるほど」

「ええ、まあ……」

納得したような頷くコルベールに、金木は顎をこすりながら肯定する。すると、そんな金木に話を聞いていたキュルケが質問した。

「でもカネキ。あなたの国ではそのえんじんとやらを使っているって聞いたけど、本当にそんなのが役に立つの?」

キユルケが抱いている疑問は他の生徒達も同じなのか、皆金木の方を見つめている。それは、金木の横にいるルイズも、いつもは無表情のタバサも例外ではなかった。金木としてはあまりコルベールの授業の時間を邪魔したくなかったのだが、当の本人も聞きたくてうずうずしているような表情を金木に向けている。仕方ない、と金木は息をつくと説明を始めた。

「役に立つよ。さっきの誰かの質問を例に出すと、確かにメイジの魔法で船を動かしたりする事はできる。それに僕は専門家ってわけじゃないからあまり詳しい事は言えない。だけど、これだけは断言できる。もしもメイジ一人の魔法とエンジン、どっちが船を早く動かす事ができるかって言われたら……エンジンが勝つよ」

その言葉に、不穏な雰囲気が教室に満ちるのを感じたが金木はそれを無視した。この世界の貴族は、自分達の魔法に絶対的な自信を持っている人間が多い。こんな言い方をすれば、反感を持つのは当然の事だろう。

「とは言っても、コルベール先生のエンジンじゃまず話にならないし、普通のエンジンでも分からない」

「……？ 濟まない、カネキ君。普通のエンジンとはどういう意味だね？」

コルベールが生徒のように金木に質問をすると、金木はさながら教壇に立つ教師のようにその質問に答える。

「エンジンにも種類があるんです。僕らの国では、商船の場合はディーゼル機関を採用してます。確か以前は蒸気タービン機関を採用してたけど、燃費の問題でディーゼル機関になったんじゃないかなかったです……」

「でい、でいーぜる？ じょうきたーびん？」

ちんぷんかんぷんと、言いたそうな口調でルイズが言う。周りの生徒達も、同じように困惑した表情を浮かべている。唯一好奇心で顔を輝かせているのは、コルベールだけだ。

「ああ、ごめんごめん。話を戻すね。ディーゼル機関を用いた商船の場合、速度は約12ノットから18ノットになるんだ。……ノットつ



てどれくらい速さだつて言いたそうだね」

周りの生徒達の表情から彼らが何を言いたいのか察した金木が言う。生徒達が一齐に頷いた。金木は仕方ないと言うように息をつく。と、席を立つて黒板の方へ向かう。もう本格的に教師みたいになってきたが、今さらそれを突つ込む者は誰一人いない。教師であるはずのコルベールが好奇心で目をキラキラさせているし。

「1ノットは約1.852 キロメートルまいじ km/h。これはつまり一時間に1.852リーグ進めるって事。こういう細かい文字になるのには理由があるんだけど、今は省くね。で、商船の速度は最低でも約12ノットだから、単純計算で22.224 キロメートルまいじ km/h。つまり、一時間でこれほどの距離を進めるって事。だけど、これぐらいなら君達メイジでもできるよね？」

その言葉に生徒の何人かが頷いた。金木の言う通り、自分達ドットやラインのメイジなら難しいかもしれないが、トライアングルかスクウェアのメイジならできない事ではない。

「問題は、速度に特化した船だよ。こういった船は文字通り次元が違う。僕達の国の人間はパワーボートやモーターボートと呼んでるんだけどね。こういった船には速さに特化したエンジンが積まれているから、速度が尋常じゃない。僕が知ってる国でアメリカって国があるんだけど、その国で行われたドラッグボートレースじゃあ速度が400 キロメートルまいじ km/hを越えたボートがある。これはつまり、一時間で400リーグ進めるって事になる」

金木の言葉を聞いて、生徒達全員の顔が引きつった。少なくとも、ハルケギニアにそれほどの速度を叩き出せるほどの船はない。というよりも、そんな速度を出したらどんなメイジでもすぐに魔力が底をついてしまう。そんな生徒達を見ながら、金木はチョークを手に持つと黒板に簡単に船の絵を描く。

「で、どうしてこれほどの距離を進めるかって言うと、もちろんエンジンの性能もあるんだけど、それ以外にもあるんだ。モーターボートのような小型艇は船底をフラットに作る事で、強力なエンジンの力で船体そのものを浮かばせる。で、スキーのように水面を滑走して走る事

ができるんだ」

「カネキ、スキーって何？」

「僕達の国のスポーツだよ。今度話してあげる」

飛んできたルイズの質問にそう返しながら、金木はさらに説明を続ける。

「だから、航走中は水の抵抗がほとんど無くなるからかなり高速になる。だけど、こうなると気をつけなきゃならない事がある」

「気をつけなければならぬ事、とは？」

それまで話を黙っていたタバサが手を挙げて質問した。いつもは無口のタバサが口を開いた事に生徒達が驚くが、問われた金木は黒板に描いた船の絵に波のような絵を付け加えた。

「この速度になるとわずかな波でも船体はバウンドして、再び着水する時に受ける反動はまるで地面にぶつかったような衝撃を受ける。ちよつとでもバランスを崩せば、船体を破損したり沈没したりする危険性をはらんでいるんだ。実際、パワーボートでは死人も出てる。……で、改めて聞くけど、君達メイジは船を操作する時に、約400リーグの速度を叩き出しながら、船が吹き飛ばされないようにコントロールできる自信はある？」

放たれた問いにキュルケがタバサを見てみると、彼女は険しい顔をしたまま顔を横にフルフルと振った。

しかしそれは、当然の反応だとクラスの誰もが思った事だろう。そんな事は、魔法のコントロールが上手いか下手かという問題ではなく、生物である以上不可能なのだ。まずそれほどまでの速度を叩き出す事に魔力をつぎ込めば魔力が先に尽きるし、船のコントロールをしようとしても速度維持に精一杯でそれまでに気が回らない。そうなれば、船もろとも自分も水面に投げ出される羽目になる。

だが、何よりも脅威なのは、今自分達の目の前にあるあの妙な機械が、それほどまでの可能性を秘めているという事だった。エンジンを凝視している生徒達を見て、金木は何故かふつと笑った。

「……と、まあ皆さん驚かせちゃったけど、今このエンジンにそこまでの力はないよ。これをさらに調整・改良させなきゃそこまでの出力

は出ないと思うしね。それに何も速度だけがエンジンの良い所じゃない。とても大きな船にこれをさらに大きくしたエンジンを組み込めば、人間のメイジでもとても運べない大きさと重さの荷物を大量に、一気に運ぶ事ができるんだ」

エンジンを撫でながら、金木は静かな声でそう言う。それに生徒達が視線を向けると、金木は生徒達の目をまっすぐ見据えて告げた。

「つまりこのエンジンは、凄まじい可能性を秘めた機械だとも思ってくれればいい。今は大した事は出来ないけど……この技術を発展させれば、君達メイジだけじゃなくて、君達メイジが導く平民の人達の大きな助けになるって事だけは、間違いなく言える。ま、僕から言える事はこれだけだよ」

そう言うと、金木はその視線をコルベールに向ける。

「出しゃばったような真似をして、すいません」

しかし、コルベールは何故か穏やかな笑みを浮かべて、

「いや、私の方こそありがとう。おかげで貴重な話を聞く事ができた。良ければ今度、詳しい話を聞いても良いかね？」

「……良いですけど、さっきも言ったように僕は専門家じゃないんで、あまり深い話はできませんよ？」

「それでも構わないよ」

「では、暇があれば」

金木は軽くコルベールにお辞儀をすると、元の自分の席に戻っていた。金木が席に座ると、ルイズはかすかに目を見開きながら金木に言った。

「……あんたってもしかして、あんたの国じゃ教師とかだったの？」

「ただの学生だよ。それにあの程度なら、僕の国の学校で習うから」

「あれほどの知識を？ 冗談でしょ……」

信じられない、と言うようにルイズは呟くが、それも仕方ないかと金木は思った。科学技術があまり発達していないこの世界では、自分にとっては馴染みのある知識でも、彼女達にとっては未知のものに思えただろう。

一方で、コルベールは教壇に立つと、教室を見回した。

「さて！ では皆さん！ 彼の素晴らしい講義の直後で申し訳ないが、誰かこの装置を動かしてみないかね？ なあに！ 簡単ですよ！ 円筒に開いたこの穴に、杖を差し込んで『発火』の呪文を断続的に唱えるだけです。ただ、ちよつとタイミングにコツがいるが、慣れればこのように、ほれ」

コルベールはふいごを足で踏んで再び装置を動かした。爆発音が響き、クランクと歯車が動き出す。そしてへびの人形がびよこびよこ顔を出した。

「愉快なへびくんがご挨拶！ このように！ ご挨拶！」

すると、生徒達の何人かの顔にさつきまで無かった好奇心という感情がありありと現れ始めた。もしかしたら、先ほどの金木の説明を聞いて、エンジンの仕組みにわずかでも触れてみたいと思っっているのかもしれない。

すると、何故かモンモランシーがルイズを指差した。

「ルイズ、あなたやってごらんなさいよ」

そんな彼女に、ルイズが何のつもりだと言いたそうな視線を向けると、モンモランシーはふんと鼻を鳴らしながら、

「土くれのフーケを捕まえて、何か秘密の手柄を立てたあなたなら、あんな事造作もないはずでしょう？」

その言葉にルイズは気づいた。モンモランシーは、自分に失敗させて恥をかかせようとしているのだ。恐らく、最近ルイズが派手な手柄を立てて、舞踏会の主役になったりちやほやされているのだが気に入らなかったのだろう。モンモランシーは自分に輪をかけて嫉妬深く、そして目立ちたがり屋である事をルイズは思い出す。

モンモランシーは挑発を続けた。

「やってごらんなさい？ ほら、ルイズ。ゼロのルイズ」

ゼロと呼ばれたルイズはかちんときた。モンモランシーごとにナメられては、黙ってはいられない。

ルイズは立ち上がると、無言でつかつかと教壇に歩み寄る。

参ったなあ、と金木は内心で呟いた。あの様子では、自分が何を言っても耳を貸しはしないだろう。それどころか、下手な事を言えば

さらに逆上する可能性すらあり得る。

ルイズの危険性を知っている生徒達が、こそこそと椅子の下に隠れる。

そんな生徒達の行動とモンモランシーの台詞で、ルイズの実力と結果と二つ名の由来を思い出したコルベールは、その決心を翻そうとして、おろおろと説得を始めた。

「あ、いや、ミス・ヴァリエール。その、なんだ、うむ。また今度にならないかね？」

「わたし、洪水のモンモランシーに侮辱されました」

冷たい声でルイズは言った。鳶色の瞳が、怒りで燃えているのがここからでも分かる。

「ミス・モンモランシーには私からよく注意しておくよ。だから、その、杖を納めてくれんかね？ いやなに、君の実力を疑うわけではないが、魔法はいつも成功するというわけではない。ほら、言うではないか。ドラゴンも火事で死ぬ、と」

すると案の定、ルイズはきつ！ とコルベールを睨んだ。

「やらせてください。わたしだって、いつも失敗しているわけではないです。たまに、たまに、成功、します。たまに、成功、する時が、あります」

ルイズは自分に言い聞かせるように、区切って言った。声が震えている。彼女がああなったら、もう止められない。ルイズは完全に怒ると、声が震えるのだ。

コルベールは自分の発明品の末路を想像したのか、天井を見上げて嘆息した。

ルイズはコルベールがしていたように、足でふいごを踏んだ。気化した油が円筒の中に送り込まれる。

それから目をつむり、大きく深呼吸をするとおもむろに円筒に杖を差し込んだ。

「ミス・ヴァリエール……。おお……」

コルベールが、祈るように呟いた。

ルイズは朗々と、可愛らしい鈴の音のような声で呪文を詠唱する。

教室中の全員がぴきーんと緊張した。

期待通りと言うべきか、順当に円筒は装置事爆発し、ルイズとコルベールを黒板に叩きつけた。生徒達から悲鳴が上がり、爆発が油に引火して、辺りに炎を振りまく。生徒達は逃げ惑った。

椅子や机が燃える中、ルイズはむっくりと立ち上がった。見るも無残な格好である。制服は焼け焦げ、可愛らしい清楚な顔は煤だらけ。しかし、ある意味流石である。大騒ぎの教室を意に介した風もなく、腕を組んでから呟いた。

「ミスタ・コルベール。この装置、壊れやすいです」

コルベールは気絶していたので、答える事ができなかった。代わりに生徒達が口々にわめいた。

「お前が壊したんだろ！ ゼロ！ ゼロのルイズ！ いい加減にしてくれよ！」

「というか燃えてるよ！ 消せよ！」

モンモランシーが立ち上がり、呪文を唱えた。『水』系統の魔法、『ウォーター・シールド』である。瞬時に現れた水の壁が、燃え盛る炎を一気に消し止めた。

モンモランシーに、クラスメイト達の喝采が飛ぶ。

それからモンモランシーは勝ち誇るように、ルイズに言った。

「あら、もしかして余計なお世話だったかしら？ なにせあなたは優秀なメイジだもんね。あのぐらいの火、どうって事無いものね」

ルイズは悔しそうに、唇を噛み締めた。

その夜、教室の後片付けが終わったのは夜だった。燃えた教室の机を取り換え、水浸しになった床を拭きあげる作業は大変だった。金木はくたくたになったルイズと共に、部屋に戻ってきた。

金木がわら束の上に座り込むと、ルイズも同じようにベッドの上に座り込んだ。そろそろ寝る時間である。いつものようにルイズの着替えを取ろうとクローゼットに向かったら、ルイズが突然立ち上がった。何か作業をし始めた。

「何をしているの?」

金木が尋ねても、ルイズは頬を染めたきり何も答えない。手にシーツを握っている。それを、天井から吊り下げ始めた。どうやら簡単なカーテンのつもりらしい。

ルイズはそのカーテンでベッドの上を遮ると、ベッドから下りてクローゼットに向かった。目を丸くしている金木をしり目に、着替えを取り出すと再びベッドの上に向かうと、カーテンの中に入り込んだ。ごそごそとベッドの上から音がする事から、どうやら着替えているようだ。

カーテンが外されたので金木が視線を向けると、ルイズは髪をブラシですいていた。

やがて髪をすくい終わると、ルイズはベッドに横たわった。

机の上に置かれたランプの明かりを、杖を振って消した。そのランプには、持ち主の消灯の合図に応じる魔法が付与されているのだ。なんてことのない魔法だが、これでも高価な物らしい。

金木は寝ようと思い、目を閉じた。

すると、もぞもぞとルイズがベッドの上から身を起こし、金木に声をかけた。

「ねえカネキ」

「何?」

返事をする、しばしの間があった。

それから、言いにくそうにルイズが口を開く。

「いつまでも、床っていうのはあんまりよね。だからその、ベッドで寝ても良いわ」

その言葉に、金木は思わずルイズの顔を凝視した。

「……………ええ?」

「勘違いしないで。へ、変な事したら殴るんだから」  
「いや、僕はさすがにそこまで特殊な趣味は持って」

無い、と言いかけた金木をルイズの殺意がこもった視線が貫いた。危ない危ない、と思いつながら金木は口を閉じる。あのまま言葉を続けたいなら、ルイズの爆発を食らっていたかもしれない。

「別にこのままでも良いよ。床でも寝られる事は寝られるし」

「使い魔の体調管理も主の仕事よ。良いからベッドで寝なさい」

「いや、だから……」

「わたしに二回同じ事を言わせる気？」

「……ベッドで寝ます」

やれやれと思いつながら金木はベッドに向かうと、端に潜り込んで毛布を被った。ルイズはと言うと、ベッドの端の方で毛布にくるまり丸くなっている。

二人がしばらく無言でいると、ルイズが口火を切った。

「ごめんね」

「何が？」

「勝手に召喚したりして」

「別に良いよ。命を助けてもらったしね」

「きちんと帰る方法、探すから。でも、どうすれば良いのか分かんないの。ロバ・アル・カリイエへ帰る方法は無いわけじゃないんだけど……そこに行くためには、色々難しい問題があるから」

「そうなんだ……。だけど、大丈夫だよ。ゆつくりと探していけば良い」

金木がそう言うのと、もともと動きながらルイズが尋ねた。

「ねえ、あんたって向こうで何してたの？」

「何をしてたって言われても……色々なな。大学生とか、アルバイトとか」

「大学生って何？」

「ルイズちゃん達がやってる事とあまり変わらないよ。勉強するのが仕事みたいなもの」

「それで、大きくなったら何になるの？」

ルイズのその質問に、金木の言葉が止まった。

「どうしたの？」

「……分からないよ。あまり考えた事、無いから」

別に今までそういつた事をまったく考えた事が無いというわけではない。しかし、自分の運命はある日突然一変してしまった。狂った



医者の手によって半喰種の体にされ、血にまみれた非日常に巻き込まれ、生きるか死ぬかの生活を送る事になってしまった。そんな事になってしまったからは、自分が何になりたいかなど考える余裕が無くなったのだ。

「あのワルドが言ってたわ。あんたは伝説の使い魔だって。あんたの手の甲に現れたのは『ガンダールヴ』の印だって」

「みたいだね。そう言えば、デルフリンガーもそのガンダールヴが持ってた剣らしいよ」

「それって、ほんとなのかしら」

「だと思っ。そうじゃなかったら、練習も無しにあんな風に武器を使う事なんてできない」

それに、デルフには魔法を吸収するという破格の力が備わっている。そんな力が備わっている以上、デルフの言っている事が全て？だとは思えないし、彼の言う事には不思議な説得力がある。どうやら昔の記憶はほとんど失われてしまっているようだが、しばらく経てばまた何か思い出すかもしれない。

「だったら、どうしてわたしは魔法ができないの？ あんたは伝説の使い魔で、わたしが知らない事をたくさん知っているのに、どうしてわたしはゼロのルイズなのかしら。嫌だわ」

「……どうして、そんな事を？」

金木が尋ねるとルイズはしばらく黙っていたが、少し真面目な声で言った。

「あのね、わたしね、立派なメイジになりたいの。別に、そんな強力なメイジになれなくても良い。ただ、呪文をきちんと使いこなせるようになりたい。得意な系統も分からない、どんな呪文を唱えても失敗で、使い魔に頼りっぱなしのままなんてイヤ」

「……………」

金木が何も言わずに黙っていると、ルイズはさらに話を続ける。

「小さい頃から、わたし、ダメだって言われてた。お父様も、お母様も、わたしには何にも期待していない。クラスメイトにも馬鹿にされて、ゼロゼロって言われて……。わたし、ほんとに才能ないんだわ。得意

な系統なんて、存在しないだわ。魔法唱えても、なんだかぎこちないの。自分で分かっているの。先生や、お母様や、お姉様が言っていた。得意な系統の呪文を唱えると、体の中に何かが生まれて、それが体の中を循環する感じがするんだって。それはリズムになって、そのリズムが最高潮に達した時、呪文は完成するんだって。そんな事、一度もないもの」

ルイズの声が、小さくなった。

「でもわたし、せめてみんなができる事を普通にできるようになりたい。じゃないと、自分が好きになれないような、そんな気がするの」それはきつと、ルイズが今まで胸の中に溜め込んできた不安や恐れなのだろう。今まで魔法を満足に使う事ができず、親や姉からは魔法が使えない事で叱られ、同級生達からは馬鹿にされ続ける日々……。それは、彼女にとってどれほど辛い日々だったのだろうか。

金木は寝転がりながら、口を開いた。

「魔法が使える事が立派な人間の証明だとは、僕は思わないよ。例えば大きな力を持つていたとしても、使い方を間違えたら、誰かを傷つける暴力にしかならない。僕は強大な力を持つているなら、誰かを傷つけても良いって思ってるような奴らを、ここに来る前に散々見てきたから」

例えば、自分が初めて出会った時の西尾錦。例えば、喰種の組織『アオギリ』の一員であり、自分に過酷な拷問を行ったヤモリ。それ以外にも、人間達は喰種達に全てを奪われても良いと考えている喰種達を金木は嫌というほど見てきた。

だが、それと同時に金木は知っている。例えば自分が喰種でも、人間の社会のルールを破らず、生きていく上で最低限の殺ししかしない喰種達を。喰種でありながら、人間が好きだと言い切ったある喰種の事を。護れなかったという事実があったとしても、彼らの表情は今でも金木の記憶に鮮明に残っている。

「だからルイズちゃん。君はゼロなんかじゃないよ。確かに君は魔法が使えないかもしれない。だけど、誰かを思いやる心、誰かを護ろうとする気高い心を持っている。例えば他の誰かが否定したとしても、僕

はこう言い切るよ。君は、僕が出会ってきた中で最高のメイジだつて」

金木は心の底からそう言ったが、ルイズから返事は帰ってこない。金木が振り返ってルイズの方を向くと、彼女はあどけない寝顔を見せていた。どうやら寝入ってしまったらしい。

うつすらと開いた小さな桃色の唇の隙間から、寝息が漏れている。「くー……」

金木は苦笑を漏らしながら、仕方ないかと心の中で呟いた。今日は教室の片付けなどあったので、彼女も疲れてしまっていたのだろう。話の途中で眠ってしまったても無理はない。

金木はルイズに背を向けると、目をつむる。それから間もなく、金木の意識は眠りの世界へと落ちて行った。

寝たふりをしていたルイズは、金木の寝息でぱちりと目を開けた。

そして眉をひそめて、「寝てるし」と呟く。

それから、ルイズは胸に手を置いた。やはり、気のせいではない。この青年のそばにいと、何故か胸が高鳴る。

金木が妙に感じるほどルイズが優しくなったのは、自分を何度も助けてくれる上に、この前自分勝手な命令を下したにも関わらず、変わらずに自分に接してくれる金木への恩返しのもり……。だが、それだけではない。

異性に対するこんな気持ちは初めてで、ルイズはどうして良いのか分からないのだった。

着替えを金木に手伝わせたくなかったのは、そのせいだ。意識しだしたら、急に肌を見られるのが恥ずかしくなったのだ。本当だったら、寝起きの顔だつて見せたくない。

いつごろから、こんな風な気持ちを金木に抱くようになったのだろうか？

たぶん、あの時からだ、とルイズは思う。

フーケのゴーレムに潰されそうになった時、金木に助けられた。あの時初めて、死ぬかもしれないという状況なのに何故か心臓が大きく

跳ねたのだ。

しかし何よりも一番嬉しかったのは、アルビオンを脱出した時に自分のそばにいてと言ってくれた事だった。ワルドに裏切られて心に傷を負った自分を、彼はその言葉で救ってくれたのだ。もしもあの言葉が無かったら、自分は今でもベッドの中で泣いていたかもしれない。

金木は自分の事をどう思っているんだろう。嫌な女の子？ 意地悪で、意地っ張りで、わがままなご主人様？

少なくとも、好意を抱いているという事は無いと思う。今まで彼がそんな素振りを見せた事は一度もない。精々、手のかかる妹ぐらいにしか考えていない可能性すらある。そこまで考えて、何故かルイズは悔しくなって金木の頭を枕で叩いた。一瞬起きるかと思っただが、その心配は杞憂だったようで、金木はぐっすりと寝ていた。

それからルイズは、金木の顔をじっと見る。どこか頼りなさそうに見えるが、本当はとても強く、自分をいつも護ってくれる青年。遙かに遠い、別の国から来た青年。そしてルイズの使い魔。伝説の使い魔……。

だが、考えても考えても、ルイズには今の自分が抱えている気持ちに分からなかった。

どうすれば、その問いの答えが見つかるのだろう。

そんな事を考えながら……、ルイズも使い魔の青年と同じように、眠りの世界へと旅立っていった。